女子文壇

第三巻第拾號

明治四十年八月一日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



奈錦堂石印

朝顔



富岡まさ子筆

女子文壇

第三卷第拾號目次

〇甲種一等賞銀側懷中時計當選者
寂寥（新體詩）……大村竹尾

▲水彩畫
〇海岸の夕照……三宅克己筆
▲繪手本
〇朝顏……富岡まさ子筆
▲繪はがき
〇ゆり花……長原止水筆
▲寫眞版
〇夏の山水　◎近江八景亭より彥根城を望む◎北海道登別溫泉湯本◎鹿兒島の瀧◎樋田洞門競秀峰◎安房八幡濱沖の捕鯨
〇日本女學校の修學旅行
〇北海道の瀑布とアイヌ人
〇伊豫高濱の四十島
〇下總銚子犬若島〇上州伊香保湯本〇遠江小笠の里
〇誌友おもかげ（其十四）「氏名畧す」
【女子文壇】
◉藝術的眞心……記者
◉暑中休暇……第一高等女學校長　伊藤貞勝
◉露榻絮語……文學士　沼波瓊音
◉不老の水……池田朝村
◉作文そのをりく……高須梅溪

◉投書地誌……一　記者
【圖畫】一八
〇夏の夕：岡野豊子〇青葉：梅本龍子〇はた：今西こゆき〇病：平野ゆき子〇白帆：淺井こう子
【叙事文】一九―三三
〇風邪氣：わか栄〇夏の夜：告天賤女
【新體詩】三三―四三
〇寂寥：大村竹尾〇生贄：山田くに子〇受驗：石川一葉女
【短篇小說】四四―五六
〇車中：杉永白藻〇おぼえがき：ます子〇梅雨空：田原瑠璃
【和歌】五七―七〇
〇くれなゐ：〇村岡布貴子：〇小泉さかえ
【文藝遊戲】七一―七三
▲趣向談▼終焉：一葉女〇邂逅：石出愛子〇洪水のあと：水神まさき〇戀く蝶村雨〇家庭問題：壽女
【抒情文】七四―八四
〇春徂く日：秋保八千代〇妾が兄上：鈴木さち子〇ふる里より：くれなゐ
【俳句】八五―八六
〇木原蓮舟〇千代延君子〇白井宮子〇小島なみ子
【書簡文】八七―九四
〇古里の友へ：岡部なか子〇孝繼なる兄樣に：佐々城よしゑ〇妹に「花百合」を贈りて：末政壽惠
【新歌論】九五―九六
〇三橋千代子〇山田鈴子〇難波あいの
【評論文】九七―一〇一
〇懸賞文に就て：廣川淸子〇希望と人生：林霞江〇勞働者にかはりて：竹下季子
【短文】一〇二―一一三
〇九重の雲：中里きん子〇給葉書祭：古志益子〇おはんにや：難波あいの〇覓：季花子
【新笑話】一一四
〇百度：三浦ます子〇博覽會見物：彌吉はるみ〇英語の本：榮谷德子
【誌友倶樂部】一一五―一三三
〇文學顧問〇諸孃と記者〇諸孃の交際〇閱書換讀〇繪葉書交換〇寫眞繡物交換〇懸賞品發送報告〇剽窃詩文の注意
【雜報】一三四
〇讀書會（新課題）〇新出版〇雜報〇臨時增刊『しら萩』豫告
【英文】津田梅子閱　河井道子述　一―一四
〇夏の雨〇僕婢〇露帝の不可能の事〇試驗後

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

鮫島大浪君著　鏑木清方君畫

小說 妻の懺悔

一冊四拾五錢　送料四錢

女學生の讀んで爲になる小說なり

鹿島櫻巷君　千葉秀浦君共著・水島爾君裝畫

結婚之秘訣

一冊四拾八錢　送料六錢

▲要目▼男女の肉的及心的區別●戀愛の覺醒●結婚の目的と實體●良人の撰擇●結婚の修養●結婚の後●若き妻と未來の母●不幸なる結婚●生存競爭に立てる婦人●國家と結婚

生田葵君著　杉浦朝武君畫　鏑木清方君畫

小說 富美子夫人

一冊八拾五錢　送料拾錢

『富美子姬』は發賣禁止となりたれど、こゝに同胞の姉なる『富美子夫人』在り。

柳川春葉君著　安田靫彥君畫　齋藤松洲君畫

家庭小說 獨身者

一冊七拾錢　送料八錢

その病は治すべからず、その失戀は慰むべからず世路の嶮、何處にか歩むべき。あはれこの可憐なる獨身者に會して、その境涯に含まれたる意味深き歎の聲を聽く者や誰。

東京市京橋區木挽町四丁目　也奈義書房

東京市京橋區木挽町四丁目　左久良書房

皇后陛下
東宮妃殿下　御料

長谷部仲彦氏發明
完全無鉛白粉

ねり製　御園白粉　壜入金廿錢。金三十五錢。金七十五錢。特製金五十錢。金一圓。金三圓　樂屋用固煉製金五十錢

水製　御園白粉　壜入金二十五錢

こな製　御園白粉　紙包金十錢　壜入金五十錢

洋風化粧クレーム　御園の蕾　特製金二十錢。金五十錢　濃化粧專用錫入金十錢

高等化粧水　御園とき水　壜入金十五錢　大壜金五十錢

洗顔あらひこな粉　御園なでしこ　紙包金十錢

濃厚化粧水　御園四季の花　壜入金廿錢　大壜金五十錢

高等香水油　御園香油　壜入金五十錢

高等香水　御園香水　壜入金一圓　別器入金五圓

高等はみがき　御園歯磨　紙包金廿錢　硝子器入金五十錢

製造元　東京芝　胡蝶園

發賣元　東京日本橋區橋町四丁目　丸見屋　電話浪花四四八番

海岸の夕照



三宅克己先生筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

文學博士 小杉榲邨先生序文　飯田永夫先生註釋

標註參考 **新古今和歌集**

全壹册

洋紙刷大和綴
定價金四拾錢
郵稅金八錢

新古今集は、古今の歌界に一新機軸を出したるもの也。古今の歌集中に、嶄然として傑出せるもの也。其格調は雄偉瑰麗に、其詞華は優艶雅美に、其着想は清新幽邃にして、しかも餘韻嫋々たり、實に修辭の美技巧の妙掬すべし。されば昔よりこの書の註釋も多かれど、或は繁に過ぎ、或は簡に失し、尚、全部にわたり通釋完結したるもの尠し。本書は夙に古今集に標註を加へ好評を博し、普く世に流行せる著者の註釋を爲したるものなれば、彼の標註古今集の如く、この標註新古今集も初學者の自修によろしく、また教科書にも適すべきものなれば、江湖の諸賢精鑑あらんことを乞ふ。

飯田武卿先生校　飯田永夫先生標註

標註參考 **古今和歌集**

全壹册

洋紙刷大和綴
定價金貳拾五錢
郵稅金六錢

發行所　東京市日本橋區數寄屋町（振替貯金口座第貳參七壹番）　六合館

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

香水界の覇王

佛國製大高評

本品は上流社界に理想的香水として信用を博す



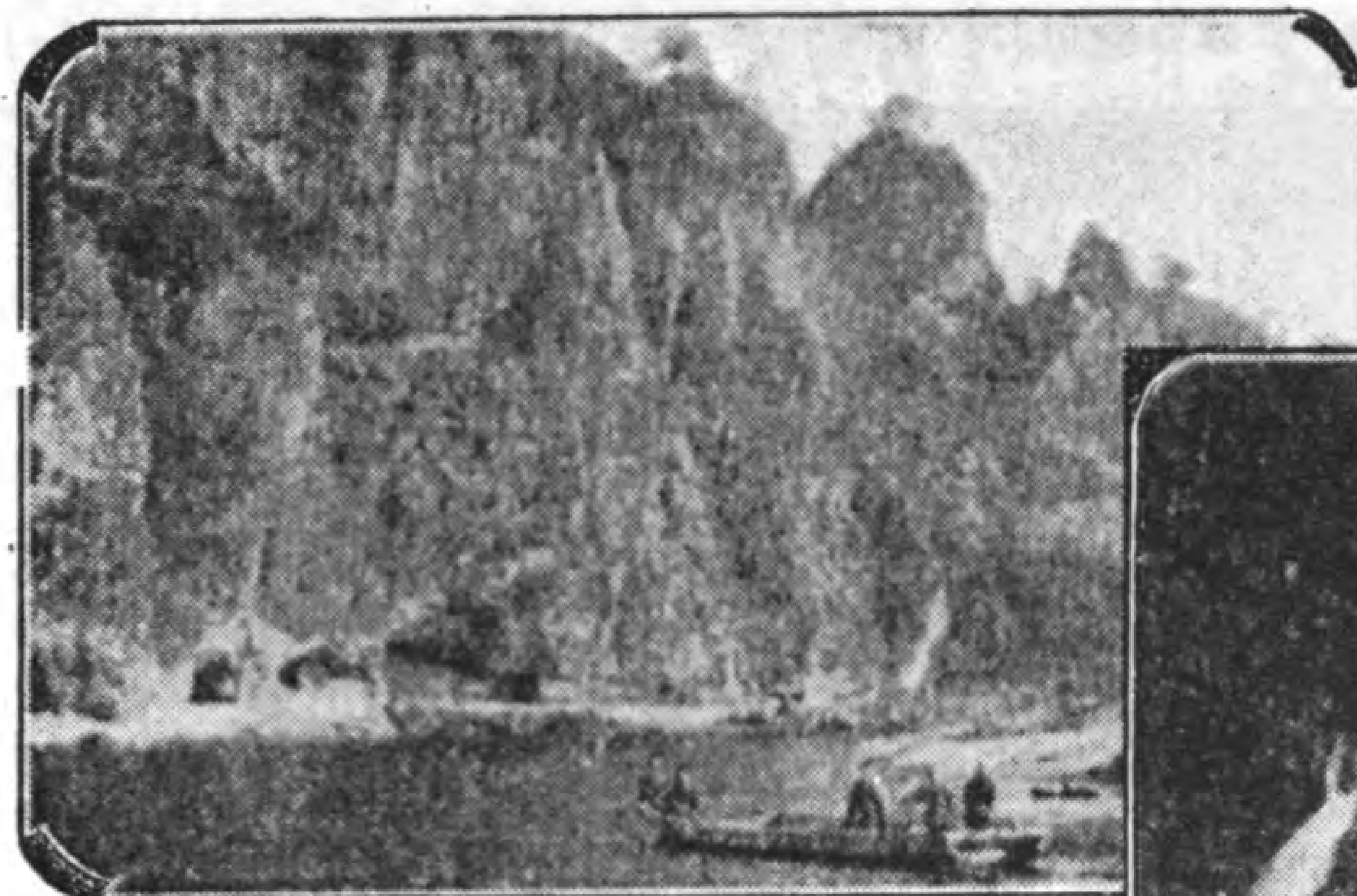
フランス交際社界はケーバ香水の如き高尚なる香を愛す

定價　中瓶金壹圓　小瓶金廿五錢

東京市日本橋區橘町

化粧品輸出入商　竹間商店

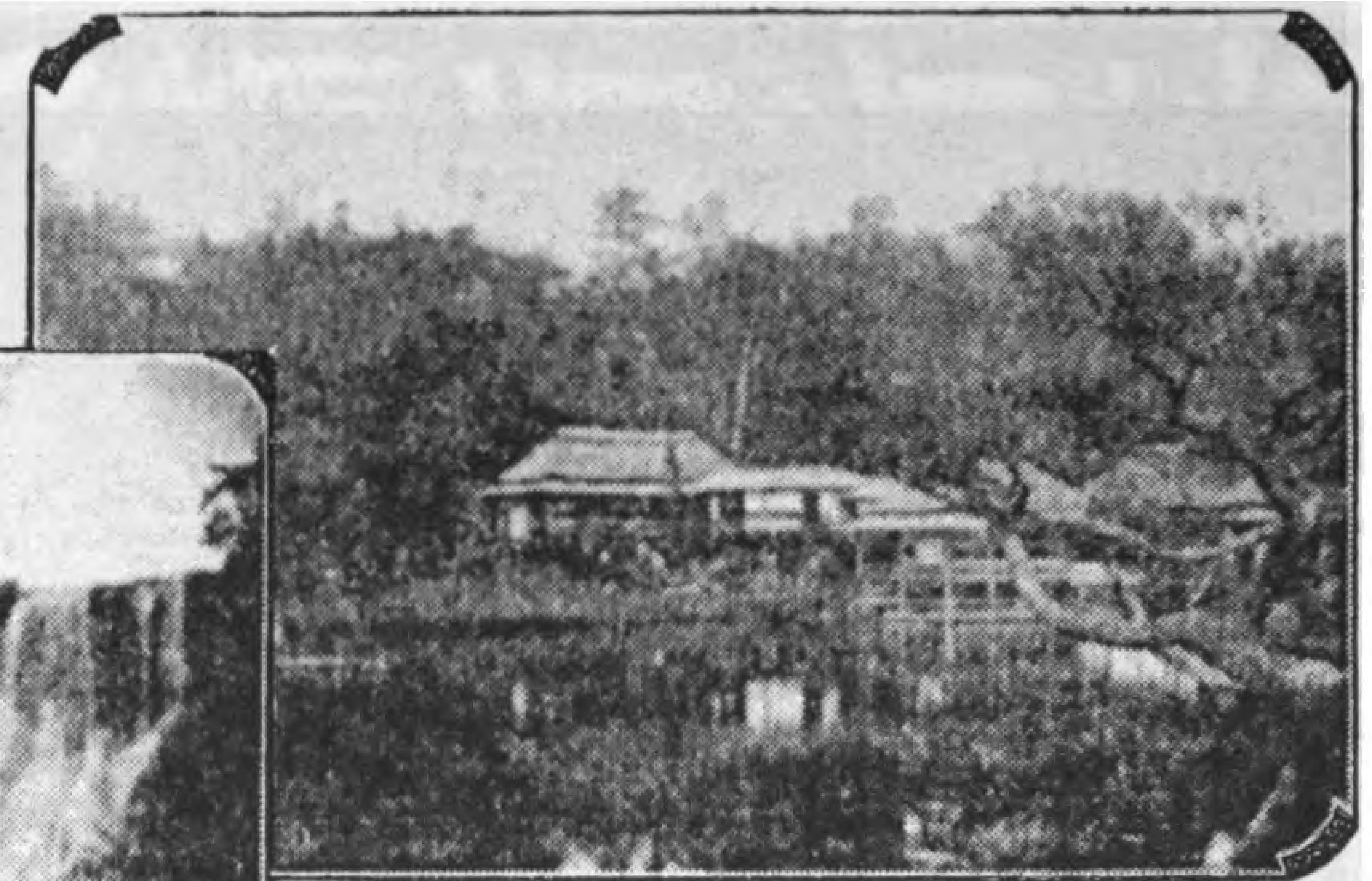
夏の山水



樋田洞門競秀峯（長門小國敏子寄）



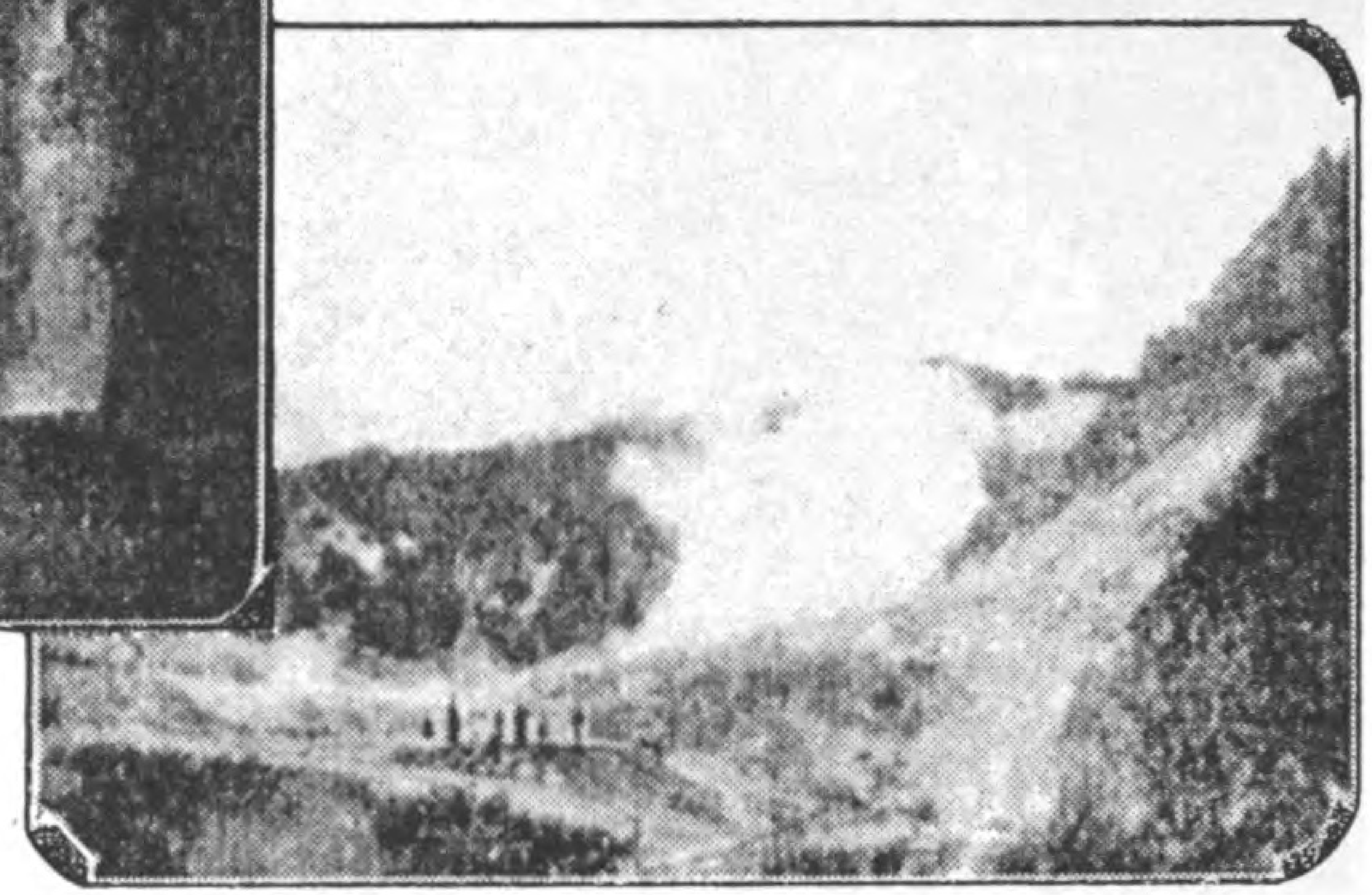
鹿兒島の瀧（谷照子寄）



近江八景亭より彦根城を望む（小田千代子寄）

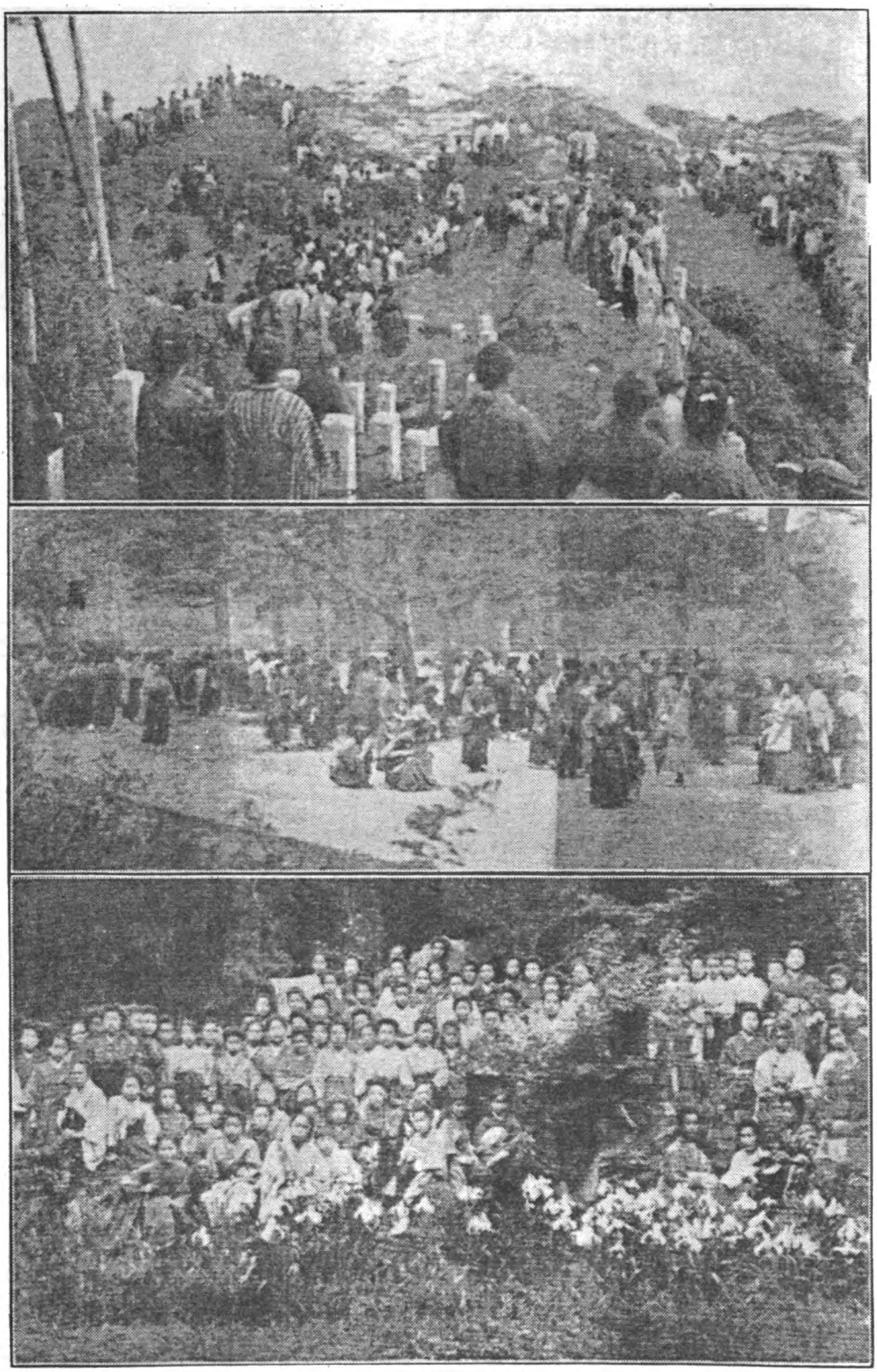


房州八幡濱沖捕鯨（谷本安子寄）



北海道登別温泉湯本（津金糸子寄）

日本女學校の修學旅行



本年六月日本女學校生徒相模に旅行したる時の撮影　上段は江之島洞窟への道路、中段下段は鎌倉。（誌友森木しげ子寄贈）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

法學士満田寛一著　一定價五十錢郵稅八錢

英雄ナポレオンの母と家庭

一世賢母として歴史に名ある[illegible]しナポレオンの母レーテチアが一生の[illegible]賢母とならんとする[illegible]ならず

帝國婦人學會編　一定價四十錢郵稅六錢

和裝　意匠　優美　高尚

婦女子の本分

婦女子が家庭用として良書に乏しきは大に遺憾也本書は即ち女子が日常必要の事柄を網羅す一度繙く時は健全に圓滿なる家庭を造り得るを疑がはず

大和田建樹著　一定價金六十錢郵稅八錢

洋裝　新形　製本　嶄新

女子記事文林

女子記事文に良書乏しきは女子教育の缺陷也國學者中の大家大和田先生が嶄新なる構想と流麗なる筆とを以てせらる文藻清新作例嶄新とは本書の特色

和裝　優美　高雅　十版

女子の弱點

女子世に立つや世間大抵男子の從物の如く輕ず女子何等の弱點ありや新婦となりて健全なる新家庭を作らんとせらるゝ世の婦女子は必讀す可き書也

定價四十錢郵稅金六錢

美術技藝研究會長　梶山彬著　一最新刊和裝高雅美本定價五十錢郵稅八錢

女子技藝 刺繡術新書

本書は著者が多年の實地研究と授業上より得たる結果とに基き其方法を嶄新に且つ懇切に叙述したるものなり。されば我邦獨特の美術を發達せしめんと欲するものは必ず本書に據りて其精巧目を眩し絢爛の妙技と蘊奧を修得せざるべからず殊に今や綠蔭濃かならんとす涼風秋を襲ふ窓下に坐しながら一度本書を繙き一針動く所鳥歌ひ花笑ふ妙味を知らむ。且つ參考用として刺繡雛形圖百五十餘個を入れ斯術を研究せらるゝ諸媛の資料となせり。

美術技藝研究會長　梶山彬著　一第三版和裝高雅美本定價五十錢郵稅八錢

女子技藝 造花術新書

世の進歩と共に女子技藝の發達は日に月に盛ならんとする中に其盛大を極むるは造花也とす本書は著者が教授の旁ら實地研究せられたる結果を世に公にせられたるもの其內容は學理と實際とを調和し染色鏝當組合せ等極めて懇切に解説し加ふるに一花一葉ごとに正確なる切圖百九十餘個を附したれば一度此書を繙く時は容易く座がら千紫萬紅の花卉を自然の儘に造り得べし。且造花は晩年刺繡等と共に高等女學校必須の一科目となり居れり。

美術技藝研究會長　梶山彬著　一最新刊和裝高雅美本定價五十錢郵稅八錢

女子技藝 摘み製作新書

從來摘みは大抵專門家の堂奧に秘せられありしため斯術に熱中する人は大に遺憾となせし所然るに著者は從來其專門家なりしが研究會を創立以來女子藝術に稗益せんと志し斯る秘決をも敢て惜まず世に公にせらるされば此書を繙くときは如何に細小なる花卉と雖ども思ふが儘に造り得べし世の諸媛等が斯道研究のためには最好の指南車たるを疑はず

發行所　東京京橋桶町　廣文堂書店　振替貯金口座四六八四番

女子文壇の廣告より御注文の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會編

家庭要鑑

家庭要鑑目

● 家政の巻
● 育兒の巻
● 裁縫の巻
● 手藝の巻
● 衛生の巻
● 禮法の巻
● 料理の巻
● 文藝の巻
● 化粧の巻
● 附録 家庭諸届式

口繪

明治時代女子風俗……岡田三郎助君畫
江戸時代女子風俗……一條成美君畫
閑院宮妃殿下最近の肖像を始め其他口繪數面

一部でどんな事でも分る婦人の一生を通じて最も親切な相談相手。あらゆる婦人の日夕座右に備へて心の影をうつす可き鏡。定價最も至廉縮緬の半襟一掛買ふ金にて此寶典が求められる。極めて平易な談話體で總振假名づきだから讀み難い憂は無い。

定價

全一册洋装紙數大判壹千頁 體裁優麗
定價金貳圓五拾錢 五萬部限り特價壹圓六拾錢
小包料金拾錢郵券代用一割増のこと

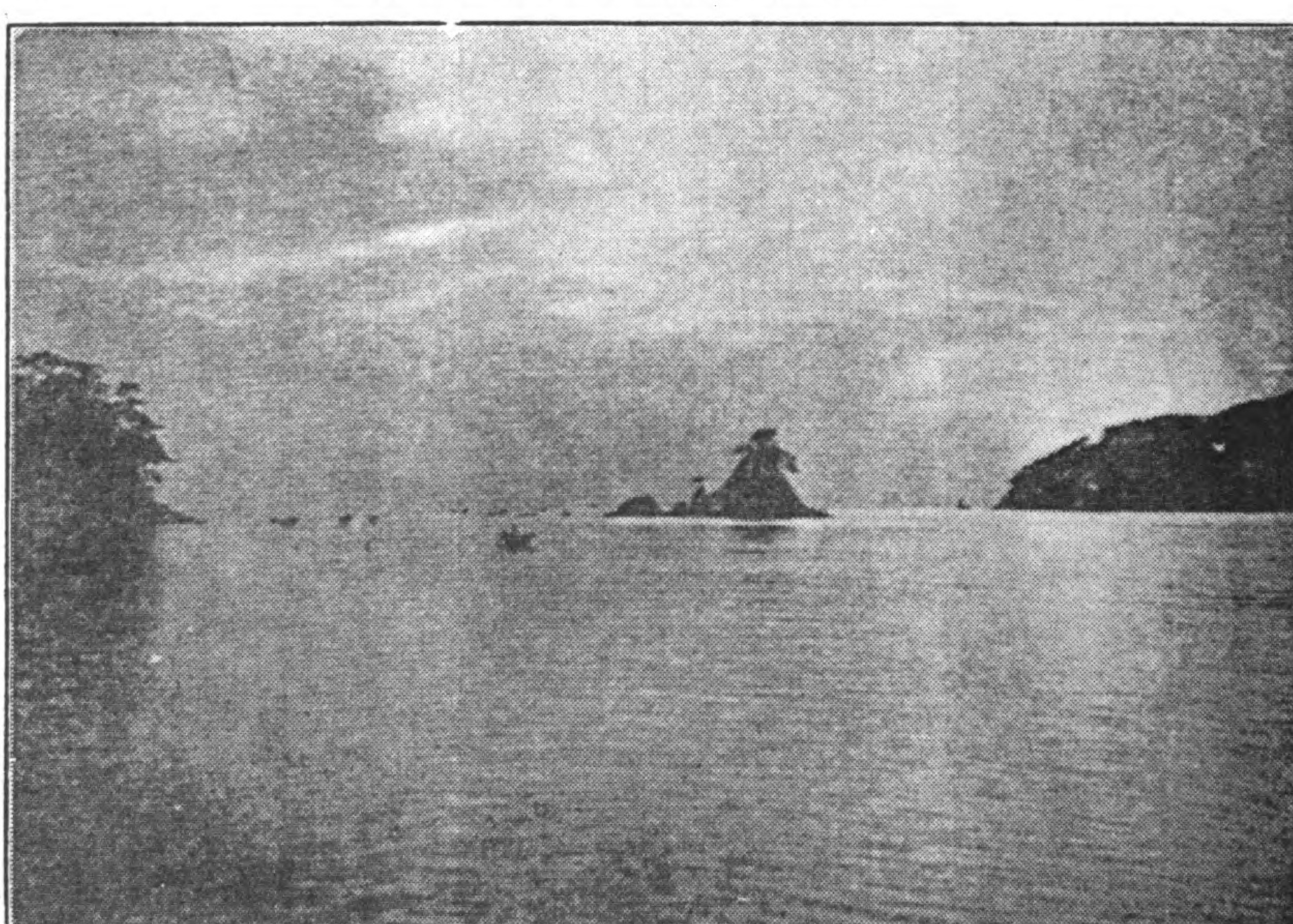
發行所 東京神田南甲賀町 東京國民書院

北海道の瀑布とアイヌ人



（小樽 梶水仙子寄贈）

伊豫高濱の四十島



（伊豫 百合子寄贈）

誌友おもかげ



（函館）山崎あき子
（大坂）若紫



（大坂）白菫
（秋田）無花果女史





（遠江）大橋益子
（高知）富永春枝子



（高知）澤本房代子
（石狩）都築やよい子





（石狩）林芳子
（大坂）兒玉成子



（大坂）中尾松野子
（秋田）落花子



《誌友諸嬢よ、奮つて寄贈あれ、到着順に紹介の上　お寫眞は返却致します》

社告

女子文壇七月號（七月一日發行）

右は發行期の翌日本社は悉皆賣切申候に付乍遺憾次號（八月一日發行分）代送仕候間左樣思召被下度候自今可成は前金にて御申込置被下度候はゞ缺號の憂ひ無之候

女子文壇社
發送部

（銷夏の友）八月限り空前の特賣（綠蔭の友）

見落す勿れ＝九月より正價に復す



（東京京橋大鋸町十一 振替口座第壹七貳九番） 出版元 女子文壇社 （東賣各捌 京外海店）

投書家並に愛讀諸君は此社告を見落す勿れ

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生
佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種 ●敍事文 ●抒情文 ●書簡文 ●評論文
（各半紙廿四字詰三十行以內楷書にて認めらるべし）
●短篇小說（半紙かな付 廿四字六十行內） ●新體詩（半紙かな付 十句以內）

乙種 ●和歌（半紙半分 一首宛） ●俳句（仝上） ●新歌謠（仝上）
●短文（半紙かな付 廿四字五行） ●新笑話（半紙半分 十六字詰） ●圖畫（二寸の三寸 風俗景色）
（但日本紙の薄きもの）

別種 ●文藝遊戲（半紙十六字詰）
●誌友倶樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも採選は隨意▼
▲同封にて送付差支なし

↓（每月十五日投稿〆切）↑

奬學懸賞品

甲種

第一等 貴金屬品類……價格金拾圓
第二等 吳服物類……價格金參圓
第三等 小間物類……價格金八拾錢
第四等 便利の圖書切符……金五拾錢
第五等 同……金三拾錢

乙種

第一等 絹蝙蝠傘……價格金五圓
第二等 帶止、半襟類……價格金壹圓
第三等 文房具類……價格金五拾錢
第四等 便利の圖書切符……金貳拾錢
第五等 同……金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも决して政治的時事論に涉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は「原稿在中」の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に關しては一切應ずな禁ず○投書は他人の作物を剽竊すべからず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返付せず○投書き不足未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（每月一回（一日發行）定期增刊年四回 二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

一冊（六錢 百六 十五）	前金拾錢	郵税共	前金拾壹錢
八冊（半年分 增刊共）	前金七拾六錢	同	前金八拾四錢
十二冊（一年分 增刊除く）	前金壹圓八錢	同	前金壹圓廿錢
十六冊（一年分 增刊共）	前金壹圓四拾四錢	同	前金壹圓六十錢

郵券代用は必ず壹割增

便利の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法
此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年七月廿九日印刷
明治四十年八月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話「本局六〇七番」 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	一行……
上等	一頁廿五圓	半頁十三圓	一行……
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切 每號十五日前



第三卷　第十號

（明治四十一年八月一日發行）



藝術的良心

藝術的良心と言へばむつかしいやうに聞えますが、其意味は然までむつかしい事ではない、畢竟文章を作つたり詩歌を作つたりする時の、精神の態度を言ふので其精神の態度一つて、作り上げた詩歌文章の可否が定まるのです。偖て何う言ふ風に其精神を持てば好いかと言ふと、第一精神を向上すること、高慢の高でなく、高尚の高です、普通の人間より一段高い處へ精神を据ゑて、凡てを觀察し是を文字に表はすと、其文字も屹度氣品が高い、思考は高く持たねばならぬ。次に精神を美しく持つこと、清く持つこと、同じやうな事です、美しく淸く持たないと、作品が何となく卑しい。それから精神を正しく善く持つこと、最も或る場合には作家として立たうと思ふ以上は、社會の暗黑面、即ち不善ことも筆に上さなければなりませんけれど、精神の態度までも惡く、暗く持つ必要はないのです、精神は何處までも明るく、又正しく持つて居て、他の惡い事も洞觀れば、善い事も洞觀るだけの經驗を有し、而して社會の暗黑面を寫さうと、光明面を寫さうと自由に作り出せば宜しいのです。最後に精神の眞を失はないやうにすること。眞情が何處までも其作に表はれて居なければ、所謂超越ところが無くなります。

暑中休暇

府立第一高等女學校長　伊藤貞勝

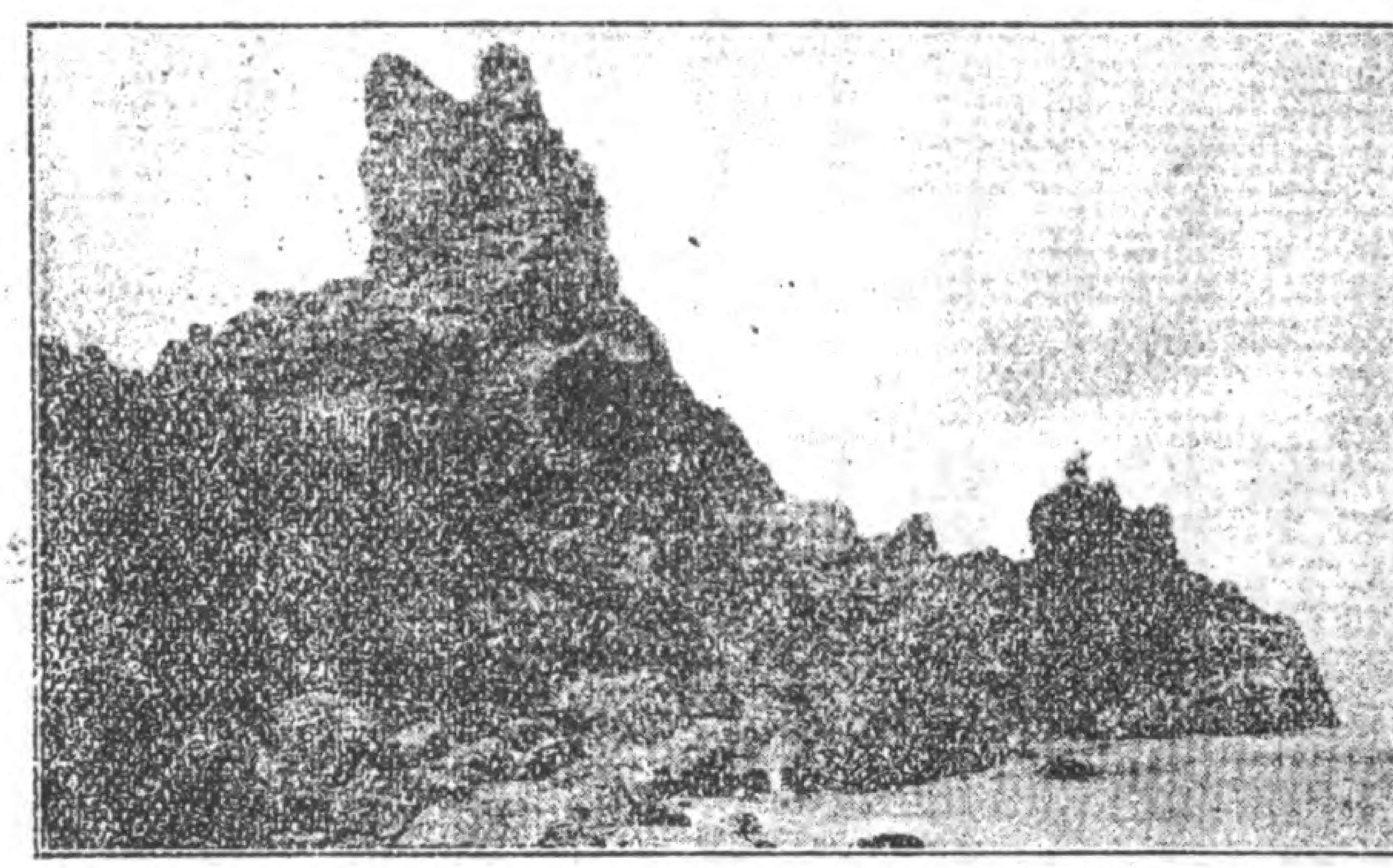
暑中休暇は遊ぶための休みでなく、氣候の關係上、心身の休養を要する時期であつて、强制的に學業を授けるに、不適當なところから設けられてあるのですから、休みになつたからとて、空しく遊んで過すのは宜しくありません、必ず何れだけかの勉强を爲なければならないのです。

然らば、何ういふことを爲たならば宜しからうかと云ふに、先づ第一には、此休み中を利用して、自分の平生不得手な學科を充分に複習して、他の學科に劣らぬまでに進めて置くことです。之は平素でも、强ち出來ないことはありませんが、不素は一般の學科を複習しなくてはならぬので、それ相應に仕事がある上に、更に、取分けて或る一部の學科を精しく複習しやうとすることは、腦力も免さぬところであるし、强て勉めれば、自然他の學科の方が粗にかゝり、又一方には、健康を害ふなどの恐れもあります。或は家庭敎師を傭ふとか、夜學校などに通つて、不得手な學科を修めるといふやうなこともあるやうですが、此れは敎へるものが、餘程上手な良い敎師であれば格別、左もない以上、却て害になるとも、益になることは少ないのであるから、それよりも、此四十餘日の休暇のうちに、ゆる〳〵と自修する……勿論他の學科をも複習しなくてはなりませんが……のが宜しくありましやう。尤も此場合には、今申したやうな、家庭敎師に就いて勉强するとか、夜學校に行くとかすることも、平素と違つて、別に差支はありますまい。が、玆によく注意して置きたいのは、自修するなり、或は敎師に就いて學ぶなり、何れにしても、既習の塲所を複習するのは差支ありませんが、未習の塲所……まだ學校で習はない先の方を習つて置くといふことは、誰しもやつて見たいことではあるが、よく愼まねばなりません。此れは一寸考へると、好いことのやうでありますが、却て爲にならぬ、而已なら

ず、前に習つてあると、今度學校で敎はる場合に、自然不注意になり勝で、其不注意も自分一人だけならば未だしもであるが、一人の不注意は引いて全生徒の不注意を釀して、他に害を及ぼすことが少なくありません、よく注意すべきことです。

其外、學校で敎はる學理以外に、實地に就いて修養すべきことが澤山あります。例之ば割烹とか、裁縫、技藝とか、其他倫理に屬する禮義作法等のことは大體の筋道は學校で授けらるゝものの、學校では充分に時間も免さず、且又、學校のみでは到底及び難いところがあります。是等は皆他日女子が、各其本分を盡す上に於て、最も必要なる、是非學んで置かねばならぬことであるが、學校では前云ふ通りの次第であり、且平素は學校て五六時間を費し、歸つてからも複習の時間を要する

下總銚子犬若島　（富山白菊寄）



のでありますから、自分から進んでする暇もなく、父母の側からしても、健康上抔の點から、餘り細々した家事には心を配らせぬやうに、といふやうな傾もあるでしやうが、暑中休暇には、充分に暇があることでありますから、自分から進んで此機會を利用して、平素學校で學んで居ることを、實地に就いて練習するが宜しいです。時には廚房に入つて料理の手傳ひもする、御飯も炊いて見、お菜もこしらへて見るが宜しい、又、夏うちは何處の家でも爲ることであるが、冬のうち着た衣服を解いて洗ひ張をして、更に縫ひ直す手傳ひをする、之は縫ふことの出來ぬものは解いて綿ぬきをするのみでもよいし、縫へるものは縫つて見るのも爲になる、又、兄弟のあるものは、年少のものゝ衣服の仕末をしてやるのも善い事である。斯様なことを爲るのは、單に自

分の修養となるばかりでなく、父母に孝養の一端ともなり、且、父母が自分達を育てゝ呉れるのに、何れ位の手數がかゝるかと云ふことも知れる。或は朝夕の箒掃除なども、運動にもなることであるから、勉めてやるやうにする、猶其外にも、社交的の修養として、來客に應對することと等も勉めてやつて見るがよい、取次をする、座敷に通して煙草盆を出す、茶菓をすゝめる、一寸した世間話位をすることは關はない。凡て斯樣なことは、皆他日社會に立つて立派な婦人となり、女子の本分を盡す上に於て、大切なることでありますから、暑中休暇のやうな好期を逸せず、出來るだけ練習して置く可きてす。且又、いろ〳〵なことを自分で爲て見ると、自然に其ことに趣味を持て來る、趣味が生ずれば、學校で學ぶ時分にも、非常に面白く感じて、不知々々身が入る譯てあるから、從て學校の成績の上にも好結果を及ぼすことになります。

以上は休暇中、家に居るものゝみに就て云ひましたのですが、猶休み中、或は避暑に行くものもあらうし、旅行するものもありましやう。之は經濟上の問題も伴ふことて、人毎には出來ないことてありますが、事情の許すものは、避暑に行くなり、旅行して見るなりするも好いことてす、殊に日頃東京のやうな紅塵萬丈裡に住つて、生存競爭の激しい巷に居るものには、偶山間若くは海濱に行つて、大なる自然に接することが、非常な愉快てもあり、又、少なからぬ心身の修養になるものです。

避暑なり旅行なりするものは、天然に就いて深く觀察すべきは勿論であるが、よく注意して社會の狀態を觀察することも趣味あります、譬へば田舍へ行きますと、現今でも、穢い家に住み、破れた衣服を着け、粗末な食物を食べて勞働して居るものが澤山あります、又、土地に依つて、言語が違ひ、風俗習慣が異り、從て住民の思想感情にも大分の相違があります、是等を精しくいろ〳〵の方面から研究するのは、餘程爲めになることであります。其他、其土地に功勞のあつた人の事蹟を調べるのもよろしい、此は古人ても今人ても

構ひませぬ。それから猶、名所舊蹟を尋ねて、之を歴史に徴し、或は士人に就いていろ／＼なことを聞きただして見たりすると、案外に面白いことがあつて、爲になるばかりでなく、非常に慰みになるものであります。

猶、避暑なり旅行なりするものは……之は家に居るものも同じであるが……取分けて日記を精しく書くことが肝腎であります。平素でも日記は可成丁寧に記して置くべきものでありますが、休み中や、旅先きでは、比較的他の用事が少ないのであるから、日々見聞したことは、出來るだけ精密に詳細に書留めて置いて。他日其中の面白いところを、文章に綴つて見るなり、話の材料にするなり、或は何かの參考にすることも出來ますから、その心掛けで始終日記を書いて居ると、自然物ごとに對する觀察も密になり、樂々と筆も運べるやうになつて、大變に作文の助けにもなります。又、日記のうちに畫を挿むことも、是非心掛けて欲しいものです、之は好い景色に接した時とか、美しい花、愛らしい鳥を見た時とか、或は異つた風俗の人に遇つた時分などに、一寸描き取て置くので、圖畫の練習になるばかりでなく、斯うして置くと、後々になつて日記を見た場合に、記事以外に其時の事が聯想されて、興味の深いものであります。全躰圖畫の應用とか、練習とか云ふことは、誠にやり惡いことですが、斯ういふ場合に應用すると至極宜しいのです。

之で暑中休暇中、家に居るものと、外に出るものとの兩方面に就いて、大體は申した積りでありますが、猶一つ、誰しも注意して居ることではあるが、云つて置きたいのは、衞生を忽諸にしてはならぬことであります。極めて普通のことで、取立てゝ云ふまでもありませんが、衣服はよく洗濯して、決して垢染みたものを着て居ないやうに――洗濯なども可成務めて自分でするが宜しい――晝は暑いからと云つて、晝寢など爲ないやうに、夜は寢具をよく纏つて、寐冷抔のないやうに、旅行先では水を呑まぬこと、氣候の異つたところへ行つたらば、注意して身躰を加減する、海水浴に居

るものは面白いに任して、永く海水に浸つて、下痢など起さぬやう、と云つて、又、暑い炎天に身體を曝して眩暈などにならぬやう、凡て自分のことは、他人から注意を受けるまでもなく、よく自分で加減して、健康を保つて行くやうにしなければなりません。

よくあり勝のことでありますが、休み中は、學校に通ふ時よりは、却て身體が自由になるところから　萬事が不規律に流れて、夜更しをしたり、朝寢をしたり、食事を不規則にしたり、間食をしたり、運動を缺いたりする爲めに、病氣になることが往々ありますが、それては休みのために却つて身體を害ふので、暑中休暇の本意に違ふのでありますから、よく務めて萬事規律を守り、衛生に注意し、適度の運動を怠らず、身體を出來得るだけ强健ならしめ、新學期に入つても充分に勉强の出來るやうに、心掛けねばなりません。

（文責在記者）

露楊絮語

文學士　沼波瓊音

間斷の害

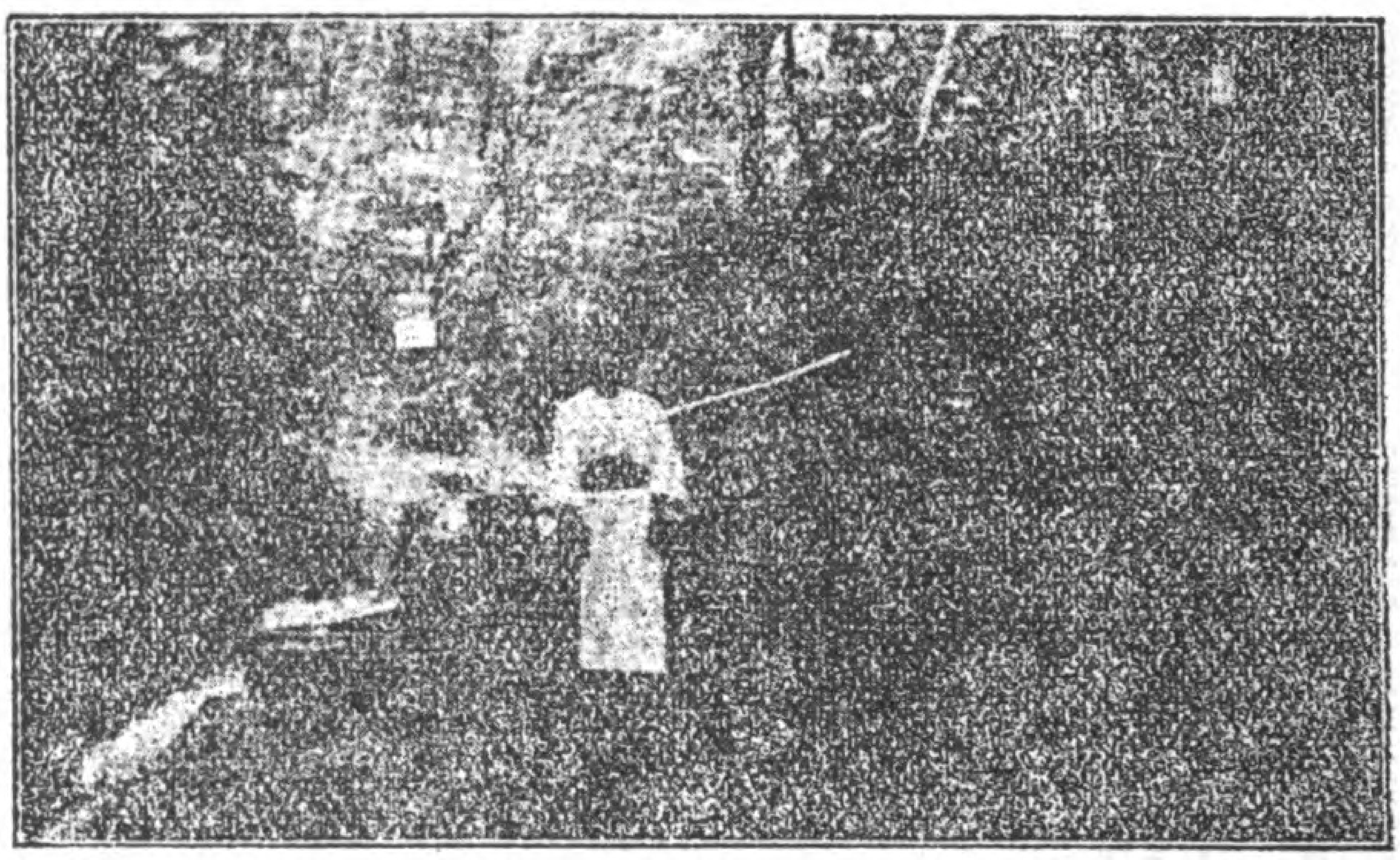
汪積山姪の師濂に教へて「間斷の害は學ばざるより甚し」と云つた。書を讀むのに中絶しては往けない、たとひ少しづゝでも毎日々々讀んで間斷せぬやうに勉めねばならぬ、間斷する位なら學ばぬ方が增しだ、間斷の害は學ばざるより甚しい、との意味である。

專意

同じ人の言に「作文は必ず悟入する處を要す、悟入は必ず工夫中より來る、僥倖にして得べきに非ざるなり、張長史の如きは公孫大娘の舞を見て筆法を頓悟せり、張の如きは專ら意を此事に專にし未だ嘗て少しも胸中に忘れず、故に能く事に遇ひて得る所有るなり」とある。僕嘗て「悟」と云ふ題の下に「鴻儒一齋言ひけらく、月を看るは淸氣を觀るなり、圓缺晴翳の間に在らず、花を看るは生意を觀るなり、紅紫香臭の外に存

すと、偉なる哉この言や、淸氣の美をば悟る人、月の眞實を悟れるなり、生意の美をば悟る人、花の眞實を悟れるなり、圓缺紅紫知り盡すとも、花月知るとは言ひ難し、物の姿は知り盡すとも、眞實知るとは言ひ難し、眞實を知るは悟るなり、姿は人に敎ふべし、眞實は人に敎ふべからず、悟は人に傳ふべからず、悟は人に强ふべからず、夫れ凡百の學問は、皆これ姿の敎なり、言といふも文といふも、姿示すに適ふのみ、言や文章の妙なるは、たゞ／＼眞實に近きのみ、たゞ近きのみ近きのみ、眞實其のもの寫し出す、言葉は在らず文章は在らず、聲の外に響無き聲あり、其聲能く眞實を語る、文字の外に形無き文字あり、其の文字能く眞實を示す、悟りの能を缺ける者、萬卷の書を讀破すとも、生涯終に得る所無し、文字の末に泥みつゝ、姿調べに身をやつす、悲しきかなや學びの奴、異才金峨敎へけらく、刀槍は修連にこそあれ、卷物にあらずと、豪雄宗矩敎へけらく、凡そ術は調練思慮、以て自ら得べきのみと、大聖默して華を拈し、迦葉默して微笑しき、達磨心を心に傳へ、敢て文字を立てざりき、あゝ悟なる哉悟なる哉、されば文字輕んずべきか、されば書籍輕んずべきか、されば姿輕んずべきか、否々然らず然らざるなり、與衆豈直に超人を學ぶべけむや、之を思ひ之を思ひ、又重ねて之を思ひ、之を思ひて得ずんば、鬼神將に之を告げむとす、管子の言の高い哉、姿を窮め窮めてぞ、やがて眞實を悟るべき、姿を窮め窮むるは、眞實を悟る手段なり、悟らむ爲に姿窮めよ、窮めむ爲に書をも讀め、讀まむが爲に文字も調べよ、されど是皆手段なり、説く者も、聽く者も、記す者も、讀む者も、ゆめな忘れそ手段たること、手段は總てにあらぬことを」と云ふ詩とも散文ともつかぬものを作つたとがあるが、これと前の言とを參照して味つて貰ひたい。夢中に名歌を得た名案を得た等と云ふ昔物語も專意の結果である。

上州伊香保湯本



（板橋たゞ子寄）

平衍

同じ人の言に「言を立つる嶄絕刻峭に在らずして平衍なるを觀るべしと爲す、荒唐險怪に在らずして豐腴なるを樂むべしと爲す」とある。僕曾て「己が耳目に觸るゝもの、自然でも人間でも常に注意して觀察する癖を付けておくが宜い。たゞ珍らしい事物をのみ注意すると云で無く、普通身のまはりに起る事柄でもよくよく注意して居ると、そこに存外深い意味が發見されるものである、珍奇な事物をのみ探して居ると云とは想を養ふ上にあまり効の無いものである」と書いたとがあつた。ひどく古人の言と自分の言と列べ立てゝ豪がるやうに見えるが、自分の考と古人の考と似たとを發見すると愉快で耐らぬからつい列べたのである。金色夜叉は嶄絕である、多情多恨は平衍である、紅葉自らも「金色夜叉は壯士芝居だ、多情多恨が得意だ」と云つたとある。「御手討の夫婦なりしを衣更へ」とか「閻王の口や牡丹を吐かむとす」など云嶄絕の句を製つて得意がつたは蕪村、「白露をこぼさぬ萩のうねり哉」とか「大螢ゆらり〳〵と通りけり」とか平衍にして觀るべき句を吐いたのが芭蕉一茶である。

字義

荻生徂徠曰く「譬へば和牘の一筆啓上と云ふ語を、或人講じて曰く一の字は是れ數の始、筆は乃ち蒙恬の製る所、或曰漆園篇に吭毫の語あり恬に起るに非ざるなりと、此れ豈に國語一筆の義に繫はらむや云々今世村學究の書を講ずる往々是の如し」、今でも此流義の書や先生が全く無いでは無い、左う云書を讀み左う云先生に就ても更に所得無しとは云はれぬが、自分がつい釣込まれて自分が文章を讀む時にも小さな字義ばかり解するに骨折てその文章の眞髓を味ひ得ぬやうにならぬ樣注意が肝心である。

體製と精工

倪思曰く「文章は體製を以て先と爲す、精工之に次ぐ、其體製を失せば辭を浮にし響を切にし黃を抽き白に對し其精工を極むと雖之を文と謂ふべからず」、文章を作ると云とは面白く無い事を面白く書きなすと思ふは間違である、面白く無い事は面白く無く書き面白い事は面白く書くのが文章である。又中身が空虛で外ばかり滿艦飾をしたとて妙文でも何でも無い。俳人鬼貫

が「句を作るに姿詞をのみ工みにすればゝゝと少し、只心を深く入れて姿言にかゝはらぬこそ好ましけれ」と云つたのは、此所のとである。併し到底精工を重んじて體製を忘れると云時代は經ねばならぬ。精工を第二にすると云事を悟るは餘程趣味の進んでからである。我國の文藝嗜好者もつい近頃まで技工にのみ眩惑されて居たが此頃になつてやつと殆技工絶無で意味の妙なのを歡迎するやうになつた。

摯虞曰く「象を假りて大に過ぐる時は則ち類と相遠ざかる、辭を造りて壯に過ぐる時は則ち事と相違ふ、言を辯じて理に過ぐる時は則ち義と相失す、靡麗美に過ぐる時は則ち情と相悖る」、これは誤られたる精工を云たものである。

一家の風骨

祖瑩曰く、「文章は須らく自ら機抒を出して一家の風骨を成すべし、何ぞ能く死人と共に生活を同じうせむや」、所謂古人の糟粕をのみ嘗めるなと云とである。死んだ人て無く今生きて居る人の眞似ばかりするのも同じく詰らぬとである。自分、自分は尊いものである、自分は自分の外に二つとは無い、自分の顏が他のあらゆる人の顏と異なつてる如く、自分の考は他のあらゆる人の考と必ず異なつた所がある、こゝを發揮せねばならぬ。こゝを發揮し得るは自分にも甚愉快な事であり、世の爲にも幸である。

極至

東坡曰く「意盡きて言止む者は天下の至言なり、然れども言止んで意盡きざるは尤も極至となす」、さアこゝだ、中々むつかしい注文ではあるがこれを理想とせねばならぬ。云つてある言が見樣によつて種々の形を現はし繰反し讀むに從つて愈意味が深くなるを覺えると云、かう云文章がお互に作りたいものである。

不老の水（お伽話）

池田朝村

水が盃に一杯になると、底の方から細かい泡が立ち昇つて、それが一つ一つ水面で破れて、四つの盃の上には時ならぬ虹を靉靆かせました。そして其香の善いことゝ言つたら一通りてありません。四人の客は泡を見、

香を嗅いだ斗りで、心が恍惚となり、喉がぐい〳〵言つて、急遽一口に飲まうと致しました。すると博士が是を止めて、

博士「皆さん一寸御待下さい皆さんが、其をお飲みになる前に、一寸一言御忠告申上げて置きたいとは、皆さんが再び若く御成りになる前に、皆さんの是迄の經驗に依て、今度若く成たら何う爲樣と言ふ規則を御立てに成たが宜しいと思ひます。そうでなくて、依然前の通り自分勝手な眞似斗りして、他の若者の手本と成るとが出來なんだなら、それこそ實に再び若く成る甲斐もなく、誠に恥かしいとと言はなければなりませんから。」

四人の客は是に答へず、只苦笑した斗りでした、それは四人共、今に成てから若い時の不心得を後悔して居るのですから、今度若く成たら、決して前の樣な馬鹿は爲るものかと思つたからです。けれども何うでしようか、若しそうでなくて復もや前の樣に馬鹿な眞似をしたら、隨分可笑なものでしようね。まあ讀者と一緒に、飲だら何うなるか見て居ましよう。そこで博士は、

博士「それでは何うぞ御飲み下さい、いや御蔭で試驗も充分に出來ます。」

博士も隨分人が惡い、朋友四人に此不老の水を飲ませて、四人が何の樣になるか見樣と言ふのです。若も此水が、眞實に年寄を若くするのだつたなら、此四人の客より最と最と飲みたがつて居る人が有ても遣るとは出來なかつたのです。

四人の客は、手を震はせ乍ら盃を取り上げて脣に持て行きました。前にも言た通り、四人共、最う此世の人とは思はれない、屍桶に、片足どころでない、腰迄入れかけて居て、是で十七八の花の盛が有たとは、何うしても思はれない程凋び切て居たのでしたが、盃の水を一息に飲み干して、盃を下に置くと、客の樣子が直ぐに變つて何處となく晴々として、今迄死人の樣な顏て有たのが活々と紅味を帶びて來ました。客は互に顏を見合せて、是は確に、魔法の力で年を若くするのだと考へました。ウイッチェリー婆さんは、何處となく自分が若く成た樣な氣がしたものですから、もう衣紋を正したり、髮の毛を撫て附けたりし乍ら、

ウイ「何卒もつと其不思議な水を下さいな、私達は大分若くなりましたが、未隨分年を取て居ます、早く最う一盃下さい、早くさあ」

と一生懸命に急き立てますと、博士は落附き拂つて、

博士《御待ちなさい、貴方はその樣な年寄になるには何十年と云ふ長い年月かゝつたのでしよう、然るに三十分かそこらで原の通りに若くなれるのに、それが御辛棒出來ないとは……併し水は貴方の御望みの儘ですから、さあ御遠慮なく御飲り下さい》

と云ひ乍ら、再び四つの盃になみ〳〵と注ぎました、四人の客は待ち兼ねたと言ふ風で、唯一口に飲み干しました、すると實に不思議ではありませんか、其水が咽を通るか通らない中に、僅二杯飲だ斗りだのに今迄寄て居た顏や手足の皺も、雪の樣に白かつた髮の毛や鬚も、何でも彼でも、年寄の記號となるべきものは、朝日の前の霜の樣に、瞬時間に消え去つて、髮の毛、鬚は漆の樣に黑く、眼は星の樣に輝いて參りました。今は最う死損ひの爺さん婆さんの姿は何處へか消え去て、血氣盛んな紳士と花を欺く樣な十七八の娘とが現はれました。さあ斯うなると四人共、最初に博士と約束したとは悉皆忘れて、そろそろ昔の馬鹿に返りかけました、そして先づキルグリユー少佐から騷ぎ始めました、

我が郷里（遠江小笠秋香子寄）



キル《やあ、ウイ子さん、貴孃は實に御美しくなられましたねえ》

斯う言はれたので、婆さん、否娘のウイツチエリーは急いで鏡の前に行て自分の姿を映して見ました。其他の三人も亦各自に醉た樣に成て、もうすつかり年寄の沈着いた風はなく成て、心から昔の若者に返つて了つた樣に成りました。

ガスコニーは、昔政治家で有たものですから、政治上の演說を始めました。傍には一人も聞て居る者もないのに、獨りで夢中に成て汗を流して、側で見て居ると宛で發狂の樣でした。

キルグリユー大佐は、盃を叩いて調子を取り乍ら、三十年も前に流行つたホーカイ節か何かを謠ひ出したし、メドボーンは、一つ何か大儲けを遣ろうと、一向と胸の中で途方もない考を廻らして居りました。其考はどんな考かと言ふと、

鯨を生捕つて其に帆を掛け、千島の果から氷を運び出したら、此暑に嘸儲かるだろうなぞと、斯な馬鹿げたとを考へて居ました。

ウイッチエリーは、何うかと見ますと、最前から鏡の前に立て、髪を撫て附けたり、腰を捻つて見たり、眼を瞰張つて見たり、笑つて見たり、種々樣々な風をして、是も側で見て居ると宛て氣違の通りでした。そして顔を鏡に附けない斗りにして、皺が殘つて居ないかどうかを試し、髪の毛を掻き分けて白髪が殘つて居無いかどうかを檢べて見まして、愈々皺が一條もなく、白髪が一本もないと言ふとを確かめてから、鏡を離れて、舞踏でもする樣な足付て、博士の所へ歸つて來まして、

サイ【博士、何卒もう一杯下さいましな】

と頼みますと、博士は、

博士【さあ〳〵、御覧なさいまし、もうちやんと注て置きました】

と言ひましたので、見ると何時の間にか、水は四つの盃に滿々と注がれて、底から立ち騰る泡は、ダイヤモンドの樣な光を放つて居りました。その時はもう日の暮方で、部屋の中は外よりも一層薄暗くなりました。

すると此水を入れてある瓶から青白い光を發して月の樣に博士と四人の客とを照しました。今はもう全く若く成りすまして、心から面白く樂しそうで年取てからの苦みや惱は宛然恐ろしい夢で有た樣な氣が致しました。見ると博士は相變らず皺だらけの六ケ敷い顔をして、四人の樣子を眺めて居りました。四人の客は三杯目の水を飲みかけた時、博士の此何となく一種不可思議な樣子を見て、思はず身震を致しましたが、其水が咽を通つて若い時の樣な、勢の善い血が、全身を廻り始めましたら、もう何事も、忘れて、年寄てからの、心細かつた事や、苦しかつた事は、宛然一時の夢で有た樣な氣がしまして、互に、若く成た！、若く成た！と叫び出しました。斯うなると人間と言ふものは勝手なもので、たつた今迄自分が年寄で有た癖に、年寄の風を馬鹿にし出しまして、互に自分等が年寄の衣服を着て居るのを可笑しがつて笑つたり、又は、中氣病の眞似をして床の上を蹌踉けて歩いたり、眼鏡を掛け直して、年寄が本を讀む樣な風をして、魔法の本を眺めたり、安樂椅子に腰を掛けて、博士の風を眞似たりして、各自に勝手な眞似をして笑つたり、飛び跳ねたり、大騒ぎを始めました。其中にウイッチエリー婆さん、い

や婆さんではない、孃さんは、博士の側に行て其皺だらけの手を執り

ウイ（さあ博士、一緒にお踏りなさいな、さあお立ちなさいよ）

と言ひますと、他の三人は、博士の澁い皺だらけの顔を見て、可笑しくて堪らんと言ふ風に、大聲立てゝ笑出しました。けれども博士は相變らず眞面白な顏をして、

博士（いや何卒お許下さい、私は此通り年寄で、加之此頃リウマチスで、手足が痛んで困つて居ますから……私が舞踏を踏るなぞは四十年も昔のことです、それより其處に若い御方が大勢居られますから、其御方々が御相手を爲さるでしよう）

と言て少しも相手になりませんでした、すると、キルブリユー大佐が、

キル（ウイ子さん、さあ私が御相手を致しましよう）

と言ひ乍ら、ウイッチェリーの手を執ろうとしますと、ガスコニーとメドボーンとが兩方から一度に、

ガス（いや私が御相手を致します）

メド（いや私が）

と言ふ風で、三人がウイッチェリーを取り繞て、引張合を始め、宛然金魚が何匹も寄て、一つの麩を取り合ふ樣に、彼方へ押し、此方へ押し、終には三人互に喧嘩を始めて、部屋中を彼方此方蹌踉めき廻つて、大騷動を遣り出しました。何でも此時例の不思議な鏡の中には、三人の皺くちやの爺さんが、一人の皺くちや婆さんを取り合つて居る有樣が映つて居たと言ふことです。斯な大騷を遣て居る中に、終々食卓を覆して了ひましたので瓶は壞れ、水は溢れて了ひました。恰ど其時、衰弱つて死にそうに成た蝶が一匹飛び込んで來て、其水の上に落ちましたが、暫くすると、急に元氣付いて再び高く舞ひ上つて、博士の雪の樣な頭に止まりました。博士は此蝶を追ひもせず、嚴格な調子で、

博士（皆さん！、皆さん！、これウイ子さん!!!、左樣亂暴を爲れては困ります、何うも怪しからんではありませんか、）

斯ふ言はれたので、皆氣が附て見ると、食卓は覆返つて居る、瓶は壞れて居る、勿論其不思議な貴い水はすつかり溢れて了つて居たので、吃驚して博士を見ますと、頭に胡蝶を止まらせて苦い顏をして、何となく物懐い有樣で有たものですから、今迄夢中に成て騷いで居た連中も思はず身震を致しました。博士は粒々に壞れた瓶の破片の間から、例の半世紀前の薔薇の花を拾

ひ上げまして、手眞似で人々を椅子に坐らせ、偖言ひますには、

博士（皆さん御覧なさい、花は再凋みかけて居るでしょう）

斯ふ言ひ乍ら、微に射し込む夕燒の光に、其薔薇を透かして見せました。見ると、成程博士の言ふ通り、今迄美しかつた花辨が、漸々と其色も褪め水氣が無くなつて、見る間に前の通りの、干枯び果てた物と成て了ひました。其時博士は、

博士（私は、枯れて居樣が、枯れて居まいが此花を愛します）

と言ひ乍ら、其凋んだ花を彼の凋んだ口元に持て行きました。其時博士の頭の上の蝴蝶は、博士の顔から滑り落ちて死て了ひました、是を見て一同は再び身震を致しました、そして互に顔を見合せますと、今迄不老の水の力で若く成て居ましたが、其が醒めかけたのでしよう、皆の顔に徐り徐りと皺が寄り始め、漆の樣に黑かつた髮の毛も、薔薇の樣に紅かつた脣も、次第次第に褪めかけました。

一同（やあ、皆は再年寄に成た!!!）

今迄如何にも面白そうに騷いで居ましたのが、如何にも心細さに堪ないと言ふ樣で、斯ふ言た儘默つて俯向いて了ひました。中にもウイッチェリー婆さんは流石に女のとてすから、御轉婆な眞似をしたのが耻しく成て、皺だらけの手て、顔を匿て了ひました。すると博士は、

博士（そうです、貴方等は再び老人に成られました。そして御覧なさい、水は一滴も殘らずに、皆床に浸込んで了ひました。併し私は決してそれを惜みは致しません、のみならず、例ひ戸口に其水が堪えず湧き出る井戸がありましても、一口も飲み度とは思ひません。貴方等は實に善い教訓を與へて下さいました。若し貴方等が此教訓を與へて下さらなかつたなら、私も皆さんと同じ樣に其水を飲みましたでしよう、いや御蔭で助かりました。）

博士は、人間と言ふ者は、徒に若く斗り成ても仕方がない、仕方がないのみならず却て若い時の過を繰り返すものであるから、やはり自然の儘に年を取り、そして死すべき時に死なねばならないものだと言ふとを悟りました、けれども客は、現在自分で其樣な眞似をして置き乍ら其を悟らず、猶又此水は只の水で、博士の魔法で皆を若くしたのかも知れないのに是非フロリダ半島へ行て、其水の湧く泉を發見して、毎朝毎晩飲み

續け度いと言ふので、早速探檢に出かけたと言ふことてすが、今だに死だか生たか其消息を聞た人はありません。（をはり）

作文其をり〳〵（續き）

高須梅溪

二　旅行記について

夏について思ひ出だされるのは、涼しく樂しい旅行の味てす。勿論、旅行は必ずしも夏に限つた譯てありませぬが、暑中休暇があるので、どうしても身體の自由がきゝますから勢ひ旅行する方が多い樣てす。波打ち寄する濱邊、人里遠き山蔭、そこに溢る許りの涼味があると思ひますと、最早魂が山水の間に逍遙ふ樣に感ぜられます。此機會に乘じて旅行記の御話をするのも一興てありましよふ。

私の所謂る旅行記は、從來紀行文として知られて居るものてす。只紀行文と言ふよりも旅行記といつた方が分明り易いので、此く改めたのてす。旅行記は極めて作り易い樣て其實、中々むづかしいものてす。今迄世に出たものゝ中て。之はと申す程のものは、極めて少い樣てす。其理は從來行はれた鑄型を脫せぬからて、何れを見ても千篇一律て少しも其旅行者が通過した土地の、地方的特色が現はれて居らぬからてす。之を現はすことが中々むづかしい、それに旅行記は人情風俗の樣々な色合を寫すと共に、自然の變化、其折々の調子を明かに畫き出さねばなりませぬから、雲の姿を寫すにしても、朝夕の差別、乃至、夕暮の中て、只三十分間位な間に絶えず變るは所の特殊の色彩を見逃してはなりませぬから、餘程困難てす。旅行記が作り易いとて少しも油斷は出來んのてす。今左に二三の注意點を述べましよふ。旅行記を作る準備としては、科學上の智識、殊に動植物、歷史、地理、の智識が必要てす。之れ丈でもちよつと重荷てすが、なほ其上に、相當の畫心、があれば結構てす。

右の準備智識がないと假令、如何なる名所舊跡を廻つても、盲目か聾の樣に何の得る所がないてしよふ。即ち草木を見れば其名を知り、動物を見れば其種類を知り、山水を周ればそれが如何なる地質から成り立つて居るか又、其名稱、特色等の大體に通じて居らねばならず、名所舊跡に逢ふては其由來の概略を知つて居らねばなりませぬ。左樣てないと折角の旅行も無駄に

なる理です。次には、

一、觀察　二、手帳　三、取捨撰擇　四、文體

の四要件を知つて置く必要があるのです。觀察とは各自が經廻つた山水について、詳細に其特色を見分けて微細なる點をも見逃さぬ樣にすることです。若しこれが疎漏であると旅行記の好材料を得るわけに參りませぬ。ですから多少旅行記の上手な方は、總じて其觀察が細かい樣に見受けられます。

既に觀察の眼鏡を透して得た材料は、其の折々直ちに手帳に書き附て置くがよいでしよふ。さすれば愈旅行記を物する塲合になつて、當時の記憶が明白と心に浮んで參つて、筆の運びも自ら滑らかになる理です。

然しながら如何なる旅行記にても其の中に或る一の山があることを知らねばなりませぬ。山と云ふのは一番面白い所に力を注いで、油が乘つた樣に書く事をいふのです。假令ば富士山へ登つた其折の有樣を書くにしても、途中のことは成る可く簡略に書いて、山上の初日出或は最夜中の光景などを詳細に書き出すのは、即ち其文章中の山なのです。そこでどうしても、旅行記の材料については、取捨撰擇が必要になつて來るのです。ですから其中の山には、力を盡しても宜いのですが、其他は輕く刷毛を塗抹した方が結構です。即ち一番肝心な所は明確と浮び出す樣にして、他は模糊と背景の樣にするのが肝心です。

終はりに文體の點については言文一致の方がよい樣に思はれます。どうしても昔風の文躰を假りると、痒い所に手の屆く樣に寫し惡いからです。而し言文一致としても其目に見る景色や人間を心の上に浮べて、さて、どう云ふ風に描寫してよいか、と言ふ技工上の問題に振りかへる必要があるのです。所が此技工といふことには中々手心があつて、其神髓に觸れることは到底出來難いことです。私は此所で種々の注意をするよりも、只、正直に有りの儘を御書きなさいと申したいのです、無用の文飾や、成る可く面白そうに書かうと言ふ樣な心持は、寧ろ其後に來るべきものでありましよふ、只正直にさへ書けば自ら自然の特色も現はれ、又地方的特色も浮んでゐる理です。然るに此傾向に適合べき文章が割合に見受けられぬのです。西洋人の旅行記は此點に於て一特色を以て居ります。彼のハイチの旅行記などは最面白いものとして愛讀せられて居りますが、日本の旅行記もハイチ以上に發達することが望ましいのです。

投書地誌

▲澤山本誌の投書を見て居るうちに自ら地方に依りて、其地方的特色のある事が分る、凡て文藝の作品が其地方の感化を蒙る事は、何れの時にもある現象で茲に一つ二つを述べて見やう▲先づ第一に文藝の中央都府たる東京の投書は、地方の投書に比べて誠實の氣を缺くと云ふ事は欠點である、文章は上手であつても眞摯の氣が乏しい、其代り小説などは何うしても東京の投書家に佳作が多い社會全般に觸れ易く、人間を知る機會が多いからであらう▲東京附近て多く投書の來るのは長野、千葉の二縣である、而して一は山岳的氣風を帶び、一は海濱的氣風を帶びて居るのも面白い對象だ、長野縣乃ち信濃からは澤山に來る許りでなく皆一癖ある作を寄せる、藝術的良心の籠つた作は信濃の人に之を見るが、反對に千葉の方から來る投書は何うも輕浮で重みが無く、數に於て劣らないが質に於ては甚だ劣る、信濃も千葉も文藝の盛んな土地には相違ないが一は作家を養成するに適し、一は生噛りに止るらしい▲次で茨城、埼玉、群馬、栃木の諸縣からも同じ程は來るが勝れて地方的特色を見ない▲ずツと離れて我國第二の都會大阪は何うかと云ふに此れ亦甚だ振はない、却つて京都の方が多いやうに思ふ、大阪から來る投書にこれぞと思ふ傑作の見當らないのみならず、概して熱心な投書家が乏しい、一度や二度は出して見るが三度と續ける人はない、只一つ大阪から來る投書に有望な事は、ほんの十四五才の小學校上りの少女の書いたものに折折、優れて摯實の文章を見る、此れは、教育が進歩して作文の教へ方などが好くなつた爲であらう、所謂青年時代の投書家には殆んど望がないけれど此の少年時代の投書家には望を囑して置く▲中國一帶は生活の程度も富裕で文運の進歩が早いと見え、讀書力も作文力も優勝である山陽では山口、廣島の二縣に多く山陰では石見に多い▲畿內附近では大和が近頃目に立つて投書家を增加しつゝある▲北陸では第一越後、次は越中、能登などから多數に來る、越後にも有望の少壯作家が潜んで居るらしい▲東山では近江と美濃には熱心家があるらしい、東北の奥羽地方にもそれぞれ散在して居るが、一人誌上に名を出す人があれば必ず其傍に隱れた同好者が幾人か居る▲遙に遠い北海道から來る投書は大いに傑出したものがある、人烟稀疎の地、自ら靈感に觸れる機會が多いのであらう。

（記者）









懸賞當選圖畫（其十）

山中古洞先生選



（1）夏の夕（二等）　下谷坂本　岡野豊子

（2）青葉（三等）　大坂市北區上福島三ノ三九九　梅本龍子

（3）はた（四等）　大坂市東區松屋町筋石町西南角　今西竹田堂方　今西こゆき

（4）病（五等）　四谷區永住町一、岡部內　平野雪子

（5）白帆（五等）　名古屋市押切町七丁目　淺井こう子

敍事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○無邪氣

藤枝わか榮

さとから歸つて着更して居ると婆やが「あれよくお早く…、私はまた貴女は當分御かへりはないかと思ひました」といふから、なぜなのと目を大きくすると「間違ひましただ、ぼけばあが…、ハツハツ、夫はさうと月末でなくても銀行はさうお忙しいですか、旦那は這麼に度々お泊りで」と今度は婆やが目を大きくするから、御用が多いとみえるねえと帶留をパチンと締めてそこへ座ると、婆は茶を酌んで出ていつた。

二三日留守にしたのだけれど旅からでも歸つたやうに懷かしいので、物珍らしさうに四邊を見廻すと隅の衣桁にをつとのぬぎすてたよそ行着のお召が其の儘になつて居るので、疊まうと手にとると袂に何やらかたい物が…、卷煙草かしらと袖口から引出して見ると紙に包んだ一枚の、逢つた事はないけれど美人だと評判の、小菊といふ舞妓の寫眞なのです、お座敷へ出るなりではないでせう、丸髷に格子縞の羽織の立姿、すつきりとして、目鼻立のいゝは元より、濃い毛をふつさり結つた髮のうまさ、小袖重げな肩つきの格好のよさ、私はどうしてかうもまあ、美しくうまれたものかとうつとりと見つめて居ると、不意につむりの上で「ど、どうしたんですそれは」と急き込み口調のお聲がしたので、びつくりして見上げるとお姉樣（緣付た先の連合に死なれて今はうちに戻つて居る夫の姉）が容易ならんようなお顔をしてゐらつしやるのです、有體にお咄すると「さう、まあ」と穩かならぬ御樣子でしげしげ私の顔を見入りながら、何か仰しやりさうにお唇を動しましたが、首を振るやうになすつて、あちらへ行き掛けに「星さん、道夫が歸つたら其事をお咄なさいよ」と優しくお云付になりました。

それから私はいつもの通りお湯に行きましたが出掛につかつて來て垢はないので、早く上つて歸ると、もうひけたと見えて居間に洋服がありまして、お姉樣のお部屋でお聲がする

のて、何心なく次の間迄ゆくと、何か衝突があつたと見えて、お姉様の激した聲で「そんなようなら星子はさとへおやんなさい」と仰しやると夫がきつぱりした調子で「私の妻は私が思ひ通りにします」とお答へなさるんです、私はハッとして引返しましたが、夫にしてもあのお優しいお姉様がなぜあんな事仰しやつたんだらう、私に落度が有たのかしら、さうだ、乾度あつたに違ひない、けれど私は、例へお姉様が、夫が、何と仰しやつても去られる氣はない、どんなに詫入つても許して戴いてと胸を騒がせて居りました。

一躰をつとは概して優しい方ですが、どうかすると別人のやうな時があります、そして夜更けて醉つて歸る事も有りますし、外泊も珍らしくは有ません、其都度お姉様は苦いお顔をなされて私には一倍よく成さいます、併し私は激務をおとりなさるからだと敢て怪しみません。

聽て夫は居間へ這入て來ましたが、別段憤つた樣子もなく、叱らうともなさいません、實家の事も聞いたり、四方山の話して居ましたが、腹這になつて煙草吸ひ乍ら、打解けた口調で「星さん僕の友人にかういう人があるがね、どつかの宴會か何かで或婦人と懇意になつて、深い愛情を注いてる譯ではないが、止むを得ず行掛り上…意志の弱いからではあらうが…親しくして居る、といふ事は妻君の身になつたらどんな感じがするだらう、まあ星さんならどうだね」とおききなさるから「私ならですねえ」と躊躇つたが思ひ切て、そればかりの事に不服なんか勿躰ないと思いますわ、這麼足らぬ勝ちの身を我慢して戴くのですもの、と團扇で顔を隱すと、「星さんのやうな考へて居れや紛擾はないねえ、星さんが醜い女なら世間に美人はないけれ共」と莞爾なさる、私は思ひ出したので「あ、あなたのお召に寫眞がはいつて居りましたよ」と申あげると「さうだつたかな」と一寸考へて思ひ出した躰で「あゝ、寫眞きちがひの小花がうまくいつたつて自慢てよこしたて入れといたつけ」とお咄なさるから「まあ、小花さんはそんなにお上手ですの」と感心すると「ウム」とあちら向かれましたが「星さんは眞に無邪氣だねえ」と私を見返りなすつた眼の中はどうしたのか、大へん潤んで居りました。

私はまだ苦勞といふものを知りません、いつも愉快です。

（評）人妻として嫉妬の念なくば、其の一生の苦は大半除去せらるべし、さはれ愛のある所必ず此の念なくんばあらず、蓋、嫉妬は愛の半面なればなり、所謂「無邪氣」の幸と不幸とは未だ遽に斷ずべからず。



五等

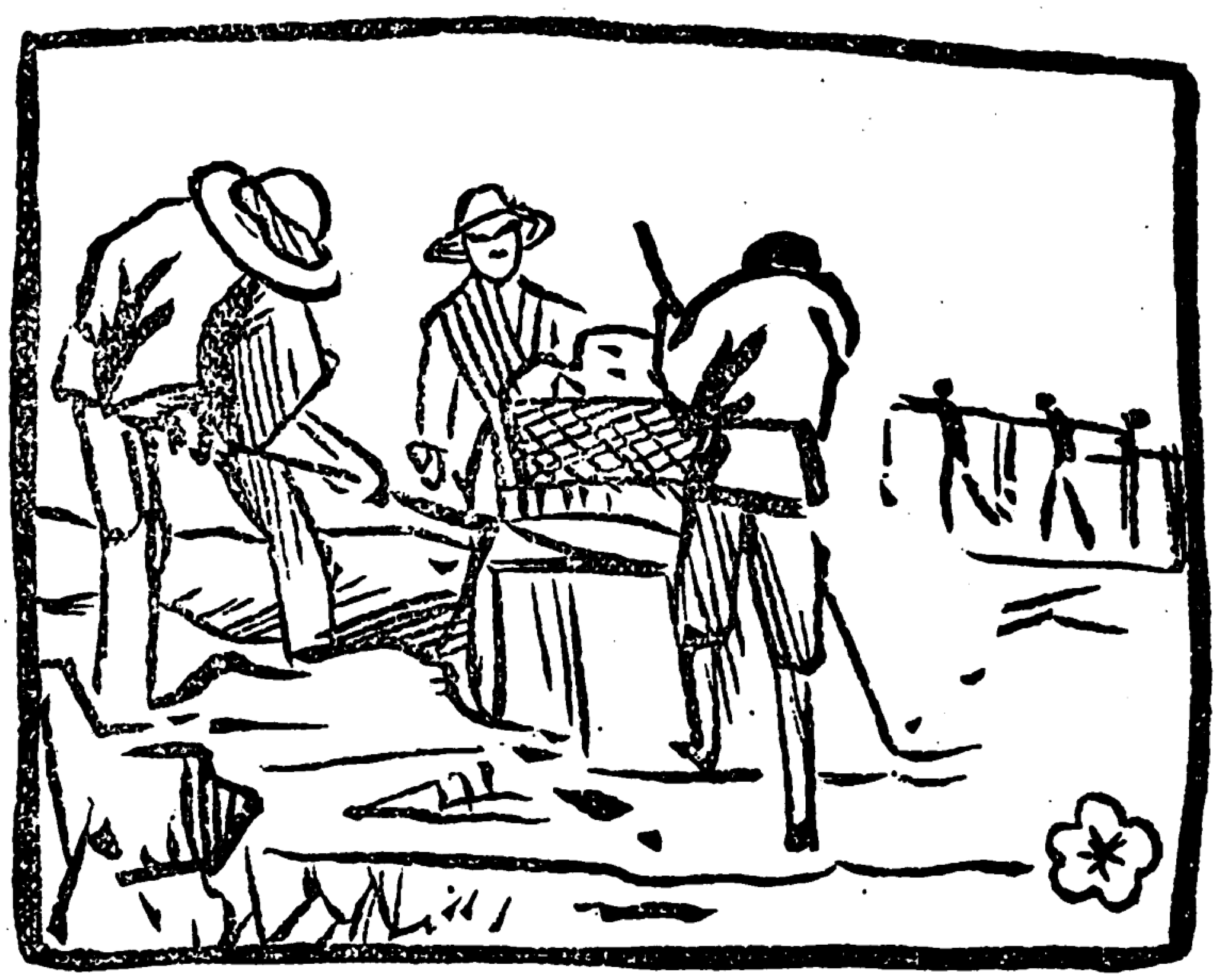
○夏の夜

紀伊　告天賤女

工　夫　　和歌山縣　津田三子

卯の花くだし降る雨に、いとゞさへ人目稀なる宿の、いよゝあはれまさりて、軒をめぐる點滴の音をねざめの友なるわびしさに、見るともなくいたづらに、暫くりひろげゐたる、時鳥のそら耳かと、たどらるゝ計り遠く名のりて過ぎぬる、うれしきものゝ猶かず覺ゆるまゝ、又おとづるゝと待つ夜つもれど、甲斐なきにうんじて、思はずまどろみたる曉、鳥のこゑ〳〵にふと目さむれば、窓もる日かげはなやかに、垣根の朝顏のまだ青葉がちなるもあはれなり。

青葉茂りて、木の下のくらくなりまされる夕べ、日もあらで、黑みわたれる庭の面に、暗をわがものがほなる、螢の二つ三つはかなげに飛びありきたる、何をこひしとて、かく我からもゆる思ひに焦るゝならんと、をかしきに、折しも颯と吹きおろす風の梢わたり來しかば、いひしらず涼しきも似るものなく嬉し。



何の見所もなき賤が家も、垣根に夕顏の青やかに、はひ、ひろごりて、所々に白う咲き出でたる、折から、をかしきながあめなるを、軒端たちのぼる蚊やりの煙、やなぎの梢かすめて消え行く彼方に、糸より細き三日月の、はや入方の光たど〳〵しきを、蝙蝠の時を得がほに、飛びかふもをかしき眺めなる。

篠つく許りに降りいでぬる雨につれて、神さへおどろ〳〵しう鳴りはためけば、恐ろしさに物も覺えずやう〳〵音も遠うなり、雨も小やみになるさまなれば、端近う出て見るに、餘波の露、梢にも草葉にも置きあまりて、はら〳〵と散る玉に影をやどし、いつしか昇る月の光さやかに、雨のなごりとも覺えず、さりげなうくまなきに、今ぞよみがへりたる心地して、空うち仰げば、星の八十川原もはれやかに、かゞやきあひたる實に似るものなく、心ゆく夜のさまなれや。折しも柴の戸扉を、ことゝゝと訪ふこゑす、誰ぞ小夜ふけ

て訪ふ人ありとも覺えず、例のくゐなにてぞと見かへりもせぬ程に、いつしか止みぬ、然なりけりと打笑ひてふしどに入りぬる翌朝、何方よりとも、知らず文あり、急ぎ引あけ見れば、たゞ

ゆくりなく一夜を月に明しけり
待つ人もなき宿を訪ふとて

手は兼て知る友のなり、賓にいか許、憎しと思ひけん。

（評）時鳥、螢、水鷄、とり〴〵にをかしき夏の夕べのさまなりや。

秀逸

◎夏の夜　呉市　世良ふみ子

燃ゆるが如き暑さに苦しめられて、萎れん計りとなつた、庭の若葉も、妹が打水で、蘇生したやうに生々として、梢に綠の雫が宿つて居る。涼しい青葉の風が、軒の風鈴をおとづれると、釣葱もともに、くる〳〵と靜かに廻る。池の噴水の下には緋鯉や眞鯉が、澤山集つて餌を爭うて居る。お父さんは椽から、池の鯉を眺め乍ら、獨酌で樂しさうにやつてお出る。植込の間から西瓜を割つてなげ出したやうな月が出て、葉末の雫がきら〳〵と光る。

製絲塲の滊笛がなると、思ひ合したやうに、鎮守の杜からも、夕神樂の音が野面に響いてくる。臺所では蚊遣火を焚くと見え、窓から二條白い煙が靜かに昇る、裏の馬小屋でも、下男が馬に蚊遣を焚いてやつて居る馬も煙いと見え、頻に嘶く。馬小屋の裏から、螢が二匹飛んで出た、妹が招くけれども屋根を越して桐畑の方へ行つた。

前の小川の畔の葡萄棚の下で、弟が行水をして居る、湯の中へ木の葉や草など入れて、魚が居るとか、映つて居る星影を見て、湯の中に螢が居るなど〳〵、一人興がつて、上がらうともしない。生垣の蔭から、大きな蟇が、のそ〳〵と出て、葡萄棚の端なる蚊柱を大口あけて、睨んで居る、蝙蝠も棚の下を彼方此方と飛び交ふ。

川邊の卯の花が面白く咲いて、淸き流れに水鏡を映して居る。私等が植えた青田の方から、青嵐がそよ〳〵と吹いて來て、裕衣の袖を飜る、畷道を戻る女馬士の追分も草臥聲である。向ふの山の麓の村は夕靄に包まれて、汀が淡く見える、蚊遣の煙か、夕餉焚く煙か、薄霞んで夢のやう。

我家の裏手に當る、水門の下で、松明を燃して二三人の男が夜振をして、松明持ちが頻りに罵られる聲が聞える、水車塲の脇に、黒い二つの人影が見える、あれは夜網打つ人だらう。螢狩戻りの女の子が唱歌を歌つ

て通つた。七日の片破月は中天高く昇つて、夜は更けたらしい、向ふの村の灯も見えなくなつて、蛙の聲と小川の音の外、寂寞として、折々物思はれそうな水鷄の聲が聞える、螢が一つ青い光りを放つて水車場の方へ飛んだ。

（評）一讀涼風の腋下に生ずるを覺ゆ。

○さつき日和　鶴前　好久

降濱を過ぐる頃、ポツ／＼と傘を打ちし雨は、外新に至りてやみぬ。道はさすがに泥濘ふかく、田は水かさ増りて小道に溢れ、畦に草多く水淺く、小鮒白き腹をあらはし、僅にはねて、田より田にうつる。

濁れる梅田の岸に沿ひて、四ッ手網幾つとなく置かれつ。川筋自から明らかなり。

川下は僅に廣く、蘆荻茂りて一葉々々に露の玉を綴り蝦其の間にはねて波の輪をつくる。サラ／＼と風にそよげば露は生きて走り、水また生きて走る。葉は身ぶるひして囁き、行々子二聲三聲けゝしとなく。岸の家家には早や朝げの煙おこり、松林を低く迷ひ、蒼白き水蒸氣濛々として烟の如く、茸ぶきの屋根を通して登るかと見れば、雲僅に開きて日光雨の如くさすなりき。例の川下の芦間より、不意に驚き立つ水鳥の、聲もたてずにバタ／＼と水の面を飛び行くを、折から岸に立てる六歳許の兒二人、指して高く笑ひぬ。

根羽井を過ぐる頃又降り出でぬ。蛙聲は蛙聲と相應じ雨聲は雨聲と相答ふ。戸々麥打つ音きこゆ、淋しき音なり。

村盡くる邊、卯の花の一叢あり。傘を上げて輕く枝を打てば、バラ／＼とちりて道白くなりぬ。

畑中の一軒屋より麥笛の音高く響きて、此方の茂みよりも一入しげく相應ず。

雨細けれど麥苅る人も見えず。

繭買ふ人なるべし、包み脊にせるが、傘傾けて彼方の村に隱れぬ。花が崎の製糸の笛、煙を上げて高く濕りたる空氣をふるはす、ワクの音耳に溢る。

中柴に入りて雨愈々細し。蜜柑畑の麥苅る女一人、若き娘也。折から通りかゝれる二十許の男の、色さへ白きが、傘斜に樂しげに呼びかくるを、娘は振返りて笑みぬ。深き中なるは其面持にて知れり、我はうつくしと思ひぬ。

村を出はづれて再び畑となる。雨一しきり降り來て、小池村の邊遙に馬車の笛の聲す。中學生二人、白服なるが、踏切守る若き女の住む小屋に隱れぬ。

午前九時三十分、雨全くやみ、雲は解けて、流れて桔梗色の空を匂はし、時に日をボカして東にいそぐ。時のたつ間に雲は烟の如く低く這ひて、思はぬ方に山

の一角を畫く。石卷は盡く雲の衣をぬぎ捨てたり。本宮の山の腐玉の如く淸し。

日光雨の如く、樹影鮮に地に横はる。風一陣、葉間聲ありて、樹影は樹影と相抱き、相離れ、相をのゝき、相さゝやく。

畑には甘藷植うる女あり、麥苅る男あり。野面を撫て來る涼しき風に、流るゝ唄の如何に淸きよ。

（許）筆に隨うて風景の變化する様宛然パノラマを観るが如し。

○賤女

京都市　胡蝶

背戸の木小屋に、薪付がたつた一束となつてしまつたので、今朝早く起きたのを幸、天氣はいゝし、少し道は遠けれど、朝飼の前の一走り、涼しい内に一荷をと道を急いだ。

通りすがりに一寸松さんの家を窺いて見れば、ひつそり閑として、伯母様のしはぶき一つ聞えぬ。まだ寐て居るそうな。

村はづれの土橋を渡れば、これからは川に沿へる片岨の、山又山の葛折の小道、この邊り相馴川の上流は、春は霞の奥に、靜心なくちる花の風情をかしく、秋は時雨るゝ溪に、人見回らぬ紅葉の錦美しいが、今は恰も七月初旬、滿山翠簾懸け渡して、緑の淵はいよ／＼濃く、急瀬の水音人の心を洗うて、俗塵離れし此一仙境は夏の眺をひとり擅にして居る、取分け、曉風肌に快き此頃の朝の川景色ほど淸爽なる物があらうか、道の邊の露を含みし山百合の花は、實に浮世の物とは思へぬ迄麗しい。爺が淵を過れば、欝々たる密樹淵を掩うて、道は小暗く、嵐氣冷に、靜けき空氣の傳ふる我足音に、人や來ると後見かへるのも可笑い、有明の渡へ來ると、目ざす圓山はもうすぐ目の前、あれあの山の中腹に見えて居る、木を伐り開いたあとがそれなので、石から石へと渡した板橋の音コト／＼と、扨これからは露繁き山坂…、爪先をシットリ濡して漸う上りつくと、早遙の山の頂には日がさして居る、どこかで怪しい鳥の啼く音がきこえる、掩の下から束をぬいて、新しい繩でメ直してやつと擔ふた。

不知の谷に荷をおろして、ホッと一息、いつもの石に腰をかけて、木の葉隱れに瀧の音を聞きながら、岩間を潜る水の行末を見やると、ふと眸に止つた憐れたつた一本の河原撫子、出水の折の已が危い命も知らぬげに、そこの雜草の中に咲きほこつて居る、あれ家に植ゑて父様母様嬉ばせましようと、草を分けて下りたつて、大事に根こぎにして、蕗の葉に根を包みながら上つて來ると、折しも川下の方から盆踊の唄が響いて來た、耳をすませば、オヽ、あれは慥に松さんの聲だ、私はおもはず姉様かぶりの手拭に觸つて見る、と草刈

姿かひ〲しい其人はすぐ目の前に現れた、あら兄樣もご一所だ、云ひ合したやうにニッコリしたが、私は赤くなつた、すると兄樣が「又遊んで居るわい」窘めながら、叱られながら、三人の笑聲を谷間にひゞかしたが、私は手にした花をそつと淸水に浸して、「これご覽なさい」。成程とほめて下さるのが嬉しくそれをば薪に挾むと、兄樣は輕々と擔はせて下さる。さらばと計り別れて角をまがれば、又も松さんの得意の美音が青葉の彼方に餘韻長う響く。

月見　三河　近田みつ子

（評）浮世に遠き山ずみの身の、富を願はず、名を求めず、かくて過さん作者の一生、實に羨むべきかな。

○ある夜

武藏　櫻月子

「お孃樣お風呂が」わづらはしとは思へども、入らざれば又「御氣分でも」と聞かるゝがなほうるさければ、「あゝ」と答へて其後に從ひつ、熱からず溫からぬ湯加減、入りて見れば流石に氣持も惡からず、されど髮かき撫づる氣にもならねば更に白粉塗る氣にもならず、衣だけ新しきに着換へて上りくれば、膳の上は早夕げの支度調ひたり、澄汁、酸の物、色のみは心地よげなれど食べたしとも思はず、重き箸しひて取上げ一と口二た口かたばかりすまして書齋に入る、先に讀みさしたる朗詠集とり出して又誦し見しが、ものうくなりたれば其まゝにふせつ、窓を開けば青々とのびたる若竹の柔き葉の表、打水にしつとりとうるほひてサファイヤの如き雫ぽと〱とそれより滴れり、遠からぬあたりに蜩の鳴くも聞ゆ、大かたかの青桐の邊なるべし、涼しげなれど又何となく淋しき聲なり、吾は何思ふともなく握りたる筆のじくを嚙みて黃昏るゝ空を打まもれり。



ふと神にもあらず、魔にもあらず、一種はかり難き大なる力あるものの此夕闇に潜みて、陰にもあらず、陽にもあらず、怪しき氣を吐きつゝ吾が未だかつて覺えたることなき奇き情に吾を引き入れんとするものあるをおぼえぬ、されど己は其何者たるかを知らず又知らんともつとめざりき、吾心平和なるにあらず、されど又吾心悶ゆるにもあらず、只默せるが如くにして語れるが如き此の夕、聞かざるが如くに聞かむと吾は伺ひぬ、突然「お花」と呼ばれて吾にかへり聲せし方に至れば父上の常よりは更にましたるやさしき聲にて「お花涼みがてら水族館にいて見

ぬか」涼しさは水族館よりもうちの緣の方がはるかなり、がや〳〵したる町の中通るもいとはしとは思へども、折角々々父上のかく仰せ給はるにと吾はつとめて心よく「はいお供いたしませう」と答へぬ。

母君の逝きまし〻よりいとゞしくお年召し給ひし父君の、痩せた〳〵と妾が上をのみ氣づかひ給へるがいと心苦しきに、その淋しげなる御後姿見るにもそゞろに淚ぐまれぬ、ほの暗き燈火のもとに様々なる魚族の痩せ衰へたるが力なげに泡を吹きつ〻浮き沈みなせる樣見るから憐にいたまし。

出づればまばゆき燈火の花、寄席、芝居、笛太皷の音かしましきに美装したる若き人々三々五々いと面白げに出入せり。

や〻小暗き四辻に至るにこ〻に覗繪一つ据ゑたり、見る人もなきに老いほうけたる人足躰の男只獨り飽かぬげにさし覗けり、ア〻此の男、妻や何處、子や何處、汝が休むべき家や如何、人は皆かく歡樂の夢にあくがれつ〻あるなるに汝のみは獨淋しき此の火かげに只わづか二錢の覗繪に終日の勞を散じ、かくして汝は汝の墓にまでたどらんとするなるか？

吾が心は忽ち闇きものに掩はれぬ、かくて暗々たる冥想の裡に吾はいつしか吾等の家に至りぬ——下町の雜沓はかすかにしてあたかも群蚊の遠くせまるが如く己は此の夜よりいとゞしく世を厭はしとおもひそめぬ。

（評）多感、傷婉の情切なるをみる。

○眞晝

本所　田中久子

ガアン〳〵と近所の工塲で銅打つ音が響いてくる。靜かな眞晝の空氣を破つて蒸し返されさうなお向ひの家根から上る暑氣と共に、目もくらみさうに頭の中迄這入り込む。夏と云て今日程暑い日はなかつた。

乾き切つた埃の立つ地面の上からは絕えずむつとしさうな水蒸氣がポッポと登つて人通りのない往來は水を撒く人さへない。さつき方氷賣りが通つたが「エ、氷一杯五十錢」と皺枯れた聲で呼び立てると、糸でもつけて躰中の汗を絞られるやうな氣がする。ガラ〳〵と鈍い音をさせて車を引いて行て了つた後は暫く下駄の音もしない。何處か遠くで蟬のなく聲がしたと思ふとガチャ〳〵下駄で駈け出す音、バタ〳〵草履の音も混つて三四人の子供が長い竹をかつぎ乍ら「むかふの柿の木だい」と怒鳴つて橫町を曲つて行く。

少し鼠色がゝつた空には東の方に少し白い雲がふつくらと綿を積んだやうに蟠つて遠く空の盡きる所はうつすらと煙のやうなのが動きもしない。眞向に見える煙

突の少し右に寄つた所を鳶が大きく輪を描いては、二羽寄つたり離れたり、靜に空に舞うてゐる、太いのや細いのや幾つも見える煙突からはどす黒い煙を凄い樣に吐いて、夫が皆西へ／＼と早足に流れて行つて、軈て空の色と一つに成て見えなく成つて仕舞ふ。遠くで汽笛が長く尾を引いたと思ふと、高架鐵道の音がゴウゴウ風につれて聞えてくる、下りと見えてだん／＼東の方へ廻つて行つたが、張やの張場の立ち並んだ棒の先に黒い煙が細くかゝつた時、音もバッタリ聞えなく成た。

丁度塀の下を定齋やがガタ／＼音をさせ乍ら白い洋傘をさして通つて行く、と方々の工場から三時の汽笛がボー／＼と眠たさうに聞え出した。

汗は止度もなく頸からも額からも流れてくる。

（評）煙突多き本所の夏の暑くるしさ、評者もまた汗の加はるを覺えたり。

○御着車まで

靜岡市　大石貞子

午後二時、御道筋の兩側には愛國婦人會、篤志看護夫會少し放れて、赤十字社員、其れに次いで中學校、師範學校、商業學校、高等女學校、高等小學、尋常小學の各生徒、二列に並び、受持の敎師は皆、それ／＼注意を加へて居る、分けて、尋常小學の生徒の聞き分けなく、列をはなれるやら、無駄口をきくやら、敎師は一一、叱言を續けて居る、各學校の生徒の列が丁度四ッ角の所で切れると、其所には拜觀の老若男女が群集して、一層の雜沓を極めて居る、我れ先きにと前へ／＼と出る、押されて背に泣く子もあれば、年いたく老いたる翁の曲りたる躰を杖に便りて、健氣にも拜觀せんものと出て來り、群集に押されて、正に踏み付けられ相てある、警官は「押すな押すな」と制して居るけれど中々多勢の事故、鎭まる事なく、人は七重八重にかさなりて、子供の叫び聲やら、下駄を脱ぎ捨てた者もあれば、實に、此所計りは雜沓の巷である、警官は二人增えた、先刻の老人は漸く前通に出た、群集は未だ押す、三人の警官は兩手を上げて「押しちやあいかん」、と大喝して居るけれ共、豆腐にかすがい、と云つた樣な次第て、只、群集の動搖めくのみである、刹那御着車の砲が鳴つた、荒浪立ち騷ぐ樣な群集も、ぴたと、靜まつた、東から西に亘る大道は箒を持つて掃いた樣て、もう横切る人さへ無いのである、「氣を付け」、と各校の生徒に下す號令も何んとなく嚴かに聞えて、四ッ角の群集は水を打つた樣に靜かにいと靜かに成つた。此時耳朶をつんざく嚠喨たる喇叭の音、蹄鐵の響、拜觀人の眼は一時に其の方に集中して、生徒は脫帽、各

婦人は衣紋を合はすのであつた。

（評）前段の雜沓と相對して後段一層の莊嚴を覺ゆ。

○眠れぬ一夜　こもろ　花ぞの守

明日の父樣兄樣の御出立が早いからと云ふので、妹や弟の寢たのは、つい今し方、どれ妾もと、まだ、明日の事を色々と打ち合せていらつしやるお二方と、兄樣とに御挨拶して、はなれの部屋へ。

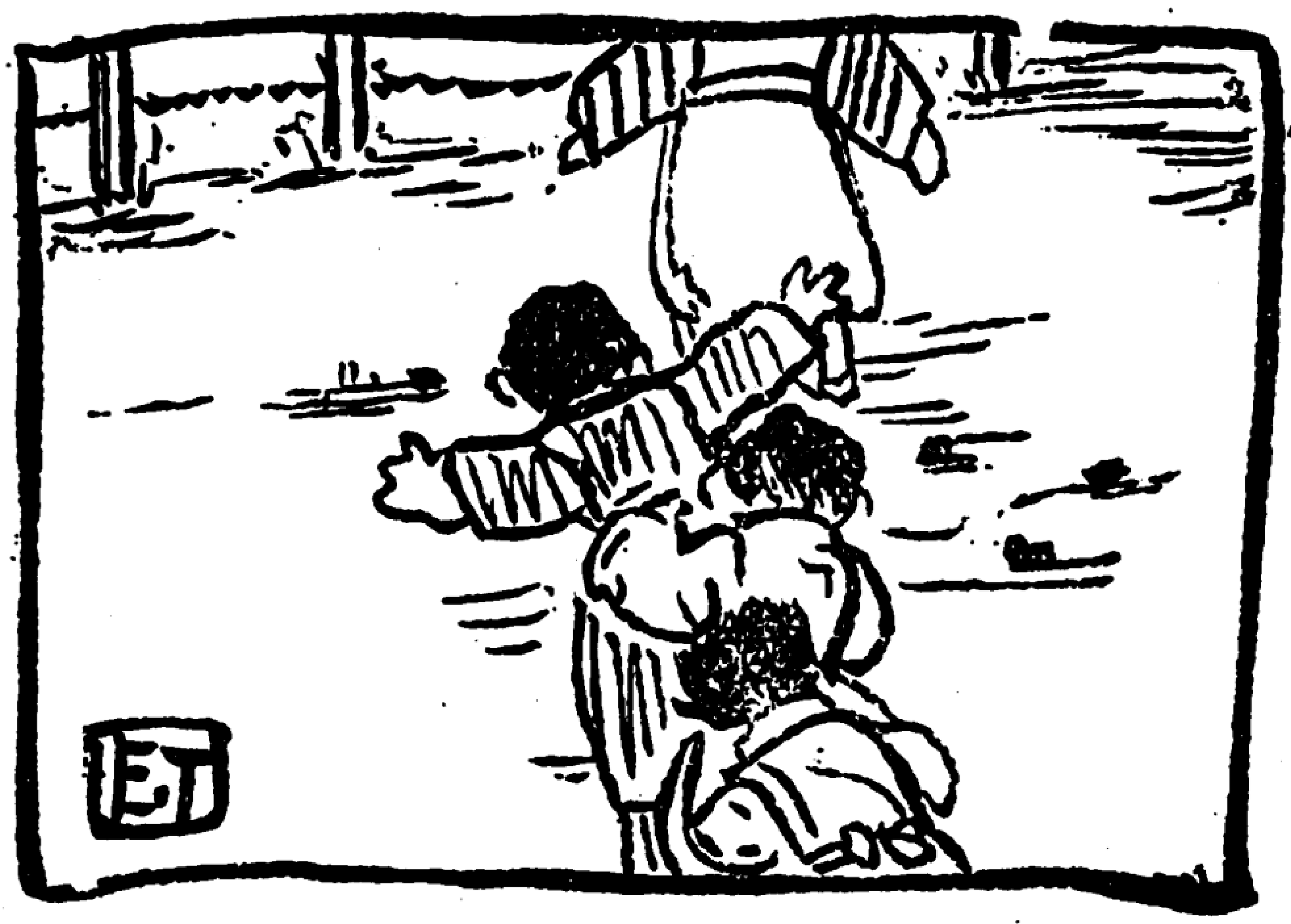
スヤ／＼と能く眠つて居る、美いちやんの、目醒めない樣にと、靜に床をのべて、さて寢衣に着替へ樣と手に取り上げた其時、廊下に忍び足の音が聞える、はて、と思ひながら、キツト、障子の方を睨めて、それでもわざと落ちついた聲で「誰？蝶かへ」と云つて見たが、返事が無いので、何となく薄氣味惡くなつて、急いで着替へ、緋モスのしごき手早く前結びにして、ぬぎすてたのを疊むもそこ／＼に枕につかうとすると、障子がする／＼と開いて、何者か入つて來る氣配、ぎよつとして見かへると、あゝやつと安心、蝶であつたので腹立たしさに、「何だい蝶は、呼んでも返事もせずに」と云へば「ホヽヽ、御免遊ばせ、あの花樣、父樣が御召してございます」と、私は、何の御用だらうと、心配し乍ら寢衣のまゝ一寸衣紋をつくろつて、茶の間へ來て見ると、お三方共にこ／＼していらつしやるので、つい氣おくれがしてそこ／＼と、柱の側へ坐て、「母樣何？」と小聲に、不安心の目に見上げると、「花さんお喜び急にお前をもつれて行つて下さるので」「あら實際？」とあまりの意外に、半信半疑の目を見張て、驚きに打たれて夢の樣、突然アハヽと父樣が、私を見つめてお笑ひ遊ばしたのに氣がつくと、兄樣は眞面目なお顏なさつて「花さんお前は東京見物は嫌だつて昨日云つたつけねえ」と、まあほんとに憎らしい方、私が日頃行き度いを口くせにして居るのを知つていらつしやるくせに「あらうそ、うそですよ母樣」と、やつきとなつて、云ひわけした、父樣も母樣もはては大笑ひ、けれども私は笑ひ所ではない「母樣着物は如何しませう」と少しませた樣な事を聞くと、母樣はだまつてツと立つて、お手招きなさるので、ついて行くと座敷には見なれない着物、母樣は疊んだまゝ私の肩へかけて、と見かう見「如何だい氣に入つたらう、實はねえ初めからつれていらつしやるおつもりで此の着物も御自分でおあつらへ遊ばしたの、けれどねえ、早く知らせるとお前がさわいでいけないつてホヽヽ」私はまるで何から何迄夢の樣、着物は京お召のあらい矢がすり、繻絆は白の絽縮緬、肉繻絆は紅麻、帶は赤地繻珍の薄ぐけ、しごきは黃の紋羽二重、妾は、只もう嬉しくつて、云ふべき言葉も知らない、やがて、さあ安心して早く寢て早くお起きと、促されていそ／＼床にはついた樣

なもの丶、どうして眠られ樣。思はいつか、五十里の東京に遊んで、此處に寢て居る者はもう、魂のぬけた形ばかりなので。われにもあらず、それからそれへと想像の影を辿れば只もう嬉しくつて、只もう樂しくつて心は丁度、胡蝶の憧れにも似て、何の事は無い現乍ら夢を見て居る樣、仕樣事なさに、美いさんは、とさしのぞけば、あどけない顏に時々片ゑくぼを出してほゝゑむのは、きつと、さつき御約束したおみやげの夢でも見て居るのであらう、父樣には靴、兄樣にはリボン、あゝまだ私の行くのは知らないのだけれど、妾は何がよからう、人形か、帽子か、ホヽヽ又笑つた。只一つ心配なのは、言葉で、東京言葉をどうして急に上手になつたらよかろう、恥かしいなあ、あゝ早く夜が明けてくれゝばよい。

折から中の間の柱時計はチン／＼と二點を報じた、どうかして眠むろうと、じつと目は閉ぢた樣なもの丶、逆も／＼、只もう嬉しくつて、只もう樂しくつて。

（許）眞にトロ／＼とすれば東京の夢。

親取ろ子取ろ　大連　高洲女



○光男のお守り　淺草　とみ子

今お湯から上つたばかりの光男を母樣から預つて、自分は涼しい風の吹き入る庭へと下り立つた。雨上りの水色に澄んだ空には星の影が五つ六つ、涼しい光を池の面に投げて居る。石橋の上に立つとそよ／＼と青葉を漏れて來る風が、何とも云ばれぬ程心地好い。白萩の亂れて居る築山の邊にはもう虫の音が。見ると汀に一匹の蟇が鹿爪らしく兩手を張つて頻に叢の一方を白眼めて居る。何をして居るのかと思ふと、やがてスーッと口に入つたのは蜘蛛であつた。蟇は他に餌は無いかしらといふ風で、キョロリとした眼で四方を見廻したが、此時先刻から此の有樣を怪しんで居たジョンが突然苔蒸した石燈籠の蔭から飛んで出たので、蟇殿は周章てゝ池の中へ飛び込んだ。すると其の勢で今朝弟が作つた附木舟が美事に覆つてしまふ、「ジョン！」と呼ぶと嬉しさうに尾を振りながら走つて來て頻に飛び付くので、光男は恐ろしさうに其

を見つめて居たが、一聲高くワン！と吠えたので遂々ワッと泣き出した。自分はジョンを追ひながら急いでゴムの乳首を含ませてやると直に泣き止んで、驚いて逃げて行くジョンを、可愛い眼に涙をためて見送つて居る。ずつと廻つて湯殿の前迄來ると其所には蚊柱が立つて居て、まだ貞子が、遊び半分にポチャ／＼やつて居る。人が居ないつもりで簾を半卷いた窓から顔を出して「ヤア好い月だ。」などと云つて居るのは弟。「風を引きますから其様なおなりをしては不可ませんよ」。と云ふと、きまり惡るさうに首を引き込めてしまふ。光男は風鈴と並べて乳母やが吊して行つた走り燈籠をクリ／＼した眼で珍しさうに眺めて居るが、可哀さうに熱いと見えて和かな髪の毛が汗でピッタリと額にくつ付いて、鼻の邊はジョーロで水をまいたやう。袂からハンカチーフを出して拭いてやると、涼しく成つたと見えておとなしくして居る。門の方へ行くと線が重なつてうす暗く成つた木々の間を洩れてチラ／＼光の見えるのは、門の爺やの家でも最う燈火を灯したのであらう。暫時すると何處かで調べ初めた涼しげな爪琴の音。「清水寺の鐘の音：：：」と、曲は熊野。自分は何と無く興が湧いて來たので、音につれて小聲に歌ひ出した。突然ポタリと何か襟元に落ちたので「オヤ！」と梢を仰ぐと、露を一ぱいためた青葉がくれに三日月が美しう。心附けば、おゝ何時の間にか小さい鼾の音。

（評）精細を極む、妙。

○ほとゝぎす

相模　加藤婦美子

よぼ／＼と痩せさらぼひし老馬は、空打仰ぎ哀しう長うなきて灰色の鬣ふるひつゝ、よろめかんとして幾度かイみては、馭者が無情の鞭をはげしみ、石高き路を喘ぎあへぎ駛りゆく。いぶせき馬車なり。乗合へる其少女をしも、つくづくと打瞻りては妾は胸の轟抑へあへず。窓につきたる頬杖の、雪かと白き腕は緋牡丹燃ゆらむの八つ口に映りて、折れやしぬべき頸には重しとやうの島田の、痛くも亂れて、鬢の毛のうるさげにこぼれかゝれる横顔よ。愁に曇りし三日月の眉、星の瞳、似ると思へばあはれ斯うも似るものか。地に曳く袂の淡紫、世の常の少女には見ぬあてやかさは、面影のみかは姿さへに——、あはれ「雪さん！」と呼ばんとして妾はいく度も思ひまどへるなり。

されどそは、はかなき思ひなしなる可し。京の三條の花のおぼろ夜、われ偲びて、相模に一人の姉偲びて、鼓に伏して涙果てなく泣きぬとぞいひし、噫、其子はすでに、雪さんは、逝いて此世にあらずと

いふを——。

雨もや降りいづらし。灰色の雲空をとざし、同じ色の霧地に布きて、淋しう暮れゆく山蔭の路や。闇を包める木立のかげに、あやめの葉の燐火かと青う搖らぐよ。馬はひたと歩を止めて、馭者むちうてどむちうてど石の如く動かず、只頂垂れてなげけるらし。

「あ!」と小聲に叫びて、傍なる老婆は、圓なる眼して彼方を打仰ぎつ。「杜鵑!きゝませ、あら杜鵑!——」

車中の人皆打仰ぐ。暗き空に、く、く、とさびしう。馬は進みいでぬ、馭者が無情の鞭をはげしみ。

道は深き林に入りて、ほの黒うせまる暮色のうちに、悄然として物おもふらしき仄白き顏、かの少女はしもその美しき瞳して、かの聲の行方の空をいつまでもいつまでも。

「雪さん!懐かしき雪さん!」

さるにても、あはれ少女よ、おん身は雪さんにまぎれもなくてよ!!。

(評)温雅なる筆は讀む者をしていひ知らぬ哀れを覺えしむれど、作者が平生の作に比してはいたく劣れり。

○てゝむし物語

佐世保　きぬ子

冷たく堅き甲のなかに目さめて、あたりのけはひうかがへば、こゝなむ地を去る尺ばかりの葉表にありける、をかしき事どもなり、夜べなめくぢの君と鐵を裝へるかたくなの身もうち忘れて、おどけたる戀物語あまたせしうち、君は夢路、われは寢ごゝちあしきまゝ夕月に葉うらを辿りて這ひ出でぬ、ひと時あまりもたちけるとおぼゆる程に、うれしきばかりの夜露降りて、鐵甲心ゆくばかり涼やかなるにいつとはなくて眠につきぬ、おなじ葉のうら葉表とは思はざりけり、たまたまに葉を搖る風おぼつかなしと思はざるにはあらざりしも、涼しさがまゝ眠りしに、さめて落ちなむばかり危うかゝれる身を思ふにつけ、今更ながら不自由なる甲のさまのかこたれつ、葉うらはそよとのけはひだもせざるなり、「なめくじ殿夢やさめし」と呼べどもいらへなし、いさゝかはねたみ氣味に「今日も夕べは候ものを、あまりに長き夢にてはおはさずや」と呼べども更にいらへなし、よく／＼の寢坊かな、いな幸福の生れつきかな、又來む世こそ吾もあれ程樂性ある身にうまれつきて、日も夜も分かず眠り暮さむと思ふ、覗き見るに下はこゞしき岩あまた、白きは瀬戸物のかけら算をみだしてちらかれる、狼籍など云はん方なし、身がまへしてやう／＼に葉のなかば頃に到りつきぬ、夜はとうより明け放れていくばくの時を經たるに日の面さへ見えず、あたり何となくぼうけて空は雲灰色の濃き薄き雲を重ねたり、春の暮と云ふ頃なむめり、まことうれはしきは、ものゝをはりかな、嘆かはしきはものゝいやはてかな、垣根の花美しきが風に萎

みては若き子の涙おさふるにたへず、若葉の梅雨に腐れては吾が想鐵甲の外に溢るゝものをなど、とりとめもなく思ひわずらふ。

やゝ高きに這ひ出てゝあたりの景色うかがふ程に、かたちおほむねおなじく、角にして長きもの、おの〳〵頭に意匠をしたる蓋ようのものを戴き、臺といふ見得にて下に幾層の平石大小を重ねたり、こをいしぶみといふとかや、かゝる形のもの數かぎりもなく並び立てれば、こゝを墓地とはいふなりけり、新らしきは脊に鑿の痕際立ちて字を刻めり、字に朱を入れしあり金を粧ひしあり、古きは字も分かず見る影もなうこぼたれて、腰より肩、頭にかけて蔦、苔のたぐひおびたゞしうはびこれり、吾と族をおなじふせるもの蠢々として苔のところ〳〵に這へる、呼べば答へんほどの近さにあれども、振り向きもせざる意地惡さに葉うらに眠れるひとりの友を思ふ、碑とは亡骸をさめたる處とおぼゆ、高樓の花、入江の月、手折るがまゝに掬むまゝにと詠じけむ、やむごとなき人の末路かくのごとし、來世に如何なる望を抱けばか、死してもの後までこの驕をほしいまゝにすらむ、笑止ともおろかなる事なり墓地と云ふからに何となう底氣味惡き思ひ、まこと雨をかしくそゝぐ夜など魂魄石の柩の冷たさにおびえて、もの蔭の淋しきに靑き火の尾を曳くとかや、折から風一陣颯とみだれて葉にくだけて、鐵甲はかなく、コロ〳〵と轉び出てぬ、落つるやいづち、瞑目せし瞬間に戞と音して飛魂靑き煙たつ甲の外へ迷ひ出てぬ。

（評）餘り新奇に奔せて、衒ひたる傾あり。

○花のいろ〳〵

東京　水仙女史

櫻こそ花中の玉ならめ華美に咲き華美に散る之を俠の意氣地に比べなば梅は山中に臥せる高士とは能くも譬へたるもの哉深みどり風に櫛づる柳は露の雫を花とや見ん桃は醜婦が七難隱さんとて白粉こて塗りに塗りたるにも增して胸惡しかりかゝる花は穢多村の革臭きが中に咲くこそふさはしけれ菫は秋草の中にや入れてん躑躅は岩角に咲きて勾配よし梨花の淡なるは牡丹の濃なるに相對し杜若は水に映えて色香を增しそよ風の波を起すなくば藤は風情に乏し夏の夕陽漸う西に消え月影白う木立には撒水の雫滴りて垣に時ならぬ雪かと見まがふ卯の花や星の如き夕顔の花は爭で佛臭き蓮華の及ぶ所ならむや葉鷄頭の色は皮膚病患者と見るべく暑くろしき日車花の太陽に面を晒して咲けるは鼻つまみなり秋こそ草は柔しけれ萩を先鋒として薄女郎花蘭桔梗さては露草など枯槹とられて水貰ふてふ朝顔は短夜の睡たき眼を覺すべく差しづめ菊は後殿の役目なり花は冬ぞ淋しき僅に殘菊を秋の名殘に見て早梅を春の魁に見るに止まれば木々に降り積む雪を花とや見ん。

新體詩

河井醉茗先生選評

一等

○寂寥

赤坂區青山南町五丁目九十六番地　林内
大村竹尾

遍路が笛もしめりゆき、
日は秋深野さびしらに、
わが白膠木のあからみば、
渡鳥羽にふるひ落つ。
樹間に透ける野の家は、
賴りなげなるたゞずまゐ、
光にあへぐ片ゆるぎ、
たゆげに廻る水車。
またはかなたの塔の上に、
輪をかく鳩もなだれ來て、
息づむふりや野鼠も、
影を隱しぬ草の根に。
目路は灰色おどもりて、
このもかのもの鈍の色、
日は萎みつゝ天さかる、
雲はなのめに羽ぞたるゝ。
江の音かあのとほと〳〵と、
駒寄るけはひのありなしを、
ふり向きざまにつと退きつ、
あなおどろきぬ「寂寥」よ。
あゝはたと逢ふ「寂寥」の、
鈍の被衣の面深み、
俛居のさまは古鄕の、
千曲川邊にかつて見き。
情强面さなれども、
汝ぞ深き生命の根
盡きず涸れざる魂の、
天の眞名井の胸ならまし。

新しい詩集より造詣する處あるらしい、けれども此れ程に按排し得たのは確かに詩技の如何を解する方でなければなりません、千曲川邊に寂寥の姿を見、深き生命の根ざしを歌ふと云ふこと、既に超然たる詩想です（醉茗）

三等

○生贄

長野縣諏訪郡下諏訪
山田くに子

陰森と奈落より、
亡魂の叫ぶ如、
言がたき悲し音に、
咽び來る夜の潮や、
秉燭の星わづか、
水脈の間に泣き濡つ、
失戀の白鳥は、
寂しさに堪へかねて、
悲しげに低く鳴き、
闇深に迷ひ入ぬ。
御靈の崇り氣味、
萬象の魂死に誘ふ、
丑三ッの海にして、
恐ろしとすくむべき、
弱き性質失ひて、
愛に身を終らんと、
美しの生贄は、
波狂ふ岩の壇に、
悲痛に――歡樂に――
微笑してイみぬ――。

才氣発溂、草に捨つるべき才てはありません、作一作每に向上を示して居られるのは目覺しい、靑春

の器、痛み易く砕け易し、乞ふ詩の爲に慕進あれ（醉茗）

五等

○受驗

土佐　石川一葉女

席につきぬ、思ひ思ひに　諸人の想ぞゆるゝ
仰ぐなる時機ひとり　こつ／＼と、刻みゆく。
その一刻みてそ迷の淵に　下りもゆく階段か
魂ぞ今何處さまよふ　胸ははや鎖てめぬ。

かち／＼と拍子木の音　つと前に試驗官たつ
わな／＼と又想ゆれ　衆の眼ぞかゞやく。
前に出し課題の　一つの文字もおとさじと
ロの中、讀みもてゆきつ　さら／＼と紙の音す。

悔いぬ才なき醜の身を　前に後に想は亂れ
難題とかん努力は消せて　文字のあやさへ腦に映らず
室の中寂寞として　人はと聞けば、たゞ
筆の走れる紙の聲ぞ　蠶兒の桑葉をはむ音に似たり
あやに狂ひぬ胸のもの　常に闇なる森にいるごと
難題とくべきすべもなみ　才なき身悔いに悔いぬ。
この一瞬ふと暗に光得て　さら／＼と筆走せぬ、
ほと吐息して時計仰げば　かち／＼と拍子木の音。

試驗を受ける一瞬、成程眼の着け處が面白いです、さう無理な言葉も使はず、所謂社會詩の一態として難題を歌ひ得ました、あなたが此方面に興味を持つてゐられるなら、大いにおやりなさい（醉茗）

秀逸

○虹

城扇　やま川

惡魔はびこる地を淸め　今、かへります天つ神
黄金の征矢を脊に負いて　うなじに飾る七星の
燦き遠く、冴えわたり　神八百萬從へて
うたひつ舞ひつ天のぼる　凱歌の曲は虹の歌。

碧色濃き磯山の　森の中よりはて遠く
空や水なる境まで　影をうつして千萬里
亘す七色虹の橋。

みほとらして悠々と　かすかに響く靈絃の
音をしとふて門近く　白雲やがて消えゆきて
歸ればもとの天にして　またゝき弱き明星の
夢たゞうすき夕べかな。

虹の歌も澤山見ますが、此れなどは比較的想像の豐かさ、技巧の妙の優れて居る方でせう（醉茗）

○罪の人

德島市　眞　洲　子

嚴かにいと重く、「死刑」と宣告す
威にたけき司法官、その聲は低かりき。
傍聽人の眼は滋く、一線に集注まりぬ。
罪人は首だれて、
あはれげに眼をとぢぬ—。

「上告のその權！」
汝こはさば賜びな得ん。
「活殺」は瞬間の、
「宿命」なり。まさにいま——

されど身は「罪の犠牲」、
觀念の眼をとぢて、
悔いごゝろ——「服罪」と　青ざめてこゑふるふ。
悔ひ泣かず「罪の人」、　今はたゞ清淨の
國人と——世をば見ず。　一文字、口むすぶ。

法廷を詩にするのは誰しも考へて居たでせうが、なか／＼むづかしいのです、第一着として此作の如き上出來の部（酔茗）



夏の暮　長崎　一蝶子

○幸ある我

東京　河　野　槇　す

空仰ぎ夢見心地に、高う誦す讃美の一節
きゝなれては慕ひくる我友、踊りて耳傾けぬ。
小屋よりもるゝ赤き灯影、柔き若草の上に
我姿友の姿描き出しぬ。

濃き朝靄に包まれ、
小鳥の歌の爽なる時
我この小屋に生れたり、
生れてこゝに十三年
少女とこそはなりにけれ。
と見る、楡の梢に、
やさしき光たゝふる星
あゝ其の星！
思へば、すぎにし秋の夕べ
彼方なる高樓の、
華やかに夕日てる。
欄によりてはうなじたるゝ、美しき人ありしが
園に匂ふ白菊の葉に、初霜のおきそめし頃より
その姿つひに見えず、噂にきけば堪へ難き
悶抱いて星となりしと。
それより我は知りそめつ、我世の風のひやゝけさを。
其日より我はさとりぬ、己が身の幸福なるを。

平和なるこの樂園に、　白き毛の軟きを優しき瞳して
我をみる愛らしの友と、　ひねもすをむつれあふなる
幸多き哉あゝ我、　運命に笑みてとこしへに
運命うたはむこゝの牧場に。

わざと思ふやうに歌ひ出さうと、調子を破格にやられたのでせうが、全くわざとらしくなつて、詩趣を缺損した處もあるやうです、矢張一定の制約を守つた方が初心の間は無難です(醉茗)

○姉の子を預かりて

麹町　康子

すぐ歸らんと二つなる　婦美子を我に預けては
ゆあみするとて出て行し　姉は未だに歸り來ぬ。
母振り眞似し子守歌　寢せつけてから一時間
何に少さな怯えして　婦美は圓の眸をあきぬ。
母が添寢のねざめならば　櫻の頰にくちづけて
笑窪見するは常ならむ　今日は悄ふも泣く人よ。
すかしあぐみて我はふと　胸さぐり見ぬさあれまた
我れ十八九若ふして　乳房小さき形ばかりかな。

眞情、かざらず僞らず、却つて斯う云ふ詩の生命は永いのです(醉茗)

○みごもりて

新つま

嫁ぎて四月つねならぬ、　心地にかてゝふくらみし、
乳首くろむは豫てきく、　こは懷妊とさとれども、
さすがそれとはうちつけに、　いひ出んよしも惱むのみ、
食すゝまぬを脊の君も、　たづね給へどいかめしう、
言葉少なにましませば、　心弱くも頂垂れて、
君が愁ひをますばかり、
かゝる時しも物なれし、　母君さきくおはさばと、
はかなきことを偲ぶのみ。

女子文壇に有るべき詩(醉茗)

○君故人にのろはれて

四谷　佐倶羅

戀の囚のくるしさに、　然ばかり惡きわれならば、
花の小夜着に手を置きて、　藥めせとなのたまひそ。
人を想ひて然ばかりに、　われねたましき君ならば、
胸に咀はでうちつけに、　死ねかしとこそいひたまへ。

情激して語吃する趣があります(醉茗)

○花うばら

名古屋市　西脇政子

日かげはなやく野路めぐり、ふとみいだしぬ花うばら、

神のたくみをたゝへつゝ、たゞうれしさに眺めけり。
聴け葉も顫ふ花の身は、歓喜の脈うてるなり、
知れ息なせるかをりには、あつき情けのこもるなり。
わかれて胸のうちさわぎ、なよび姿をわすれかね、
雲うるはしき曉に、また相見むはわがねがひ。
夜あけてゆけばあなうし、花に思ひややどりけむ、
なごりの香のみたちまよ、かすかに胸のいたむかな。

何となくかすかに胸のいたむ詩です、此等は純乎たる叙情詩でせう（酔茗）

○梅雨　　麹町　山下里子

うちしめる　み空より
しと／＼と　雨ふりぬ
病葉を　ひろげては
右手にのせ　息ふきぬ
梅雨時の　うらさびし
梅實のる　林の中に
今日も又　君見むや

今少し何ものかを捉えて御らんなさい（酔茗）

○溫室　　品川　小林雪枝子

黄の蝶やむらさきの蝶、あたゝかき香に蒸され
南國の春を夢みて、數あまたねむれる形
溫室は玻璃の屋根に　日影さし花みな匂ふ。
ふと見れば霞のごとく、たゞよへる暖氣を吸ひて
現はれし美くし精か、薄紅の頰にうらわかき
笑みうかべ立てる乙女子、半身は花にうもれぬ。

後の一節花精の姫が如雨露で水を注ぐことや、戀の比喩などは却つて神韻を涜しますから削りました（酔茗）

○葉蔭の闇　　麹町　淺井千鳥子

闇のつかひはいと近く　乳いろなせる玻璃窓の
五尺の方にせまり來て　我を蔽ふとをのゝかる
こえたる幹の無果花の　手よりも廣き葉を見せて
風ふくまゝにひそ／＼と　密語ごとの恐ろしく
熱と血に凝る掌の　今やわが頰に觸るゝかと
弱き子なれば胸せまり　さとふく風に髮は乱れぬ。

子供が闇い場所へ連れてゆかれて、あゝ恐い／＼と言ふやうで、未だ眞の恐怖と云ふものに觸れて居ませんけれど、年若い方には未だそんな恐怖も味ふに到らないでせう（酔茗）

○莫告藻　　小石川　馬場ふじ子

戀はしも、淸き渚の潮間を

迷ひ堪へじの莫告藻か
花はしも、燃えむの色のうつろひの
露うすらぎの戀の譜か
一たびは、をどりし血潮一度は
にほひし花よたそがるゝ

感興はあるですが、なほ詩作に就いて深き用意を持つて御らんなさい（辭者）

○雨の日

下野　鈴木雪子

皐月の日なり空くもり、　いとしめやかにくだちゅく。
窓に冷たき雨の音――　部屋薄暗く冥府のごと
冷へゆく想ひ胸寂し。
冷えし死の影たえず吾が、かげに潜むとおのゝきぬ。
沈默は迫る室にして――　ひえゆく胸のさびしみは。
雨ふる日――　薄ら日の影寒くして
空くもりて風あらび、　獨りさまよふ心地かな。
冬枯れの曠野のはてを、　陰府めきたる部屋にして。
おのゝきてはたと斃れぬ、

上手になれさうな歌ひぶりですが、今一歩、仙の言はない創見た持たればなりません（辭者）

○しほれしばらを拾ひて

信濃　花ぞの守

色樣々に濃きうすき　匂ひぞ薫る薔薇の花
暖かき御手に摘まれて　御胸の小琴にふれし時
其絃の響きや何と。
戀の囁きに耳傾むけて、　そと口づけし若人が
面ほてる微笑みは　光り薄するゝ夕の如
薄れゆき――消え果てゝ――血は冷えぬ――
しほれし花よ汝にしも　愛の光りの尚輝るや
色あせし汝にしも　戀の命の尚ありや
そよ、只かすかに。
いとかすかなる香にのみ　人の生命の若やぎの
花の俤止めつゝ　戀失ひしさびしらに
敗殘の子が冷き手にも捨てつるものか

同じやうな詩材は本誌でも見ましたけれど、又異つた感想があるやうです、此作、調子は强ゐて亂す必要はなかつたやうにおもひます（辭者）

○菜の香

山形　豐田わか子

霽れやらぬ　五月雨に
眞白なる　窓掛の
ゆつたりと　垂れかゝり

藥香の　くしき病室
若き醫の　廻診に
聽心器　震へては
あやしうも　胸の波
高潮に　高まりて
言ひ知らず　涙ぐむ
一人なる　妹の
紅き頰も　唇も
色褪せて　細り行く

辭あるべき詩材を辭なく歌はれたのはよろしかつた（醉茗）

○卯花垣

周防　河村芳江子

ふと醒め果てぬ。
かぐはしき夢路のかげは、
現實の形躰をはなれ、
ほの〴〵と眞白に匂ふ。
宵闇の卯つ木ぞかほる、　垣のきは鹿の子佇む、
優眉のひそみぞ、　にぶく悒めるよ。
われはつと思ひぬ。
薄暮に、胸に手あて丶　用としもあらで訪ひ來る
外處ながら思ひを馳する――妾かも。



（胸こそ躍れ。　何のきざしぞ面はゆや、
天に咲くてふよき花を、　見るが如きよろこび心―）
ふと醒めはてぬ。
宵闇に笛の遠音ぞ戀しけれ。

失名

思想が統括されて居ない、散漫の嫌ひがあります（醉茗）

○若き愁ひ

東京　水仙女史

夜はあけぼの丶神の座に
妙なる花や燄に燃ゆる
雲むらさきに煙りつ丶
匂ふくれなゐ野に照ぬ
草籠おきて彼の少女
蝶を夢よりさましつ丶
今日もはやくぞ刈り初めぬ
えみては歌ふひな唄の
しらべを受て野の花は
辨ほのかにもふるふかな
玉ぬく露のかつ散りて
足元うるほす水更に
虹の七色みだるれば
琥珀をといて流れ行く
草葉がくれに咲く花を
若き愁のなからでや
しほれ行く花見守りつ
あはや刈りては湧出る
涙を眼に浮べつ丶
無心の唄はこの日より

あゝとこしへにさびにけるかな

○あけぼの

神奈川　加藤婦美子

垢なる戀を覗くとて　あけぼの姫は天の月に
うす紫のかつぎして、　玉履をよろ臥しばう。

（おん瞳かや、星はさゆらぐ
しろがれ色に、櫻はちりて
きぬぎぬの、つらきわかれや）

あないてましぬ日の神は、　姫はふためき隱るゝと、
あなや被衣のすべりしか、　はぢらひの頰ぞ紅に。

（櫛や落ちけむ、殘月のかげ
しろがれ色に、櫻はちりて
別れし人の、とほれの笛や）

○花橘

上野　大沼楓子

血のこゑしぼり、　夕べ夕べをひな垣に、
啼くとりは——、　如何なる人の後を追ふか、
心もあらで、　咲きてぞ出づれ花橘。
五月の空に、　夕べほの白霧たちて、
まろらの夢に、　山も野里もかへる時、
汚れぬ色香、　匂ひも出づれ花橘。

○夏のうた

酒田　渡部みや子

青葉のいろのきらめける、　みどり涼しき山かげに、
ねむるも夢か夏のかぜ。
柘榴の花をめぐりくる、　鳥はあつさにたへざれば、
かのたきつせに羽をぬらせ。
ひときの松を見上ぐれば、　峯をはなれし白雲の、
かゝれるかげもすが〳〵し。
さゆりのもとに身をふせば、　たもとにはらむ涼風や、
遠音に清き水ぐるま。

○稚子失ひし若き妻の歌へる

門司　彌吉はるみ

たゝけば響く豆大皷、　右足すりてさしよりて
ほと〳〵たゝくいじらしの、　姿は目にも見ゆれども
稚子のみ靈は返らざる。
たゝけば響く豆大皷、　坊よと抱いて我が夫が
京の土產のひなぐつに、　り覺して微笑の
愛らし聲はのこれども、　吾子の姿は見えもせぬ。
たゝけば響く豆太皷、　坊はいゝ子よれんれしな
乳房を口にふくませて、　すや〳〵眠る兩の頰に
紅さし添へて笑ひしも、　吾子は返らぬ我が袖に。

○鐘の音

芝　大沼きさえ

金色の雲風まきて、　碧海づらをきえて行く
衣ヶ浦の夕の風、　星より星になり渡る
鐘のひゞきに古き代の、　夢はめぐりて禍災の
嘲笑聲に埋てし、　みたまを高くいざなはん。

○朽葉の露

淺草　渡邊とよ子

朝を命と咲きいてし　淺黄紫朝顏は
冷き垣に低頭れぬ　嗚呼命なる露かれて
少女の胸の清らけき　眞白の色は蟲食みて
愛の心と燃え出でし　紅き蕾も色あせて
三日戴きし炎天に　露は天なる靜の傍

涼しき國に又生れぬ

○小百合

夕立晴れし黄昏を
おゝ染み入るよ我胸に
怪しう雲の立ち罩めて、
木立繁れる深き谷、
咲くやゆら〳〵百合の花。

訪ふ人とては更になく、
永劫に惱みを嘆きつゝ、
斯くて世を經ん汝小百合。

嗚呼堪へ得じな「我はそも、
そと立ち倚りて吻けば、
淋しう笑める小百合花。

○涼しき風よ

青柳はゆらゝとゆれて、
眞向ひの氷屋の旗、
過ぎし日に君と語りし、
思ひつゝ甘き熱睡に、
よき添乳かな。

○眞夏日

眞夏日の强き光に、
油蟬じゝと長なく、
直ぐ角の車立場に、
車夫れむる涼み臺、

淋し亡骸を垣にして
ま垣が下にたゝずめば
朽葉に落つる露の響
影薄暗く物のけの
寛の澄むらん岩が根に、

會津　星野光子

市にや沽らんの榮もなふ、
文明の慾も知らずして、
おなじ運命に泣くもの」と、
氣高う香り薫じつゝ、

神戸市　網盛幸惠子

簾打つ涼しき風よ、
ひら〳〵と涼しき風よ。
青楓涼しき蔭を、
うと〳〵と涼しき風よ、

磐城　片寄しな子

縁板の脂うきぬ。
門前の電信柱
新聞を顔へかぶりて
其下に小犬れむりて

日は高し二時の輝き。

○筑波女峯

紫の羅衰の長う、
詩の國の東に立ちて、
天神の姿にも似て、
谷あひの白百合の香の、
淡紅色の雲のたゞよひ、
徐ろに峯をめぐりて、
朝いく片の白露の、
籠路を西に流れて、
いぢらしき雲り惡戯、
夕鳥の影浮びては、
たなびける雲の彩影、
平和なる自然の神の、
清麗の峯に對へて、
限りなき胸の思ひに、

○花のたね

いざまゐらする花のたね、
土に生えなば蕾して、
君み手づから蒔かるべし、
青葉がくれに獨居の、
さては奇香をしるべ來と、
少女しぬばせ天降りせし、
打ち見守るとさとらすな、
天授けらたる甘汁に、

茨城縣　小泉さかへ

金色の冠りまばゆく、
人の子に啓示與ふる、
崇高しや筑波女の峯。
くもりてはみ空榮ある、
悠久の美をあやなへ、
限りなき神秘つゝめる。
舞ひあくがるゝ蝶の如、
男の峯の袖にかくるゝ、
天神の戀の使と。
京の子が舞の綾衣か、
華やかに峯により行く。
美しき額にも似たる、
嬉しうもたゞなつかしき、
朝夕を笑まむ身なりき。

三重縣　中林むめ子

小沙利とやうに干乾らべと、
咲き耀やうる日もあらむ。
夢見し眷も去ぬあした、
常夏花をいつくしめ。
妙の黄金翅羽衣の、
胡蝶は花に面差ゆげ。
雄蕋雌蕋をくぐりぬけ、
我世安けく眠るなる。

○森の朝

京都　吉田靈花

靄の幕老樹に垂れて、
精氣吸ふと分け入る木下路、
あら怪し樹叢の蔭や、
さては世のけがれを忌みて、
したゝれる人の血洗ふと、
いざさらばと後を追へば、
森一つ古沼に横りて、
怪しきは森の朝戯、
○○○○○○
白鷺の翅なりしよ。

寂寞の神ぞ守る森の朝、
はらはらと露はこぼれぬ、
靈し香、衣の裾の、
逍れ來し仙姫達が、
此處にして靈草踏むか、
幻の如消ゆる姿や、
木下闇につと去りぬ。
亂れ香の衣の裾は、

○落日

備前　堤紫舟

遠き彼方に彩雲の、
夏の夕の落つる日の、
妙なる虹の輝きの、
流るゝ雲の峰の上の、
飾冠にしばし息らふを、
そは其時に消えん時、
子守の歌の歌園に、
彩らんとての業なれば、
夢みる額の微笑や、
あゝ落日の破れたる、

流れてゆるう消ゆる時
暗示を我れに語れとか――。
をとるが如きその光
羊の毛とも擬ふべき
貴しと我れは思ふ哉。
やさしく其處に聚りて
遊べる稚子の小さき夢
貴しと我れは思ふ哉。
祝福に開ける唇は
光と餘榮と讃美なり。

○げにその如く

滋賀縣　井上つゆ子

秋山里の路にして、
われにゆかりはあらざれど、
ふと振りかへりゆく人の、
○○○○○○○
たゞ何となく見かへりぬ。
げにその如くうらぶれて、
相見るひとのやさ言に、
沈みはてたる心はも、
たゞ何となくなつかしむ。

○神鴿

土浦町　稻葉靜子

あゝ神鴿よそも汝は、
そが美しき星眸は、
愛の光ぞかがやける。
ゆらぐ和毛のやわらかに、
戀の血汐の湧きめぐる、
姿いみしうやさしさよ。
あゝあゝ奇しき神鴿よ、
聲を聞くより蒼空高く、
○○○○○○○
胸の和毛をはらゝかに。

いかなる夢にか憧憬れし、
よし小さくも消うして、
白き羽衣の艷やかに、
若き少女のそれに似て、
祝詞稱うる神主の、
彩雲を亂して急ぎとぶ、

○夢こそ醒むれ

宮崎縣　山元しをり子

夢こそ醒むれ――、
燃りえならぬ「誘」ひにうつゝな心地、
夢こそ醒むれ――、
せゝら笑ひの「詐はり」に聞きほれしあるは、
夢こそ醒むれ――、
ほゝけ顔なる花海招くか――あはれ嘲笑――
時めき冷えし胸の野に野わき寂しう波たちぬ

去にし日よ「謀み」の揚のさゞめきに、
「惑はし」の奇しき醸に酔ひにしか、
去にし日よ「驕り」の華に眠まぐさひ、
「うつ心」徒なる花に狂ひしか、
いまにして追懐さむき越し方や、

○夏夕

北海道　久子

詩の韻を聞かんとの
いさゝ川べにたゞずみて
御空をかざる彩雲や
水に光を沈めては
そよ吹き來る夕風に

われにふさはしこの夕べ
月の光に花を見ぬ。
月かげほのに匂ひつゝ
くだくる波ぞ玉のごと。
濃みどりゆらぐ葉かげより

玉とみだれて飛ぶ螢

○浮彫獅子

紅の南極星下、
地を裂いて火のきほひ、
圓座にうめくいのりの誦文。
濃朱の和毛逆立て、
血に燃ゆ舌の熱き焔は、
十丈の火の寬ぞ呪ふ、
爛れ斷れし巴の斑紋、
狂ほしのひげふるはせて。
胸に呪咀の白き矢を、
天竟が彫りし斧あとか。
ふつふつと火の色に、
燒け沸る息の風、
獸欲の生贄の骸か、
肉の臭ぞする。時は極熱、
蠻人は咽喉に血をすゝる。

○野に立ちて

夕べうするゝ影ぐもに、
ありし昔を思ひ出てゝ、
多年の希望地にすてゝ、
あはれの少女ある事は、
畫筆もつ手にむちを取り、

天つ星にも似たるかな。

明石　喜代子

赫灼と日の光は、
椰子の葉蔭裸男は、
そゝり立つ浮彫の靈像、

向ふ岸　大坂　倭文子



豐前　小草子

西なる空をながめては
おのづとおつる我なみだ。
まきばに一人羊守る
昔の友もしらざらん。
文讀む口に笛ふきて

野末になげく少女をば、
あゝ唯一人野に立ちて
他郷の風のつめたさを

○白牡丹

白金の降るよと見えて、
口紅やお白粉つけし、
舞殿の朱の欄干に、

今年は咲けよ山百合と
春行き夏の來にければ
日の照る庭の一隅に
我世の塵にまみれざる
其の花瓣をはなれては
空に薫んずる美し香は

都の人はしらざらん。
むかしを偲ぶ夕ぐれは
又今さらにさとる哉。

紀伊　鈴木　綠

月清し寧樂の都は。
巫女の芳紀今年十一。
そとよれば伽羅の香ひ。
金扇をなかば開きて、
かくれつゝそと微笑つ。
翠袖を靜かにゆれば、
くづれける白牡丹哉。

○山百合

群馬縣　雲雀子

松綠なす金山の
山の奥なる谷間より
取り來て植へし山百合の
去年は花まだ咲かずして
美くしと見る折もなく
莟も持たてしほれけり

朝夕神に願して
神のようなる變して
花は咲きけり山百合の
一點穢れぬ白色の
涼しき風の吹くまゝに
天なる神のみ息かな

短篇小説

廣津柳浪先生選評

三等　○車中

駿河清水町新地橋際　松永白藻

友が別を惜んで振つて居る手帕の桃色が、一本々々走つて行く、プラットホームの柱に見え隠れして居たが、頓て構内の建物に消て了ふと、妾は急に心淋しい感がして、此時程友の親切が深く身に泌みた事はありませんでした。

懷かしい人、懷かしい都、今其等と別れて行くのだ、と頭の中で繰返して見ると、妾は世の中から除物にでもされた樣に思はれて、意味のない涙がこみ上て來る

其程慕はしい都、其程懷かしい友、何故妾は捨て歸る氣になつたらう、意に染ない緣談を承諾して、何故歸る氣になつたらう、此結婚が幸福であるにしても、自分の理想は光を失して、希望なき盲從の人となつて了ふのではあるまいか。

汽車は一秒の間も軌路を刻んで、騷がしい車輪の音が、人を呪ふ惡魔が凱歌をあげるやうに聞える、衣服をほして居る二階の人、柵の外に遊んでゐる小供、其等は東京に住む人達である、樣々の思が縺れて、頭が痛む、目が朦朧として來る。

恰然五月末の事で、雨を含んだ雲一面に空を掩ふたが午前十時頃の日光が、雲の切間から鈍い光を落して、野も山も薄暗く、秋の夕暮のやうな哀な景色である。加之濕つぽい風が吹付て來るので、妙に氣が沈む、外を見て居るのも物憂くなつて、薄緣のついた腰掛、三等室の一隅に坐つた。

「成程、其にしてもお子さんを連てぢや骨折ですな。」

「えゝ什麼しても一緒に行くだつて云ひまして、小供には勝ませんですよ。」

妾の向側に、旅鞄を持つた商人躰の男と、子供を連れて、粗末な服裝をした二十七八の女とが語つて居る。妾は聞くともなく耳を傾けた。商人は二つ三つ頷いて、

『いや眞實です、泣く兒と地頭には勝れないと云ひますからねはゝゝ』と高く笑ふ。女は見えぬ程に眉根を寄せたが、其儘俯向いて子供の頭を撫始めた。
『何ですか靜岡に御親類でもお有なさるんで』と男は默つて居るのが退屈なのか、又言葉をかける。
『いゝえ左樣ぢやムいません』と躊躇ふ樣であつたが
『あの良人が靜岡の病院に居まして……』
『其は如何も、其は御心配でせう、惡くつて東京から被行たんですか』
『いゝえ家の方は三年計前に出ましたんですよ』
『へえ何か事情があつたんでせうな』
女は惡い事を云つたと云ふ狀て、艶のない顏を赤めて



暫時打按じたが。
『事情と云ふ程の事も御座いませんが、些少の事から阿父さんと言爭ひまして、家出しましたんですよ、今迄妾や子供の事は忘れて居ましたんでせう、ほゝゝ』
嗚呼何と云ふ淋しい笑だらう、人の頭に泌入やうである、浮世の生活に疲れた顏、良人に別れて何位苦勞したろう、今日しも逢ふ事が出來る良人は病に惱んで居るとやら、彼女の胸には病と云ふ考へはないかも知れぬ、健やかな良人に今迄の苦を話す考だろう、藥の香の高い病院の一室に其良人を見た時に彼女は如何に悲むだろう。
世の中には這麼不幸な女も有と思つて、妾は何とも知れぬ哀愁の念に打れて、自分の考は餘り勝手てはないかと思ひました。

本誌の二號にあつた「乘合船」と異曲同工、「乘合船」の方が勝れて居

たには違ひないけれど、是も一個の運命觀を乘せて走る汽車中の感慨、巧みと云ふより、事實には出來て居る、發車する時の描寫も好い(選者評)

四等　○おぼえがき

ます子

意地の惡い風が吹き立てお庭の櫻もまうおしまひ、ちらちら〳〵と散るのをお姉樣はじつと柱に凭れて眺めてゐらつしやる、その後姿が今日は何となく繪にある人の樣に見えました、私はそつと行てお姉樣をひとつおどしてあげ樣と思ひましたから、忍足で近寄つた時、お椽の薄縁へ足が引懸た故、すつかりさとられました。私もお姉樣に並んでお庭を見ました、ほんとにきれいでした、其時駒やが、お客樣で御座いますといつて來ました、誰といつたらお染樣と申ました、すぐお座敷へお通させ申しまして、三人でお話しました。お染樣は何だかおめかししてゐらつしやいました、今日はゆつくり遊んでゐらつしやいと申して、御好の蜜柑だの例のお羊羹だの出しました、お二人は頻にお話してゐらつしやいましたが、其方はお幾歳つてお姉樣がお染樣におきゝになりますと、二十八つて仰しやいました。何を遊してゐらつしやいます方つて再お問ひになりましたら、醫學士とか理學士とかつてにこにこしてゐらつしやいましたが、いやに歎息しながら、ほんに世の中がつまらなく成てしまつたと、仰る樣子が何だか變でした、どうしたのかしら、お染樣はお嫁にゐらつしやるのかしら、ゐらつしやるのがいやなのかしら、いやならよしたらいゝのだらうに、何故また女は皆お嫁に行かなきやならないのかしら、私なんか行くのはいやだと、思ひました。なぜつてお姉樣を御覧なさい、さんざつらい目におあひなすつて、とう〳〵御歸になつて、もう〳〵死んでも行きたくないつていつてゐらしやる、なぜ女は皆お嫁に行くのだらう、いやだ〳〵お染樣なんかもほんとにお可愛相だと思つて、お姉樣を見れば、これも涙ぐんでゐらつしやる、お染樣もさしうつむいてゐらつしやる、折ふし風にまぎれて花辨がお茶器の中迄散り込んで來る、私はまう心細くつて、どうかしてお染樣に加勢して、お嫁に行かなくてもよいやうにしてあげたいと思ひました。

今日はお染樣は齋藤醫學士の所へお嫁に行きました、とう〳〵ゐらしつたのです、何だか淋くなりました、お染樣も人樣の樣に丸髷にお結ひになつたのかしら、

いやな事た〳〵と思ひました。

今日は暑くて〳〵汗びつしよりに成て學校から歸りましたら、お玄關にお沓と耕鼻緒のお草履と並んで居るのです。駒やにきゝますと、お染樣でした、どんなにおなりなのかと思つてお座敷へ出ましたら、いやだ旦那樣も御一所でしたもの、お姉樣がこれは妹ですつて御紹介して下さるから、きまりが惡いの何のつてお顏も見ずにお低頭しました。今日はお染樣はいやににやにやとして、私が耻がつて居るのをお笑ひになり、旦那樣は五つ紋のお絽羽織で金緣のお眼鏡て、お色が眞白て、何てお美しいてしやう。お染樣はお島田てした、明石か何かの紫の矢がすりをめして、白茶の樣な地に孔雀の尾を織り出した帶をしめて、ダイヤモンドか何かおそろしく立派なお指環をはめてゐらつしやいました。母樣とお姉樣としてそれからそれと、冷きもの、酸きもの、甘きものいろ〳〵お出しになつておもてなしゝて、日の傾くのを待て、四人て風香園へお花を買ひに行きました。私はもう〳〵うれしくて〳〵お染樣はようてそお嫁にゐらしやつたと思ひまして、お姉樣のおとめになるのもきかずに、お染樣の御手にすがり付て行きました、道々もゆきゝの人が皆ふりかへつて見ましたほど、お染樣たちはお美しかつたのて、花屋では白百合や撫子やどつさり買つて皆なして持て來ました。

はや日が入たと仰つてお二人はお花の荷作を遊して、いくらおとめ申してもおきゝにならず、御歸りになりますから、お姉樣と御送りして、原へ迄行きますと、あの方はもうお歸りなさい〳〵つて、そして桃ちやん、今度は僕の所へゐらつしやいよ乾度よと仰つて、私の肩へお手をおかけになりました。ほんとに御優しい方と思ひました、お染樣も私の髮をなぶりながら同じ事を仰いました。其時お月樣も出ましたがお別れいたしました、歸つてお湯には入てお姉樣のお部屋へ行きましたら、眞つ暗です、ゐらつしやらないのかしらといひましたら、お窓の所で、こゝに〳〵と仰るてすよ、何を遊して居らつしやいますと申しますと、お月樣を見てゐると仰います、きつとお歌を考へてゐらつしやいますのでしやう、私も御一所に柳の木に落ちかかる片碎お月を見てゐましたが、其中うと〳〵としてお姉樣の御膝にもたれたまゝねてしまひました。

あどない追憶の一節として、思無邪の覺え書、文品の高雅なる、情味の濃やかなる、ちよつとは得難い文字てあるが、只小說としてよ

り、美文として多くの價値を占め得るものなることは言ふ迄もない

（選者評）

五等

○梅雨空

麹町區麹町三丁目六番地沼田屋内　田原瑠璃

梅雨空の曇り勝ちな空は何時か細雨が降り出して、頭は重く氣が何となく沈む日でした、昨日山口から來られた伯母樣を、新橋の旅舍に尋ねて十四年ぶりで、慈しい懐かしいお顔を見たのです、伯母樣は妾を見るより早く『マア芳さんは大きくなつたネー』と言つて妾の手を確かり握つて下さいました、至つて涙脆い性質の妾はモー胸が一杯になつて、お室へ通ると直ぐ伯母樣の膝に打俯して只理由もなく泣たのです、伯母樣は妾の脊を擦り乍ら幾度も『大きくなつたネー』と仰しやいました。妾が未だ國に居た頃の談話を泣たり笑つたりして伺つて居る中に、御客樣が來られたので明後日の土曜日には泊り掛けで來るやうにとのお言葉を後にして歸途に就いたのです、平常乘り馴れない電車に乘つた故か、眩暈がして胸苦しいので家に歸ると直ぐ床を敷いて横になりましたが、慈しい伯母樣のお顔や談話の事やらが、廻り燈籠の樣に胸に浮むで眠られません。今年廿才になつた妾は漸やく物心の付く樣になつてから樂しいと言つた日は、只の一日もなかつたので、今日こそはと思つて伯母樣に御目に懸れば、却つてそれが又妾の心に新らしい悲哀を增しめたのです、『芳樣お前の母樣のお居でる處をお知りかえ』と突然に伯母樣に聞かれた時『エッ妾の母樣生きて居らつしやるの本當に伯母樣』と言ふに言はれぬ感想が胸に込み上げて來て、熱い涙が頰を傳はるのでした、伯母樣も涙聲で『お前は未だ知らないの』妾は泣きじやくるので聲も途切れ〳〵に『ト父樣に伺がつたらお前を生でから直きにシッ……死んだつて』後は涙に消されて言へません、『マア罪だね可愛さうに』と言つて妾を堅く抱き締めて下さいました、何時も妾が泣いて居ると父樣は『芳や決して人を恨むな皆な己が惡いのだからナ此の己を恨めつ』て仰しやるのよと申し上げると伯母樣は『アー好く辛抱おしだ人間は忍耐が大事だから何でも忍耐しなければ不可ません』と共にお泣き遊ばしたお顔が歷然と目の前に現はれて來るのです。人の子の增してや涙脆い女の身、いとゞ悲しさは胸にせき上げて、涙は耳の邊りを傳ふて枕から敷布にと落るのでした、今の母樣が居らしてから十三年の間、苦

いお顏を見、皮肉な御言葉を聞き、邪慳な仕打をされ、それも生の母樣がお死去なりだからと思へばこそ耐えもし忍びもしたものを、生中に伯母樣のお口から生きて居らつしやると聞いては女氣のせめて一目なりとお目に懸つて今日までの憂い辛い思ひをお聞かせ申したら母樣は何と言つてお泣き遊ばすだらう、と胸は千々に亂れて涙は止め途なく湧て來て思はずも夜着の襟を嚙み締めて泣いて居ると襖越しに母樣のお聲で『お芳ッ未だ癒らないのかい夕飯だから起て來てお食り』何時もなら些のみにも思ひませんが今日は此の一言が胸に針でも射された樣に感じるのでした。

伯母を新橋の旅舍に訪ふて、新愁を得ると云ふ一くだり、あはれに感じさせる、書きなれた筆らしく、これなら何んな材料でも書きこなす事が出來るだらう。（選者評）

秀逸

○綠陰

尾道市　平田かつ子


綠陰　萩町　小國啟子

一面に蔓の廣がつた葡萄棚。葉陰からは天の濃醬を湛た樣な實が累々とたれてゐる。下には卓が据られて雪の樣な白絹の卓子掛がしてある、その編製の椅子に凭れて頻りに筆を動かしてゐるのは、由美子である。湯上りに菖蒲模樣の浴衣、白地絽友仙の帶を緋の帶上で締めてゐる。雲と漂ふ前髮の亂が白い頰を掠めて、指輪のルビーが、ペンの動きと俱に輝く。やがて書く手をとめて幾度も口の中で繰り返して居たが、「どうもいけないわ」、と吐息をして徐に、後へ身をもたした輪廓の正しいふつくりとした顏、書いた樣な眉を被つた目は云はれぬ表情にとんで、パッチリと淸しい。夕暮の寂寥は此の奧庭に滿ちて、涼風に戰ぐ葉摺の、幽な音よりはほかに、そよとの氣配もない。花の唇きつと結んで瞬すらしない由美子の有樣は、恰度マーブルにでも刻れたかの樣。風がないのに彼處の植込がザワ〳〵動いたかと思ふと、「姉さん此處に居るの、僕は今探して居たのだ」と、大きな聲して現れたのは弟の勇である、未だ氣付ぬか振り向

ふともしない、姉の傍へ走りよつて、優しい肩を振りながら、「姉さんてはきこえないの」、はつと現から覺めた樣に向直つて、「アーびつくりした惡い人だわね」、半は微笑て、「大層遲いじやなくつて」「端艇競爭をしてゐたのさ。今日は連戰連勝で愉快たらなかつた」と得意の笑が滿面に渦まくのを、覗き込て、「端艇たら全く氣でも違つてる樣だわ」とニッコリする。「何僕がボート狂だつてそんなら姉さんは文學狂だ、けれど僕は撰手だろう、姉さんは何だ」肩を怒らして詰寄るとたん、彼の雜記帳に目が止つて、「何を書てるのお見せなさい」と手を差延す「アラ見てはいけないのよ」と双袖でしつかと押て「文子樣に出すお手紙の下書なのだもの」「譃だ譃だ、きつと新躰詩に違ゐない」と叫びながら、押てゐる手を離そうとする、由美子は離すまいと頻りに爭そつてゐると、不意に頭の上で「お母樣がお留守だと思つて喧嘩してますね」と鮮明とした聲がした。驚いた姉弟は言ひ合したように振向と、締つた口に笑を含んで、凜とした青年が立つてゐる。是れは從弟に當る葉山繁と云つて美術學校の秀才である「ヤ繁さんだ」とりかんでゐた姉の手を離して立上つた。由美子は耳朶まで眞赤に染めて、一寸會釋したきり直ぐ伏目になる。繁は手近の椅子によりながら「一躰どちらが惡いのです」、と笑顔を勇に向けた、「姉さんが惡いのだ、新體詩を書いてるから僕が見せと云ふのを隱すんです」と口早に云ふのを、繁は頷いて「隱すのは惡い由美子さんお見せなさい」と涼しい目を其方へ移す。「だつてそんな物じやないんですもの」と術なげに頂垂るのを、勇は橫合から突然「見せなくつても見るんだ」と叫んで、電の樣に其手は長い袖に這つて潛んでゐる雜記帳を取り出した。アラと由美子の立上る間も無く、もう繁の手に在るので、抵抗ふ勇氣失せて其儘、時色半布に顏を埋めて卓子の上に俯伏た。

すら〳〵と美しい紫インキの水莖の跡を、繁は少聲で讀み初める。勇も傍から覗てゐたが、何だ詰らぬと手近な菊簇を摘つて、口笛を吹きながら彼方へ行つた。幾度も繰返して見てゐた繁は下に置て、優しく高い氣韻の籠つた作ですね、といつて、じつと目を或物に据えてゐたが、由美さんと、突然に呼だ。けれど返事もせぬので、「腹を立たのですか」と無邪氣な笑を湛えて「此詩が完結たら是非見せて下さい、其更り僕も好ものを上ませう。それは先刻實に好書題を見付たのです。だから腕を揮つて書いてそれを上ます」「書をです

つて全くですか」と由美子は顔から半布を離して例の美しい目をみはつた。

月の影が、綠廣葉の隙から洩れて、露に濕つた實がほのかな薄紫の光を放つてゐる。

廿日計の後、彼の新躰詩と齋が交換された。齋は綠蔭美人と題されてゐたが、何故か由美子は深く手箱のうちに秘めて誰れにも見せなかつた。

事件が詩的であるのみならず、筆も詩的、詩趣溢るゝが如しと言ひたいが、溢るゝ處まではゆかない、只、若々しい花やかな血が確かに此作に通ふて居る、存外多くの愛讀者を引きつけるであらう（選者評）

○雲ゆき

本郷　美波

青葉若葉にほの暗き、稲荷の奥の院に詣でた歸り。しとしとと、小雨を凌ぐ澁蛇の目。照世は今、最後の鳥居を出た時、ぱつちりとした眼で、向うを見詰めたが、高足駄の危げもなく、敷石の上を馳出した。桃割れの根が弛んで、する／＼と、菫の簪が抜けたのも知らず、通り掛つた十四五の少年の雨に濡れた肩を叩いて、「秀さん。」「え？」と喫驚振向たが、赤くなつて、其引摺て居る破れ傘を、持ち換へて、思案顔「まあ、づぶ濡れよ」照世は美しい眉を寄せて、自分の傘を、差し掛けながら「氣持が悪るくはなくつて？毒だから、お入りなさいな」「だつて……」と耻し相に少年が、肩をすぼめると、冷たい雫が、額際から流れて氣味が悪るい「さあ」と自烈た相に、手を取れば矢飛白と二子縞の、袖が搦んで、逢ひあひ傘。雨は横様に、照世が紅友禪の帯を潤す。

「ねえ」と莞爾して「暫らく、逢はなかつたわね秀さん」嬉しげなのに引かへ、幼染馴の秀松は物思はしそうである。

照世はそつと、覗き込んで「もう、先の様に遊べないかしら」「あゝ」と太息して、秀松は「金田の叔父さんは、鬼だから、照さんとも口を利くなつて、お父さんが……」「まあ！内の父様が鬼だつて？」思はず聲を高めたが、がつくり俯向いて、

「でも、私には柔しい父様よ、悪魔の鬼のと人に云はれて、貯めたお金も、お前に遣るのだ、世の中に可愛い者は照ばかりだと、口癖の様に仰有るわ、だから私には吝ぢあ無くつてよ」「ふむ」と冷かに聞き流して「照さんには、好いお父さんだらうが、己らは口惜しい、抵當だつて家を取つた、鬼ぢやないか己らの家ぢや、毎日泣いて居るぜ」と流石に聲が、顫へたのであ

る、照世もほろり「全くだわね、私心細いわ、父様も此節病氣だし」「え？重いの……」「はあ」悄然として照世は「今朝も、長屋の人がね、父爺め早く死ねつて、母さんが聞いて、何の因果だろうと私と二人で、さん〳〵泣いたの」

「考へると淋しいなあ」思はず云つた、秀松の手をぢつと握つて「秀さん！去年の今月は樂しかつた事ねえ……」昔慕ふて、夢心地の二人を掠めて、燕が飛んだ。

「秀さん。お願いだから、口を利いて頂戴な、貴郎と別れて居るは、淋しくつて……」

親にこそあれ、彼れに何の、怨があらう、秀松は、茫然と其嬋妍な姿を見詰めたが、忽として胸に、敵！敵の血筋!!と、夢中に手を、振拂つて「駄目だい」「えッ」照世は息を呑んだ。

「己らは、大金持になつて、金田と喧嘩すらあ」

眼を輝かして、頼母しい「では、可けないの……」「……」「あの、どうしても……」「……」頼みの綱も切れ果て、失望して、よろ〳〵と、捨石に危く倒れんと、支へた秀松の手に、すがり付いて、わつと泣いた。其手は放し得なかつたが、秀松は蒼くなつて、遂に一言も答へなかつた。

西北の雲、怪しく、今にも變りそうな、空摸樣。

モデルは幾許もあらう、必ずしも創意ある作とは認めないが、摸倣ならぬ上手なところが、ひら〳〵と折々文字の間に閃めいて居る（選者評）

○渡舟場

群馬縣　星野すみれ子

「さあ早く乗らないと出ますだよ」

未だ朝もやのうす暗い河のほとりにつながれた小舟から太いさび聲が聞えた。

遠く近く二三の人影、近い一人は急いでかけて來る、夜の神の名殘と云ひたげな朝もやも次第にうすくなつて四邊はだん〳〵明るくなつた。

遠く見えた二人も間近く來た、夜は全く明けて顏も定かにそれと解る。

淺黄の小風呂敷を負ふて、むぎわら帽子の古いのを被り、見すぼらしい旅仕度、それは村でも孝行者と評判の春吉である。

一件に來たのは其母で、

「なあ――春や躰を大切にするのだよ。決して無理はおしてない。そして成るたけ早く歸ておくれよ……」

「お母あ、案じる事は無だよ、なにわけは無い。それ

に鐙の日雇手つだいは樂だつて云ふだもの。つらいも苦しいもないよ。案じずに金持て歸るを樂みに待て居チッ‥‥」

母に心配させまいと事もなげに云ひはなつ。

「おい乘るなら早く乘りなよ」

再び舟夫のだみ聲が聞えた。

七人乘の端舟今やともづなを解かうとする。

春吉は急いで乘た。

「そんならお母あ」無限の感じを目に云はせて。

「おゝ躰を大切に‥‥」

愛子を旅立す母心。影見ゆるうちはと見送つて居る

舟は中流に出た、母の爲身の爲働ぎに旅立つ孝子を乘せて。

何と云ふ事は無く、誰が書いても波し場などは興趣のあるもので、日雇に行くと云ふだけ一寸あはれさを感じる點が深い（選者評）



栃木縣　橋本てる

初夏の日ざしはやけつく樣に、蟬の聲がチ　ンと響いて暫くあたりはひつそりと成つた時、午前じまひの紡績の汽笛が聞えて、綠の蔭へ立ち寄つた娘二人。一人は女工らしい、青ざめた顏を上げて先の返事を待つらしくぢつと友の顏を見つめた。

「お竹さん、てはいつそ私と一所に歸つてをしまいなね」

何氣無く云つたがどこと無く沈んで居る。

「だつて私、歸るにしてもお金はありませんし。それに兄さんに‥‥」

「そりやね、そうですけれど、這麼嫌な所に居るよりか、歸つた方がいくら宜いか知れませんよ。故里だつても何か仕事はありませうし、其中好い緣家でもあつたらね‥‥」

何故かちらと頰を染めた。ミーンと小蟬が一聲音をもらして、青葉の梢を早其影が片手を置いた膝の上邊で戰ぐと嵐がゆすつた。

娘は術なそうに溜息をついて

「そんな風に成りますと宜しいけど‥‥」

○啞蟬

丹波　難波愛の

何か深い〱思案に沈んだ。友のお光も共に首垂れたが漸々何をか考へついて、

「お竹さん……」

不意に呼ばれて見上げた顔には思案に餘る涙がきらめいた。

「それではあなたかうしたら宜いでせう。私が歸つた後にはどうしても下女が入用んですし、あなたの事は毎々お談しして奥様も感心遊してゐらつしやるから、明日からでも紡績の方は止して、お家へお越しなさいな。私がよく頼んで上げますから。……そしたらね和木とかいふ嫌な人も居ないし身體だつてもね。あなたなんかも顔の色がよつぽど悪くなつてるわ、だからそうなさいな」。

下女乍ら天晴れ友愛に富むお光の力を入れた言葉に、

「有がとう、ではあなたから宜いやうにね、私、お願よ。あの和木つて人が一番いやで……」

思はず身震ひしてお光の手を取つた。

借金を殘して二親の死んだ後、兄を助けて家を起こそうと良家に奉公して居る友をたよつて來たのは五年前のこと。賤しい工女と迄成つて、金の爲に身を粉にし乍らも、金の爲に名を惜しまぬ幾多の工女連と、一所に視て、ある浮れ男の云ひ寄りを無情無くぽんとはねかへしてからは、機械がゝりとか云ふ名の元に、何にも斯にも邪魔がついて、居たたまれぬ中を友の慰安に漸々辛棒して來た今日、友は、良縁あつて故里へ歸るのも早や五日の中となつたので、姉と慕ふ人に別れの悲しさよりも、苦しい勤の我身に泣いて、思案に暮れた折りも折、外出の途中ふと出合つたが、相談の掛けがひあつて、嬉しい友の言葉。

「やれうれしや……」と思ふと亦も浮びくる別の悲しさ。

「私は、何故這麽に不幸なんでせうね」染々云つて俯向いた頰に傳る一滴。

薄命の子を弔ふやうな蟬の音は亦やかましく響いて、青葉の梢の嵐も死んだか、正午過る日のやけつく計。聲なくつーッと飛んだ蟬一羽。音も立てず、幹に隱れた。

立ばなしの一節にも人世の波瀾、運命、は能つてある、此等も立ばなしとしては、宜い處を捉え得たものである（選者評）

○雫

府下　貴久子

夕立上りの夕日はきら〱と前の小川に浮で最早一丈ばかりで西山に沒しそう。楠の梢からポタ〱雫が

驟雨

埼玉縣　村上花月

落てくる。今しも木下へ來かゝつたのは裁縫塲歸の秋子て、年は十七八、頬のあたりの豊かな美人である。「秋子樣私何程よんだか……」「アラソウ少とも知らなかつたわ」「過時は大變降つたワネ」「あの雷樣隨分てわかつたワ」秋子は雨傘て夕日をさけて居る、「冬子樣お入なさいな、色が黒く成つてよ」「此上黒く成心配はないのよ、オホヽヽ」冬子は秋子と同年で其美しい顔は青白くて何所となく沈んだ調子、「冬子樣貴嬢何日からいらつしやるの」「私…何日になるか不明ないのよ」と心元なさうにいつたが「母樣に願つて來月からでも行きますワ」「必つとよ一日も早くいらつしやいよ」「秋子樣貴女もう何でも縫るでしよう私なぞなんにも出來ないからきまりがわるいワ」「あらさう云ふ方こそ出來るのよ、私なんにも出來ないのよ」「先にいつてる方から教わるのてしよう」「そうよ御弟子が多勢から皆先に行てる方からおそはるのよ、私だつてネあの美代子樣におそわつたのよ、實にいやてしたワ」「私いゝワ貴嬢におそわるから」道路へ出た木の枝からポタ〳〵と雫が二人のかざして居る傘の上へ落ちた、「あら又雨が…てんなに日があたつて居て降ちやあ狐の嫁入だワネ」「雨じやあないワ木の雫よ」「オホヽヽ」「オホヽホ」「秋子樣貴女の家の武ちやん矢張隣村にいらつしやるの？」「えゝ母樣もさむしがつていらつしやるからつてつれに行てももう少しつてはなさないのよ」「最早幾年に御成りなの？五つ」「えゝ」葬式時お車の上て抱かれてすや〳〵と眠つていらつしやつたのネ私今ても目に附てゝよ。父樣も御存ないて實におかわいそうネ」「えゝでもネ兄樣がいないものと思つて武雄は弟と思つてゐるのよ、其よりも貴女のお家が御きのどくてネ」。冬子は無言、秋子と冬子とは無二の親友て今から三年前、町の高等女學校へ入學したが三十七八年の役に秋子の兄なる人は事業をすてゝ出征し今や平和と成



らんとする時哀れ他國の土となつてしまつたのである、其忘れがたみは今年五歳の武雄である、秋子は程無自ら老父母を慰むべく學びやの庭を去つた、冬子の家は村唯一の富家で黄金の光に誰一人敵たふ者もなかつたが一朝株式の變化の爲幾萬の財産は露よりもろくきえうせて家人の袖は時雨ならで涙の雫にぬれにぬれた「本當に御きのどくでネ……さぞ學校の方も殘念でしようもうすこしの所を……」「えゝ……何も運命ですワ私もう學校の方も何もすつかりあきらめて仕舞ましたワ」冬子の眼には一杯の雫、秋子はちらと見て彼も雫を宿した。あゝ眞に夢の樣だ。孃樣々々と多勢の者に貴まれたのも昨日の事、是からはどうなるであろう、之も皆黄金の光、あゝ十人の下使はたつた一人。父樣は御居室にばつかりこもつていらつしやつて何も仰しやらないが、心の中は如何であろう、母樣はたゞ泣てばかり、此頃の衰へ方あゝ萬一御病氣にでも成られたら如何仕やう。それに口惜いのは村人、昨日までは旦那樣、孃樣と貴んだくせに、今日では見向もせぬ、他人と云ふ者は薄情なもの、あゝ口惜い。と齒をくひしばると眼からはら〳〵と涙が流れる。

鍬からポタリ〳〵雫の落るのを肩にして過ぐる里人、皆人足は早い「ホントに淋いいやな夕方ネ」と秋子、空には十三夜の月影淡く、道行く人の顔をのぞく樣である。

時々、雫が落るので愛嬌になるが、全體に未だ稚氣を離れない、併し女學生の會話は活躍して居る處もあらう（選者評）

をんな（名句）

▲女といふものこそ愛でたく美はしきものなれ、おしなべて其心優しく望小さく、爭ひをきらひ僞を遂ぐることなし（露伴）▲われと同じ年頃なる美しき娘二人、草を折敷きて座りて、紅なる袂を飜へしつゝ、頻りに花束を作り居たり（花袋）▲汝は幾千萬年の昔より幾千萬年の後に至る迄、いかに美しくいかに微かなる光を以て、この暗黒なる落寞たる人間界を照さんとするか（桂月）▲戀人の僞りを見んよりは寧ろわが身の死にたらんかたいかにはるかの幸なるべき、サツポヲの死や晩かりし（樗牛）▲面長にして色白く、頰の邊すこしく羸れたり頸長く髮濃く、華車なる姿の好きは繪にも寫すべし（紅葉）▲昔の娘風に當世の愛嬌を持たせ、陰柔なれども寂しからず、引立ちたる相貌に多く得難き美人なり（紅葉）

和歌

佐々木信綱先生選評

三等

窓の灯は扇のなりに影さしぬ
庭の牡丹を繪もやうにして

駿河 くれなゐ

四等

あざやかに潮よする朝凪や
眞珠とる船港につきぬ

磐城國雙葉郡久之濱町 村岡布貴子

五等

繪日傘の一むれ過ぎて順禮の
少女憩ひぬ青葉下道

茨城縣高濱町東大橋 小泉さかえ

秀逸

○ 和歌山 淑子

えや／＼と舟を装ふ裸男に宵月さしぬ水の如くに

○ 石見 石橋浪子

夏の夜に涼しき風のふく如き喜びおぼえ君を見る哉

○ 下野 鈴木雪子

のどかにも鷄鳴きぬ藪かげの桐の花咲く皐月野の家

○ 伊勢 三輪葉津惠

いつかまたあひあはん日を心あてに君を送りぬ山郭公

○ 上總 秀月女

我が心蝶のやうにもおん胸の花野を日毎いくめぐりしぬ

○ 新潟縣 或見なか子

梅雨霽や牛群れ遊ぶみどり野の遠き野末に白雲浮ぶ

○ 上總 山田沖子

菁莪ちりぬうたゝねしたる風の神狼狽き行くと夕に

○ 羽前 深外女

連錢の葦毛の駒にくらおきて若武者過ぎぬ花の下道

○ 尾張 長司哲子

雲の峯稲田の末に列なりて一鳥泣かぬ夏の眞晝時

○ 岡山縣 三宅しずゑ

金魚鉢の水取かふる晝下りえんじゆの風に蟬の涼しき

○ 大分縣 鈴木さち子

よき人と濱の松原さまよひぬ衣更へして薄寒き宵

○ 土佐國 ます子

木がくれに鶯なきぬ駕を出る人に日傘を参らするとき

○ 若狭 内田美代子

夕陽やあけの欄干照り榮えて緋桃をかざす少女美し

○ 小石川 山崎房子

病ませる夫の枕邊灯も細く看護りする夜を郭公なく

○ 神奈川縣 岩澤玉江

皐月晴小唄に馬を牽きかへる童かはゆし夕顔の宿

○ 水月君女

羊追ふとふりにし雛を野になげて思出おほき夕露を見る

○ 京都 田島曲亭

窓あけて鯉に餌をやる朝の人の淡紅の袂に藤散りかゝる

○ 伊勢 本田文子

ねぎかへし衣の袖をふくかぜのうらなつかしき夏は來にけり

○ 橫濱 加藤とみ子

反古張の障子隔てゝ春の日の花散る椽に小猫眠りぬ

○ 野々宮芳子

螢とぶ汀の蘆に風見えて涼しくよする池の漣

○ 下野 松本きくの

見るだにもこゝろよげなり水かれて干かれし小田にそそぐ夕立

○ 相模 靈山淳子

牧の子の追分のふしさやかなり夕月ほそき里川のきし

○ 高岡 梶川みつ枝

夕風は妹がかざせる野菊にそよぎてゐたりこゝろあるらし

○ 靜岡縣 花枝

有り難き君が御文の眞心をかみ忘するまじ我も忘れじ

○ 仙臺 三好まさる

友逝くと知にし宵や風暴れて魂呼ぶかと聞れたりけり

○ 高岡市 梶川露子

春の園さきの世界の戀人と逢ふ日の如き心地する哉

○ 京都 岸村季子

戀すてふよしなきものを胸に秘めおもひなやめる乙女子もあり

○ 羽後 佐藤笑花

兄君を忍ぶにあまる此夜半を月さえ渡り夜烏の鳴く

○ 滋賀 姫百合

詩集よむ小燈つきて冬の夜を思へば長し琵琶のみず海

○ 伊勢 無知女

御國に小松姫松榮えまし千代萬代といはふけふかな

○ 栃木縣 世取山園子

南の椰子の葉蔭の戀の幸とけて流れてよりけん波か

○ 兵庫縣 木村菫子

樂しみし庭のさくらも散りはてゝ綠り滴たる初夏の空

○ 上田町 すみれ子

侍つ人の影の見えればいと淋しこよひもひとり夜を明すらん

○ 伊勢 垣内かつ代

白鶴に歌三千の卷頁せはなれ小島の君に送らば

○ 長崎 伊東りう子

春風に胡蝶の夢の破られて夕日つめたき白ゆりの花

○ 成田きさ江

白ばらはくづれぬ夜半に音もなく今はさびしき思ひ出の雛や

○ 大分縣 ひらた

心合ふ君と手を取り遊びなば長き春日も只夢の間に

○ 德島縣 吉田紫花

螢二つ湖を橫ぎる影見えてあはたゞしくも夏の螢飛ぶ

○ 大分縣 藤澤いよ子

梅が枝にまだ床なれぬ鶯の初音もらさん時は來にけり

○ 長崎市 峯時子

この秋は豐なるらん早苗うゝる小田に雀の千代とうたひぬ

○ 岩代 根本松江

夕べ告ぐる鐘の鳴る音に詩添へて彼の世の友に聞かせてしがな

○ 越後 松山けん子

又更らに肌につけてもなげく哉かたみに殘る母の寫し給

○ 小樽 岡部麗水子

わか姫のゐます御島やおぼろにて君戀しうもなりまさるかな

○ 韓國 永尾春子

わかれては憂き事しげき欄や朝暮の雲に君をこそ
思へ

○ 我孫子 林君子

一時だに忘るゝひまはなけれども偲ばるゝ秋の
たそがれ

○ 陸前 阿部よし枝

蕊に寄るその蝶にしも捨てられて運命のまへに牡
丹くづるゝ

○ 若狹 長谷川英尾

遠くともこのみちよりぞたどらましなくうぐひす
の聲にひかれて

○ 和歌山 木下美笑子

たゞ一人草刈少女過にけり紅葉しぐるゝ夕暮の路

○ 備中 ふみ子

銅瓶に白ゆりいけて只獨西詩誦すなりはなれ座の
うち

○ 秋田縣 三浦紅羞子

うら淋し花散る里の夕暮を蛇の目傘うつ小雨つめ
たき

○ 神戸 高橋紫峯

風すさぶ沖の男波の怒る時海の宮居の姫や病らし

○ 岡山縣 白芙蓉子

絲柳雨にもつれて末とけて下ゆく人に雫するかな

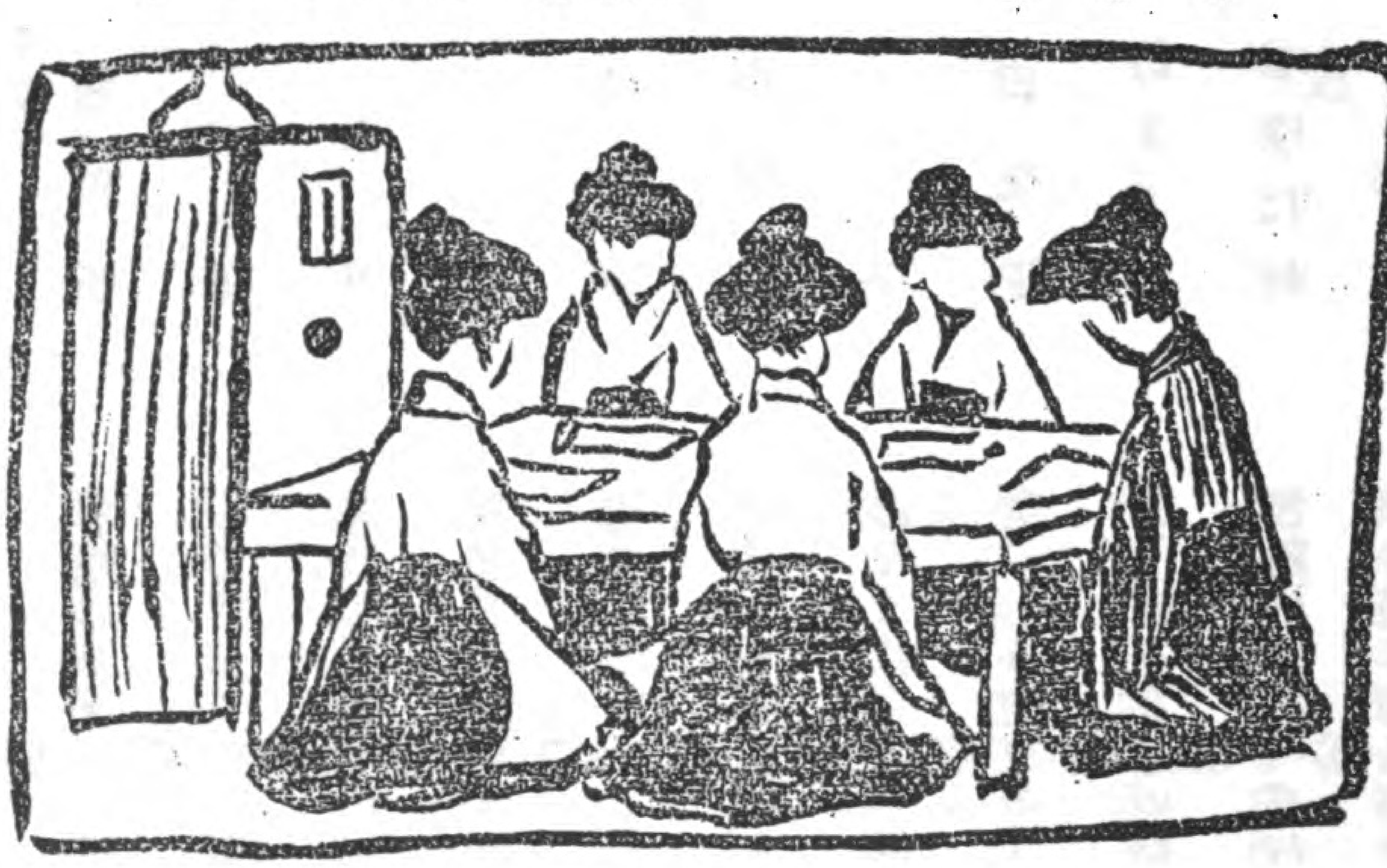
○ 紀伊 長井漣月子

夕虹は彩美はしうかゝりけり森の上より白雲の谷へ

○ 陸奥 名久井さえ子

ほつぼつと雨白う降る野の眞萱靑葉がくれにほとゝぎす鳴く

寄宿舍　佐賀縣 徳久よね子



○ 北海道 藤本鳥羽子

音もなく垣根のぼたんこぼれけりふる里忍ぶ夕ぐれの窓

○ 遠江 一少女

亡き君が紀念のさくら花咲きて春雨けぶる夕まぐれかな

○ 神戸 山崎つぼみ

父病むと胸せき越ゆる峠路の東雲時を啼くほとゝ
ぎす

○ 桑名 しげ子

あらひ髮小櫛をとりて姿見にむかへば涼し若葉う
つりて

○ 相模 加藤ふみ子

姉君はさびしう笑むになれましぬ夕しづかにもの
おもひては

○ 神戸 麗雨女

亡き母と眺むる星の影もなく悲しき宵を啼く時鳥

○ 磐城 松川楚月

辻堂の村雨淋しう春ふけて小暗きあたり病梟のな
ける

○ 飛驒 秀子

吾が少さき胸の小琴は亂れ初めぬ君垣間見しその
夕べより

○ 土浦 佐野清子

春は逝きておもかげかはる秋の野のいろもあせた
る霜の下くさ

○ 紀伊 稲子

柿の花理想成らずて若き人のよみ路をいそぐごと
白う散りぬ

○ 名古屋 とう子

さみだれにあさき小川も水こえて舟ながすべくなりにけるかな

○ 京都 波多野桂子

賑しく植て去りける田の面に月ほそく殘りてさゞ波ぞする

和歌

○　鳥取市　上山千重子
あやめ切るとふとそて洩れし絹小桝得取らて暮るゝ池の面哉

○　信濃　古澤秋子
もゝ千とせかしづきあかぬ母逝きてみ墓さびしうこひ泣く子はや

○　上毛　伏島なを子
こがひする暇なき身にありながらみ文をのみぞくりかへさるゝ

○　京都　田邊俊子
さみだれに港入江の船の灯に千鳥むらがる夕まぐれかな

○　磐城　鉦舟子
夕霧につもる恨みを打ち包み只こといはん有明の月

○　伊勢　ぎ女史
小夜更てさやかに照す月影に心迄こそ澄渡りけれ

○　駿河　紋子
日は落ちて夜の黒幕に閉されぬ賤が母屋に燈の見ゆ

○　愛知縣　樋口琴子
ゆく君を慕ふてなきし門前の櫻はちりて白菊のさく

○　名古屋　原田琴子
み佛が衆生に宣らす御聲と白蓮開く音ほのにきく

○　長崎縣　芳子
八重霧や白衣の袖に鳩なきて神つ代思ふ神苑の朝

○　伊勢　藤田光子
青葉蔭猫のねむりの夢さめて木立にすだく松虫の聲

○　仙臺　三好まさる
蚊遣火の行違見送る姫君や琴かいやりて泣伏し給ふ

○　磐城　山本ゆたか
讀經する御寺の堂の南椽に小猫眠りて晝靜かなり

○　相模　今井吉子
詩にくるふ我ひと時のたうとさは誰ぞ百合の座にいつきてか見む

○　藤澤　わかば
闇の夜を垣の卯の花心あてに戀しき人の宿をとはなむ

○　栃木縣　菅谷とく子
すてられし身はなか〳〵に思ふかなつたなきいのちさゝげんとまで

○　靜岡　山口芳子
弱く育て妹に別れし夕べより小雨の音にしのばるゝかな

○　高知市　高島田富
たそがれに降りくる雹にあてられてみだれちるかな白菊の花

○　下野　入江靜子
春雨のそぼふる里の夕まぐれわが新妻のいかにまつらん

○　丹波　稻葉純子
夜もすがら戀の惱みに泣く身とも知らで水鷄や戶を叩くらん

○　讃岐　少女
時鳥鳴音盛りになりにけり垣の卯の花咲き初めしより

○　伊賀　山村すみれ
友どちに戯奢されて丹の頰せし十年昔は戀も幼なき

○　上毛　大沼楓子
梅の實のなり〳〵落ちて家根うつ夜淋しと言はて實の母とふ

○　熊本　もくづ
父はしも盗に居ますを此もだえ泣くべき際の母狂ひましぬ

○　神田　奧田公子
心なく吹きくる風に我家の庭の櫻は散りはてにけり

○　伊豆　尾崎そひや
美くしき流れのすゑに菖蒲咲き釣り垂る人やうら若き春

○　廣島縣　操子
君は遠く左遷の船に送られて思出多き梅の宿かな

○　岐阜市　篠田とみ
世離れてかへり行きます春姫のみ袖にすがりなく小島かな

○　伊豆　杉山野菊
吾想ひ紫にほふ雲と凝りて君が夕のみ歌に映えよ

○　越前　波萬子
人の來て思ふと云ふを憎みえぬ二心の人を罪したまへな

○　石川縣　ルビー女史
むらさきの潮うれ〳〵濵萬里朝霧晴るゝ夏の海かな

○病人のぬかにかゝりし黒髪とそゞろ想ひぬ岸の青柳　奈良縣　栗山英子

○徒然ゐ我友どちと十六夜の唐橋越せば月の湖戯　日向　濱砂まさよ子

○母をこひつゝ白菫咲く野に立てば故郷に似たる川を見いてぬ　愛知縣　竹下季子

○月あかり青柳湖に影おもふ靜にゆれぬ夜のしづくして　奈良縣　野崎さよ子

○つちかひて花さかすべきなてし子のすゑのみのりぞ忍ばれにけれ　周防　むらさき

○樂しくも見ゆるものかな朝な夕な水くれし蔓の朝顔の咲く　四谷　小林みかつ

○我母を思ひ明石の夕まぐれ帆かけて歸る漁舟いさまし　岡山縣　平井繁子

○大原の青田に波を打たせつゝ海へ走りぬ夕立の雲　阿波　藤井茂枝子

○銀燭の灯影そむきて笑き人がすれたる櫻か花の朧夜　神戸　櫻井白菊

○時鳥なきつる方を眺むごとたらちれ戀し故郷の空　高知　あげは蝶

○淋しさは秋の習ひと知りながら涙もよほす夕ぐれの空　八王子　梅子

○且つ光り且つ消え行きてはた光る野邊の螢に似たらずや人　日本橋　宮島みちな

○晴れてゆく雨の名殘の露草にすゞしく宿るなつの月かな　越後　白蕗子

○戀しさに君住む空を眺むれば身を焦しつゝ螢とぶかな　千葉縣　秋山花翠子

○牛の背に淺瀬を渉る牧童の顔に寂しき夕風の吹く　上毛　富川滿津江

○駿河なる富士の高根の白雪もいつしか消へて松虫のなく　遠江　しづ子

○今さらに縣びし小袖ぞうらめしき逝きにし母の片見となりて　宇都宮　山田竹子

○卯の花の壁が袖垣匂へども今に訪ひ來ぬ山ほとゝぎす　上毛　金子尙子

○少女子が歸さ忘れて春の野の二葉のなぐさ摘み暮しつゝ　千葉縣　內藤とし子

○青すだれ白帆孕ませ吹く風に涼し波よろ日頃となりぬ　山梨縣　一倉濱路子

○午すぎて煙る柳の間より見ゆる朧の春の夜の月　埼玉縣　石原良子

○欄干の月に昔を忍び居れば杜鵑一聲身ははや老ひぬ　秩父　桂花子

○いともろきよろこびを盛るうつはもの砕けて更に盛るよしのなき　千葉縣　よし子

○きませ君すみれの薫る稚兒の歌二人して見む春の野の夢　宮崎町　垂水薫子

○ほゝゑみて給ひし董色あせぬ君が心も萎れたるらし　名古屋　ゆり子

○ふけぬるか鵜づかふ舟も歸るなりさす篝火のかげもみだれて　河內　糸若柳野

○病める身の獨り夕べをおぼしまに思ひ出多き流れ見るかな　美濃　臼井安子

○蓮の花池の面おほふ青き葉のなかより白う咲きてけるかな　下總　三橋げん子

○何ごともたゞ何事も胸に秘めてからだと共に墓に埋めん　高知市　竹村朝つゆ

○給に君と妾の戀秘めてしづめて見たき春の海哉　奈良縣　芳野涙子

○つく鎚は海を渡りて詩の國のうらぶれ人のもだへとなりぬ　土賀　谷子

○千葉縣 吉原靜江
燈火の影かすかにも見ゆるかな朝ぎりふかき浦の苫屋に

○下關 石谷旬仁
夕月夜梨の花ちり散りしきり笛に興やる人にかゝりぬ

○仙臺 東華女
花束に花つみそふる春の野の右に左に雲雀なくなり

○羽後 渡部みや子
別れむは闇こそよけれ月浴ぶろうしろ姿を見るにえたえれ

○門司 春美
新潮の無韻の波の月の磯郷國なつかしの南洋の春

○下野 手塚妙月
君が手に摘みし桑の葉食む蠶如何に清けきまゆつくるらむ

○遠江 秀子
とり〳〵の花咲き匂ふ春野には少女の聲のたへなかるらん

○伊勢 みどり子
かつぎして來ん公達を見もほしや花のこずへにかゝる月かげ

○後志 大塚貞子
朝霞島こぎ出づる漁舟の海原つゞき千島山影

○石見 田舍女
うちみれば藤なみさへにこへにけり春も今しは末のまつやま

○熊本 たけ子
草の中に顔を埋めてまひる野に故郷も吹く風の音聞く

○肥前 松林靜子
山里も海士のすみかも此頃は花てふ花のさかりなりけり

○越後 なみだ子
たよりなき身は白川のすて小舟きれしつなのを結ばんともせず

○下總 せい子
花賣の謎聲消し野の小道歌をこひしと蝶は舞ひてか

○名古屋 胡蝶
栞りにと送られたりし押花はあはれ昔の色香とゞめて

○富山市 小林芳枝子
天の樂調流れて露となりさびしさせまる夕ぐれの雨

○滋賀縣 井上つゆ子
驟雨に雷まじる夏の宵都に在す姉おもひ出しぬ

○羽後 渡部みや子
いと戀し今年十五の我妹が破琴抱きて歌したまへば

○埼玉縣 中村勝子
花咲けど鳥もきたらず蝶とばず遂に散りなん山つゝじ花

○下野 中山百合子
元曆の其おもかげは殘られど須磨の浦波音は變らじ

○信濃 中山もりじ
春雨のはれてまばゆき晴空に太陽照るなり殘す限なく

○群馬縣 青木もり子
何知らぬ森の彼方のほとゝぎす枕を越えて聞も淋しき

○石見 野の白百合
都なる君を思ひて夜すがらを朧の月に春の夜更けぬ

○南多摩 金子れん子
夕日さす朝顔垣ぞ美しき畫繪の具の筆にしゝ如

○丹波 難波あいの
綠山ゆらぎ大きく風に去なば空に君戀ふる涙かわかん

○秋田縣 無花果庵
わが思ひとけて流れて君います歌の濱邊に通ふとやせん

○淺草 大谷哈々子
思ふどち身をよせかけてたばしまに戀を語りぬ夏の夜の月

○茨城縣 根本靈子
鐘樓の軒落ちかゝる山寺や銀杏樹高く時鳥なく

○羽後 柳子
赤白のうばらうるはし春の夜に美き顔ほころ少女に似たる

○岡山 坂東須美子
思川の堤も暮れて宵闇に螢火あかく二つ三つ四つ

○神戸 三木政子
淋しき旅客等の話に夜は更けぬかゞり火かすかに春の雨降る

○ 京都　滿壽子

深山路さびしくたどる夕まぐれ讀經の聲にゆくてたゆみぬ
○ 香川縣　せき子

君と吾かたみに泣けば同音に木の葉むせびて夕雨すなり
○ 上毛　羽衣女

花散りぬ若葉萌え出る靈も生ひぬい ざやつとめん國のみために
○ 豐前　小草子

笛の音の主はいづこ春風は花の香そへて今日もおくりぬ
○ 伊勢　紫女史

夏木立軒のすだれに風絶へてひるれを醒ます蟬の諸ごゑ
○ 京都市　奥本喜美枝

あめやみぬ風おさまりぬ月いてぬ玉はやどりぬ木々の梢に
○ 上總　うつくしきむら

花雫硯にうけて道知らぬ歌かき送らん君が御許へ
○ 下谷　蕉雨子

都には待ちわびぬらん郭公今日も軒端の山に聞くかな
○ 越後　白菊子

君ひとり我も一人とちかひてし心のいろはいかでかはらむ
○ 紀伊　野木ちとみ

鳥啼きて川霧立ちて筏士の聲より白む春の曙
○ 金澤市　木原蓮舟

茂りあふ若葉がくれの一つ家にたそがれ淋し水車の音
○ 大和　榮山若葉

業なりて三年ぶりにてかへり見れば破れし軒に母繩なひ給ふ
○ 羽後　渡部みつ子

赤間宮　下關市　川村政子



夕日浴びて八重の緋桃をかざさばや舞ふによろしき濱の松原
○ 會津　山女

朝毎に君と行逢ふ菊園に何恥らいて我胸ゆるゝ
○ 兵庫縣　大內八重子

五月雨に晴れたる宿を失ひて忍びれになく郭公哉
○ 大坂　土井靜枝

心なききこりもなしき心地せむみやまのおくにかをる蘭は
○ 神奈川　岩澤みどり

蓮の香や磬の音遠く響きゝて物にはしまぬ朝心かな
○ 京都市　岸村とも

よき人のたまひし金の襟留の光りまばゆく胸を射るかな
○ 京都　嘉勢なほ子

秋雨や窓ゆるうつ憂き今宵書讀み居ます君としおもふ
○ 紀伊　室谷忠子

黑ずめる杉の梢に星見えて一聲橫に郭公なく
○ 土浦　稻葉豐子

水淸き川添ひ十里櫻咲き小さう霞むや人と白馬
○ 宮崎縣　山本しなり子

夕鐘は木枯に似るひゞきして人の氣なき街を走りぬ
○ 四日市　山本さつき

淋しげに物や思へる少女子の顏をかすめて櫻花散る
○ 伊勢　操子

はる風に吹き誘はれてまふ蝶をちりくる花とおもひけるかな
○ 大垣　坂東子

知るべより貰ふて來りし菊の苗植ばしたれど名を忘れけり
○ 福岡縣　青葉女史

ほがらかに朝日輝くせんすゐの邊に一つ薔薇花の咲く
○ 長野市　松尾みれ子

池の面に翠を移す松影は千代も曇らぬ鏡なりけり　高岡市　梶川あや子

○

舟にして下ろ大河の朧夜やあかき灯並ぶ街美くしき　熊本縣　山田きく子

○

朝榮や薔薇の若葉に軟風の媚びゐる様なり里川堤　滋賀縣　井上つゆ子

○

夏の夕湖上靜かに波ゆれて遠近聞ゆうたものどかに　名古屋　小杉富貴子

○

勝ちまけのわかたぬほどはすまひ草ゆかりの色に心そめけり　靜岡縣　岡村博子

○

並び立つの椎小森に淡日差して塔に鳩みゆ古寺の夕　宮城縣　よし子

○

少女子が螢來よ〳〵うちむれて遊びにあかぬ夏の夕ぐれ　駿河　日章草

○

我が庭の籬に咲ける夕顔の仄かに匂ふ薄化粧哉　多摩　しん子

○

母も亡くはらからもなき我が身には此のうき梅雨をいかに過さん　武藏　青柳彌生子

○

瀧つせのしぶきにぬれて里の子が螢追ふなり岩根傳ひに　芝　朋女

○

大利根や小利根にはゆる若葦にこ皺しぶきて夏の風吹く　但馬　孤蘭

○

うすものゝ二尺の秋風に咲かれほゝえみて立つ梅若葉蔭　播磨　松下ゆかり

○

亡き友の移し植ゑにし花薔薇に黄白の蝶の飛び交ひ遊ぶ　北品川　丸山たつ子

○

馬洗ふ少女が白き腕まで月はのぼりぬ山の湖　豐橋　いさ子

○

流れ行くばらの束にぬる蝶の夢しづかなる夏の夕川　長野縣　白百合

○

折々は瀧より空を仰ぐなり鶯も古巣や戀しかるらん　龜井戸　鵜澤白蓮

○

春逝きぬ陽炎もえて牡丹咲く苑の金砂に玉沓のあとして　淺草　磬史子

○

おばしまに白帆數ふるたをやめの浴衣に磯の日は暮れかゝる　日本橋　持田とし子

○

谷深く嵐の音はしづまりて山松が枝に月ぞのぼれる　下野　溪泉子

○

岸つゞきけぶる柳の風うけてま柴つみ行く利根の川船　大坂　伊藤淺子

○

須磨の浦日は暮れはてゝ大船の白帆にうつる夕月の影　麻布　秋山欽子

○

夕されば蘆間の小舟漕ぎいてゝ七瀬の淀に螢狩りすも　弘前　福井松江

○

利根川や若葉の堤にたゞずめば白き帆三五夕ばえの空　本郷　朝井千とせ

○

雨になやむ八重山吹の花見れば見ぬ世の人も偲ばるゝかな　安藝　碧星

○

宮島の紅葉の宵に散り止みて月冴え高く鹿の鳴く聲　麴町　長谷部里子

○

梅雨晴れや戸に立つ人の片頬をば色どるごとし楓葉ごしに　滋賀縣　永井やな子

○

湖のほとり松原通る俥の灯われ見てたてば時鳥なく　香川縣　合田まがれ

○

春きぬと掃き清めたる高欄にあないもまたて朧夜の月　名古屋　照子女史

○

夕されば靄の我が身に迫り來てなにとはなしに胸さしぐまる　神田　勝原榮子

○

ほの〳〵と祈りに明けし綠野や笛の音遠ちに牧場は靄に　松江　古志ます子

○

香たきて君ますよひやさみだれの音なくつたうのきの玉水　兵庫縣　井澤秀郎

○

亡き友や病みます友のしのばれて朝夕ぬらすなつかしの筆
○　陸中　若生仲子

白菊に添へて送らむ歌なくて思ひにくるゝ夕ぐれの窓
○　京都　片山重晴

諸々の花と其美を爭ふを厭ひて梅は深雪に咲くや
○　遠江　又平蝶子

うちよする波はくだけて清見潟光り涼しき夏の夜の月
○　伊勢　山路くに子

見し夢のすごきに耐えて窓押せばほつれ髪さむう百合の香せまる
○　京都　中島園子

幾度にも思ひつるかな故郷の父母居ます方のいかにと
○　羽前　高橋絹子

むすぶ手をとゞめて聞かんま清水の岩間流れてさゝやく音を
○　長野縣　山田くに子

亡き夫の忘れ形身と嬉しくも悲しくも兒が寢顔眺むる
○　京橋　涙光

まひ心地何とはなしに君思ふ戀ならなくになつかしき哉
○　紀伊　橋蝶子

梅が香に牡丹の艷はれがはじなはれは深山の大和なでしこ
○　丹波　あいの

消えし歌追ふてひぢする文机のひゞきふと見ぬ影の夏菊
○　宮城縣　小林春子

五月雨の音のみ高く夜は更けて君訪もせず獨り文よむ
○　岩代　瀧谷てつ子

田植する皐月忙し我里は姉が馬引く歌山かげに
○　栃木縣　智惠子

星川を渡き月影身にあびて吹く風薫る白ばらの花
○　近江　東枝子

そゞろありく我れ白雲の上にして夢見心地の花の仁和寺
○　奈良縣　中富よしみ

紀の國の詩人に見せんみ吉野の散る花片ないかだにのせて

○　滋賀縣　川島儀子

暮そめて静にそよぐ西の風牧場のほとり牛追うて行く
○　中島胡蝶

宵の君の墓參を終り歸路に道に迷へる稚子をおくりぬ
○　麹町　淺井千鳥子

青柳に春雨そぼつ宵のまど物思はしき哲學の人
○　横濱市　古川ふき子

春の夜や若き舞姫の振袖に風激るなり躍るごと
○　麻布　牧野葉江子

戀の炎地にうづめてかなしみの涙ふらしぬ五月雨の頃
○　秋田縣　佐々木園子

白金や黄金の風鈴幾數十釣りたるさまにヂキタリス咲きぬ
○　陸奥　瀬口不二子

そゞろ行く田甫小路日は暮れて草葉がくれに螢とぶなり
○　和歌山　津田眞佐子

山々に櫻花咲き鳥啼きて春の景色は盛りとなりぬ
○　千葉縣　入木久子

水早し浮べる花の末何處邊に止めよ暮れて行く春
○　常陸　今泉義子

夏の風來ぬとてぢれし世の人は團扇煽ぎて風を呼ぶなる
○　三河　伊藤さと子

大和路を歌も霞みて馬に乗る少女過ぎ行く春風の道
○　名古屋　西脇政子

旅ながら伽羅焚く夜なりしと〳〵に花や流さむ春雨のして
○　下野　瀧澤秀子

何を恨む思ひの歌か雨の夕を川邊のみゝず忍び音に啼く
○　上毛　青木もり子

春來ればまがきの梅も咲き初めて我宿ちかき鶯の聲
○　荏原郡　かれ子

さびしげに病む美人ゑみぬ花ちりぬ小雨のこよひ春や行くらむ
○　下毛　杉の雫子

月の夕べシユーベリチルの湖に船を浮べて笛ふくは誰れ
○　岩代　入　重子
見せばやと思ひし人は來まさずに花散りそめぬ今日の東風
○　中谷　近藤くら
人毎におもてかはれど變らぬは君なし思ふ大和魂
○　橫濱　古山春枝
木がくれておろすいかだのみなれ棹底のわか葉のかげみたすらん
○　西山松子
一聲をほのかに泣て郭公雲の何處に遠ざかりけん
○　下谷　白梅女
むらさきのゆかりの色に咲きいでゝ香もなつかしきはなあやめ哉
○　長崎市　柴田とき子
父君に藥まいらすまよなかにあわれそゑてか春雨ぞ降る
○　長崎市　武石欧子
なつかしき君のうつしゑながめてはしばしとくるゝ夕暮の窓
○　大分縣　湖華子
君思ひて寢られぬまゝに窓押せばたゞ鐘音細く月圓なかり
○　兵庫縣　直田まつゑ子
よき人のかなづる琴のつめはしによしありげなりすゞむしのこゑ
○　紀伊　田中文子
世にそむき人に背きし我ながら月も戀しう花もこひしき
○　備前　井上梅僊
夕づゝは青ばの森にいろはえてうつる池畔にわれさまよひぬ
○　大阪府　內海新
貝ひらふ都乙女の美しう長汀十里霞に睡る
○　近江　西村悦子
ほたるをば此上なくめてし我妹子は逝きてかへらず誰にあたへん
○　芝　齋藤らく子
紫の雲かと見れば老松にかゝりて匂ふ藤にぞありける
○　大和　岡崎執遊子
果敢なしと思ひながらも嬉しきは戀しき人に逢へる夢かな
○　肥後　寺田えみ
只一たび京にのぼりしものがたり今もかたるよ沖のしまもり
○　福岡　ゆり子
櫻花人に待たせて春來れば待たせしかひもなくちりにけり
○　橫須賀　齋藤袖香子
もたれよる秋さびしき夕まぐれ西のをばしま牡丹くづるゝ
○　赤阪　中ゆき子
美しき夢や結ばん蝶々の牡丹の花にかりの宿して
○　下野　翠蓮女
生ひ繁る青葉葉末に雨玉の見えて涼しき夏の夜の月
○　長野縣　矢名
陽炎の燃ゆる小庭に蝶舞ひて猫戯むるゝ梅の下かげ
○　丹波　あいの
猶賞づるみたまや花に迷ふらん偲び行く野のあまり悲しき
○　札幌　みなしご
俄か雨降るとみしより鳴く蟬の聲はしづみて森風ぞ吹く
○　若狹　奈良梅花
つれ〴〵に想ふは戀しわが夫よ蝶追ひ花に醉ひし時はと
○　千葉縣　靜枝
遠る〴〵と道は千里を離るれど心に變りなきぞ嬉しき
○　若狹　津田汐汀女
奈須の原草は綠りに日は薄くむるゝ小羊に柔らかき風
○　日向　甲斐玉歌子
亂女の若葉蔭に戯むるも薩摩の風に賑はざるかな
○　磐城　片寄しな子
五月雨の闇に一聲時鳥見し戀人の夢さましけり
○　神田　川岡絹子
風死して夕雲ゆらぐ鐘の音に靜かに花のひら〳〵と散る
○　後志　大塚さだ子
花藤の影むらさきに榮ゆる池の泡ふく鯉に花つぶてしぬ
○　信濃　橋本今江

朝顔は露の干ぬ間が美しとかたる姿の面淋しげに
○ 紀伊 木下美笑子
武蔵野の文の林に咲き匂ふ花や千歳の實を結ぶらん
○ 下谷 春洋子
行春を御髪亂れし戀君が無絃の琴に憂愁悲しむ
○ 能登 鐵目よき子
はろ〳〵と廻り渡れる妹の土橋の上に涙ふきつゝ
○ お題目
花散りし櫻の下にうら若き僧寂しげに獨りたゞずむ
○ 渡島 すみれ子
別れ路の今日のこよひの悲しさをみそらの月やひとり知るらん
○ こんち子
今も猶おさな子なりと思ふにや時々いづる乳母が言葉の
○ 攝津 寺部君子
五月雨は軒近く降る昨日今日一入さびし夜の病室
○ 臺北 峡よし子
天降る高千穂峯に紫雲して奇しき女神の百合の花咲く
○ 愛媛 白形みやび
またしても思出多き春雨に哀れ悲しき順禮の聲
○ 和泉 津田浪子
殘りなく花散りはてゝ夏木立青葉にそよぐ風のすゞしさ
○ 茨城縣 大水霞子
日週々と天のきざはしふみのぼる花理と中の人を照らすと
○ 京橋 井上はな子
よもすがら春を名殘とふる雨に花の小徑ぞあとなかりける
○ 駿河 かなる



○ 筑前 紫英
見渡せば瀬田の唐橋霧たちて堅田の浦に雁なき渡る
○ 松山 伏見圭子
門川や星白き夜を詩誦してばらに占ふ乙女のすがた
○ 大分縣 工藤たまき
地に落ちておのれと崩えむ椰子の實に佛刻みて靈ほろぼしゝ
いちじく女
○ 備後 かたゞ落雁女
小松原白銀糸に結ばれて殘んの月に明烏なく
○ 土浦町 琴江
夕さればおよぎの子らもゐにはてゝうかぶ月のみふれのみなり
○ 茨城縣 久保田つれ子
榊垣の杉の古葉に散りまじる雪おもしろき春の夕ぐれ
○ 陸奥 一花
見わたせばまさりなとりは白菊のさきみだれたる野辺の八千草
○ 廣島縣 鈴森きみ子
あさな〳〵しばし宿かる露ごとに命まかせて朝顔のはな
○ 福岡縣 龍子
姉病める小窓に白き卯の花の盛も知らでばやちらんとす
○ 下野 栗原くに子
花嫁の重れ衣のあて姿見送る窓に風かほり來ぬ
○ 明石 白旗清子
散る花を皐月の闇にすかし見て逝く春戀ひぬ我涙する
○ 周防 胡蝶
二とせも深き恵をうけたれどむくひかれたる身をいかにせん
○ 讃岐 みどり子

夢の跡追ふてしばしはたゝずみぬ昔の我屋の前を通りて
○　上總　四之宮　うた子

求女塚君の御爲めに消えしより清き操ぞ世に殘りける
○　神田　玉川　稚子

五月雨の晴間を椽に彳めば青葉の蔭に郭公啼く
○　伊勢　植本　くに子

夕月夜卯の花垣を前にして小椽にならび小唄する子よ
○　陸前　大場　ちよせ

いさゝかの風にくづれて白罌粟のひるがへりゆく初夏の庭
○　神田　北村　天外女

詩の國や近う高樓の簾ゆらぐなゝめ掠めて飛螢散
○　大阪　生田　花朝女

書に倦みて障子開けば五月雨は日毎夜毎に降りあかぬさま
○　盛岡　蕉　雨

涼しさや四方みどりなる野の川に繪扇ゆれて行く小舟かな
○　羽前　白　菊子

をちかたの空はみどりに晴れながらのぢ行く袖をぬらすむらさめ
○　信濃　節　子

縁きて三年消息とだえし學友の音は來にけり五月雨の夕
○　本郷　きく子

青葉なす木々の繁みにせみ一つほそくなくなり夏は來にしと
○　丹波　齋藤　笑子

螢出る加茂の河原の夕景色青柳より涼風の吹く
○　鹿兒島　兒玉　しげ子

ともすれば杜鳥にくるゝ五月雨や妹をあひてに舞ひても見るか
○　陸前　丸山　香花

賤が頬はふし面白くうたひつゝ早苗とるらむ小山田の里
○　長門　白石　ひさこ

花のいろに霞たなびく小松原もの間くゞれる里川の水
○　新潟　土田　りた

梅咲きて鶯鳴きて桑の花の黄なる上をば蝶々の舞ふ
○　下總　山田　芳子

花賣の小唄すゞしき朝月夜ふし面白し桑の花小道
○　岐阜縣　丹羽　久子

名にしをふ二見の浦の朝ぼらけわが大君をおがみがてらに
○　越後　しらゆき

雲に入りし君が後追ふ夢さめてそゞろに戀し有明の月
○　神田　三室　梅子

緑したゝる若葉の山の頂に紅の鳥居ぬ見えつかくれつ
○　靜岡　佐々木　久子

師の許に通ふ田中の細みちのあゆみたゆたふ五月雨のころ
○　遠江　宮城　梅子

舞ふ蝶は遂に小猫にとらわれぬ牡丹花散る晝中の庭
○　伊豆　上原　露子

夕まぐれ月出る方をながむれば窓に淋びしき山寺の鐘
○　京都市　島田　千代

うたゝねの夢に通ひて遠き里今讀みうみし書のさながら
○　秋田縣　佐々木　千代子

麗しき花のやどりを失ひて若葉の中に胡蝶さまよふ
○　陸前　露　子

薄く濃く其いろ〳〵にする墨はいづくの松のけぶりなるらん
○　沼津　渡邊　とよを

富士うつる田子の浦端の舟遊び雲井に登る心地こそすれ
○　播磨　井賀　房子

父母逝きて早や七とせの花咲きぬ御靈よ何處に眺めまつらん
○　濱田　ちどり

時鳥うつゝに聞きぬ尺へだてやさしき君のたはぶれ見つゝ
○　相模　今井　吉子

天女めく垣の卯の花白うして眞晝あざむく其が姿かな
○　松山市　後藤　露枝

夜更けて遠音に響く笛の音何れの人のすさびなるらん
○　遠江　白百合子

亡き姉のかたみに植ゑし白百合をあはれのこらず折られつるかな

○　鹿兒島　犬飼たま子

白梅の氣高き香り妹は緋桃の艶よいづれによせん

○　山口縣　利喜子

郭公青葉の奥になきそめてあはれ清げき夕月夜かな

○　茨城縣　小泉はま子

灯の白う朝雨しげき湯の宿の京の繪蚊帳に百合の香せまる

○　米澤　樋口夏月

いざこども空のどかなり春霞たちいでゝ野べの若菜つまじ

○　淺草　とみ子

金扇を口にくはへし舞姫の頭に重もき紫陽花のはな

○　肥前　水里

幾人もおなじ思ひにはるの夜のおぼろながらの月を見るらん

○　近江　武藤はつ子

見渡せば青田の蒲遠ちこちに蛙呼ぶ子の霞に見へぬ

○　美濃　傍島みゆき

乳母が脊にこちこと呼びてゐれぶりし稚兒の笹葉による螢かな

○　常陸　豐島波光

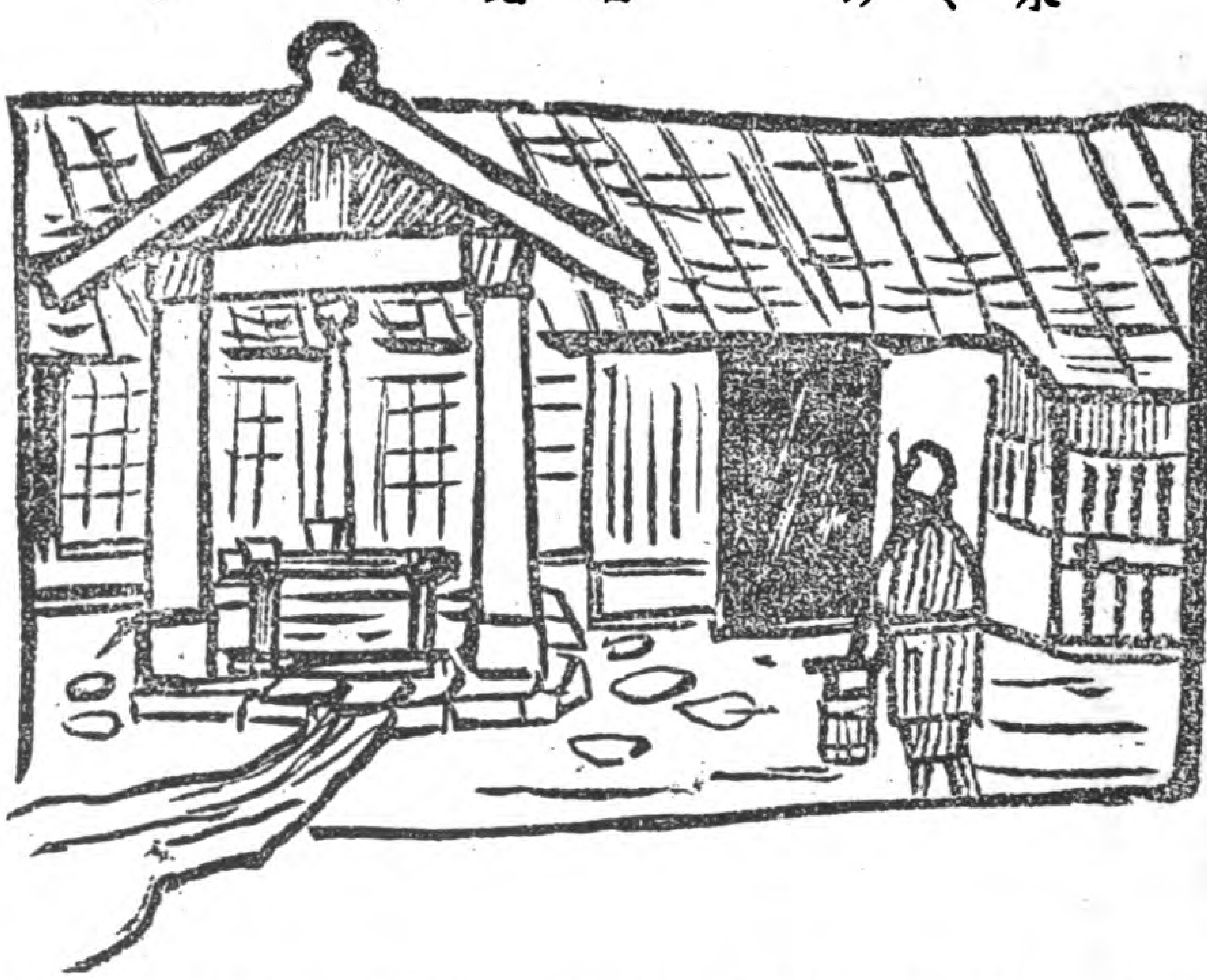
風吹けば月の宿れるひまもなし露の玉ちる池のはちす葉

○　京都　吉田靜枝

立ち迷ふ硫黄の烟物凄う嶇に咲きたる鬼百合を卷く

○　能登　白梅子

夏草のしげれるなかにまじりてもすがたやさしき姫百合の花



水くみ　石見　[illegible]

○　鳥取市　山根綾江

心してうれしき夢にゆくりなくほとゝぎす聞く里のあけぼの

○　丹波　和田しげ子

たゞひとり思ひなやみて泣く夜半の月はかくれて郭公なく

○　加賀　杜若女

夕涼み月を横切るむら雲は遠山里の役やりなるらん

○　和歌山　岡崎ゆり子

なんとなく琴なつかしみ柱を置きぬ萩の若芽に雨ほそき宵

○　石見　靜子

時鳥なきていづ地へゆきぬらん月の影のみ空にのこして

○　陸前　千葉眠男女

すみ濁る人の心を汲みわけて八千代につたふ水莖のあと

○　越後　山口しげ子

病める母なける子寒き秋の風とりどり悲し身はいかにせん

○　福島縣　あくがれ人

螢とぶ清き流れに月おちてみ空にきこゆほとゝぎすの聲

○　越後　西川喜代子

若楓みどり色よき南窓に白き小鳩の今日もきなく

○　相模　野島里子

舞扇入日にかざす京の子が笑まひ涼しき水のおばしま

○　石㳂　若木美枝子

雨に風にうれしきことにうきことに故郷こひし友なつかしゝ

○　沼津　山縣梅園

我友の我にやさしきまごゝろは幾世ふるともわすれざらまし

○　福岡縣　秋の初月

都なる友の使か白蝶の我文學ぶ窓べにぞ來ぬ

○　靜岡縣　石神喜惠子

呪ひ文字つばさに書きて寬の神が見せじとぬりし黑き蝶ぞも

○　伊豫　とし子

さなきだに憂きに沈める我やどに涙そふるな五月雨の空

○　岐阜縣　中島重子

丸窓や黑髮さばく人影に春の灯ふけて花に聲あり

○　天神町　美壽子

いざ友よ涙おさめて我がために奏て給はれはなむけの曲

○　橫須賀　吉本富枝

朝ぼらけふりさけ見れば朧なる端山に殘る春の月かな

○　筑前　田中とよ

行く雲よあゝ我のせて行けよかし千里の彼方姉在す方へ

○　信濃　山浦みどり

里川の浮藻の花をゆらかして目高群れ遊ぶ日は斜めなり

○　田端　笹村玉枝

紅そめて戀わたりにし薔薇の花冷めたき床に淋しう病みけり

○　千葉縣　木村せつ子

卯の花のとばり開けば夏の姫青葉きぬ着て舞まふて居ぬ

○　栃木縣　猪瀨いれ

立出づる時の心に似もやらず何とは知らず濡るゝ袖かな

○　下野　遠井ひろ子

須磨明石松ふく風に浪たちて碎くる月のかげぞ凉しき

○　石見　松原多賀子

五月雨のそぼ降る音の淋しくて逝にし君ぞしのばるゝ哉

○　岡山縣　榧原美喜子

きり〳〵す軒端に近くこゑきゝて淋しさまさる雨の夜半かな

○　名古屋　高木米子

都言葉また笑れぬ一人旅都暮しは憂しと思ひぬ

○　周防　三井はる子

尋れ來し庵の畫師は逝きて居ぬ朽葉に秋の蟲の音を聽く

○　岐阜縣　白梅子

歸省して妹と二人そゞろあるく磯邊の月の凉くもあるかな

○　信濃　佐々木りさ子

姉妹が凉みし庭のこの夕べ置きしベンチに柿の花ちる

○　小野綠子

野もやまもおなじみどりの夏木立花の梢はいづれなりけん

○　三河　松子

わが宿の庭の若竹生茂り學びの窓の暗くなりけり

○　河內　松露

あすよりは更衣着るためしなりいと名殘惜し花のうつり香

○　美濃　大西英子

咲き匂ふ百合に戲る白蝶の何の秘密を花に告ぐらむ

○　土佐　中山翠美

君戀し春逝きたれど君戀し小窓にかをる白椿哉

○　一蓮女

橘の花散る夜なり朧なる月にうた得し君が家の庭

○　遠江　增田たけ子

赤襷白地手拭綾どりて茶摘少女はみな歌うたふ

○　橫濱市　婦美子

初旅に別れし友の偲ばれてそゞろなつかし故鄕の空

○　愛媛縣　嶋田さだ子

凉しさの限りなりけり夏川の水にうかべる老松の陰

○　京都　大井順子

萩の露硯にうけて文書けばこひしき君が笛の音をきく

○　田中なか子

月あかき秋の夜庭にまよひ出でゝ去年をしのびつ一人泣くかな

○　上總　堀口秋子

心して人はみよかし蓮の葉にみちてこぼるゝつゆの哀れを

○　越後　原孝子

住む人のありとも見えぬ山の奥に晃なき鳥の鳴くれをぞきむ

文藝遊戲

趣向談（課題）

記者曰。文章、小說、詩歌などの材料になりさうな面白い趣向を皆さんにお尋ねいたしました處、いろ〳〵原稿が參りました、最も、ふだん程澤山は參りませんでしたけれど、其代り却つて沒書にするやうなものは少く、皆それぞれ取り得があつて、讀者の諸嬢が御覧になつて爲になるやうなものが多いのです、一つ〳〵の題は選者が假りにつけたので、通じて皆趣向談ですから其積りで御覧を願ふ。

一等　終焉

土佐　一菫女

此れ迄、人間の終焉の悲慘な樣を歌つた方は多いように存じますが、妾ふとこの樣に考へました、人の生れて來た世が若し一等宜しいところだとすると、永遠に生て居らねばならないのに、中には苦痛をして迄も死ぬるのを見ると、必ず何所かに、美しい國があつて終焉の際人の想像に反して、魂はよろこんで去るであらうと。夫れで妾は終焉の際の美を詩にして見たいと考へて居ります。附たり、素詩才のない妾、未だによう出來ませんが、其の初めの作として本誌八號へ出して下さいました終焉がそれて、とう〳〵彼の樣なものになつてしまひました、尤もあれは初めの方の一節では御座いますが。

不健全な思想だと云ふ人があるかも知れませんけれど、神秘的、冥想的な處は女性に珍しい、藝術の向上は靈の飛躍にある、あなたの靈には他の持たぬ翼を有して居ます、これありて詩の境にも翔ることが出來るのです。（選者）

二等　達磨

芝區西久保巴町三十四、平山方　石出愛子

私は達磨の小さいのが好きで、七個持て居ました、暇な時に机上へ並べて御相撲させて遊んで居たのを軍艦の兄様に見付かりました。兄様は笑ひながら之れに手が生えて踊る踊りは此樣のだと躰操の樣な妙な手付で暫時笑はせて置いて密と衣兜へ入れて御歸艦になり、後から御手紙で、「嘸御相手無く淋しからんとは存じ候へ共衣兜に入れ歸艦致し候處、達磨は艦が初ての由舟暈にかゝり毎日軍醫部に連通ひ治療罷在候段御悲み下され度候。尚又私とても戀しく慕はしく手放し兼て連れ參りし心中何卒御推察下され度候……」これも何かの趣向になりませんか。

趣向談と云ふより此まゝ上出來の短文と見て差支ありません、既に達磨を愛する事から奇抜であるのに、軍艦へ連れゆかれ、軍醫部に通うて居るなど、其わざとらしい處に言へない可笑味があります。（選者）

三等　洪水のあと

岩代國北會津郡荒井村字下荒井　水神まさき

數ふれば去年の秋、そばの花が眞盛りに白き頃、三日續きし大雨のため

大川の堤は崩されて、ノアーの洪水もかくやと思はるゝばかり、三十町の梨園と二十町歩の林檎畑、洗ひ去られて唯だ凸所に十本の林檎と、五七本の梨を餘すのみ、凹地は礫の河原と化り鶺鴒の小走りに礫を渡つて囀る聲も悲しく、吾が會津の名物たる玄女節の、花摘む影に聞えしにと思へば、この畑主は何程悲しきやら、春もこゝのみは淋しく。林檎召しませと、梨花より清き少女の、ふれ賣る聲を今年の秋は聞かれますまい。是等の事を妾は新體詩に作りたくあります。

成程新體詩には好い材料でせう、お話を聞いたゞけても、詩を聞くやうてす、殊に觀察の細い處は實際洪水の跡を見たものてなければ、分らないてせう。（選者）

四等　驚く蝶

福岡縣遠賀川畔　村　雨

私の家には蠶が飼つてあります、私は桑切りが役目です、夕方行くと蝶蝶が澤山桑に止つて寢て居ります、是を切ると一度に舞ひ立ち、ひらひらと飛び廻り他の木に行つて止ります、蝶々は如何驚いたかと思ふと私實に氣毒てすよ、また此を新體詩か叙事文かに作ると善い材料と思ひますけれど出來ません。

此位がほんとうの趣向談として、上出來てせう、蝶々が一時に舞ひ立つた處は、實に美くしいてせう。（選者）

五等　家庭問題

芝區三田四國町二ノ一三池田方　壽　女

毎朝早くお向ひの琴の先生のお家へおけいてこに入らつしやる奥樣が御座ひます、お早い時などは先生のお家てまだお休みになつて居られます、御門のあく間をお袖から新聞を出して見て居られます、あゝ私はいつもそう思ひます、御宅には御主人もあるものを其は召使ひも居りませう、決して御不自由はなくとも一家の主婦たる物が、朝早く其も何のためましてお子供も三人とやらあるお身いづれは乳母もありましよふが何もこんなにしてまでもお習ひなさる必要がありますまいと思ふと私は此を家庭問題の一つとして立派な論文をかいて見たいと思ひます。

女だけに眼の着け處がちがひます、凡ての女は斯う云ふ處にも氣を注けて居たなら、論題でも、文題ても、澤山あるのです、皆さんの周圍は其論題と文題に充ち實ちて居るのてす。（選者）

秀逸

○下り蜘蛛　肥後　村松喜代子

外風呂に弟共二人、這入つてゐます暮だ、蜘の子が、上の梅の枝から糸を吐いて、だん〳〵下つて湯桶を距る一尺位になりました。處が、二人が騒立つて體をすり始めましたので、蜘の子はあはたゞしく糸をたぐつて上つてしまひました。これは、良い寫生の材料だと思ひまして、是非十七字詠に纏めて見たいと、只今工夫中なのでございます。

○足音　丹波　難波あいの

私が本を讀みますには、夜靜かな時高く聲を上げて讀むのが、好きです。けれども、一寸でも足音がすると、直ぐ止めてしまひます。そして、通り過ぎてから、亦讀みます、それて、其時と其心。お氣に入つた方があつたら、新體詩に作つて、頂き度ぅございます。

○田植　岐阜縣　中島重子

お父さんとお母さんと兄様に妾と四人が毎日花野新田へ田植に行きます父上が後押て兄さんは馬の口を取つて田を耕されますし妾と母さんとは苗を植ゑて行きます御日様が頭の上へ御出になつた時分に妹の靜ちやんが繪日傘を挿してお茶を提げて來ますと仕事を止めて畦で馬も一しよに御飯をたべます前の方も後の方見ても皆んなお友達が畦で美味そうに御飯最中妾は此樂しい春の海のようなありさまを田を植付て仕舞たら抒情文に作りて投書しようと思つて居ます。

○綠の夢　淺草　とみ子

見渡す限り綠に染められた野の木蔭に、烈しく照る太陽の光を避けて涼しい夢を結ぶらしい若い女。見ると愛の片手に卷かれた僅小さい口をよせて眞白にふつくりした母の乳房を吸ふ兒ー濃く甘い白汁の兒の唇に運ばれる其の如く、林檎のやうに美しい頬には笑の波を漂はせて…自分は此時如何かして此の有様を美しく詩に歌ふて見たいと思ひました。

○東京　長門　五月雨子

私の姉様は東京にお嫁に行つてるのですよ、そこからいつも手紙で博覧會を見に來いといつてよこすのよ、だけど肝じんのお父様から何のおゆるしも出ないので、毎日陰では、ほんとにつまらない、澤山の兄弟の中でも不幸の者は私で、前の第五回の博覧會へも私だけ行かなかつた、此度こそ是非行かなければといつては、つぶやいて居ました所が、或る日父様から、お前東京へ行きたいか、行きたければ明日行くから仕度をしろ！と申されました其瞬間妄想やら空想やら未だ作りて見ませんがいづれ其の内に作ろうと思ふて居ます。

○花くらべ　龍山　工藤いつ子

法幢寺で聯合茶話大會があつた日、夕休時間に芳子様と押花に仕様とお庭に美しく咲いてる色色の花を二三輪づゝ折りとつた。やがて石燈籠の上に花くらべし様と振の袂を開くと燃ゆる如な紅絹底に紅紫白とりどり美しき花の雑居一つ一つとりだすとおそ咲の櫻はひらひらと淡葡萄染縮緬の振袖にちる折しも春と逝く名殘の朧月がうつすりと葉櫻の繁みに照りていつきたのやら彩羽の胡蝶が一羽ならべた白牡丹の中に假寢の夢をむすんで。私は此趣向で美文を作りたいと思ひます。

○瀬戸内海　備中　千代子

私は折々朝はやく起きてゝ裏山の桐ばたけまで散歩しますそして清々した空氣を吸ひながらあちこちと眺めるのですが其桐ばたからは海面が一目に見渡されて遠くは讃州のしまじま近くは水島三郎島が横はり其中間を右左する釣舟眞帆あげて行く大船片帆してかへる小舟など誠に得もいはれざる景色です私は眺る度毎にあの景色を克己先生の様な畫にかきそして其隅へ俳句を作つて女子文壇の口繪に出したいといつも思ひます。

○濱邊　香川縣　山地玉子

私は今、濱邊の石に腰をかけて居るのです、出船を見れば友に便りがしたく、汽船が棧橋へ着くと、きれいにしたお嬢様達が、上つたり下りたりして居る、すると小說が作りたく、島の間を鳥が飛んで居ると畫が書きたく、舟子の歌聲を聞くと、和歌、俳句、新體詩、新歌謠が作りたく、人の業を見ると、短文や、新笑話等が作りたくなる。

○我身の上　名古屋　西脇政子

明治二十四年、丁度妾の三つの時、なつかしいお母様は永いながい眠りにお付きに成り大切の兄様は日清戰爭で其後お死に成り、お父様はたゞさへ、まづしい家の財產を皆んなお酒としてお飲みに成り終不歸の客とお成りになり、其後、妾は難儀に難儀をして遂に或る親切な、お人のおかげて、今、名古屋の市立女學校へやつて貰ひます、しかしお父様もお母様も無い、よその家、妾は、どんなにさびしいでしよう、嗚呼妾は今まで十六年の間の有樣を一つの小說にして書きたいと思ひます。

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

二等　春徂く日

羽前西田川郡温海　秋保八千代

御寺は今眞晝の靜寂。

欄によりて盛りすぎし櫻のそゞろ散りしくを眺め、白椿の花二つ、池水に浮べるに、眼うつして、そとゆれし水草のさゆらぎに、梢見上げし妾が心ともなき後より、主の尼君の優しう「さらば」との給ふに、「は」と應へて行かんとせしが、待て暫し、今一日、たゞ一日、この春に名殘惜しまんと、また足とめて、一わたり見渡す眼の、おぞや又、曇らんとするを、女々しと罵りつゝ、ぼけの花、井戸の傍に紅深う眞盛りなるを、みつめしが堪へがたくてハラ／＼と……………。

思はずも立ちつくすを、主の君も敢へて促しもし給はず、かくてはと涙拭ひて、よろめくをふみしめて、

「さらばおんあるじよ」

「いざこなたへ」と先立ちて導かれしは本堂なりけり。

御佛の前に坐をしめて、さすがに胸のときめくを、諸手に乳のあたり抑へて、あふげば、御燈火のゆれもせで、尊き御姿の我身見下ろし給へるに、何とはなしに眼そらせし甲斐なさを、我と我が心に叱りつ。

さて、いざと兩眼を閉ぢぬ、主の君は立ちませり。

「今こそ」との給ひつ、妾が後により添ひまして……ブッリ……あゝ妾が半生の誇の一つに數へたりし五尺の黑髮を、固き根占めの元結の、結び目もとけて其まゝ前にや落ちぬらし、兩の腕はあはれわなゝくを、しかと力しめて見むかんともせず。

髪はおひ／＼にそり去られて、なくなりし前額に折からの風、ひや！と觸れしに、ぶる／＼

と身ぶるひしつ。

心よわくてはと……やゝしばし……

無言の主がわれに持たせし器にみ手かけ給ふに、はやそり終へられしかと夢見心の眼ひらけば、烏羽玉の妾が黒髮は……妾が黒髮は、うべ高う。

またもあふれんとする涙の、さてもはしたなしや。

昨日までの靜は、十九の春に悶え死し、大慈大悲の佛佗の御弟子、靜念は忘想もなくて今生れしぞや。

浮世の執着見事こゝにたちきりて、浮世の垢穢一切をそゝぎて、御佛の冥護を祈るわれ女人。

尼が前には人もあらず!!世もあらず!!たゞ御佛のみ、我主のみ花にも泣かじ月にも嘆かじ、明暮の鐘の音のみぞ尼が友なる。

今は心強う立ちあがりつ、更めて主の尼君の御前に出でてみ心づくしを謝しまつれば、御言葉はなくてたゞ傍の經典を指し給ふに、妾もたゞうなづきて額たれぬ。

（評）さらぬだに春愁多かる花散る頃を、たらちねはかゝれとてしも撫てずやありけん烏羽玉の黑髮を剃りこぼちたる、悲しとも哀れとも評せんに言葉あらず、文に老いたるものと謂ふべし。



我が姉　失名

三等

○妾が兄上

豐後國姫島燈臺第二號官舍　鈴木さち子

雨蕭々として波騷がず、沈寥なる岬頭の夜は漸く更け候、幾秒毎に淋しく窓を覗き去る彼の燈光の下、今當に直に立たれつゝある兄上は如何なる事をか思ひ居らるゝ、妾獨り此の陰鬱にして冷たき官舍の小机に凭りて悲しき感懐をば叙するにて候。

妾は脚氣を患ひて試驗の終了と共に保養を兼ね、久濶にて燈臺にある兄上を訪ねて四月以來此處姫島の一角に暮居るものに候、周防灘の一孤島！加之島中の極邊僻、其索莫は到底永く人をして留まらしめざる寂境に候、妾も參り候當座こそ朝な〳〵の海景色、島々の眺望さては干潮の磯遊など中々に趣あるやう思ひ候ひしが、二月餘りの今日此頃は、配夫の外に人の子一人おとなはぬ乾燥無味の生活に飽き果て、唯もう寂寥を感ずるのみにて、塵俗到らずと云ふなる有がたき場所が厭になり、すゞろに都會戀しく覺え候。閑靜など云ふ感は決して永く持續さるべきものに無之、這境に處して强ひて索

寞を白せぬ人は負惜みの似非風流か、又は隱者を氣取る僞君子のこと、存候、妾こんな人大の嫌に候、兄上は其何れに屬するやは判らず候も、兎に角燈臺に入りて四年、而も靑春の身が孤棲してよくも我慢されたるものに候、妾共なりせば旣にすでに寂殺されたるものに候。

兄上は妾と八つ違の二十七に候、曾て或實業學校を優等にて卒業の際『さあ是で幕が開いたぞ、愈々お前も社會てふ大舞臺の一戰士だ、花々しく働いて吳れ』と亡父が包み切れぬ怡悅を抑へてさしたる盃を妾に注がせながら『戴きます、小子は多くを申しませぬが失禮ながら永く武者振をご覧下さい』と希望に輝く面を上げて會心の笑を浮べられしを妾今によく記憶して居り候、當時妾は世に賴もしき兄上の妹たることを如何ばかり心に歡び候ひしか。其後叔父の事業を補けて三年、着々功成らんとする秋、恰も父上の逝かれたる歲にして從姉のせつ子樣が他に嫁したる其月に候、何と云ふ豹變!、父上が臨終の仰せに背き叔父がたつての制止をも肯かず、今迄活動を口癖にせし其人が、突然職を燈臺に求めて遠く去られしに候、大黑柱を失ひて淚の跡未だ乾かざる一家は呆れに呆れ候、親族とも談合し只管其不心得を說き候へども、頑固なる兄上は徹頭服せず、緘默して言はざる母上の顏は靑く、妾は初めの心に引替へて今更賴もしからぬ兄上ぞと深くも恨みたるにて候。

妾の病氣は快癒して母上は頻りに歸鄕を促し來り候、嘸佗しくや在はすらん、妾も固より此寂境を永く愛する程の風流もなく又隱者にもあらねば、一日も早く歸り度きは山々に候、疾く還りて溫かき膝下に再び樂しき學びの林を逍るべく候、とは思ひ候も　ア、思ひ候も妾は如何にすべき『兄さん、妾歸つても寂しくなくつて？』暮行く海を瞻めて悄然裏門に立ち給へる側よりもの言ひし先刻『ウム……寂しい！』と肉落ち髯延びて疇昔の面影なき憔悴の片頰に、淋しき笑を浮べられしを想うては、天性寡默なりし人の心事も推測られて妾の眼は濃く霞むに候母上佗しく在さんも家には尙次兄小妹あり、妾は今此に哀れに傷はしき寂棲の兄上を孤り殘して去るには忍びざるに候、廣き世に同じ血を受けし同胞なれば、寧ろ俱に泣くべきが自然ならずや抔、心は千々に亂れ候、さるにてもおぞましからずや兄上、可惜有爲の身を何故……斯かる罪なき配所には自ら進むで投じ給ひし、妾は返す〳〵も殘念に候、懷うて此に至る最早や何事も言ふ能はず、妾の小さき胸は痛く候、噫。

（評）拜なうして靈所の月眺むるに至れる失戀の苦痛を明かに言はずして「從姉のせつ子樣が他に嫁したる其月に候」の一句にそれと示したる手腕凡ならず。

（又曰）這般の内容は自叙体にものせば多くは女々しくなるべきを、側面より描寫したるを以て、その苦悶にも同情し得らるゝなり、徒らに悲哀、涕泣、煩悶、苦惱等の文字を臚列して意を得たりとする作者は顧みて可なり。

五等　○ふる里より（男となりて）

くれない

再昨夕無事乳母が家に着、御放念被下度候。出迎へたる爺の腰の曲りたると喜ぶ婆の髮の白く成りたるとには、今更ながら驚かれ申候。露のひぬまの撫子折りとりていざと下り立てば、口を揃へておん服にて何は偖おき、亡き父母の墓參第一と、おといふ、なんの、事々し、是にて澤山と斥くれば、前樣の夫れ迄に成られしお姿、草葉の陰より御覽じなば如何許嬉しからん、是非に〳〵と勸められては否みもならず、窮屈なる制服に身を堅めて、其昔小學へ通ひ馴れたる畷道てく〳〵と、聽て松の葉積る山門をくぐりて墓前へと着し申候、先朽葉清めて花を手向け、丹念にぬかづきて我成業を告げ、四邊見廻し候ふ、近頃住持變りたりときけ共、改革の實毫も上らず、持崩しの樣に、かてゝくりの裏手には媚しき浴衣さへ干しあるに興さめて、そこ〳〵に裏門より出でつ、歩を轉じてかの甚作兄を訪づれ申候、たしか土橋をこえて三軒目と記憶すれ共、間違ひてはと少時畫顏垣の外に佇みて打案じ居るに、門口に兒を脊負ひて物洗ひ居ける女、手をとめて勇夫樣ならずやと問ふに、さなりと答へつく〳〵と打戌れば、眉こそ落したれ齒こそ染めたれ、紛ふ可くもなき兄の許嫁なりし初代子なるに、早斯るもの迄出來てかと吾の驚けば、御身は肩書のできしにあらずやと納屋に太き聲あり、近よれば兄は赤裸裸にて茶揉みの最中に有之候、先々賓人はあれへと指ざさるゝ儘に、我は母屋に入りてマダム初代のすゝめに從ひ、荒筵の上に制服をばぬぎ捨てつ、手織木綿の兄の常着拜領して凉を入れ候に、そよ〳〵と稻葉を吹きくる風胸毛をはらひて心地よさ限りもなし、かゝる程に茶もみも果てたり、風呂もわきたり、いざと促されて先づ主人よりと云へば、まらうどよりと云ふ、果しなければ二人一緒にとなりて思ふさま故郷の水にちりを淸め、又も借着の浴衣に凉を入れながら初對面の愛姪藤子を抱きて後山に上るに、兩袖夕風に舞ひて羽の如く此儘とんで登仙せずやと許り思はれ申候、ふと見下ろし候へば、ミセスは今生造りの最中にて、銀の細刄に見るみる列ぬる指身の波、器用な者哉と感じ入り

申候、都の少女ならましかば赤きリボン似合ふべき年頃を、親ゆづりらしき蚊飛白に更紗の帯して手束ねの結び髪、よくも女房振りのうつりし事と飽迄見入り申候、招ぜらるゝ儘八寸の膳を双方より圍みて猪口とりあぐるに、都の味のなれさせ玉へるお口には斯るものはと、マダムの呟くに、否とよ、東京灣の魚は浪穏やかなれば肉柔かくて歯ごたへなし、しこ〳〵と身に締りある此味よ、歸郷の一つの樂しみにてと、世辭ならず我の舌皷打てば、然らば大いにやるべしとて、兄もいつになく杯を運らされ候、早太くも醉ひたり、まかてんと云へば、是非に一夜をといふ、若夫婦のみの家にとめられん事迷惑なりと立上れば、他人の家と思へばなり、我家ならばごみの中にも寢るべし、貧する故と此の兄にひがみな起させぞと迄説かれては、言葉もなし、勸めらるゝまに〳〵兄と二人綿は薄けれど情は厚き蒲團の上に横はりつ、朝迄擔がれるも知らず眠り申候、今我漸く起き出てゝ門川にて顔洗ひたる處、午後よりは一緒に舊師山邨翁を訪づるゝ積りに候、先は第一信として右迄、匆々。

（評）筆致輕妙にして、快活なる人の面影躍如たり。

秀逸

○身の幸　　丹波　難波あいの

思へば斯る山奥に土のみ相手に、月日に追はるゝ妾ら賤の女の身にして、且つ名も無き田舎の里に居乍ら、九重の奥深う在します、御皇嗣の宮の御影仰ぎ奉るを得る今日のかしこさ。只女心の、胸のみ迫りて、有難涙に袖ぬらしつ、折りからの、村雨一しきり、群集人の熱き心を鎭めんとてか。木綿乍らも妾には晴着の肩をしたゝかに濕しつ。されど三千年此方かつて例だに無き、今日、此里の光榮。我こそ正しく奉拜せんと、思ふ心の穂に表はれて、村雨にも、眉顰むる者さへあらず。殊に巡査にさとされて、本意なげに手なる扇子をふところに納めつゝも猶「それでも餘りに勿體ないではござりませんか……」と節くれ立ちし手に瞼をさする老翁の眞あふれし淸き目の底に、うるみはありき。こは先年日露の役にたぐひなき功を立てゝ、今は譽れある、白木の一片と殘り果て給ひし、某の君の老父君なり。吁々其思ひ、如何に繁かるらん、嘸々、無き方の事共も偲ぶらん。と思へば、妾も共にそゞろ涙ぐまれぬ。

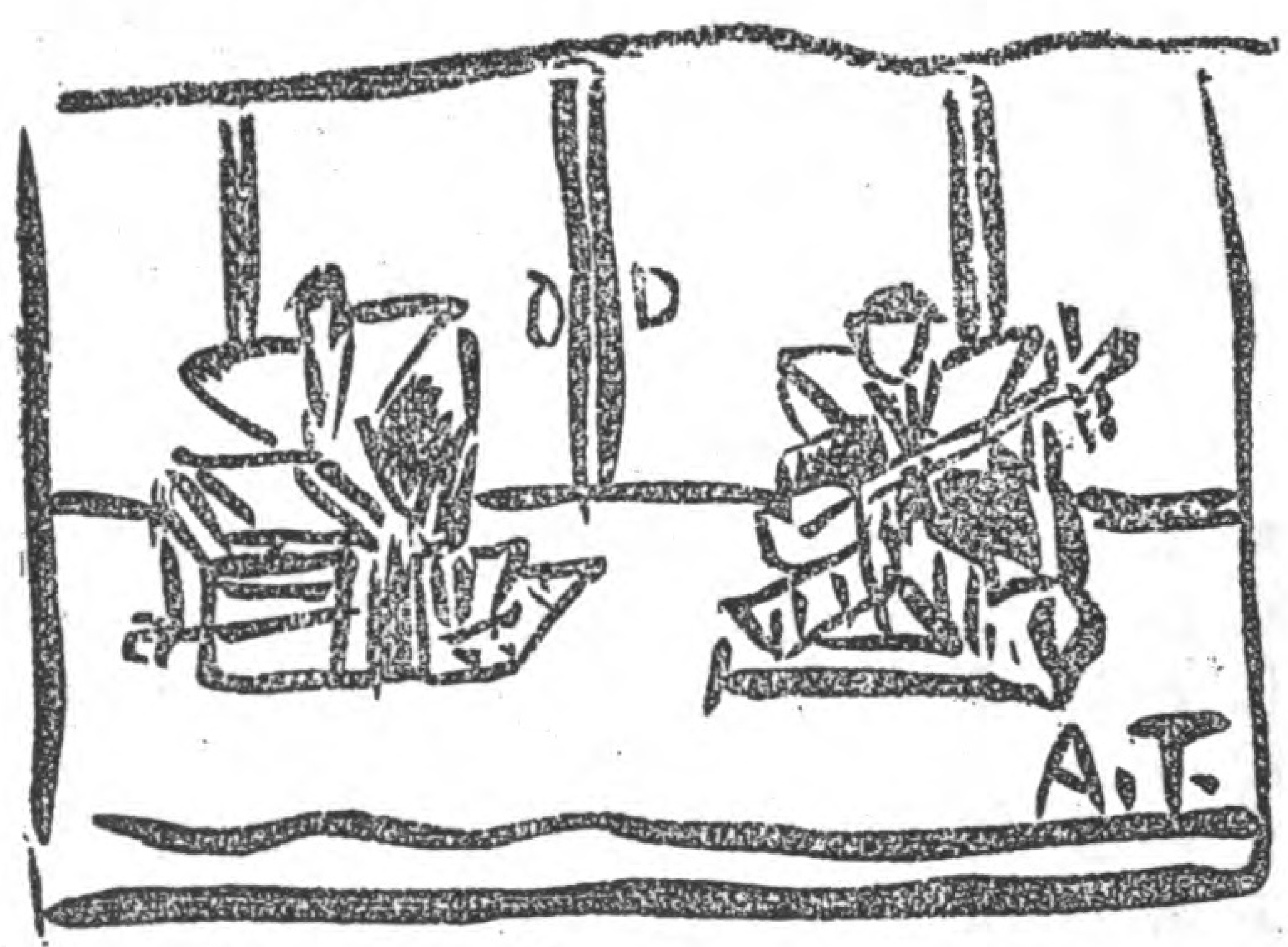
折しもあれ、幾百の人の心をいましむる、汽笛朗らか

に、程よくも晴れたる雨の名殘り、早やうら〳〵とかげろふもゆる千草のみどり、柔かなる中を、いづこ迄もと敷き並ぶレールの上、み車は早やしづ〳〵と音もなく近づきましぬ、汽鑵の前仰ぐも目くらむ計りの菊の御紋の、先づ妾ら幾百の眼を射て、不思頭垂れしも多かりき。一生百迄長らふ共、亦遇ふべからざる今日なればと、心を鎭め、殊更に湧きかへる血潮の思をおさへて、涙のひまの目を上げ、僅につと仰ぎしと計り。外は覺えで、赤黄染分の御軍帽、玉胸のみ邊り、黄金の輝きかすか乍らも固く脳に刻まれて。再び朧の眼ふり仰ぎし時には、あるかなきかの烟うつすりと、み車は早や山の陰。拜するを得ざりき。

嗚呼今日のこの光榮。こも、み國に生れ得し身の幸、いく久しく忘れざらん。

（評）純朴にして忠君の念深き樣晴るゝやうなり。

晴れの場　京都　辻あい子



○桃代樣へ

鳥取市　上山千重子

小夜更くるも歸り來ぬ夫をしまちて、思はぬ空に杜鵑聞きました。さはれ、眞白に咲きみだれた卯の花がくれや、雨雲ちぎれて星影まばらな宵闇のほど、書の窓さゝて聞くのはなか〳〵に嬉しう御座いますけれど、これは孤燈わびしう夫まつ夜を、またぬ一聲血に泣く哀れさ、我しらず胸せまりて、此方も共音に忍び泣きましたよ。アヽ桃代樣よ妾もやつぱり不幸な子で御座いますわ、「手鍋さげてお豆腐買ひに……」と仰せられる桃代樣の御苦勞も、普通大ていではあるまじけれど、相互に提へての苦勞なら妾は喜んでいたします、ましてあなたは立派な慰藉が御座いますもの、可愛らしい坊ちやんが乳房含んでのほゝゑみは、これからのつらさを醫して餘りがありませう、其上旦那樣はお優さしくつて、御舅姑もお情け深くつて、ほんとに斯樣な嬉しい事は御座いますまい、アヽ妾には何より〳〵それが御幸福だと考へられますわ、ね桃代さまさうではなくつて、して見ると全く妾は一等哀れな者てした妾は石のやうな冷めたい夫より外に唯一つの慰藉も持ちません、はかない身てはありませんか。おもへば十九を妻と呼ばれて、丸髷姿はぢらひしも二

年の夢、そのかみは肥え太りて、はめた指輪が肉をはむばかりで御座いましたが、先日髮けづるとて小櫛取りました時、如何したはづみかする〳〵拔け出ました。馴れぬ此地に夏やせてかなど思ひましたけれど、よわき心は更に〳〵やせたやうで御座います、ア、綾錦取り重ねても此の惱は包むすべもないでせう、桃代樣こそなか〳〵に御多幸な御身、貧しきやせ世帶と宣へど、舅姑樣はじめ皆々樣御揃ひ遊ばし、御いつくしき小さき君を中心に平和のつきせぬ御家庭、心の豐ぞ誠の〳〵富とおもひますわ、扨此の指輪は誠に使ひふるしたのですけど、御目にかけます、寂しい妾の身御しのび下さらば、何卒いつまでも〳〵御忘れなきやう御交り下さいませや。また裏山あたりで杜鵑の聲がしてよ、宵から出た月は早傾きましたに、噫我が夫は遂にけふも歸りませぬ。

(評) 孤閨夢成らずしてゆくりなく杜鵑を聞く、新しからざれど、あはれは深し。

○夢に立田姫に遇ふ

青森縣　猛　子

月は皓々として限なく澄みわたりたるに、夜はいたうふけたりけむ、萬籟寂然としていとものしづかなり。かなたの岡べに刈りのこされしひとむらの薄のうら枯れたるが、月のひかりをあびつゝほのかに搖ぐも面白ろや。この麗しきけしきにたへやらで、枯野の白露ふみわけつゝあこがれけるに、いつしか潺々たる細谷川のほとりに出でつ。なほゆきゆけば、あな美しや、そも高雄の山か立田の里か滿目たゞ紅葉なるが、月のひかりにてりそひて赫燿として目もあやなるに、吾をわすれて恍惚たることやゝしばし、やがてその奧のかたよりかすかに響く琴のつまおと、ほどへていよ〳〵しろく、曲はなにやらむさだかならねどもそのしらべのいみじうたへなるは、げに久方の雲井のあなたにやかよふめり。あなあやし、人住まむともおぼえぬこの山里に、さて何ものゝわざなるか、そがぬしこそみまほしけれと、いりかふ枝のすきまもる月のひかりをたよりつゝ、こゝかしことたづねけるに、いときらびやかなる錦帳をかけつらねたる宮居のうちに、ひときはあざやかなる金襴の粧いみじうたふとくわたらせ給ふひとりの姫君、金光燦爛たる玉琴をかきならしてぞおはしたまふ。ひそかにうかがひゐるに、つとこなたを見たまひしが、いとうるはしきみけしきに、やゝほほゑませたまひつゝ、「それなるまらうどよ、わらはこそ秋の野山をつかさどる神ぞと詩歌にうたわれつる立田の姫にてはべれ。今宵の月の、いたうあかきに、あはれおとづるゝ人もがなと、かくは待ちわびけるになん。もの語りこそ侍れ。いざいらせ給へ、」さらば」と

て、「あはれ姫君よ、ひねもす野山をしろしめしたまう御身もて、こよひかくおはしつることのおんいたはしさよ、」姫君、「あなかたじけなきみ言葉かな。いで暫し語らしめ給へ。拔かば秋水こほらむばかりの霜刀に威風あたりを拂ふもの丶ふどちが、一曲ほがらかに吟じつ丶わらはをおとづれにし昔は、げにもうれしき極みにて侍りしかど、やがて物換り星移りては敷島の大和島根に住む人もわが立田の川瀨に匂ふもみぢ葉の、とことはにかはらぬ色には似もやらで、あやしき色のとしごとにまさりゆくこそうたてけれ。世の縉紳淑女とやら、時をえがほに、妍を極め、輕車轔々として來るは、わらはをおとづれんためならで世に傲奢をほこらむ爲なるよ、高吟悠々、低回顧望して去り能はざるは、わらはをうたはむ爲ならで、人に風流をしめさむためなるよ、おもへば情なき世なるかな、か丶る世の人にかゞつらふことの物うければ、今はかく立田の里に奥ふかうたれこめて侍るにこそ」と、やさしきみ聲ふるはしつ丶のたまふに、そゞろ同情のなみだにかきくれて、われ知らず肅然として襟をたゞしうせる一刹那忽焉としておどろきさむれば、破牕や丶白み、曉鴉啞々として兩三聲枕頭近くぞおとづれける。

（評）立田姫の慨慨、げにさもあるべし。

○角兵衛獅子

新潟市　中村多賀子

「はい舞ひませう」と六つ許りの顔の靑ざめた獅子舞の子が入て來た、女中は直に「い丶よ」と歸さうとするのを、私は可哀さうなので「一寸お待ち」と呼び留めました、元より斯かるものなれば其の言葉は賤しく「何だい」と戻つて來た、「まあ其處へおかけ」と上り段の處へ腰かけさしておいて、私は奥に行き、今朝母様にわけて頂たお菓子がまだ手をつけて無かつたので其にお金子を添へて與へました、小供は大層喜んで「有り難う」と三度も繰り返した、然して其をじつと見つめて居ます、私は「其お菓子食べてご覽、美味しいよ」と云ふに、「いや」と首を振りますから、何故と聞きますと、「親方に怒られる」と云ひますから、私は「誰も居ないからい丶じやないか」と云ひましたが、更に食べやうとは致ません、あ丶其程までに親方が恐いのかと、小供の心が思ひやられて私もう胸がいつぱいになつて來ました「お前幾つ」と尋ねますと「八ッ」と云ひます、私は年の割に躰の小さいのに驚いてしまつたが、またあ丶他の小供は皆まだ親に何のかのとあまへる頃なのに、此子は學校にも行かず毎日斯うして嫌な思ひをして成るべく怒られまいと親方の機嫌のみ伺つて縮んでる爲めであらうと思つて、何だか私も泣きたくなつて來た、其からだん／＼きけば、此子はまだ誰

彼の顔も見わかぬ時に兩親を失ひ、只一人の義理ある叔母に育てられたが、元より良くは扱つてくれなかつた、其から去年の暮今の親方に買はれて來たが、初めの中は馴れない爲めに躰が自由にならないと、太い棒で處嫌はず打たれて傷の絶えたことがなく、其上覺えないと食を絶たれて叔母の内に居るよりも猶一層辛かつたが、今では餘程馴れて來たさうだ、彼は色々過ぎ來し方を物語つて小供心にも流石に悲しくなつたのであらうシク／＼と泣き出した、私は見かねて「お泣きでないよ」と脊を撫でつゝも熱い涙は留めどもなく頰をつたはるのであります、暫時は互に無言で居たが、今まで話にのみ氣を取られて親方の打つてる大鼓の音が聞えなかつたが、今俄かに耳に入つたので、「あゝ早くお歸り、此樣にまあ長く留めて置いてね、また親方に怒られるといけないから」と云ひましたら、彼も漸やう氣がついたらしく、つと立ち上り、手にあるものを見て急に微笑し「叔母さん有り難う此樣に澤山頂いたから少し位おそくなつても怒られないよ」と行き度もなげにして居る、「これも宿世の約束だからねよく親方の云ふことを聞いて務めなさいよ」と云ひますと「はい」と氣を取り直して名殘り惜しげに後を見つゝ出て行つた、あゝ今夜は何處に宿を取つて如何な夢を結ぶであらう。

（評）年は幼稚なれど、構想の美しきをとる。

○夕ぐれ日記（病みし日）

長野縣　山田くに子

雨上りの鈍ぎ夕暮、病の身を危くも、ゑんの柱にもたせかけて、どこともなく眺め入りました。

暮色は刻一刻家を埋め、人を埋め、小さい鳥の巣をも埋めて、世を呑みつくそうと迫つて來ます。

何と云ふ物淋しき夕暮でせう、しかし私は心の惱みよりして、こんな夕を妙に好むのです。

淋しき夕暮を好む――好むから私に取ては、こんな夕暮が何より樂しき夕暮なので……ジット柱に身をまかせて、靜かに目をつぶつては、魂を遠きに走らす時……戀人の熱き胸によつて、我を忘れた其時の醉心地……それではない、幼き／＼罪の無き、「邦ちやん」と呼ばれた其昔、かあさんの暖き胸に懷かれて、甘い甘い乳の香に醉はされ、耳に慈愛の聲優しく、「ねんねんよウ」の歌を聞かされた、おゝ!!其時の現心に返つた樣な氣に成つて、さて我知らず嬉しい樣な、なつかしい樣な物影に卷かれて、ホロ／＼と譯のわからぬ涙がこぼれるのですもの。

あゝつかの間に凄い暗い、闇の世界にうつり行く、此夕ぐれの瞬間が、私に取つては何より樂しき天のパラダイスで御座いますわ……ジット目を明けて仰ぎ見る空

に、大きく燃えた夕やけの雲、其紅がだん〳〵薄れて行くのを見つめて居ると、私の心も雲の紅に溶けて消えて行つてしまふ様……。

あゝ生れ出てより十八年、両親の愛の手に育くまれて何不足なく生ひ立つた身の、なぜにこんな淋しさを味ひ得たてせう。御近所の皆様から、お美しいお姿てとほめらるゝたび、まだ青春き身の、血汐がをどらねては無ひけれど、私はやつぱり淋しいのて――。燃える様な情のさゝやきも、私の心を動す事は出來ぬとはあゝ私の心には、黒き冷き岩の精が、ひそかに住んて居るのてせうか――と、花ゆりて見た夜雨先生の、かげろふ物語の一ふしが心に浮びました……

――私はきつと暗い道ばつかり歩いて行くのてせうよ。暗い道――暗い路、それはどんなにか淋しいてせう、思うてもぞつとします。

と云ふ所……私は思はずぞつとして、み空の雲を再び見つめました。おゝ其時はすてに、夕映の名残ことごと消えて、暗い〳〵冥府の有様に、只々鳥羽色の雲のみがどんより流れて居りますもの、私の魂が邦子の肉躰をはなれて、暗い淋しい冥府に行く時は、キットあの雲に乗つてゆくのてせうよ。



神様のみ園に熟して居つた、智慧の實を食べた其の罪て、人はこんなに死を恐れて居ませうが、花は散つても復咲きますもの、あきらめて病の此身を神様にまかせませう。むづかしい理論や哲學などて、とても〳〵此寂しいつらい、死の波をふせげるものてすか、只眞の信仰にのみ生きて、私は神様の御膝に歸りませうよ。

今、前の畑で妹が菜をつんて居ます大方今ばんのお汁のみてせう、後から姉さんの聲て、「邦さん冷えますよ、内へは入つていらつしやい。」――「鳥がたのしそうにチウ〳〵ねぐらに歸ります。私は姉さんの聲にしたがつて、又あのいやな床の中に歸るのてすが……神様は、鳥と私を見ていらつしやいませう

羽前　杉葉女史

（評）ともすれば悲しい冥想に陥り易い夕暮れ、病ある身には這麼感もするてせう。

○悲しき夜　　熊本市　熊本六花

或る月の清い夜であつた、妾は猫の額の様な庭を行きつもどりつ逍遥して居たが、ふと塀一重なる隣家で獻

歎する聲が耳にはいつた、其聲が實に譬へ樣のない哀な樣な悲しい樣な深く〳〵自分の胸に響くので、前後の考へもなくそつと耳を欹だてた「おゝさぞつらからう、さぞつらいんだらうねえそりやもう秀坊だつて可愛想だ、可愛想だけれど今の塲合どうとも仕樣がないんだからね、どうか暫らく辛抱してお異れ、其中勇さへ治れやね、」其聲は强かつたが語尾はさすがに震を帶びてゐた、「今もお母さんのおつしやる通り、私の病氣さへ治りや長い苦勞は決してかけやしない、私だつて自分の妻を滿洲のはてまで人の玩弄物たる藝者などに……吁なぜ自分はこんな意氣地無なんだらう……」其聲は實に一句々々血と淚であつた、妾は驚いた、そして泣いた、隣家ではあるけれど、廿日前移轉して來た人達、愛らしい子供、美しい人、優しそうなおばあさん、他に病める人が有るとは聞いてゐたが、元より細いことは知らなかつた、で妾は今此悲慘なる話を聞いては、どうしても泣ずには居られなかつた、內でも三人共泣てゐるらしかつた、それにしても子供の聲のせぬのは母の懷に眠つて居るのであるまいか、折柄此寂莫を破つて時計は幾時かを報じた、內では淚でかれた若き人の聲で、「どうかもう泣かないで下さいましな、私はまゐります、喜んでまゐります、皆御病氣のため、本家のためなんですもの、どんな汚水の中に沈むでも女の操だけは……どふか御安心なすつて……」月はいよ〳〵さえ渡り橫丁の料理屋より面白そうなしやみの音が洩れてくる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

妾は常よりも早く臥床に入つたがどうしても眠られなかつた、夜も更けて犬の聲もしない丑滿時、カーチヤン〳〵カーチヤン〳〵と火のつく樣な聲が自分の心臟をゑぐつた。

（評）今少し深刻にありたし。

○月にそむいて

姬路　大友湖畔

ふりみふらずみさみだれのふるやの軒は朽ちさうな此ごろを青葉若葉に埋もれてまた〳〵泣きにないた綾は心づよくも逃げて行かうと思ふのです。新樹少い須磨の明石の片かげへ。

あゝかつては入日うすづく夕ぐれを人を怨まずのゝしらず落葉數へて笑うた秋さへありましたものを……と心勵ましても萬象をよみがへらせる綠の千葉に對しては——あゝ弱いと笑つては下さいますな——……心のそこの底のそこに生れながらか生れてからか深くも浸み込んだ或さびしさが噫只私をなかせますもの。とても〳〵滴るやうな新樹ながめる力は綾に御坐いません。

おゝ御なつかしい靜子樣。

やがては人にしられて短夜を月にさびしくうなだれる月見小草の花ない枝のかたはらに寫す今宵の影をかぎりあゝ……綾は此地を立つのですそして……そしてときはかきはに色かへぬ松の嵐を友として怨みもつらみも寂しみも須磨の浦わのうたかたと消えよとばかり祈つてしづかに暮しませう。これからは淡路しま通ふちどりと音をないて幾夜御夢を破る事て御坐いますやら。

あゝ靜子樣！久々て冴える今宵の月にそむいて末とほい御空のわたりをふり仰ぐはかない友の俤をせめては御忍び下さいませ。



二等

懸崖や餘花仰ぎ見る舟の人　石川縣金澤市新竪町三ノ五八　木原蓮舟

（評）豪壯の中に詩美あり。

三等

蝙蝠や西三條の夕月夜　石見國波子局區內波子　千代延君子

（評）古雅にして又凄涼。

四等

杉垣の低きに蚊遣る藁家哉　美濃國山縣郡谷合村一三〇　臼井宮子

（評）田園の清趣。

五等

水涸れて橋の高さや雲の峯　羽前國西置賜郡玉川郵便局區內　小島なみ子

（評）雄大の觀あり。

秀逸

夕立に京の土産をぬらしけり　磐城　園枝女

朝月や塔影うつる蓮の池　和歌山　岡崎ゆり子

姫百合を折れば神秘の匂ひかな　美濃　大西繁子

夏の日や白粉はげし女連れ　京都　吉田靜枝

川一つへだてゝ淡し月の村　磐城　村岡滿津子

町の子の寄り集ひけり繪燈籠　相摸　野島里子

風薫る京の五條の若葉かな　磐城　片寄しな子

大空に聲あり闇に散る花火　備前　鞭木よし子

薫風や朱鞘さしたる伊達男　京橋　梅浦峯子

衣更へて黄金作りの太刀を佩く　奈良縣　島田せい子

面影の水にたちけり杜若　神奈川　岩澤みどり

岸にして舟に物言ふ涼み哉　讃岐　十河花琴子

田植して十戸の村の賑はしき　越後　松山けん子

五月雨や土間にほしたる簑と笠　豐後　溪の月

鵜の聲五六丁長閑なり　長門　伊藤よし子

夏やせを知るや指輪の差し心　上毛　富川滿津枝

雨たま〳〵落花の窓を開きけり　越後　藤原よし

牡丹落ちて床の玉琴響きけり　靜岡　山口芳子

このおくに瀧ありと云ふ繁かな　大和　榮山若葉

花瓦斯や都大路の宵の春　岩代　森千代子

更衣聲高々の謠かな　大和　足高ならたと

武者一騎出てし砦の若葉哉　南越　好波間子

絹さらすたらひに散るや柿の花　常陸　長谷川清子

草に月濡れ鵜抱へて戻りけり　高知縣　鏡野月子

姉妹の乳母訪ひに行く日傘かな　愛媛縣　青野道子

洋館に和して美し幟鯉　岐阜縣　中島重子

測量の赤い旗みる麥の秋　神戸市　福田靜子

隱れ住む女ありけり桐の花　本郷　柴田きよ子

張板に桐の花ちる小庭かな　八王子　秋月英美子

夕顔に燭して迎ふ勅使かな　福井　蘆汀女

蚊の聲や紙帳繕ふ月あかり　滋賀縣　永井やな子

四隣皆寂寞として鐘こほる　愛媛縣　鳴田さだ子
紙燭把て案内しけりふかみ草　茨城縣　根本露子
古火桶蚊遣火を焚く山家かな　美濃　大西英子
八つ橋を給師の渡るやあやめ草　芝　すて女
若葉かげいたち走りて日は午なり　常陸　細田かすみ
音もなく清水落ち込む清水かな　大和　崎山利子
蟬しぐれ訪ふ人も無し寺の晝　靜岡　大石貞子
常夏や美人の眠る伊豫簾　南多摩　花輪靜江
棠の花や俥にのらぬ京の人　伊賀　山村野菊
子狐の角力を見るや春の山　伊勢　坂西野
竹と竹とするゝ響や霞の夜　武藏　青柳彌生子
夏の月吟詩の窓にかたむきぬ　愛媛縣　松田はな子
古寺や椿の落つる夜の音　群馬縣　萩原きん子
薫風や局々の夕化粧　安房　和田白百合
僧乘せて浦の舟出やほとゝぎす　磐城　いさを子
峠茶屋屋根より高く新酒はた　兵庫縣　大内八重子
冷麥や月がさし込む勝手口　栃木縣　世取山國子
沖の島一つ一つに霞みけり　日向　濱砂まさよ子
律院の門をくゞれば蓮の花　近江　田中紅雨
夏の夜や蚊遣のなかの高笑　伊賀　山村すみれ
虫干や母なつかしき古小袖　丹波　稻葉純子
戀歌の反古に螢を包みけり　龜井戸　鯖澤白菫
笑はれて裾とりなほす汐干狩　美濃　中島重子
夕風に笹葉の螢こぼれけり　但馬　孤蘭
五月雨や閑居嬉しき茶三昧　下谷　高田春洋子
門ひろき衞士の詰所や青柳　神戸　船戸ゆき子
五月雨の押し流しけり塵芥　香川縣　森田こまき
蚊帳越しに月を眺めて寢たりけり　岐阜縣　華醉女史
傘さして雨の桑つむ少女哉　豐橋市　いち子
眠る子の車に乳母が日傘かな　熊本　村岡みれ子
塀越へて朝顔咲きし隣哉　本郷　中村ふじ子

草にねて蟻にさゝれけり夏の山　土佐　一華女
南天の花ちる夕や虹垂るゝ　尾張　長司春子
五月雨や下駄に馴れたる山法師　遠江　増田たけ子
棠の花や順禮の笠斜なり　安藝　箕岡萩村
絵日傘や神鹿多き奈良の宿　愛媛　伏見圭子
椽先きて猫も居ねむる春日哉　西牟婁　宮崎むめ
岩に立てば瀧のしぶきや青嵐　大阪市　梅本龍子
辻堂や松鬱として蟬の聲　名古屋　照子女史
竹椽に月見る僧の涼みかな　下谷　高田文子
とし〳〵に山開かれて田植かな　長崎市　天ヶ瀬さだ子
鍬洗ふ手元によるや小田の蛭　下野　溪泉子
別るゝや入江の雨をほとゝぎす　周防　はる子
尺八の夜を更しけり夏の月　南多摩　しづ江
夏の月川に澄みけり笛の音　岐阜縣　高見秀子
夏の雨富士を斜の茶室哉　後志　大塚さだ子
芥子ちる日佳き人尼となりにけり　伊賀　山村りやう
破傘に句を案じゆく巷の雨　富山市　小林芳枝子
物思ふ人となりけり秋の月　北多摩　無名子
吾れ先と落ちて行きけり落し水　大分縣　後藤たか子
歌ありと柳に駒を繫ぎけり　大島町　日東三惠子
巖あり水に望むや夏木立　美濃　みや子
遠砧貧の一燈まだ消えず　青山　後藤芳子
低うとぶ蝶の羽風や美人草　越後　山口しげ子
東雲の空ほめて行く蓮見かな　藤の舍　瑠璃子
庭新樹晝見燈籠隱しけり　大坂　露子
松風の香る池亭や青すだれ　下野　すみれ
洛陽に柳みだるゝ白雨哉　土浦　稻葉靜子
白牡丹書院の晝の閑かなり　岡山縣　堤美子
貸家の籬の茨や雨に咲く　信濃　山浦楓子
加茂あたり三味ひく家や青簾　本郷　齋藤八重子
汐干狩袂をすべる袖鏡　上總　秀月女

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

三等　○古里の友へ

四谷區永住町一番地　岡部なか子

庭の若葉に雨の脚細き夕にて候、今日は珍らしく母の外出に、しばし獨居の淋しさに、先程より藤村の破戒によみふけりゐ候ひしが、不斗お秋樣の事思ひいで候、私都へ移り住むべくなりて御地たちいでしは、十三の春にて候ひしが、其頃よりあのおん方には、いまはしき名を呼ばれて、飯事鬼事のむれにもいり給はで、いつも運動場の櫻の木に、身をおよせなされては、はる〴〵の雲の行方のみ眺めおはせしが、あはれ今はいかなる事をかおぼして、いかなる運命にか泣きゐ給ふらむと、はしなくも見いでつる思ひの糸の、それよりそれへと結ばれ候ては、佗びしげなるおん姿さへ、まざ〳〵と見ゆるやうにて、かゝる夜頃、ひとりつく〴〵と物おぼしては、わが世恨めしう怨じてやおはすらむを、いかでみ手とりてなぐさめまほしう、かつは其かみつれなき言のみいひて、泣かせまつりし此身の罪をも許し賜はりたくて、さては此筆とり申そろ、この文おん許へ參らせ候心のうちは、いはでも御察しの事とくどうはいふまじく、只おのれの非を悟り候のちのくるしさを御推察たまはれとのみ申上そろ、猶、破戒は讀みさしのまゝ、かりのしをりにとはさみ置きたる杜若の葉と共に送り申べく候へば、ゆきて返らぬ今日のかたみとおぼして、おん文机の隅へにてもお置き下さらば、いかばかりかうれしかるべくさふらふかしこ。

（評）小説を讀みて其主人公と運命を同じうせる舊友を偲び、つれなかりし昔を悔ゆる筋に無理なく、筆また整ひたり。

四等　○軍艦なる兄樣に

佐世保市天滿町二〇　佐々城よしゑ

御別れしてからまだ五日ほか立たないのに大層長く思はれて淋しくてたまりません、兄樣御變りも御座いませんか、今日は朝からしけて母樣と二人、御身の上のみ氣づかつて居ります、此度は御艦が小さくて隨分大へんですわね、一昨夕藤枝樣がいらしつて、今日はお萩の御馳走に成りに來たつて母樣へ早速の御注文、例の離れ小島が出ますやら、種々面白

い御話伺つたり致しました、月はいゝし風は涼しく沖の艦のあかりが見えて、何とも云はれぬいゝ心地で御座いました、私ね兄さんがいらしつたら、なほ賑ぎやかでせうねと申しましたら、左様です味方がいないから淋しいつて、そしてね今頃艦で竹でも吹いてをられるでせうなんて、兄様の御うわさしました、大急ぎでつぶ／＼餡のまゝ大きくまるめた御萩を母様が御出しなすつたら、一ぺんに十三もぺロりなのですもの、母様御あきれなさつて、まあなんて召し上がるんでせう、浪夫でも居ましたら二人で身代つぶしてしまうでせうとおつしやつたら、藤枝さんは平氣でなアに大丈夫ですだつて、今に浪夫君に逢つたら話だけ聞かせてよだれたらさしてやるつて、おつしやるものですから、皆て大笑しました、兄様よだれの出ないやう御用心していらつしやい、藤枝さんの艇は明後日立つて舞鶴で兄様の御艦と一しよになるとか伺ひましたから、此手紙と御ねまきの單衣一枚とを御願しました、兄様早くかへつていらつしやいな、母様と御待ちして居りますず、又その時はあのヴアイオリンひく水兵つれて來て頂戴、今日は是れで惜しい筆とめます、左様なら。

（評）快活なる軍人の面影まのあたり睹るやうなり。

五等　島にある妹に「花百合」を贈りて

大阪市西區東綱江二番町　末政善惠

名さへ、ゆかしい花ゆりに、きら／＼宿る露の玉、糸に貫きて、指にはめ、心ゆくまで眺めたさは一ぱいなれど、それだけいとしの御許も、島の濱邊に小石數へつ待ち焦れて居ることだらうと思へば、氣もそゞろ、直ぐに帶しめさせて、心の色も一の印、やさしい御方に道中たのみきこえて。

（評）興ある書きぶりかな。

秀逸

○鄙より

伊豆　杉山艶子

鄙のたより聞かせよとな。

炎帝のいでましに、優しき佐保姫の退き給ひてより、世は日に日に雄々しき装いと相成候。四方の山々は濃緑の色に萠えて心地よきばかりにて候。草刈るとわけ入りし山の朝、家路を急ぐ野路の夕、其折々を耳にせりし杜鵑の聲は、今や既に聞くを得ず候へ共、月には早き黄昏の畦路傳ひ、水色絹に綠の絣さながらの稻田稻田には、轉ばす如き蛙の聲々、そが諸聲の凝りて化りたる白玉と見んには、餘りに清きこゝだの星影、眞に美しき者に候はずや。露を宿せる稻葉をおとづれゆく風は、夕逍遙の人の肌に快く、水の面に影おとしつつ飛び交ふ螢の樣も、實にこよなき眺めにて候、青葉

が蔭に湧き出づる眞淸水のせゝらぎ、掬はゞそこに慰めの影も潜みて候ふべし。月の光に限はなければ田毎の月は居ながらにして吟ずるを得べく、池の眞淸水むすび上げては遣水さする風流は學ばずとも、自らなる白露は軒の端迄もおきたらひて、月の光は之にも宿りて候。

破垣にまつはる朝顔はやゝにほころび初めて、朝な／＼の眼によろしく、垣の下なる白百合の花、撫子の花、早う蕾を結び候へば、匂ひ出でん折も偲ばれて候。眞盛り過ぎし紫陽花に、しとゞ降る小雨も風情あるが如く、芭蕉にそゝぐ雨の音も、亦折からの慰めにて候べし。夕顔棚の下蔭に、一家まどゐの涼み臺、あるは軒端を迷ひゆく蚊遣の煙、亦却々にをかしう覺え候。

御女中　尾張　中野いち子



其他雨につけ風につけ、野にも山にも執りて詠むべき詩材はさはに候ふべし。さるにてもすさみし妾が詩情のうたゝ口惜しう／＼候。只君在さば、在さばとのみにあこがれ居り候。さても儚かりし哉妾が詩境、夏野の朝をあえかに咲きいでゝは、やがて空しく萎みはつる露草の榮短き運命にも似たりや。唯恨むらくはゆかりの色美しき其色彩を、わが詩の巻にうつし得ざりし一事に候、噫かくて徒に生ひ蔓れる醜草の茂りにおさへられて、脆くもしぼみ果てつべきか。

おゝ彼方の離れ屋あたり祖母君の「艶子々々」と呼びます聲のしきりなるに、み床のべよの御いひつけにて候べし。さらば君よ、名殘惜しけれど、之にて筆を止め可申候、時節柄御身いたはり給ひてよ、あなかしこ。

（評）光景描くが如し。

○美代樣の姉樣に

牛込　石田文子

三町目迄買物にとて立ち出づる竹に委ね、晴れし日曜の我家をそのまゝ聞え上げ候。

先日よりの約束として武夫は父を急きたて、空氣銃買ひにと勇み出で候まゝ未だ歸り申さず、みい樣にお見舞に贈るとて彼の古き木の下に、櫻坊ひろひ居り候ひしは千代子にて候。毛蟲に驚かされて手籠なげてあわたゞしう馳せ參り候を、兄等はいとゞをかしがりておどけたる繪などかきちらし興じ居り候。此度は飯事始まり候よし我等はこれより小さき家庭のお客樣と相成るべく候。

みい樣御容態如何にや。やがて櫻坊籠にみたしてともども參上いたすべく、このよしみい樣にもよしなに。かしこ。

かへし

千代樣御消息うれしうぞんじ候。

美代子昨夜は熱もはげしくて、あはれにのみ看護つくし候ひしが、今は何を夢見てか折々片頰にゑみ候を祖母もともにたのもしがりて、さうなくいえむなど語り居り候。いゑなばまたしても小さきくりやの御手傳に參上いたさせ申すべく、千代樣の優しき御贈物には美代子のよろこび如何ばかりとたのしみ居り候。

祖父が撫育み候苺の色いとようそろひたりとて、今日しも初めて摘みとり候を露ながらの美しさ御覽に入れ度、とく／＼御入りまち居り候。

なほ太郎より武夫樣へ、空氣銃持て來給へ、家の畑には雀が澤山來て居るから。と御傳へ下され度きよし申し出で候。お兄樣方にもよろしく、かしこ。

（評）無邪氣。

○農家便り（繪葉書にて）

山梨縣　山下よし子

一便

養蠶は大概上簇いたし候。天日に曝せる蓆の數に、繭の收穫は大凡それと判ぜられ候。青葉とゞめぬ桑畑に、黑かげの三つ四つ動くは、鍬とる人の耕やす業にて候はん。

二便

畑の麥漸く黃ばみ候。

手拭眞深かに紅襷、裳からげし花嫁の、瀧なす額の汗拭ひもあへず、夫にまけじと麥刈る樣の、いかに勇ましく候かしこ。

巢を失ひし雲雀の女夫連、鳴きさへづりて大空高く飛び去り候。

三便

蓆澁紙を張り廻せる庭の眞中に、麥打ち臺を据ゑ、並こそのこれ、種子よ飛べと、少女子いく人。今や麥打ちの盛りに候。

田の畦塗るべく、男の子は鍬を濕し候。

四便

梅の實熟して、定め難なの空摸樣と相成り候。

天神宮の年古る梅樹の下に、集ひ來る小供三々五々。

棒投げ樹登り、仲々に騷がしく候。

森の木かげにかはほり幾つ晝を飛びまはり候。

五便

心いぶせき梅雨の空、玉なす雨に、つれ／＼なるまゝ小窓に寄り添へば、庭の芭蕉は笙を奏づるが如く、池の蓮は綠の蓋を水に浮べ候。

水田に起る蛙のこゑ〴〵、何となく淋しく感ぜられ候。

六　便

田植は始まり候。

馬に田をすかせつゝ唸り出す馬子の追分け、早苗とる少女子が鄙の一と節、仲々に面白く覺え候。

肥料を散らす。苗を運ぶ。繩を張る。植ゑつける。實に忙しきものに御座候。

（評）此辛勞此風光兩つながら都人の知らざる所。

○婚家の母様へ

徳島縣　紫　濃子

母上樣只今無事で家に着きました。父も今では別條ありません、併せて御安神下さいませ。さて母上樣私は今日申譯のない事致しました。と申すは、あれだけ御心配下さつて、くれぐれも、女一人の山越は決してすなと仰せられた。其峠越、私は通りましたのです。實はあの意外の電報に、父の身の上が一入案じられ、一時も早くと思ひ、それに、日暮にも間がないで、本街道では、とても夕方までに歸れぬだろう、くれぐれ御母樣の御言葉はあるけれど、何分にも心急いで居たので、あれ程の御言葉にそむいて、女の身にもあるまい大膽極まる事を致しました。晴れた日でさへめつたに人通りのない所、それに今日の雨では、兎の子一疋も見えず、あの天狗杉のあたりのおそろしさ、不死の瀧の水音のすさまじさ、其淋しさが一通りでない上に、道もわからぬ迄生え茂つて居る夏草に肩からびしよぬれとなつて、七時五分前に家に着きましたのです。兄などは、男にても此頃にては、ためらふ峠越如何に心せいたとて、女の身をも顧みず、此雨天に、然も御母樣の御言葉にそむいて、かゝる、輕卒な行して、萬一身にあやまちがあつたら如何にするか、幸に無事て歸りし故先づよかりしが、以後決して、そんな馬鹿な事してくれなと、さん〴〵に云はれて見ると、なほなほ申譯がありませんが、何卒々々御ゆるし下さいませ。父の病原は過日御酒を過せしがもとだそうで、昨日までは只胸苦しいと云つて居たゞけでしたが、今朝十時二十分、突然庭にて卒倒し、人事不省となつて、皆が喫驚したのです。が幸にも手當が早かつたので、すぐ蘇生して、先づ〳〵胸なでおろしましたさうです。然し生命には別條はあるまいと醫師が申されて居ますので御心配下さらぬ樣に願ひます。あまり大急ぎて春雄も連れないで出まして、今頃は、乳を尋ねて、むつがり、母上樣をこまらせて居はすまいかと心配いたして居ります。父の病勢によつては、二三日逗留願ひ度ござりますて、明朝使に春雄連れさせに參ります。まだ初聲あげてから、一度も私の添寢せなんだ事がないのですから、定めて、今夜一夜お母上樣を、ど

の様にくるしめるやらと、とり〳〵案じて居ります。
先は取急ぎ御知らせかた〳〵申わけまで、かしこ。

（評）親をおもひ子を思ふ心は人を動かすに足るものあり、踰越の冒險も親故ぞと姑の君も深くは咎めたまふまじ。

○友の寫眞を得て

千葉縣　あきつ

賜はりし美しの御水莖の跡、殊に封じ込められたるみ寫眞を手にせし時は、嬉しさに包まんとすれど洩るゝ微笑の、いとゞ禁じ難く候ひき、扨も五年を遠く別れて相見ぬ間にいたくも大人びさせ給ひつるものかな、烏羽玉のみ髪房やかに、清しき御眼差、召させし被布のよくうつらせ給ひて、金物付の手袋、雪を欺くショール、萬、時に適ひし御風姿、御肩の邊り揚げ見えぬはいつの間におろし給へる、すらりとせる御撫肩、揚げなくなりて一入美しき形となられしよ、忘れ難く打偲びし御俤今見奉りてさながら御對面參らする思ひに、懐かし、美くしとのみ眺め入りて、笑み給ふみ唇の優しきみ聲洩れぬが只恨めしく物足らぬ思ひにて候、過日參らせたる姿が寫眞、今更ならぬ醜さに候ふも、只君がみ姿得んとの外ならぬ思ひに參らせし物を、恥かしくも方々に示させ給ひつゝ、御自らのは必ず人に秘めてよとの仰言、そは餘りにつれなく候ふぞや、面輝やかしきうらぶれ姿さへ方々に示させられしを、之は又取わけさやかなるみ姿なるに、秘めてとはいかで〳〵、免させ給へや早や父母にも示し候ふものを、あなかしこ。

（評）女らしき文なり。

○父上の病氣ときゝて妹へ

大連市　林　政野

虫の知らせ候にや四五日前よりの夢見の悪しさ、何となく心にかゝり、もしや父上様か御許様に御恙あるにはあらずやと、東の空のみ眺めて御案じ申居候處へ、御手紙着致し、胸とゞろかし急ぎ拜見致し候處、果して父上様御病氣との御事、誠に悲しく熱も高く咳さへはげしき由、すぐにも馳せ歸りて御介抱致し度候へども、かく遠く隔りては思ふやうにもなり不申、空とぶ鳥も今日のみは羨ましく候、よし身は海山幾百里はなるとも心はとく御側にまゐり居候、苦しげなる御うめき聲、はげしき御咳になやみ給ふ御様子など思ひ浮べては何事も手につかず、立つたりすわつたり致居候、御寫眞取り出て、御胸のあたりを御擦りなど致し居候、御側に侍りなば御肩ももまん御腰も撫でんにと思ひ候へ共、かく隔りては思ふ計りにて神様にお祈り致ばかりに候、御頭は怠りなく御冷し下され度、立居戸障子の開閉にもよく〳〵注意して靜になされ度候、御病中の事故自然御無理も仰せらるべけれど何事も御心

にさからはぬ樣頼み入候、御咳の止む迄は煙草も成るべく差上ぬやう、私に替り萬事に注意して二人分の御介抱賴み入候。

（評）結末の一節をとる。

○出產せる姉に　豐後　落葉子

昨夜取敢ず電報を上げて置きましたが、まづ此度はおめでたう、など〻言ふ迄もなく私嬉しくて〱〱堪りませんの、もう今日からは叔母さんねホヽ、昨日あの御知らせが着いた時の家の騷動つたらありませんの、電報ッて言ふ聲が聞えると、そら姉樣からだと靜ちやんと武ちやんと私と三人飛んで出ましたの、夫から父樣のお部屋に持つて行つて見ますと、はや祖母樣も母樣もちやんと來て待つてゐらして、其處で皆で讀んで見ましたら無事に女のお子がお出來になつたつて言ふんでしよう、靜ちやんと私は嬉しがつて躍り舞ひをしましたわ、武ちやんは女ぢやつまらないつて、べそをかいてるから叔父さんになつたから好いぢやないかと云つてやると御機嫌をなほしましたの、祖母樣は祖母樣で何だかそは〱成すつて、はやどこへかお出掛の樣子、おばあ樣どこへつて聞いたら、姉樣が無事にお產をなすつたから早速觀音樣へ御禮參りに行くんだつて、まあ氣の早い事つて又大笑ひ、まるで內にお產があつたやうな騷ぎですの、姉樣人手がなくてお困りでしよう、昨日直にお祝ひの着物を取寄せて、只今母樣と私と大急ぎで縫つてますから、出來次第いづれ明朝の一番で母樣お出發になりましよう、私も行きたいけれど母樣と御一處には出られませんから……まだ色々面白い事どつさりありますけれど何分氣が急ぎますから後は五猿と一處に次便にゆづります、どうかお無理等なさらずにお身躰お大切の程祈つて居ります、みながよろしく、さやうなら。

（評）歡喜堂に滿つ。



赤十字　岡山市　武本薫子

○百合花に添て　相模　今井吉子

花なきこの里のすさましきに、御さし花の料もおはしまさで、いと困ぜさせ給ふらし、都に住馴れ給ひし御身には、さこそと推量まゐらせ候ふ。まことや花なき床は物淋しげなるものに候へば私もこの里に移り候ひし一年は同じ思に惱み、はては京なる姉の許へ相通じ

候ところ、それよりは、年々四季の花苗送りこし候まま、この頃はさまで不自由致し申さず候。さは云へかの潮風のためにや、いかに心砕きつちかひ候ても一向に心ゆく樣なる花はゑ咲き申さず候へどをりからの姫百合白百合など、今日の御さし花の料にと御目にかけ申し候、うなだれやすき花に候へば水上早く遊ばされ度申そへ候。かしこ。

（評）優にやさしきおくり物かな。

○都の妹に

酒田柳子

今は妹とも思はじ、おとづれもせまじと思ひ候しかど同じ血潮わけたるものとては、世に其許只一人に候へば又もや理に遠き愛にひかされて、一筆こゝにかきまゐらするになむ。あゝ思へば去年の暑中休暇に候ひし其許歸鄕せられし頃は誠に心も姿も美はしく相成り村の人々も其許をほめそやさぬはなく、殊に宅にては昔かたぎなる姑樣迄、おしげはよき妹もたれし、姉まさりなり等申さるゝ故學資金いたゞく時のかたみせまさもうち忘れ、得意顏して其許が身の上等かたり申しゝもあゝ夢！其の折等此の姉はいかに御身を甲斐あるものと思ひ候ひしか、さるをいまだ一年とはたち申さぬに其許のかゝるうはさきゝ申さんとは……四ケ月の便なきに、さて此頃の流行風邪に犯され給ひしか、さもなくば不自由がちの御身ゆゑハガキ代にも……等といぬる夜も少なうち案じて人々の衣服等ひきうけ申て姑樣のいね給ひける折そを取り出し針運もせはしく、三夜五夜一眠もせで少しの錢を得候て、其許に送り候ひしが、何の返事さへなう、さてはとあやぶみ案じ居り候處、昨夜都の師の君よりあつき玉章のつき候ひしに胸とゞろきて開き讀下し候處、あゝ……其の許が近狀は明らかに知られ候、便なきも當然に候、あゝたとひ都の學びの子等皆墮落の底に沈み候共、御身一人は夢にもさることあらじと今日迄思ひつるは全く姉のよくめに候ひしか、今は何として學資つゞけ給へる夫に顏合せ申さん、義理報恩をこよなく重んじ給へる姑君に何の面目ありて顏合せ申さるべき、あゝ妾は世に御身程にくき者は又と之なく候、否いとしきも御身！再び其の心清うなり候はぬ內は妾は御身を妹とはよび候まじ、御身も又姉とは思ひ給ふな、さるにても世に一人なる人よ、都は風荒しときくものを身躰いとゞ恙なかれかし、さらば。

（評）苦衷想ふべし。

新歌謡

編輯局選評

三等

夕東へ出たあの虹で絲を染めたや七色の

下總成田南日吉倉　三橋千代子

高調

四等

天鹽山道眞夏の旅はふきの葉笠によもぎ杖

札幌　山田鈴子

自註、北海道に於ては何れも丈は七八尺より一丈餘も成長せり葉も又同じく雨傘より大なり

郷土詩

五等

年は十六耻かしざかり機の調子も氣がおける

丹波氷上郡和田　難波あいの

情韻絕佳

秀逸

◎利根の川風十六島を吹いて持て來る潮來節

長崎　瀞江

◎お前何堀る知らしてお呉れ私しや田村のチッコ堀り

秋田　金澤參知子

自註、チッコとは泥炭の事

◎雨よ晩ならいくらも降れよ朝になつたら止んで呉れ

京都　千代

◎空に火を吐く山さへあるに何故に云はれぬ胸の中

遠江　松本綾子

◎あすは雨だよ早や苅り了へ麥が腐れば馬瘦せる

熊本　上羽溪花

◎峯は松風野はすゞ風よわしの家には春のかぜ

上野　金子尙子

◎天の原なるあの月姬に着せて見たいや振り袖を

上野　小暮たつ子

◎わしが故郷は上州のはづれどちら向ひても山ばかり

神田　吉田たつ子

◎富士八合目洞出て立てば袖に飛び散る朝の雲

周防　三井はる子

◎出來る事なら妾の學力分けてやりたい妹へ

淺草　中谷峯世

◎親に優りてきれうも好うて渡守とは可愛そな

攝津　寺部君子

◎曾我の兄弟夜うちの日にはいつの年でも雨が降る

仙臺　文子

○天のみ空で繭煮る女神傍て雲姫糸を引く　茨城縣　橋本小啓

○村の守娘が吹く笛の音に空の雲雀が音を合す　淸國　滿洲女

○あの瀬聲よい春風道を歌て馬やる木曾そだち　美濃　傍島みゆき

○私しや蒲郡海岸住ひ男波女波が寄せて來る　蒲郡　波留江

○熊の浦では鯨がとれる那智の瀧から電氣とる　紀伊　福本保子

○あの子何處行くつりざを肩に吉野川へとあゆつりに　大和　受田貴美惠

○すみれたんぽゝまたれんげ草春はよい時花が咲く　長岡　土田りた子

○おなか娘とお笑ひやるな植ゑた青田を見てくりやれ　會津　星野光子

○出來ることなら私しの胸を開いて見せたい花のよに　多摩村　横倉浪子

○私しや秩父の機織娘織つた矢絣誰が召す　埼玉縣　近藤登久子

○いやな桐原朝日がさゝぬ晩にやお山のかげとなる　信濃　桐原敏子

○國は平和に世は文明に今年や豊年伊勢詣り　香川　玉女

○無理に引裂くはちすの莖の中に千筋の糸がある　香川　松下好子

○渡し渡れば一町半よかちて踊れば一里半　京都　山口愛華

○山はつゝじよ空には雲雀中で私がすみれつむ　下野　手塚如月

○風の涼しい青田を見れば今にまたもや秋祭り　神奈川　岩澤みどり

○攝津大阪商賣どころ川の上まで茶店舟　兵庫縣　大内八重子

○わしが小村は板屋根藁家出來た病院瓦屋根　肥後　村松清子

○瀬田の唐橋夕日の下を大津通ひの船が行く　河内　糸若柳野

○向ふ信州此方は越後小川一筋國境　越後　富澤きん子

○大津名物石山寺の螢夜中にいくさする　京都　吉田靜枝

○けしの葉かげに小猫が眠る眠る小猫に花がちる　筑前　青葉女史

○たつたひと夜の短い夢にいやに蚊が多いのみが多い　三河　松子

○私しや一人子淋しい時はお姉あらばと能く思ふ　紀伊　津田眞佐子

○彩羽つくろうお庭の孔雀垂尾五尺に朝日さす　鹿兒島　犬飼たき子

○お蠶を育てゝいゝ繭取つて賣つたお金で嫁仕度　青森　三浦愛子

○蠶養ふて田植もしもて今日は目出度や代滿(しろみち)祝ひ　伯耆　櫻女

○身の毛立つよな毛蟲でさへも優し姿の蝶となる　本郷　柴田さよ子

○草刈る娘と笑やるけれど色好い薫は草に咲く　大隅　富來みつ子

○イルミネーション付けたる樣な闇の巷の螢賣り　淺草　伊藤三津重

○麥もこなして田植もすんでわたしやこれからはた織よ　下野　きん子

三等 ○懸賞文に就て

本郷區駒込千駄木町五七廣川和一方 廣川清子

百花爛漫芳馨に充ち、諸草參差幽趣に富む底の好文字紙上を飾れるは、我が女子文壇を始め、都下幾百の文藝雜誌にあらずや。吾人は我文壇の一卷より二卷、二卷より三卷と日進月步の盛況を呈するを觀、衷心歡喜の情に堪へず。斯くの如き現象は果して何に因する乎、仔細に考究せんには、幾多の原因を捕捉すべきも、要するに時代の潮流之が先驅を爲し、懸賞の方策出で丶益旺盛に向ひたる也。

懸賞の利害得失、今更論ずるは、時勢後れの感なきにあらずと雖も、世人の見解往々妥當を缺くは、痛嘆に堪へず。

人あり曰く、近時文藝に關する雜誌何ぞ多きや、然して青年男女を釣るに懸賞を以てす、是れ巧に人情の弱點に乘じたる一種の商法的猾手段なり、宜なる哉此處に彼處に剽窃の聲の絕えざることや、眞に文藝を隆盛ならしめんとせば、忠實に之が鼓吹に勉め、賞を懸くるなくして廣く江湖より作品を募集するに若かず、斯くしてこそ始めて其の本來の目的を達すべきなれと。

嗚呼何ぞ思はざるの甚だしきや、論者の如きは其の弊を觀て其の利を觀るの明なき也。試に人に向つて無報酬にて働けと言はゞ、其人面を背けんのみ、此と彼とは猥に同一視すべきにあらずと雖も、活眼もて觀察せんか、歸する所は一なるを知らむ。

夫れ勞働は神聖なり、文を作る、亦精神的勞働なり、神聖なる勞働に酬ゆるに神聖なる賞を以てす、是れ至當也、良法なり、奬勵の旨に稱ひたる也、偶々少數の剽窃者あるを見て、懸賞の害を斷ずるは、未だ淺見たるを免かれず矣。

百尺竿頭一步を進めて投書家諸姉に望む、吾人は如上の說を爲すと雖も、賞を得んが爲めに文を作れと云ふにあらず、價値ある作に賞を拂ふの正當なるを論じたるのみ。

若し夫れ賞を得んが爲めに想を構へん乎、眞情を吐露し難く、徒らに選者の嗜好に投ぜん

とし、遂に自己の本領を沒するに至らむ。蓋し文の發達を阻害する之より甚だしきはなし。諸姉にして此の域を脱せずんば、或は饒倖にして鐵中の錚々たるを得んも、斷じて金玉となる能はず。論ずる所一見矛盾の觀あるも決して然らず、諸姉解せりや。

（評）貨を貪んが爲めに筆を執る勿れと戒むるあたり、殊に評者の意を得たり。

四等　○希望と人生

千葉縣山武郡千代田村　林　葭江

斷じて曰く、人は希望に生きて滿足に死すと。試みに財を貪る者を見よ。其財を得ざるや、心を惱まし思を煩はし、氣を勞らし身を粉にし、而して尚精神旺々然たり、彼は慾の爲めに長生する也。彼は慾の爲めに老いざる也。而して一たび財を得るや、氣滿ち意驕り、百年の老一秒にして來る。彼は精神的に死して遂に形骸的に死する也。夫れ財を貪るは賤むべしと雖も、亦一種の希望にあらずや。

豈啻貪夫の生涯のみならんや、歷山大王の死するや波斯遠征の門出にあらずして、其の凱陣の時にあり、劉玄德の死するや、當陽長坂の厄にあらずして、南面して蜀の帝位に即きたる後にあり、豐太閤の死するや、雄を一擲に爭ふ山崎合戰にあらずして、聚樂、桃山、浪華城、榮華の夢の後にあり。

希望なければ未來なし、既に未來なし、剩すものは唯過去のみ、未來を伴ふ過去は恩寵也、未來なきの過去は咒詛也、苟も未來の光明あれば過去の暗黑も亦反襯して未來の光明をして、一層の大圓光を描かしむ。苟も未來をして、たゞ一の暗黑なる幔幕ならしめんか、假令過去をして光明ならしむるも、その光明は却て人を愁殺するのみ。

希望は如何なる人にも如何なる場合にも存ずるを得べし。蓋し天は希望を公平に人に與ふれば也。人唯だ之を享用せざるのみ。凡夫には凡夫の希望あり、哲人には哲人の希望あり、希望愈々純淸崇高なれば、人の生活愈々純淸崇高なるを得べし。崇高純淸なる希望は無極と一致す。

時と希望とは、人生に於ける二大要素にして、彼等は恒に相戰へり、時の犧牲となるものは過去の中に埋葬せられ、希望の寵兒となるものは不朽に入る。而して恒に人を死陰の谷に擠す時すら、尙ほ人をして、上帝の聖壇に達せしむる階段となる也。

（評）論ずる所、斬新なりとは言ふべからざるも、動もすれば希望を擲ちて落膽し煩悶する青年多き今の世には、這般の文亦徒爾なりとせず。

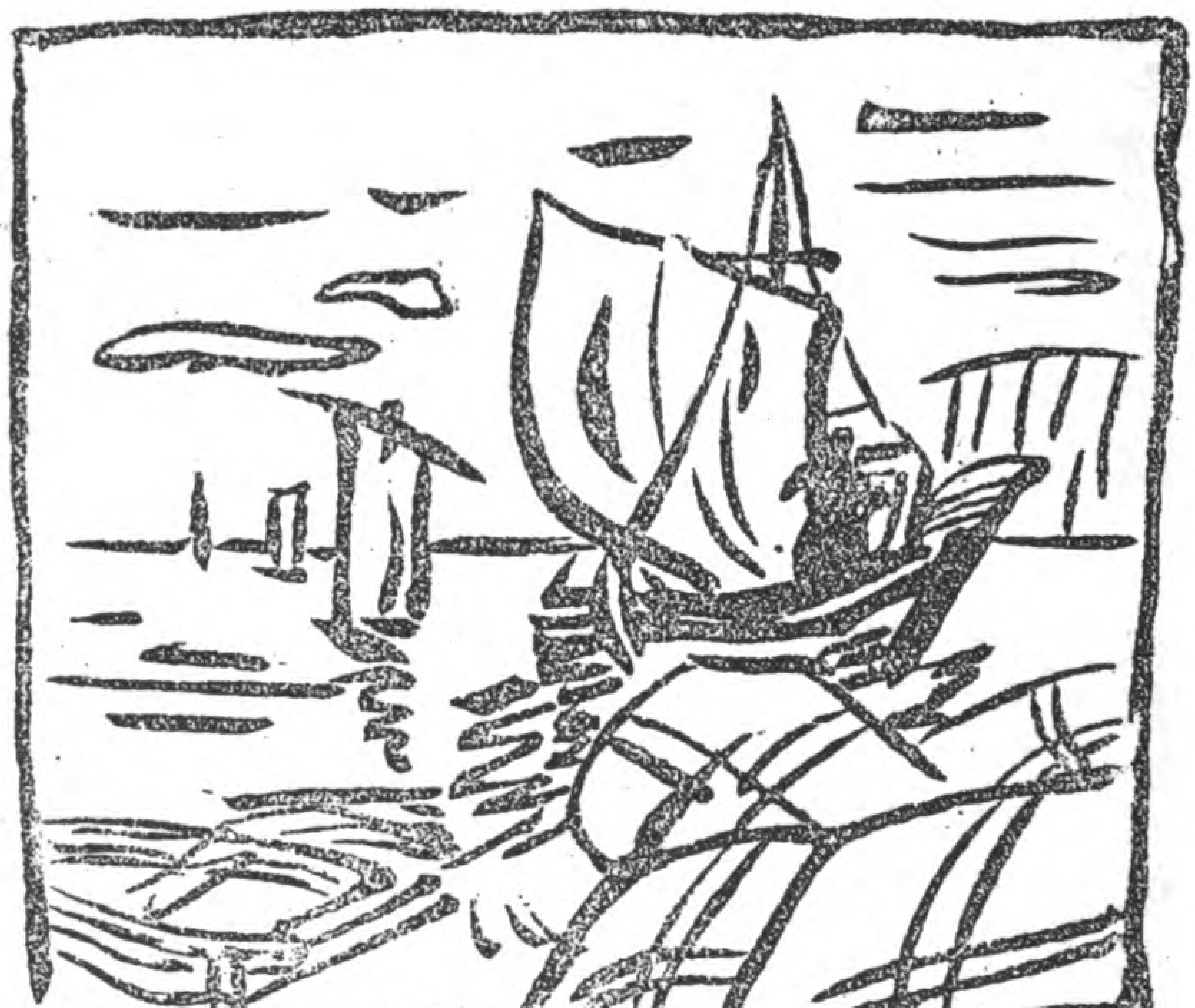
（又曰）君の投ぜられたる「饒狂」の一篇、寧ろ此篇に比して優る所あるも、投稿規定に反して行數を超過せること多大、遺憾ながら沒書となせり。

五等

○労働者にかはりて

愛知縣愛知郡八幡村字野立　竹下季子

あゝ尊きかな労働の名、美しきかな吾等が天職、されど永久に醒めぬ人生、濁れる社會は、吾等労働者を目して憐れなる貧しき者よ弱くして賤しき者よと呼べり、げに然り、黄金崇拜の世に於ては吾等は最も憐れげに見え、最も貧しく見ゆるものなり、しかも暫くいふを止めよ、吾等は弱き者には非ず、又決して賤しき者にては非ざるなり、知らずや星を歌ひ、菫を弄び、バイオレットの香水に、コスメチックの香に、風流の名を盗む幾多の軟骨男子が、彼の色白き細腕に比して、如何に吾等が腕の堅く強きかを、又知らずや人生の意義をさへ知らず、世に處して一つの職業をすら有せざる所謂當世富豪の箱入令孃が怠惰華美の生活に比して、自ら額に汗して食を得る吾等が職業の尊きかを。



波止場の夕　なみ江

星は美はし無限の宇宙、草は青し水湧く大地、富める人が千金を擲ちて温泉に涼をとる夕も、高樓に雪見する朝も、河原に砂どりし、塵街に車をひく、然も心の中には人知らぬ涼しさと温かさあり、只吾等は人情紙より薄き現世の人心にくらべんにはあまりに涙多く血熱きものなり、あゝさても幸ある吾等が天職かな、さても榮ある吾が生涯かな、仰げば天高く地廣し、神の造りし美はしの自然に心の限り歌はん哉讃美の歌。

（評）労働者のために氣を吐く萬丈、世の所謂紳士淑女をして顔色なからしむ。

秀逸

○讀書論

大和　かすみ女

世に書籍蟲と勉強家との眞の區別を知らざるものあり、百千萬の書籍を耽讀して、東西古今の思想を窺ひ、世界の知識を一身に蒐むと雖、竟に何等の造詣獨創なきもの、これを書籍蟲と云ふ、學問讀書の目的を忘失して、却て自己の生存を殆からしむるは、彼等の常態也、世上愚昧の徒、彼等を以て勉強家の摸型なるが如

くに云ひ、學問の進歩發達が一に彼等に依りて期せらるゝ如くに思念して、不知不識有爲の男女學生をして無意義なる書籍蟲と化せしむるは、眞に痛慨に堪へざるべからざる也、社會に於ける人生に於ける其効果を控除しては、吾人書に親む何等の必要を見ざる也、單に書籍蟲たらんは、麵麭の燒方を覺ゆるだにも若かざる也、彼等は幾多の空理空想を有せむも、これ悉く不消化の讀書より來れる借用の思想而已、自ら思索し經驗して得たる智識の歸納にあらざる也、彼等は過度の修養によりて、其才能を蠱毒し去れるもの也、現住の社會を離れて、別に夢想の社會を成さん事を希へる也、彼等は事物の關連を知るに堪能なりと雖、進んて事物を關係せしめ得ざる也、約言すれば知つてなすこと能はざる也、蓋し眞の讀書は、効果あつて始めて有意義たり得べき也、東西古今の智識を參酌するは、吾人が觀察力を鋭敏にし判斷力を養ひ、實際的智識をして愈々實際的たらしめんとするにあり、讀書は人を賢にし又愚にす、賢にするは其効用成果を捨てざるが故なり、愚にするは所謂書籍蟲となり畢れば也、悉く書を信ぜば寧ろ書なきに若かざらん、これ不動の眞理也、吾人は實際を離れて書籍中の人たるべからず、遠く實際を隔つるは危險の第一歩也、如何にして此危險を去るべきか？ 曰く批評的態度！ 曰く自覺的態度!! これ也。

批評的態度を以て書に向ふ時、吾人は其書の善惡兩樣の思想を區別して自己を害せらるゝ事なき也、恁くの如くにして、吾人は如何なる書籍にもこれを手にして多少の利益を收むること得べし。自覺的態度にありては讀書中に得られたる善良なる思想感情を以て、直に現在の自己の陶冶薰育に資すべき也、讀書の効果は此際に於ても最も直接的なるを得む、批評的ならざれば不消化の鵜呑となり、自覺的ならざれば無益の徒勞となる、吾人は如何なる書籍に對しても二個の態度を以てこれに向はざるべからず、當世青年婦女の多くは書籍蟲たるを以て一種の名譽なるが如くに思惟し、勉强家なるが如くに妄想するが如し、吾人は今にして此弊害を矯めずんば、久しからずして自己の破滅を來たさんことを惧る、而して今の敎育家の詰込主義は此惡傾向をして愈々助長せしめつゝある也、現時の男女學生は自から愼戒する所なかる可からず。

（評）君の如きは所謂書を讀んで眼光紙背に徹するの人。

○我等の天職と造化の妙

南越　竹下濱尾

茫々たる蒼空日月星辰懸り、渺々たる大陸河嶽森林連

なり、萬古其色を變ぜず、千秋其容を改めず、吾人生を此間に稟く豈酔生夢死の爲ならむや、雞は曉を告げ、犬は夜を守る、吾人は呱々の聲を放つと共に天賦の職業ありて之が遂行の義務を有す、然り而して世路難く狂瀾怒濤は前に迫り猛獸毒蛇の後を襲ふ幾度ぞ、吾人は滿腔の勇氣と忍耐を以て之を飛び之を居り、歩一歩大目的に達するの覺悟を要す、若し此險路にして滿目唯赭兀たる丘岳と混濁せる流水とのみならば吾人の感情意志を娯樂せしむるの餘裕なく、誰か中道にして沮喪せざらん、造化はしかく拙ならざるなり、見よ雲霞紅紫の花を包みて百鳥枝に囀づるの三春は胡蝶と戯れ朧月暗香を尋ぬるの快あり、緑蔭滴る如く赫陽地を燬くの夏は杜鵑を聞き冷露を踐んで點點の螢火を撲つの樂あり、胡風塞外より來り天地寂寞の秋に當りて明月皎々千里一色の夕に喞々たる蟲聲を聞くの快あり、萬籟たえて滿目枯衰の冬も尚六花の繽紛たるを拂うて高嶺を攀づるの樂あり、數へ來らば百態千状の變化驚くに堪へたり、斯の如く四時循環して序を亂さず、造化は自然の妙と美とを極めて其秘密を洩せり、これ何の故ぞ、謂ふ勿れ詩人騷客の膓を肥さん爲のみと、謂ふ勿れ雲卿月客の心を慰めん爲のみと、吾人は尚一層大なる望みを以て造れるを知る、四方の諸孃此至大の恩惠に酬ゆるの報償は如何なるかを思へ、必ず卿等を首肯せしむるに足らん。

（評）四時の推移を以て吾人の慰藉となす、亦一見解。



博覧會見物　相模　今井吉子

〇乙女

紀伊　森井春圃

あはれ、尊きは、乙女子なり。

天津空より天下りたらむ天女のそれのごと、無邪氣にして心根清きは乙女なり、げにかたちある生ける神は乙女なり、未だ浮世の汚に染まずして、天眞月の如く爛漫花の如き心のいかに尊く清けきことよ。

長閑けき春の日若草萠ゆる野邊に、緑の黑髮ふり下げて、つばな摘む樣は、げに汚れたる人の子とは思はれず。

あはれ美しきは乙女なり。

瑠璃の如き眼、花の蕾の唇、白桃に春の如き粧ひいと床しく美しきこと匂ひ溢るゝ黑髮、淡紅を彩りし頬、花にもまさりて見ゆ。散りかゝる櫻の下、長き袖たれて、そが愛らしき赤き唇より、清き鈴の如き聲はりあげて、歌ふ聲は春の御神の讃美歌か？佐保の姫君の奏で給ふ琴の音か？實にも乙女は天使なり、乙女の心は春の心なり。

あはれ、なつかしきは乙女なり。

短文

編輯局選評

二等

○九重の雲

南葛飾郡瑞穂村紀伊國屋方 中里きん子

あまり畏れ多い事でありますが、私は日々の新聞紙上で宮中の御様子や、各皇族方の御消息を拝見いたすのが、無上の樂みであります、倘折ふし宮様方の御近状や、御逸話などの載せられた時には、寝食をも忘れて拝するのが常であります。

開國上下二千五百年、皇室と國民の親近は明治昭代に於て其美風を興せり、草莽の一少女、感泣の涙を洩らすもの亦偶然ならず。

三等

○繪葉書祭

松江市灘町 古志益子

向ふの美代子様は非常におつきあいが廣ひので、内地は無論、北海道から臺灣、さては支那、米國まで横文字や縦文字で來る繪葉書が、丁度五月廿一日で千枚のお祝がありました。私は百枚でお祝をしようと思ひますが、まだ四十二枚たりません、せめて今年のくれまでには、お祝が出來るようにと思つて居ります。

これは珍しい祭です、山王祭や天神祭より遙に時代的て、本誌の誌友倶樂部の諸嬢さんなどは大賛成のお祭でせう、記者も繪葉書祭には、神命ぐらゐは讀みたいものです。

四等

○おはんにや

丹波氷上郡和田村 難波あいの

紫の對の衣召す五十幾人の坊様達六百冊の經本うや／＼しく、「アッ八幡何々々……：」と聲を揃へてくり給ふおはんにや、風にひるがへる黄金の紙は幾十の蝶が一時に舞ひ並ぶ樣。美し勇ましなんど云ふ計りなくお婆さん方は忝けないと双手合して「ナアム、アアミ……」

一山、大般若經の聲に埋まる。

五等

○筧

備中國高梁 季花子

朝風にどこからともなき若葉の匂ひ、顔洗ふべく筧の水を掬まんとすれば、いぶかしや、水桶の底深く梅の實の二つ三つ、はてあたりに梅の木はない筈、あゝ分つた、大方此山奥に木があつて其實が落ちて水と一處に流れ／＼て此處まで來たのであらう。

京味三斗。

秀逸

○雀の旅行　横濱　黄菊女

私はふと彼方を見ると、前の汽車の家根に雀がさも樂しげに囀つて居ました、其内一羽は何處からか、わらを啣へてきて、あたりの様子を見ながら、中へはいりました。すると汽笛一聲列車はゆるぎ出したので、外のも中へはいりました、あゝ雀は斯樣にして毎日樂しく旅行して居るのでせう。

無賃乘車。

○恩返し　岩代　根本松江

毎年玉子生みに來る燕が、歸る時に宿への恩返しにと巣の中へ、美くしい貝を一つ置いて行くさうです。其貝は目藥になるとか、今年こそは歸た後で巣の中を見てやりませう。

『くらつ丸申すやう、燕、子うまんとする時は尾をさゝげて、七度めぐりてなん產み落すめる、さて七たびめぐらんをり、引きあげて、そのをり、子安貝は取らせたまへまうす』（竹取物語）

○夕立　筑前　安部不二子

窓を開いて海を眺めると名も知らぬ鳥が一羽、羽根の間に首を入れて波のまに〳〵漂つてゐたが俄に大粒の雨が降つて來て鳥は力なげに水を離れました。その影を見送つて居た眼に不圖浮んだのは淡い〳〵壹岐の島でしたが、やがて鳥も島も消えてしまひました。

變化自在、文の妙。

なつかしき校舎　日向　甲斐きす



○筆記帳　小田原　伊藤福子

一昨年の紀元節當時當地に御避寒中の常宮周宮兩殿下より妾等小學生徒一同へ御下賜相成し筆記帳、恐れ多くも表紙をば御召衣摸樣其儘との亂菊薄色地に紅の色美しう金色まばゆきくずし御紋のまばらなるいと床しく今日迄大切に秘めしが扨何をか筆そめん。

歌か、日記か。

○螢　愛知縣　永田舞鶴子

村里に夾まれてる鎮守の森は、夕霞に包まれて居る。さつぱりとした浴衣を着て妾は、螢がりにこの畦道を逍遙つて居るのであります凉しき夕風は、妾の乳房のあたりを撫てました。と共に、夜露に濡れた螢が一羽懷ろに入りました。

青き光、浴衣に透く。

○朝の學路　鹿兒島　智滿子

糊のこわい筒袖の衣服に紫の袴を着けて裳輕く門を出ると、すぐ縣道、そこを四五町行くと賑やかな溫泉場、音もせぬ村境の土橋を渡ると、畔道ばかり、空氣は淸く、吹く風も凉しい、こんな處を一里ばかり校に着くと、袴の裾はびつしよりと露にぬれて居るのである。

學問お身にしむ。

○長野の町　長野市　小蝶

私の居ります長野の町には種々の特徴があります、先づ元善町は小間物屋町、ほんとに小間物店許り、それから西町の上組が古着屋許りて、下組が古道具屋町、好一對でせう、櫻枝町は雪の降つた後がひどく道の惡い町て、横澤は馬の通る町、末廣町は町巾が廣くて後町は坂な町それから一番美麗て賑やかなのは私の居ります町。

知らないものにも町の樣子が分ります。

○紫陽花　伊賀　山村りやう

午後三時過ぎ妾は西町の叔母樣方へ行かうと思つて、相生町を通ると京屋と書いたお茶屋の門前に咲いて居る、奇麗な紫陽花の傍に、白地に浪摸樣の有る華美な浴衣を着て結ひ立ての島田を、つや〳〵させた年頃二十餘りの意氣な女が、二人たゞずんで居た。

日に七度、色を變ふる茶屋女。

○十七八　熊本　みね子

笹の葉の動いてさへ笑ふ十七八の若盛り每日十三五人も集まる、御針の御師匠樣、其賑はひつたら、それはそれは、去年迄は、御化粧の話し一つなさるでもなかつた、文樣、君樣今日此の頃は、御化粧や、御召衣の話しばつかり。

夏はおしろひの香に蒸さる。

○聖なる夕　本所　田中久子

未だ火ともさぬ薄暗い室の中で靜に夕のお祈を捧げる机の上にうつ伏した顏を♥ッと上げる其刹那の心こそは、磨いた金剛石よりももつと〳〵淸いのである、私は一日の中に此時程美しい樂しい時はありません必と神樣のお心の中に私の心が溶込て了ふのでせう。

燭の光明は胸に輝く。

○古い湖水　周防　三井はる子

古い湖！妾の家を距る十町餘の山間にあつて周りは雜木雜草で蒼茫と深う圍繞まれ、淸い冷たい、葡萄を溶した如な水が一杯澄み湛へて居る。村の衆は水魔が底に棲ふとか言つて怖れるけれど妾は何麼も疑はしい。唯每朝其落水の小さな流で嗽いで居るのである。

湖砂、躍現す。

○妾の居室　岐阜縣　白梅子

妾の居る二階から南を見ますと果しもない田圃でありますがもう菜種は刈られて終つたし、麥もそろ〳〵刈りかけます。やがて刈り終へて土を堀りかへすと心地よう水が入つて、一日の中にまあと驚くばかり見變つて早苗が植ゑられるのであります。

湖一割、田園にも時の力は動きつゝあり。

○白鳥　鳥取縣　今井康子

晝も暗きばかり木の葉のおほひかゝつて居る湖の面を朝風さつとかすめ、一段と薄暗き水の間から雪をあざむくばかりの白鳥二羽、天の御使のごとく白き姿を水にうつしたその時つやゝかなる綠の葉末より朝露の一雫、湖上一面にひゞき渡つた。

散文詩。

○女のたしなみ　日向　乙女

着物の着形、及び縫ひ樣、髮の結び樣、口のきゝ樣などでその人のたしなみのほどは知れる、其内でも縫方て衽先の曲つてる、褄の不恰好な、肩のまわりにしわのある、これほど人目をひいて、たしなみのないことの知れるものはないと裁縫の先生は始終言はれる。

裁縫以外のしつけ。

○ガーデン　麹町　淺井千鳥子

チウリップ、合歡、ホワゲット、凌霄花、サフラン等まだ外にもありますが、此やうな種類、和洋の變つた草花を澤山やしなひ、花園を作つて、花を殖し、園を擴げて、花と共に生活をしてみたいと思ひます。

大久保か、千駄谷か。

○妾の村　岡山　阪東須美子

妾の村は、あの高い手を立つた樣な山王山の麓にある二十餘戸の一寒村です、村の中程に白壁の藏があるのは村長さんのお宅で、前の端に柳の木がある家は巡査さんのお家です、其他は皆農家でありまして、谷の畑や、沖の田を耕して、其日を暮して居ります。

村長一人、巡査一人、司法行政兩つながら治まる。

○修學旅行　中谷　近藤くら

修學旅行の朝になつて、今にも降る計の空、生徒は出發の時間が來たのでわい〳〵噪ぐ、職員室では行く行かぬの大議論、時に後の川に櫓の音が聞えたので、船長が窓から首を出して今日の天氣はと聞いたら、船人は大丈夫との答、其ではと言つて俄に出發した。

衆議一決。

○可憐兒　越後　哲子

父知らず、母知らず、只知る東郷大將を。

將軍、これを知るや。

○妾の名　大阪 米子

妾は五月一日、丁度八十八夜の生れてすの、て若しや男子だつたら八十八、女子だつたら米子とつける積りだつたのですつて、いつもお父様が仰しやるのですよどちらもいやな名ですけど、妾女に生れてまだ良かつた。

八十八でもよかつた。

○草とり　成田 きさえ

南天の花が散つた、背戸の方では與作が「もうぢきに田の雜草採だよ、早く仕事をしまいにしねえか」と濁つた聲で、叫びながら働いてゐる、門田では節面白そうに女が二人、三人、燕は何におどろいてか其の邊を高く舞ふてゐる。

夏來る眺。

○河鹿賣　大阪 倭文子

河鹿アかじかとやさしい呼び聲、さぞ可愛い娘だろうどんな姿をしてゐるのか、一寸寫生してと思つて、手帳をひつさげて門の外へ出て見ると、聲の主は早や四つ辻を曲つて姿は見へず、細い聲ばかり幽にかじかア。

河鹿賣とは繪に書いたのも見たことはない。

○見へる汽車　神戸市 麗雨女

五年振りで姉様が御歸りなさるので妾は今プラットホームに姉様の列車を待つて居るのです。時計とにらみ合つてゐると早三分、汽笛の音が聞える、オー汽車が見へ初めた。心臓の動機の激しい事。

轟、轟、轟。

○田植　下總 三橋千代子

都の諸嬢が避暑なさる六月なかば、當地では田植の初めにて殊に多忙しく、雨の日も暑き日も、朝より夜まで休まず毎日々々拾數日も田の中で暮すのですから、なか／＼骨が折れます、けれ共母上父上に賞められるのが何より樂しいので御座います。

自然の避暑。

○糊引き　京都 千代

昨日お糊を引てうと致ましたら、折悪しく半桶が二つ共漏りまして、代用にするものもありませんでしたから、漏水を防ぐ爲め桶の中に合羽を敷き臼の下の破れないよう風呂敷を四つ折にしてあて丶引きましたら。よほど工合宜敷く一升五合の糊も暫らくの間に出來まして、ほんとに嬉しう御座いました。

糊を臼にて引くは京大阪邊の風習。

○紀念樹　越後 小出彌生

十年の昔、父上は葡萄の一樹を後園に植え、最愛なる娘のために聖書の一句「約翰十五章一」を與へて永く眠

り給ひしが、春秋めぐりて十年、今夏、父の手植の葡萄の樹は塁々として美事なる果を結びぬ。

父の生命は永遠なり。

○午後一時　和歌山縣　池見俊子

日はかん〳〵と照つて一陣の風さへない、白けぶりのやうな埃は庭一パイ、今恰度私の家では麥うちの眞最中であります、唄の間々に與作の放つ拍子聲の可笑しいのには自づと勇む皆の勢！私等もちつとも苦しいとは思はない。

歌の様。

○私の書齋　京橋　ひな菊

私の書齋から御隣家の花壇に咲き亂て居る鬼臼草や、薔薇、露草、其他西洋の名のむづかしい美麗な草花に、舞姫が戯れて居るのが觀えるのよ、而して風が吹く度に何とも言ぬ好い香を吹き込て與るから、至てパラダイスへでも行つて勉強して居る樣な心持が致しますのよ。

花園の舞姫、書齋の上臈。



○牝牛守　三河　かつ子

朝に星を戴いて家を出て、笹川堤に沿ふで牧場へて〻可愛牝牛のお守をするのが私の毎日の務てあります 牧場からは私宅の花畑がよく見えます。そして一日牝牛と遊び戯れて鴉の聲々と叫びつ〻塒に急ぐ頃、月を踏むでかへるのです。

○命日　駿河　月見草

今日は、姉様の御命日なの、私はお花を持つてお墓のお掃除に行きます今日は姉様のお好の白百合の花を持つて行つたの、そしてお墓を奇麗に掃いて未だ露を含んで居る百合を、手向けて、そして家に歸つたら、お母さんが、賞めて下すつた。

○食後　南多摩　しん子

私と母は御飯後いつも食卓の前に五分や拾分はきつと座つて居ます、すると父が緣遠くなつて困るよと笑ひますから母は私等は今度の緣は遠くなくつては困ると大笑ひを致します。

○梅雨の頃　羽後　一葉女史

古里遠く離れた此校舍にあつて自分の身の弱きは忘れ果て〻毎日々々朝な夕なに思はる〻は家内のものである入梅の頃となつて何となく面白くない時候となつた…古里にますおぢいさんやおばあさんは今頃は如何におはしまするやは何時も何時もこればかり案じられるのよ。

艶町　淺井千鳥子

○ひなの悲　仙臺　岩田よし子

先日私の家にひながかへりました、親はいつもねる時大切そうにだいて居ります、或朝私はいつものやうに餌をやろうと思ひ、出て行きますと

まゐ鳥小屋の前は羽がちらばり、壁に大きな穴があいてなります、あとにのこつたひな三羽、恐しそうにひよ〳〵泣いて居るのです。

○星月夜　　東京　涙光

恰ど絹張りの簾に螢が光つてる樣、星がいつぱい輝いた夏の晩、庭に下りて空を仰ぎ、呼吸をすると、滿天の星が吸ふまゝに口にはいつて來る

○田舍娘　　奈良　中富よしみ

皆樣妾は毎日畑打や草刈を業として居る賤しい田舍娘です、殘念ながら未だ電氣燈や自動車等云ふ立派なものゝ影を見た事は無ければ、又此頃よく流行る煩悶とか厭世とか云ふ事もたゞの一度も經驗した事がないのです。

○朝の一時間　　京都　吉田靜枝

藤村詩集を小脇にして畷道を辿ると軈て小松原に入る、松の緑、所々にふく新芽、今にも緑の雫が滴りそう。松の雫ほろ〳〵と零れて眞砂路を打つ妙なる音、夢の如く響く浪の音、少時は恍惚として無我の境に迫ふ樣な心地。是れが私の朝の一時間であります。

○同縣人　　京都　片山蘆雨

今年博覽會見物に行きました處、はからず同縣の人川崎千代子樣と同宿しました、二人はまるで同胞が出會ふた樣な氣がしまして、何處へ見物に行くのでも必ず連れだちて行きました、そして歸へりてからも月に一度位は便りをしない事がありませぬ。

○祖母樣　　神田　吉田たつ子

妾の祖母樣は、今年八十四ですが、未だ中々健康で、毎日必ず近所の神樣に參詣します。孫や曾孫は勿論多勢ありますし、玄孫も四人になりました。それで、祖母樣は、妾がお嫁に行く迄生きて居たいと仰しやつて居ますし、他の者等は米の祝まで御丈夫で在るやうにと云て居ります。

○夢　　岐阜　華醉女史

玉子を巣に入れてから今日で丁度二十一日目！

『明日頃は孵化るでしようれ』と文さんとふたりが、樂しんで床に就いた其夜、文さんも妾も、可愛らしい雛子が十一羽！而かも悉く無事で孵化つた夢を見ました。

○花畑　　本郷　朝井松子

四季折々の活花の料にとて裏庭潰しての花畑、廣さは僅か十坪に過ぎれども、晝は胡蝶の樂園と成り、夜は松虫鈴虫の家となる。

○疑問　　芝町　哲子

兄さんは妾の事を御轉婆々々やつて馬鹿にしますの、それに母さんまでがお前は出産當初から御轉婆だつたなんて言ふんですもの、妾何しても御轉婆かしら。

○呼聲　　麹町　里子

豆腐屋は喧しくゆく、豆やが鈴をならす、節のよい聲で苗やが通るしばらくすると屑い〳〵と鼻聲でいやなこと、下駄や鼓をうつ、花いと可愛い聲で過ぎると、ちやん〳〵と巡禮歌のおゝなつかしい。

○御裁縫　　福岡　猪城文子

私御恥う御座いますが活潑の度を過て御轉婆の方で御母樣に御裁縫をせよと云はるゝのがなか〳〵心痛て有ましたが漸く此頃女の務はテニス許りにないと云ふ事に氣が替まして、此頃では御裁縫が進み、毎日御母樣の御機嫌のよい御顏を見るのが何より樂しくなりました。

○見送り　　天神町　美壽子

旅客は皆乘り込んでしまつて、やがて汽笛がなると、汽車は大きく煙を吐いて徐ろに動き初める、一樣に乘客の體が左右にゆれて、互に左樣ならと斗り…私は人を見送りに行く都度、いつも其時が急に悲しくなるのである。

○涼しきもの　　信濃　山浦みどり

なる神のおどろ〳〵しく木の葉の破れん許りの雨はやみぬ、女子文壇片手にして蚊帳の中よりはひ出てつゝ門に至れば、遠山に歸り行く雲、そよそよと風になびく一面の青田、すた〳〵と雫を散らす四五分の青柳、水増して暑さを小川に魚まつ子供等、夕風に動く若葉の影一つとして涼しからぬぞなき。

○ねむり　　筑後　筑紫女史

おお暑い日、机に靠れてゐますと、母とお三の、針の手がにぶくなつてこくり〳〵居眠ります。妾が、咳をしますと、針の手が早くなります。それが幾度となく繰り返へされます。

○狐　塚　　牛込　石田文子

夢刈終へた黒い田を左に、雪と白い卯の花垣を右に、朝霧深い諏訪の森を夢心地で獨歩く。と見る足下に五分玉珊瑚の銀簪が露にぬれてある。噂つてきけば、昨夜狐塚に幽靈が出たさうな。

○老　松　　紀伊　田中文子

私の家の庭に百年餘り經た古い松の木があります、故あつて此度切る事になりました、傘の樣に枝を擴げて幾多の年月綠の色こう榮えし此松の名殘を詩にうたふて弔ふてやりたいと思います、けれ共私は詩人ではありませぬ。

○精靈送り　　相模　野島里子

お父樣が麻殼を焚きつけると、お母樣が線香をお上げになる。妾は茄子のお馬を向ふにむけた。『では俊さん、お靜かにねえ。』急に焚火がもえ上がつて、ぱつと四邊が明るくなる。お母樣の眼はうるんで居ました。

○我が學校の制服　　盛岡　蕉雨

木綿の筒袖に、木綿の袴、リボン等は一切用ゐず、全く頭飾りもなく、胸にはニツケル製の梅花の徽章…梅は質實で盛り久しく、高尚なる香をはなつ、あゝ私共はこの樣にならなくつてはなりませぬ。

○根づけ　　福岡縣　うのはな

こゝ十日いづこも植付に忙しい時、例年ならば机に倚つて寫生もしてゐるが今年は少々體に異狀があつて休學してゐる故氣ばらしに强ひてお母樣にお願ひして田植ゑに手傳つた。どうか私の植ゑた處は尙よく出來ればいゝがと毎日樂んで待つてゐる。

○夏　帯　　下野　栗原くに子

町へ御使に行く途中に行逢つたのは東京の何大學とやらへ御入學なすつた御隣のみき子さん、今日は休みなので來たのよとの御言葉、御顏の色も青白く、そして大變御やつれなさいましたので、何處が惡いのですかと伺ひましたら、イヽエ夏痩です。

○白百合　　埼玉　戸張とめ子

此の間、母樣の實家、それは下總で山里ですのよ、そして從姉と二人で山に行きますと、白百合を見付て、大切に家にもつてかへりました、可愛がつて居りますが、何が恥しいのか、うつむいて居ります、此の樣によいきりようで居ながらに。

○私の日常　　長崎市　峯時子

午前は家事の手つだひに忙しく、後は裁縫これ又夕方まで夜に入つてから漸く私の躰です好きな〳〵女子文壇を讀むで枕につくまで。

○うつしゑ　　府下　失名

紋織斜綾の吾妻コートのが叔母さん、セーラ服にセーラ帽のが叔父さん正裝軍衣に青色桐葉章を懸けて居るのが兄さん、派手な友染の被布被てるのが妹の癸いちやんよ、そして海老茶の袴穿いて、右に本の包を持て居るのは、妾が高等四年の時撮影つたのですわ。

○行　春　　越後　松山けん子

藤も散り牡丹も崩れたり百日紅も大きくなれり裏の林は綠りの色いよいよこく物干竿をみれば白衣のみ多かりき嗚呼春は近きに去らんとす。

○縁端書に　　福岡縣　原鶴子

今朝私は例より早う起きまして裏の花畑に行きましたらあの姉樣のお寵愛になつてゐました白百合が丁度笑う開いてゐましたそして葉といはず花といはず露の玉が今にもすべりそうてした私は硯に受けてこの玉の樣に氣高い繪をと……繪はまづいてすがあなたのすきの白百合畫て書いたのですからお笑ひてないよ。

○電話口　　横濱市　高岡政子

此間の日曜に懇意の内へ電話を掛てお友達に言傳を賴みましたら先の方は大變丁寧な人て心好く承知して下さいましたから妾嬉しくソレデハ如何ぞお願致升左樣なら電話へ向ておじぎを致ましたら側に信坊が居てア夕姉樣が電話へおじぎをしたよつて其時の妾の顏は。

○牡　丹　　陸奥　久井さえ子

内にある牡丹の中で、一番小さなのが、今年初めて、薄桃色なのが二ッ咲いたので、御父様から、御許を得て、後の御山の乳母様の處へと、摩挟て愛して下さる、先生の御内に、持つて行つて上げました。

○油繪　兵庫縣　木村蓮子

妾の家の隣りにアーチバルドと云ふ米國人の別莊があります妾は日頃油繪を愛して此米國人と親密にして居ります時々遊びに行きましてルームに掛けてある風景畫や美人畫などの額に見取れて居りますのが何よりの樂しみてあります。

○初夏の渡　奈良縣　芳野浪子

妹背山の霞は青嵐にさつと吹き散らされて、櫻の渡の櫂は舟に變へられたわ、そして渡守はあの白髮の爺さんでは無くつて、其の美しい娘が美麗な腕に竿を取つて、爺さんに成り代つて、清い〳〵吉野の流を碎いて居るのよ。

○櫻實　千葉　ゆき子

兒童が自ら作つて自ら書いた頑是ない詩が集つた茲に小さい詩集が一册出來たさて何と名づけ様かよき名が更に思ひつかないふと眼を放つと教室の硝子窓に迫つた櫻若葉其葉蔭れに黃や紫や櫻の實がうつくしうおゝ櫻實。

○田舍生活　高知　あげは蝶

今日は日曜日て朝より兄人に從ひて芋掘りに行つた初めての働きて身體は疲れ其の上芋をになつて歸へつた所が母上樣はぬく〳〵した麥飯に新味噌の汁物で大御馳走。覺へず疲れもわすれてしまつた。

○夏座敷　呉市　世良ふみ子

窓から吹き込む青嵐に、床の香爐の煙が靜かに搖いて美人草がはら〳〵と散る。青簾の奥は碁を打つ音が聞えて、軒端の風鈴の音が涼しい。

○少女　鹿兒島　池田てい

少女ほど可愛く又無邪氣なものはありませんそして正直であつて物事に分別のないところは一そう何んともいはれません少女のたましひにはきつと神樣がついて居られるのでせうそれて私等も、つまでも少女てありたいと思ひます。

○桑摘　愛媛　英子

「ヤー晝たわ」、と下男の松吉が頓狂な聲で叫んだ。皆が言ひ合した樣に空を見た。主人が出て來て「降るかも知ん明日の桑がない早く皆取に行け」と　命令された。妾等は同勢八人跣足のまゝ籠を背負つて駈けだしました見ると何處の桑畑にも姉さん冠の白手拭が七つ八つ宛。

○蚊　下總　板橋ただ子

私は夜になると妹や弟が蚊に攻められるので可愛想でならないの、ですから私は毎晩二どづゝ起きて蚊狩をやるの、昨晩も例の通り狩り始めると美ちやんの腕にくひついてゐつたので、こいつ一番と生捕にした二匹美ちやんの敵と一ひねり其の時の痛快たらなかつた。

○自殺　北海道　藤本鳥羽子

私は毎日新聞の三面を見ると實に悲しく情なくなります、夫は何より大切な命を自ら捨る人の多い事で、原因はいろ〳〵ですが、つまり彼等には安心立命と云ふ立派な心の礎がないからて、死ぬ程の覺悟で何か國家の爲に盡したらどんな立派な事も出來ます。

○鶯　磐城　佐藤美子

必ず足など切らぬ樣にと、最と情深き母上の言葉に、青草生ひ茂れる野に刈鎌、刈り染めぬ、一間二間と、段々刈り行く程に、それは〳〵美しき鶯の子三羽、直に刈る手止めて取らんと思ひしが、情深き母の心思ひ起されて。

○姉の病氣　北海道　茂木利久子

姉樣が夕方から急病に罹り苦しんて居ります妾が看護して居り升妾の住家よりは町の醫師の所迄は二里餘り嶮岨にて夜道は出來ません、もう夜が明けるかと思ひ表に出て見ると月は西山に傾むいて何やら鳥が一聲啼きました。

○氣味わる〳〵　駿河　ぼたん

昨夜一時半頃てあつた小用に起きて手をすゝがうと手水鉢から水をすくつてかけるとヌニヤリ柔かいものにふれたギョッとして手を引くと同時

ヒタリとあんがはて何か落ちた音がした。燈をつけてよく見たら夕方南天の木に居た雨蛙であった。

○蚊帳　　靜岡　大石貞子

亂髮しどろになつた、窶れた顔を冷たき枕におし當てゝ取留めなき夢より覺むれば、何時の間にか夕日が落ちて、宵闇が此の室にも迫つて、初めて麻の香り高き蚊帳がつられて有る、嗚呼蚊帳、もう蚊帳つる夏となつたのであろうか、軒に籠の螢が淋い光を放つて居る。

○雨の鎮守　　兵庫縣　白蓮女史

雨の夜妾は五町ほど離れた鈴子さんを訪ひました、其の道筋の鎮守の杜、盛なら翠り滴たる雜木が並んでゐるのが青く見えますが夜は暗いのみてす、たゞ降る雨が葉末に露を宿して其露がお格子漏るゝ御神燈の光りにきらく〳〵と光りて水晶のやう一きわ神さびて居ました。

○雛子　　美濃　臼井宮子

朝起きて洗面を使つてお庭を逍遙ふと、つい此間孵化つた可愛らしい雛子が十一羽！親鶏に逐れられてちよ〳〵と泣き乍ら、ぞろ〳〵と妾の跡からついて參ります夫れは私が毎朝お米を與へますからてしよう。

○夕立空　　上野　大沼楓子

紺色の雲が、蒼空一面に塞ふて居て、時々起る稲妻につれて遠雷の鳴る音、風は烈しいが雨は未だ降らない。田圃から歸る兄を待つて、とぼそに彳めば、雲に添ふて飛ぶ燕二羽、外の小島は何の聲もしない。

○妾の願　　上野　小暮たつ子

妾の願は雲雀となりて青空高く舞ひあがり黄金のやうに咲き亂るゝ桑の花や美くしい八千草の花を高い青空から眺めて見たいのです。

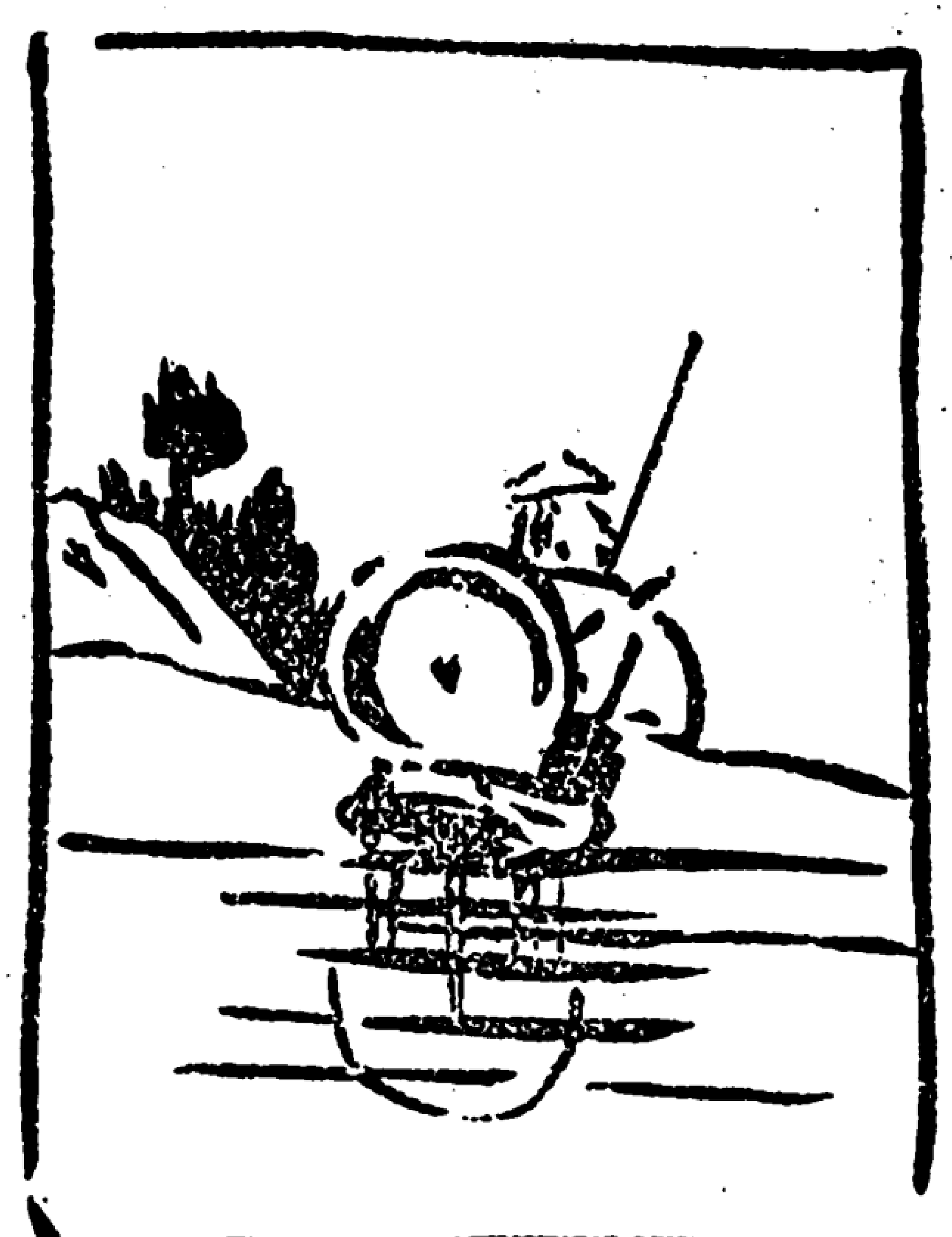
○世外　　甲斐　矢壽子

朝校門をは入ると彼方からも先生お早う此方からも先生お早う御座いますと驅け來る子等を見るともう今迄兎や角と思ひし事は皆消え失せ浮世を遠く天國とやらへでも行つた樣です、こうして午後四時頃迄・・・又校門を出づれば矢張り塵深き浮世の人と成るのです。

○心地よい時　　備前　八重櫻女

朝早く庭に出てゝ新空氣を呼吸する時とお湯からあがつて髮ゆうたときと清らかな室で女子文壇を讀むときとそして又朝早くほとゝぎすの初音をきく時が一番心地よい。

渡し　愛知縣　柴田しげ



○大久保彦左衛門　　岐阜市　篠田とみ

姉上がニコ〳〵笑つたやうなお聲でお母さんに話して居なさるのがふと耳にはいつて、私も亦一人クス〳〵笑ひ出しました、それは近所の畑中に大久保彦左と云ふ人がありますので、私が帳面につける時、勝手に衛門を附けといたのを見つけられたのでありました。

○慈姑　　石川縣　ルビー女史

此間叔母樣から慢作の慈姑を二升戴きましたから其内三ツを洋瓶に水を入れて、書齋に装飾つて置きましたら、最う此頃は根毛は充滿蔓延り芽からは青い〳〵葉が數知れぬ程出きました。

○ひよこ　　上野　あかつき

柿の木の下でまだ尻尾の出ないひよこが九つ、親の眞似して砂をあびて居る、小蝶が一つ來て、嘲弄樣に頭の上をかすめる度に驚いては追ひかける、柿の花が二ツ三ツこぼれると競ふて拾ふ、弱いのは押倒される、見て居ると中々面白い。

○にくいねずみ　　青山　白ゆり

御父樣に買つていたゞいた大事の〳〵バラのかんざし、昨夜仕まふのを

忘れてれたら、今朝机の上にめちや／＼になつてこわれて居ました。

○六　月　　播磨　石原富子

早乙女の田植歌畔より畔に移り行く昨日今日、内は蠶の上簇外には麥苅田植と其模樣の見事さ、彼方青々と初夏の風そよふく中に白手拭と赤だすき、此方黃色の麥田の内には苅取る男の黑き裸、これが我が家の六月である。

○隱れん坊　　本郷　柴田さよ子

洗濯物を貼板に貼つて居ると、弟と妹が隱れん坊をして居るらしい、妹が鬼の番で「ようか／＼」と探し廻つてるが返事がない、とう／＼母に何かれだつて居る。貼物も了へたので、ぬぎ去りにして置いた袴を疊まうとすると、中から寢ぼけ顔の弟が……。

○明日も天氣　　山形　唐松すゑ子

昨日東京から二年目で歸つて來ました兄さんの手に摑まつて「螢來い飛んで來い餅の頭の露けんぺい」と庭の築山を散步してると三郎は兄さんに買つたハモニカを吹きながら來ますお父さんは盆栽に水やる手を止めて「ハア明日も天氣かナ」

○ほしいのよ　　日出子

私は獨りなので御友達が御兄弟の御話し遊ばすのを伺ふと、羨ましくてしかたがありませんので御母樣に兄弟がほしいつて申上げると、何時でも惡い兄弟を持よりはないほうがいゝつて、仰つしやるのよ、だけど私どうしてもほしいのよ。

○五家ノ莊　　熊本　江副ちかつる

と云へば私の縣下で二とは下らぬ邊鄙の名。壇ノ浦に亡びたと云ふ平氏が落ちた地だと人は云ひます。其昔一族五家で有つたのが今では十數戶の一小村を成してるとの事、從來堅く閉鎖したので知る人もなかつたが近頃漸く開放された。

○妾の實　　藤代町　よね子

昔は御倉も立ち並び、田も多かりしものが、今は九尺二間の裏長屋炊ぐ畑は細くとも、父がかみひの鎗は失せぬとも、一人の母こそ、妾の實なれ。

○理　想　　姬路　田村重子

妾が人の妻となつて、一家の内政を執る樣になりましたら、スイトホームは勿論家內中のものには、粗末な被服(木綿物)を着せて、お食事の時には何時も、美味しいもの(滋養物)を獻立てゝ、健全な英氣ある家庭を養成しようと思ひます。

○交換手　　薩國　永濱幸子

妾は本年十七才で御座いますが、云ふもはづかしき交換手になりましたら、妾が第一のおてん婆となりました、前は此の樣にまでおてんばてありませんでしたのよ。

○妾のつとめ　　茨城縣　仲田百合子

青い／＼海の樣な麥畑と、黃金色の花の上に黃蝶白蝶ひら／＼と舞ひ居る菜畑との間を通つて、村の學校へと着いた、きれいに掃除せられた運動場には、はや生徒が參々伍々面白そうに遊びをしてゐた、妾は無邪氣なるこの生徒と共に學び遊ぶのが務めなのである。

○投　書　　青森　三浦和歌子

私の投書が誌上に载らないと、もう本誌を讀む勇氣がなく成ります、けれど載つた時の嬉しさつたらありません夜も寢られない位です。

○三　食　　多摩野　菊

此の頃私の內では、朝母樣のお料理番で、お晝は私がするのよ、先日お伯母樣が御出の時私がお料理して、出しましたらほめられましたの、そして夜は兄樣が玉川から取つて參ります鮎の御馳走で、父樣はいつもにこにこして召上ります。

○卒業して　　藤澤の里　わかば

妾此春學校を卒へて家へかへりましたら今迄四年も久しい間寄宿舍生活をして居た故か放飼にされて居た鳥が急に籠へても入れられたような心持がします。

○ねむられぬ夜　　宮城縣　千葉きわ子

プーンと一時眠られぬまゝに庭に出ると生ぬるい風につれて梱の香夢の様、今宵うす絹をかけたやうな月に青葉山の郭公が一聲。

○公　園　　盛岡市　中澤野菊げ子

こんと當市にも公園が出來ました、舊南部氏の御城跡でこけむした石垣はそのまゝ昔の姿をしめし、烏帽子石や時雨の松など目の下に見おろし空をあふげばみどりしたゝる松が枝に綾なして咲た藤の花、それに又來年になれば南部中尉の銅像が立つのです。

○いたづら　　羽前　杉葉女史

妾が出先から歸つて來ましたに靜上の姉様より美しい繪葉書澤山送つてありましたから持合せの美人畫てお禮しませうとて机の引出しを拔いて見たらこれは〳〵美人の顏はみんな入字髯に化けて居ました。

○蜘蛛の巣　　小諸　花ぞの守

春風に弄られながら朝日に輝く蜘蛛の巣を見ると、丁度、銀の細い針金のゼンマイがゆるやかに廻はつて居るかの様、其美しい事、と、何處からともなくプーンと飛んで來た小虫が其網に引掛つた、あゝ此麗しい細い糸が澤山の虫の命を取るのであろうか。

○妾の樂み　　備中　篠原しげ子

妾は漸く此間十六羽のひなをだし朝は早く起き餌を與へ晝の間は母に頼みおいて學校に行き歸る道すがらも母は年老いて居らるゝ故若しもわすれられはしないかといそぎ歸りて餌をやり一日も早く長じて卵を生むやうに待つてゐます。

○農　業　　能登　張間花枝

都の人々が花見に樂みの時分私等は田をうつたりたがやしたりするのに少しのひまも有りませぬ昨日て田植をすましましたが是より又田草を取るのに目がくらみますけれど秋の取入にお米のたく山とれるのが此上もないうれしいものです。

○島泊の朝　　豐後　鈴木さち子

起きて見ると雨が霽つて雲雀は早や今日の快晴を歌ふて居る。水天の界なき唯はゞ中空の、絹に包まれた如な嶼の彼方靄の奥に、光輝なき日輪が海を離れて未だ間がないらしい。洗顔して波止場を徘徉ながら不圖顧れば、濛々と烟ぶる青葉の上の島寺は宛然の蜃氣樓！

○夏の池　　石見　石橋浪子

黄ばんだ梅の實が浮玻璃のやうにきれいに澄んだ池の水に映ると何所からか涼しい風がそよいて岸の若草にさゞ波が立つ、途端家鴨が夕ゝと啼いた。

○夕　雲　　下野　桒谷德子

女神のしとれとも覺ゆる如き紫淡き夕雲は今し彼方にそびえ立つ筑波山の松の林を横ぎりつ靜かに靜かに南の方に流れ行く吁かの雲の行く處そも詩の神の棲家なるか。

○郵　券　　埼玉縣　近藤登久子

おゝ嬉しい私が原稿を書いて居たら、父様が二錢郵券澤山持つて來て下すつた。其の譯は私の住所は片田舍の實に不便な處てポストは直き近所にありますが其の家には何時も三錢郵券と葉書しかありませんのよ、それて私投書を書いてから二日位は何時も後れたのです。

○兄と妹　　神田　藤村眞

妾が道上寺の（梅と櫻は何れ兄やら弟やら）を唄ふ度に兄様は（お前とおかめは何れ姉やら妹やら）つて仰有るのですもの、腹が立つけれど笑はずには居られません。

○茶つみ　　薩摩　林　女

今にも取り出して着更へし初單衣身輕るに左手に籠もちて今日は八十八夜の茶つみ日て我等一同は町はなれて遠き茶畑に出た青空に一點の雲もなく雲雀の聲のどかにこゝかしこにも茶つむ人のちらほら見えた。

○小石川の友に　　和歌山市　佐喜子

お手紙ようこそ嬉しかつたわ、神棚の布袋様のお臍の大きいのと石臼の重いのと天井裏の黑いのとは、村ての名物てお宅よりかずつと涼いわきつと入らつしやいませ、門に榊の大木があるから迷子になる氣遣なし、貴女のお好きな眞瓜を作つて待てますわ。

新笑話

編輯局選

三等

○百度

静岡縣沼津町城内町方　三浦ます

「早く御醫者をよんで下さい、體温が四十度あるよ。」

「だからあなたは神經家よ四十度ばかり何ですれ夏になれば百度になりますよ。」

四等

○博覽會見物

門司市日出町九、赤司方　彌吉はるみ

春子「花子さん昨夜博覽會見物の夢を見なすつて、ほんとう」

花子「はいなか〲美しかつたのよ」

春子「あゝそう妾一緒に寝たかつたわれ」。

五等

○英語の本

下野國芳賀郡眞岡町　榮谷徳子

子供「アムニカを買つて下さいな」

父「そんな英語の本など何する」

○名古屋の村長

三河　白百合

親父、子に向ひ「手前は學問々々と云ふが學問して何になるんだ 名古屋の 村長 にでもなるのかい」

○お辨當

小石川　山崎ふさ子

けちな奥さん山だしの下女を客間へよび「明日」博覽會へお客様を御案内申すのだからお辨當を拵らへて置きな」下女「お辨當は要りませんよ」奥さん「ナゼ」下女「でも會場内で賣つて居ますから。」

○水がぬれる

廣島縣　今西初野

子供「母さん早く井戸の蓋をなさい」母「どうして」子供「あの雨が降つて來たから 水がぬれるといけないわ」

○石炭酸

秋田縣　金澤季知子

新參の田舍下女化粧室に入り來り「お嬢さん東京の石炭酸と田舍の石炭酸と香がまるで 別ですれえ」

○思ひちがひ

静岡縣　岡村博子

主婦「きたないから前垂て庖丁をふいてはいけません」下女「イエ前垂は洗ふからかまひません」。

○ほんとの話

若狹　津田汐汀

子供「お母さんお話しましよか」母「アヽ云ふてごらんなさい」子供「ある所にお菓子が紙につゝんで有りましたそれを僕が みななくしてしまいました」

○化學試驗

安藝　碧星

「アヽ中村君いつも化學には熱心だれー」「ウヤ石田君かまあ一杯やりたまへ」「何を馬鹿な沸騰する工合では毒か劇かの試驗だろー」「いまあまり暑いからラム子を製いたのさ」。

○苦と樂

山口縣　池本琴月子

「オイ金公、苦は樂の種だ、しつかり働けやい」「莫迦奴！うちの親爺を見ろい、俺は 若い時にひどく働いたんで、今ぢやあこんなに 腰が曲つて難儀だつて零してらあ。」

○入學試驗

埼玉縣　田島つれ子

甲「貴女今度の入學試驗に何番で及第しましたか」乙「八十番でした今年は入學願者が非常に多いので失敗者が六十人あまりありましたからなかなかほれてした。」

○廣告の間違

牛込　川上清月子

商店の主人、新聞社の廣告係に不足を並べて曰ふ、昨日の當商店の廣告は肝要の字が違つて居て夫れも一枚や二枚なら 仕方もないがなん枚も何枚もとはひどいではありませんか」

○夢

福岡縣　建部艮久子

妹「姉さん昨夜の螢取りの夢は面白かつた子」姉「オホヽヽあなたの見た夢を姉さんがわかるものか」妹「だつて 姉さんと二人で取りに行つたもの」

○早歸り

駿河　齋藤敏子

母「坊や最早お歸りかれ、早かつたれえ」坊「えゝ先生が歸へつても宜いと云つたから」母「左樣坊が宜く出來たからだれ」坊「いゝえ惡戲を爲たから」

○同じ仲間

神田　吉田たつ子

博覽會見物に上京した田舍おやじ同じ見物のため上京したおじいさんを見て「東京にも隨分田舍じみたじい樣が居るノウ」

○喇叭

山形縣　國松紫汀

「健坊喧しいから喇叭なんぞ止せ」「じやあ父ちやんが眠つて居るときに吹かふ」



文學顧問

問 記者樣私は高等女學校迄すみましたもので御座いますが英語は少しも致しませんでしたが今になつて後悔致して居ります、今からでも少しづゝ學びたいと思ひますが田舍ですから先生もありませず何か初等の英語雜誌でも取ればいゝでせうかどんなのがいゝでせう御伺ひ申します（さぬき、たけ子）

答 此外筑前の河村みどり子さん、下野の青木たか子さんからも同じやうな質問が參つて居ります、皆さんが英語を習ひたいと云ふ氣が着きましたのは誠に結構なことです、其方法ですが、それは皆さんが便宜に從つて方針をお取りなさい、書物でもよし、雜誌でもよし、直接、師に就くのもよし、一字も知らぬ方が直ぐ雜誌をお取りになつても分りにくいでせうから、然う云ふ方は先づ近くに居る誰かに就いてお習ひなさい、ＡＢＣやリーダーの一ぐらゐ讀める人は何處にだつてあるでせう、それから少し讀めるやうになつたら初步の讀本を習ふとか、雜誌を見るとかするのですが、獨學は餘程の決心を以てかゝらないとだめです、先づ師に就いて修得するのが一番好い方法です、獨學するにしても初めは讀本（リーダー）をやるのが順序です、讀本をやらないのは變則です、なほ初步の英語に就いては本誌の英文欄を受持になつてゐる河井道子先生に其お說を伺ひ、近日本誌上に揭載しやうと思ふてゐます

問 俳句を學ぶに一番分りやすい初學者に最も適當な本の名及び發行所等敎へて下さい（みどり）

答 高濱虛子著『俳句入門』（本郷西片町內外出版協會發兌定價二十五錢）などよろしいでせう

問 記者樣一寸御伺ひ申します長者に手紙を上げる時は上を多くあけるものでせうか下を多くあけるものでせうかどうぞ御敎へ下さいまし（福島縣あくがれ人）

答 古式には何とかありますけれど、手紙の天地（即ち上下）は同じ樣に空位をあけて置くのが宜しからうと思ひます、わざと上を多くあけたり、下を多くあけたりするのは、恐らく常法ではありますまい

問 學生と言ふのと生徒と言ふのと何か區別がありますか（京都府、冷陽）

答 別にむづかしい區別はありません

問 妾の許嫁の夫は東京になりますのですから私もゆく／＼は上京する身なのですが私は當地でミシンを少し習て居ますのを幸ひ麴町有樂町のシンガーミシン裁縫女學院へ入院しようと思ひますが卒業後東京で內職としてやつてゆく事が出來るでしようか本欄の趣意には違つて居るか分りませんがぜひ御答へ下さいまし（田舍娘）

答 實際の生活問題ですから、必ず出來ますと云ふ確答は致しかねます、けれども道理上、出來る筈です、殊にミシンの內職は比較的有望な方でせう

問 和洋裁縫女學校の所在地を問ふ（備後、希望女史）

答 麴町區飯田町三丁目（九段）

問 東京府女子師範學校の所在地を問ふ（埼玉清子）

答 小石川區竹早町

問 論文の作法心得など初めてのものに參考となる書物御座候や沼波先生に御伺申上候（某女）

答 論文を作る參考書としては江藤桂華著「論文作法」（定價十五錢、渡邊書店）「懸賞論文集」（定價六十錢、金港堂）大町桂月著「筆のしづく」（文祿堂）又は福澤諭吉等の集を見るもよろしきか（環音）

問 女子美術學校や女子職業學校を卒業すれば直ぐ高等女學校の敎師になれるでせうか（長崎、一女子）

答 直ぐと云ふ譯には參りますまい

問 記者樣田舍の私共は半紙の事は卷紙の事と存じて居りましたが此間或人は東京邊では西紙一枚の事を云ふと敎はりましたがどちらがよいのです（山田たか）

答 半紙と卷紙は大變ちがひます、卷紙は手紙など書く細長い紙、半紙は長方形です、地方でも半紙の形に變りはないと思ひましたが…

諸孃と記者

○記者さん、妾寫眞を送りたいと思つて居ます、どうすればよいのでせう、御教へ下さいまし（上毛小田郡毛里田村金井春子）（記者曰、お寫眞だけを封筒に入れ、「寫眞在中」と表書し、本社へ宛てゝ郵便にお出し下さればよろし、御返却をお望みなら寫眞の裏に「乞返送」と書き添えて下さい）○本誌愛讀三年紀念日が九月一日にあたりますの　去年九月一日愛讀二週紀念で私のまづい寫眞を送りましたら九月一日誌上に出して有りました　私寫眞大好百枚以上も有りますからよろしければ送ります（佐久間松代）（記者曰、同じ寫眞を百枚も頂いた處で仕方はありませんが、異ふのなら拜見の上、紙上に出します）○記者樣大變暖かになつてまゐりました、私、函館春江子樣の御說に賛成でございますのよ、どうぞ記者樣方のお寫眞を乘せて頂戴な、後生でございますから、あの和歌一首限りでございますの、御自愛遊ばせ、さよなら（東京康子）（記者曰、ありがたう、和歌は一首限りてす）○記者樣は御親切で表紙が美つくしくつて文章がよくつてほんとに本誌は天下無二よ　妾は記者樣の御寫眞を見たくつてなりませんのどうか口繪へ出して頂戴な御願だわ（紀伊岡崎ゆり子）（記者曰、然う言はれる方は澤山ありますが……）○記者樣失禮な事伺ひますが寫眞はだれでも出してよいのですか　又は賞をいたゞいた方ばかり出すのですか（本郷遊學七草子）（記者曰、愛讀者ならば、どなたの寫眞でもよろしい）○賢明なる皆々樣方よ賤しい筆にて本誌に投書しましたから笑て見て下さい　妾の住居はそれこそ山紫水明の地です　以後ます〳〵御親密に御交り下さいね（宮城縣栗原郡金田村瀧野齋藤惠津子）○妾にもお寫眞繪ハガキ其他宜しく御交際をねがひます（靜岡縣小笠郡大坂村八木とよじ）○記者樣、あの一人で短文、圖畫等同じものを二つも三つも出してもいゝのですか。妾し昔の姉樣のように作文小說のようなむづかしいのはよう作らないのよ、未だ小學に通つてるのですもの（備後、みどり子）（記者曰、作り易いものからお作りなさい、小說などは成程おつしやる通りむづかしいでせう、本誌は十四五の少女諸孃にも澤山の讀者を有して居ますから、少女の方の投書も歡迎します、但し同じものは一つに限ります）○記者樣私は田舍の商家の娘であります　二三雜誌を讀て居りますが本誌は當地の取次書店を經て拜讀致し居りますが社員でなければ投書は出來ぬのですか次號に御教へ下さい（新潟縣三島郡與板町山田たか子）（記者曰、讀者でさへあれば、どなたでも投書は出來るのです）○賢明なる記者樣私の處に名所寫眞が數枚ありますが差上れば誌上に載せて下さるでしよか　次號て御知せ下さい（筑前、松雪子）（記者曰、載せます、本號にも御寄贈のがだいぶ出て居ります）○記者樣御伺ひ致します　原稿を送つてから何ヶ月ばかりおくれて出るので御座いますか　四五ケ月も出ないのはもうだめて御座いましやうれえ心配てす（ふさ枝）（記者曰、左樣四五ケ月も出ないと、まア出ないとあきらめて、次のを早くお作りなさい）○記者樣　私も種々女子雜誌を拜見致しましたがどうしても本誌が一番よ誰に伺つても評判が宜いのですもの　此後も尙一層發達させて下さいな　愛讀はして居りますがまだ一度も投書した事はありませんで是非一度は投書して見たいと思つて居り升が如何ですか一寸伺ひ升　愛讀の諸孃樣にも御交際を願ひ升（千葉縣香取郡佐倉町玉澤操）（記者曰、御評判ありがたう、思つてゐないて投書して下さい）○記者さまに一寸伺ひ申ますあの先月伏木から送りました寫眞着きましてせうか　まだあとに面白いのもありますから出して頂戴御送り申ますから（伏木ゆかり子）（記者曰、前號に出ました　結髮の實習、裁縫の實習てはありませんか、なほあゝ云ふ寫眞がありましたら御送り下さい、外の皆さんにもお願ひいたします）○記者樣　光陰矢の如しとかてほんとに早くうつりゆくものですわれ　春のたのしかつた事も次第にうすらぎ　最少しすれば早起させる朝顏の笑をこぼすのが今から待ち遠い事よ　其上に其頃は又　私の無二の友なる女子文壇も出ませう私どんなに一日が待遠い事てせう　母樣姉樣のすゝめによつて投書して見ましたのよ　嬉い樣な又何となくこわい樣ですわ　出ると嬉しいけれど此からは出なくとも出るまで投書しますからよろしう（岡山縣山田郡笠岡町西本町金谷花枝）（記者曰、母樣や姉樣がおすゝめ下さいますなら、記者がおすゝめ申す迄もありませんけれど何うか御熱心をつゞけて下さい）○白桃子、葉桂子、愛媛縣、山本開春子、靜岡縣、桑原絹子、直子、榊田、公子、敏子、上毛、青木守子、上總、董子、花蝶、大和、村雨、育秀小學內、市橋柳子、岩代、石川みどり、長門、高田沖子、若松町、田原あき、羽前、杉葉女史、丹後、松本みどり子、賤の子、函館、靜の、美作、服部白萩子、鼠蛟、

たけ子、飛驒、あやめ子、名古屋、とう子、かず子、いづみ子、むらさき子、麻布、すみれ女、大下みどり、遠江、森下富士子、陸前、松枝、崎玉、朝霞子、盛岡、瀧爾女史、神戸、千代子、越後、よれ子、中津村、町田つる、臺北、道部花子、牛込、美壽子、久子、京都、里枝、京橋、濱先、越後、きく子、近江、胡蝶、沼津、鈴木多歌美、山口縣、山野しづ子、近海、貴久子、大阪市、室谷ひさ、北海道、三宅みめ子、福岡、紀藤つ代、岡山縣、金谷花枝、岩代、三女、福岡縣、小川初枝、長岡市、迷小舟、仙臺、藤波澄子、岡山縣、岩井志津與、三河、擇花子、愛知、一少女、後志、三宅みめ、靜岡縣、增田靜枝子、以上の皆さんからの原稿は一々拜見いたしました、お申越の通りてよろしいのと、本誌の卷末にある投書規則を御覽になればお分りになるとには、別にお答へいたしませんから、何うか惡しからず思召下さい、猶、暑中の見舞狀を下すつた方には深くお禮を申し上げます、記者一同幸に健康ですから御安心下さい、序ながら諸孃の御健勝をお祈り申します。（記者）

諸孃の交際

○誌友姉樣方よ妾は片田舍に住んで居る不束者玉章やエハガキ寫眞の御交換を願ます（北海道小樽郡錢函村新陽花子）○妾は東京に住み給ふ音樂好きの姉上樣方と御交り致したう存じます、又繪葉書の御交換も願ひます（牛込區市ケ谷加賀町二丁目廿四番地奧ふさ子）○皆樣の中で吹風學ギン笛御持ちの方は御送り下さいな小說エハガキ編物どれでも御のぞみの物で御禮は必ず致します（常陸國眞波郡北條町坂入芳子）○皆樣餘程暑くなりましたれ私始めて皆樣に御目に掛かるのよ以後はどし／＼投書しますから末長く御交際を願ひます私女學校の三年ですの御暇の時には御手紙下さいなそして繪端書や編物の交換を願ひますよ（岡山縣小田郡笠岡町西本町金谷花枝）○私は三年前から女子文壇を愛讀いたしてなりますが未だ投書いたしました事はございませんが此から下手ですが投書いたしますから何分御れがひいたし升諸姉上樣も何卒淸い御交りをれがひます（東京牛込區矢來町十九番地幕田園子）○讀友の皆樣私は片田舍に淋しく暮して居りますからどうぞ寫眞玉章繪葉書の交換を願ひます屹度々々皆次第御返事致します（北海道石狩國夕張郡登川村字夕張炭山九十五號村木富子）○誌友の姉上樣よ妾は某女學校を出たばかりの不恙者ですが何卒々々永久御交際を願ひます尙繪葉書寫眞玉章の交換を願ひ上ます（東京市麴町區飯田町五ノ三小林方小林榮）○私は基督敎を信ずる者ですが皆樣の中でお感じなされた聖句とかお好な讚美歌を繪葉書に書いてお送り下さいますなら私方よりも即刻聖句か讚美歌を書いて御答禮申ます（大阪市東區上本町八丁目番外三九二蛇川方佐野玉晁）○皆樣私しは去年三月に父をうしなひ又本年二月母をうしなひました世にも不幸の者ですが近頃は御友だち其他のお方の御玉章繪葉書を御貰ひするのを此上もなき樂しみにして居ります皆樣私しも仲間に入れて下さい（大阪西成郡鷺洲村海老江南町一〇九一（生駒淸子）○誌友のあれ樣方私は至て無學なる者で御座いますが以後何卒エハガキ玉章寫眞等の御交換を永久的に願ひます（橫濱市巖町二丁目十三番地字田川方石黑きみ）○私は塵地を遠く隔て只今は深山の谷間に其日を送る身にて學の道もあらねば哀れ諸姉樣よ玉章繪はおきの御交換を御願致します必ず御返事は致します（山口縣佐波郡中關村向島中村五二一和泉方ほと丶ぎす）○慈愛ふかき諸友諸姉樣方よ此の間は無學無才の妾とも思召さず親密に御交り下さるとは誠にあり難く御禮の申上樣も御座いませぬたゞ有りがた涙にむせぶの外は御座いませんの失禮ては御座いますが謹上て御禮申上ます（大分縣直入郡竹田町字兎ヶ城木下きみ子）○諸孃樣へ初めて御目にかゝりますが御見捨てなく文信の御交際を御願ひ申し升（群馬縣碓氷郡後閑村大字中後閑内堀方青木糸子）○誌友の御姉君樣よ私は十七才の淺學無智の田舍者ですが今度末席へ加はりましたから皆樣よ永久的に御交りを願ひます（愛知縣知多郡大府村長草五十四小島幸子）○諸姉樣繪葉書、玉章の御交際併せて御交誼を願ます御禮には自筆の繪葉書にて御禮申上ますよれ御寫眞を送つて下さつた方で先着拾名限り小說其他の雜誌で御禮致します（靜岡縣磐田郡岩田村寺谷永井淸子）○私は今まで多忙で投書する暇も出來ませんでしたが今はやうやくひまになりましたから投書いたしますから御見捨なく私は愛讀者の一人です誌友の姉妹方て聖書のけんきゆうしたい御方は下名に御出下さい（麻布新龍士町五番地福谷以智子）○懷かしき誌友の諸姉孃よ何卒繪葉書玉章寫眞及編物の交換を願ひます必ず五日以內に相當の物を差上ますよ（越後古志郡濁澤遠山藤吉樣方日下きよの子）○誌友の皆樣妾は幾ぶ伏原に居る不束者

ですけれどどうぞ〳〵お玉章の交換をおねがひ申ます御返事には信夫草を封じ込めて差上ますよ（岩代國信夫郡福島市曾根田四番地高野よれ子）○私は諸嬢と御交際を願はん爲に繪葉書や玉章を下さる御方には長久手古戰場の繪葉書につまらぬ編物を添へて誓て返信します（愛知縣愛知郡東郷村諸輪一九五近藤重子）○懐しき誌友の諸姉樣、私の村に黒髪塚が有り升から、繪ハガキにて申込み下さいよ、喜んで碑文を書いて差上げ升（常陸國筑波郡板橋村大字板橋、豐島くわう子。）○下野の國月樣御所御知らせ下さいませ。　北海道稚内のどなたでしたか御手紙下さいましたが御住所も御名前も失念いたしましたすみませんが最一度下さいませんかすぐ御返事いたします大坂及び岡山市の姉樣方御交際下さいませ。歸宅いたしました。（大坂市南區難波立葉町千三百十二番地辻歐音子）○記者樣妾は諸孃と交際しようと思つて交際欄へ出しましたけれども誰一人友とはなりません、て記者樣から願つてください（遠州榛原郡萩間村西萩間拾九番地兵四郎方すゑ女）○皆樣の内に消印濟みの郵便切手御持ちの方はどうぞ下記名の許迄御惠送を願ひます不束なる手製編物で必ず返禮致します五十枚以上のお方にはお耻い妾しの寫眞を添へてお禮申します妾しは下手な物ずきで品の善惡を問はず品の多く集るのが樂みなのですから老幼男女の區別なく交際を願ふ積りですから宜しく御惠送を願ひます（信濃國下高井郡日野村字高遠西山ゑち子）○私は高等小學四學年で、す同年の方で交際して下さる方はありませんかそして學校で作つた自作のものを交換して互ひに參考とするのもおもしろいではありませんか（神奈川縣久良岐郡六浦莊村三分字川木村はる）○私は或る事情のため過ぎし春の末つ方住みなれし出雲を出立して當地にさすらひの身となりました未だ乳の香失せぬ世なれぬ者でありますから只旅寢の夢の冷たくて故郷の空のみ戀しくありますよ。なつかしき出雲なる誌友の方々よ旅にして相語る友もなき身をあはれと思ほし給はゞ何卒故郷の便をください妾も當地のお便りをいたしますよ（吳にて世良ふみ子）○誌友の皆樣、妾は本年漸やく女學校を卒業したばかりの、わからず者ですが、何卒永遠の御交際を願ひます。寫眞や繪葉書や玉章を御送りの方には早速御返事致します（秋田縣由利郡院内村院内四十八番地三浦經羞子）○吾が詩の友よ何卒美はしき玉章や繪葉書を送つて頂戴な紅紫の糸を綾つりて織り出す里の有樣は必ず返信してよ（群馬縣山田郡桐生新宿宮川榮子）○誌友の諸孃樣よ妾は昨年高女を卒へた淺學な者です何卒永久に御交際を願いたい者です女學校在學の御方は殊に望みます皆未知の御方ですから始めに御うつしゑを添へて惠んで下さいすぐ樣醜い妾のに藤樹先生の繪葉書一組添へて御返し致し升繪葉書は先着十名樣へ（滋賀縣高島郡安曇村西萬木地村豐吉方山口ゆき子）○妾は淋しく誌記の所に文壇を慰藉とし起居してゐますから有情の御姉樣方よ可憐と思召して永久に玉章や繪端書の交換を願ます（對馬國嚴原宮谷町一の二民守むすひ）○記者さま私は一昨年からの愛讀者ですが精神上の友と云ふは只本誌ばかりです定期の發行が何だか待遠い樣な氣が致します就ては不束者ですが諸姉さまと御交際を願つたらどんなに幸かと存ますどうか宜敷御紹介を願ひます（香川縣善通寺町征矢野照子）○記者御一同樣誌友の皆樣私は和歌山の町はづれに淋しく暮してゐるものです皆樣永久に御手紙の御交換をねがひます（和歌山市嘉家作り町二六神保須磨子）○親愛なる御姉樣よ妾は不幸なる運命の許に淋しく日を送る者よ妾は或る事情のために學びの窓へ入る事もあたはで、只々文壇を師としたひ友として淋しく日を送る淺學なる者よ不束なる妾をも妹とおぼしめして末永く〳〵御文通のほど御願ひ致します（下ノ關市赤間町今田いそ子）○諸孃樣方よ私も誌友の御仲間に御入れ下さいれそれから繪葉書御玉章の御交りもゆるして下さいませ二三回でおよしなしては却てめいわくですこれまでつゞけて御交り下さる方がないのには殘念です（仙臺北六番一ノ六三橋本硯子）○誌上の姉上樣よ私は本年女學校の三年修業致し升たが家の都合有り退校致して淋しき山中に美しき繪はがきや誌上の姉上樣の御寫眞などを友として月日を送て居る私ですから末永々と御交際を願升繪はがきや寫眞をも御交換を願升（秋田縣雄勝郡稻庭町小川光子）○中に不親切な御方がございましてたつた一度きりて後から此方からいくら御上げしても知らぬ顏して居なさる御方が御座いますが餘り非道いですよこれから相變らず御交際を願ひますよ（神田錦町三の三尾藤方多喜）○戀しい誌友の姉さんよ美しき繪葉書や玉章など澤山御送り下され有難く誌上で御禮申上ます尙今後共御見捨なく變らぬ松のみどりの如く御交り下さい一時的でなく末長く願ます

（和歌山縣海草郡安原村字松原木下美笑子）

圖書換讀

○私の知人で貳百餘種の書籍を皆樣の御不用書類と御交換を願ひたいと申ます御希望の方は御不用書目（著者、書名、定價、發行年月、發行所等、明記を乞ふ）を添へ私方まで御申込みあれば直に右書籍一覽を御送り致します（美濃國揖斐郡富秋村小森政江）○皆さんの内に孝女白菊と靈譽のゆめの唱歌お持ちの方ありますれば譜を付けて送つて下さいましお禮は屹度しますそして永久の御交際をねがひます（東京麹町區有樂町ノ五シンガーミシン裁縫女學院内石渡直子）○なつかしき誌友の皆樣の中にて婦人世界のいつのにてもよろしく御座いますから御心あらば不束なる私の手元にある明治三十五年よりの女學世界女子文壇初號よりの幾册にてもかまいませんから御交換願いたいのです其他の新小說も種々ありますからとうぞ御願ひいたします（常陸國下妻町新地赤澤紅梅子）○諸姉樣私の手元に左の不用雜誌有り御望みの書を申込みなさい先着へ差上ます又御交換（他の雜誌）にてもよろしいです新公論十九年十號太陽十二卷十號同十卷十四號明星午歳四號（櫻花號）新潮五卷三號新聲十四卷四號健全一卷三號秀才文壇七卷十號（新潟縣西蒲原郡燕町弘進堂にて秋月女史）○諸嬢樣よ私の所に血の涙不如歸などの小說が有ますから寫眞に繪はがきを添て申込て下さい倘長々御交際をして下さいな、（宮城縣栗原郡金田村字瀧野齋藤惠津子）○皆さん私は中村秋香先生の御こしらへなされた新林詩歌自在と湖上の栞人と二册ありますから幽芳さんの作つた小說初枝の巻と靜子の巻との二册と御交換下さいませんか、赤壁風戀風中後兩編、御持の方は、小杉天外さんの初姿と美文、自然と山水、及び山水と人生との三册と御交換下さい御望みの方は下名まてまた上等ゑはがきの御交換をねがひます（和歌山縣海草郡貴志村中牧野平三郎方みどり）○皆樣私は左の本を持つてますから御入用の方は絹絲編物、附つき小說雜誌等にて御申込下さい直に御送り致します女夫波、火の柱、乳姉妹、不如歸、眞人の自白、伯爵夫人、女學世界、婦人世界、女子文壇等御申込順に差上ます（福岡縣門司市淺野セメント會社々宅大澤みゆき）○懷かしき諧姉上樣に御讀み古しの言海と云ふのがおはさば私の幻燈器と御交換下さいませんかそれから玉蟲をお持ちの方は私の（鏡浦夜話盲目政客運賦天賦うつろ舟）等と御交換遊ばせな（長野縣下高郡日野村三〇四中村眞佐子）○皆樣の内で玉蟲凌霄花を御持ちの方は私の手許に不如歸、罪のゆくへ、明治勅題歌集、今古和歌集、小說何某其他雜誌いろ〳〵ありますから何れかと交換して下さいな（和歌山市神保須磨子）○私の手許に淑女文集、馬琴旅行文集、女子文壇第壹卷八號より拾二號迄、二卷一號より六號迄、二卷拾四號より拾六號迄、三卷は壹號、秀才文壇は四卷拾號より六卷拾七號迄、全部四拾八册あります、皆樣御不用の新派歌集がありましたらどんなでも送り下さい、雜誌は御のぞみによつて五册づゝ上げます、特に黑髮か、戀衣を御送りの御方には拾册又は、それに相當する御禮は必ず致します、（陸奥八戸拾六日町名久井さえ子）○私は露件の「天うつ波」を持て居ますが何方か「家庭小說愛の辨」か「眞人の自白の總羅」か何れにでもよろしうありますから御交換下さる御方はありますまいか。次に涙香の譯にて小說「人の運」の後編御携帶の御方は御ゆづり下さいませまいか御禮としては小說「不思議の娘」か若しくは地方の繪はがき數枚を差し上ます（伯耆國東伯郡瑞穗村字瀨戸村山崎直子）○諸嬢樣よ妾の手許に己が罪二人女王寶化娘日之出島花山花人女子判任女學生庇髮當世ハイカラ蔟人の罪等不用の小說がありますから入用の御方に進呈致しますから繪葉書を封入にして御申込下さい直に送ります（佐賀縣杵島郡北方村松林靜子）○妾は北海の片田舍に生をうけ只海山を友として淋しく世を送りつゝある短才の者御慈愛深き姉君達よ御玉章惠ませ給ひよ妾の手許に「呪はれたる女」「女學生訓」「女子處世訓 一」あり御望みの方は下名まで（北海道濱益郡濱益村馬場靜子）○小說琵琶歌、長恨、人の罪、再生緣、金色夜叉の脚本、失意の青年、慘風悲雨世路日記、舊山川、詩集花ざくろ其他女子文壇秀才文壇の不用の分澤山あります諸嬢の內で藤村の詩集、乳姉妹、夏子筆子其他の新版小說で不用のものありますれば交換して下さい、又繪葉書の交換も願ひます（和泉國泉北郡横山村天堀）○只今妾ところに玉蟲、不如歸の歌、新體詩學、其他新舊の雜誌が凡五十五册許り有りますから、黃菊白菊、パイプル、英文二都物語、英文ロビンソンクルーソー、英文白百合、其の他英文小說、徒然草、伊勢物語、花紅葉など〻御交換下さるとも御讓り下さるともして下さいまし、御心ある人は先づ御一報下さいまし（上野國山田郡毛里田村金

弃春子）〇皆樣の內で岡田起作先生筆文のかき方の本（而しからず丸てない本）大日本國民英語學會發行英學講義婦人の日常生活法男女の研究造花手藝敎科書去年九月一日發行の女子文壇健康大觀とを御もち遊して御出の方は御知せ下さい私は各學校風景の繪葉書新小說雜誌寫眞などの交換大々好きです（武州川越石原町川岸旅館佐久間支店內にて松代子）〇只今私の机上に普通禮式、茶の湯の手引、生花の枝折、明治名文集、玉蘚集、美文の資料、作歌自在、箏曲獨稽古、花鳥集、其外に種々の雜誌が不用になつて居りますから、皆樣のうちで美文や小說を御持の方は交換して下さいませんか（茨城縣筑波郡板橋村大字板橋、豐島毓子）〇塔影、美文資料、戀愛字典、小說文粹つたの下道、不如歸、破れ莚、催眠術新書、新體詩作法、和歌怜野集、同草野集、讀心術自在、天眼通等不用のものがありますから上等繪はがきにて申込みなさらば抽籤にて差上ます（名古屋市笹島町四、鈴木方刑部多計子）〇皆樣の中で金色夜叉、己が罪、寒風戀風、黑風、伯爵夫人、戀と戀、年子、夏子、乳姉妹、想婦憐、みだれ髮、女夫波、等お持ち合せのお方はお送りを願ひます相當代價のものにて乾度お返禮いたします（名古屋市笹島町四、鈴木方刑部多計子）〇諸姉樣のお內に小說、筆子。露子。無果花御持なら送つて下さいませんか私御禮には破戒、黑潮、芙蓉峰、不言不語、一夜小僧其他の雜誌小說詩篇で必ず御禮申ますからどうぞ。（對馬上縣郡琴村三、仁位たつ子）〇私は音樂大好きでルセーユの曲譜お持ちの方は何卒敎へて下さいそれから繪葉書や寫眞の交換もれ猶當市の誌友の姉樣方相變らず御交換をねがひます（水戶市上市柵町廿二番地ノ十七森田松枝）〇誌友の諸姉樣御手許に御不用の小說お持ちなれば何んでもよろしくありますから一册宛御送り下さいませ御禮には上等絹ハンケチ（相當の金額だけ）を御送り申上ます但し先着五名の方には更に一枚增呈致します（橫濱市辨天通り四丁目淸水房子）〇私は子ー本誌の三卷二號がなかつたので誌上をかりて不用の方に送つて戴かうと思つて出して置きました、一册あればたくさんですのに、でも日本國中からですものわかりませんわれー來るは／＼每日來ましたよ本屋が出來そーにそれてお禮にはこまりましたので始めの方に御禮をして　おきました後の方には繪葉書でお禮をのべてをきましたそれから住所の書いてゐないのやけし印てみへないのやすれて文字のきえてしまつて住所のわからないのは致し方がありませんから失禮ですけれどもこゝでお禮をのべておきます川崎たみ子樣大橋よし子樣小坂いく子樣畑中よしの子樣安田儀子樣名古屋の季子さま弘前の佐藤なか子樣越前の靜岡久子樣（ひさ子）〇皆樣の中に黑の表紙の讚美歌の本譜と歌とあるのを御持ちの方ないでせうかもしありましたら私の雜誌と御取換下さいまし紙上まで一寸御名を御知らせ下さい直接に御願ひ申ますから（福島縣あくがれ人）〇皆樣妾は黑クロース製新英和字彙代壹圓二十錢不用ですが青海と交換をして下さい紀念繪葉書を添えて送ります（美濃武儀郡曾田町二六中島置子）〇私の處に文藝倶樂部、新派和歌發句集、日本口語典、中學雜誌、女子文壇、中學生、作文秘訣中學世界など不用なのが澤山ありますが皆樣の小說か雜誌かと御交換下さいませんか幾ら古くても構ひません、（周防國玖珂郡通津村中町三井音吉方同はる子）〇古本ですけれど片男波もつれ糸寬詩人ひとり寢別れ路はつ姿の六册を尤も舶來の上等繪はがきにて御申越の先着六名のお方丈けへ御送りします（美濃山縣郡高原村大野樣方定子）〇皆さん佐々木先生の「おもひ草」御說明の方は妾の「銀鈴」か「竹の里歌」かとかうかんして下さいれ（和歌山市外岡崎觀音前楯屋內岡崎ゆり子）〇諸姉樣私の手元に下記の書籍のほか色々の本が御坐いますの御入用の御方は「戀か夢か」「濱子」「夏子」美しい繪葉書と御交換を願ひます「ハイカラ令孃」「愛戀情」「戀愛の研究」「まさご」其の他各種（東京本鄕區本鄕五ノ六淸明館內保延七草子）〇誌友の諸姉樣妾しはロビンソン漂流記脅駒奨文資料水蔭先生著の避暑の友交際案內武俠の日本新造軍艦發句獨學海底軍艦ヘーグ奇怪塔生花自在押川春浪著の空中飛航艇外色々の雜誌澤山有りますから姉樣たちの御見倦きになりました新體詩が有りましたら交換して下さい又繪端書か寫眞か栞りを送て下さいました御方へは此內どの雜誌でも送ります雜誌御不用の御方へは繪端書て御返事致し升（神戶市橘通四丁目九七東川椽子）〇皆さん古雜誌の交換を願ひます、文章世界中學世界等は殊に結構です。お禮は神にちかつて必ず／＼差上ます。（磐城國白河町道場小路四四山本ゆたか）〇皆樣の中に、櫻の御所、小弓御所、星月夜、己が罪、金色夜叉、お不用の方は私の、濱子、不如歸、人の罪、相思怨、其他文藝倶樂部、太陽

女學世界、なぞと交換して下さいな（横濱根岸町、三、一、三、一、井上久子）○諸姉樣よ私に「黄菊白菊、花紅葉、東西二十四傑などありましたら一部でもよいですから私の彈片、女學生訓、明治の令孃、玉蟲、濱子等の何れかを上げますお望みの人は上等繪葉書に換物添へてお交換下さい（越前吉田郡月山西村開發、寶吉方、竹下濱尾）○誌友の姉上樣御願ひ申ます妾の伯爵夫人と母の紀念役綴と御交換して下さいませんか若し交換して下さる御方が御座いましたら誌上で御知らせ下さい私の寫眞と絹製の栞と添へます（紀伊八千代）○やさしい姉樣よ私に、日露戰史、日露戰爭實記、寫眞畫報、其他女子、及び青年の文學雜誌不用ですよ、御入用の御方は舶來の繪葉書にて申込なさい但しれ七十名迄は差し上げますよ又先着から妾の栞や寫眞（景色）を差上げる、そうして三十名迄きつとだよ姉樣あばよ（福島縣若松市中六日町宮原靜子）○誌友の皆樣の中てはなれ小島の歌御存知の御方は譜と共に妾の三保と富士、軍國の少女等の歌と御とりかへ下さいませんか（遠江磐田郡龍川村横山三室常子）○誌友の皆樣の中に、銀鈴、戀衣、小扇、暮笛集、ゆく春、新聲等御所持の方は私の詩集わか草、女學世界臨時增刊玉あられ、家庭十二ヶ月、小天地、花にしき、其他明星、戰時畫報、寫眞畫報等と御交換下さいませ（横濱市根岸町、地藏坂上吉川香都子）○賢明なる諸姉透樣よ妾は下總の印旛湖畔に住む無學なものですが御交際の程を御願ひ申しますそれから諸孃の中で伯爵夫人紅葉全集金色夜叉魔風戀風女夫波山と水などの小說及び其他の雜誌の不用な御方は御貸し下さいませ決して只取やめいわくはかけませんから（千葉縣印旛郡宗像村岩戸岩井盤子）○皆樣の中に神田の中文典、齋藤のニユーテキストブツク一、二、スケツチブツク等の御不用書がありましたらどうぞ御ゆづり下さい御願致ます（靜岡縣沼津上土町八代美代子）○大切な紙面を鳥渡拜借致します私の所にムラサキ水彩畫手引逝筋青年婦人世界百字文へなぶり東京案內寫眞帖女學世界ハガキ文學小波著戀の繪はがき日本少年二人椋助岡田八千代著門の草作文書類文章世界中學文藝作文錦囊文と詩車聲帆影抔汚れぬのを所有して居りますから繪はがき（未使用品）又は寫眞て御申込下されば早速差上ます但他雜誌との交換も希望致します、（駿河國庵原郡庵原村草ヶ谷天野ふじ子）○何も知らない私から恐れ入つたお願てございますが、皆樣のうちでごく優美て皆樣のお好みなさる唱歌がありましたら、讀友、想夫戀、荒城の月、海邊の朝、軍士の妻、陸奧の吹雪、閉塞隊のうち何れとても交換を願ひます、お望の唱歌を添へて必ずお返事申上ます（青森縣北郡板柳村赤田十三番地三上木枝子）○どなたか大阪每日の小說嫁が淵御不用の方は私におゆづり下さいませんか御禮は一組六十錢の繪はがきにて致します但し新聞の切拔てもよろしいからなるべくはやく誌上にてお知らせ下さい（賤の子）○皆樣先月は早速と御信り下さりまして誠にありがとう存じます、今度に「春葉、眉山、癸山、花園、八千代」などの作物の御不用のものがありましたら御知らせ下さい、又妾の手元に「自由結婚、新婚旅行、萬朝懸賞短編集、七部集俳句評釋、俳句四年間、秀才文集」及び本年度文章世界懸賞ありますから、以上のものと御交換或はうつしゑに栞を添えて下さる方に、差し上げますから至急御問合せ下さい、（東京市牛込區中町卅八番地船越靜江）○何卒以後繪葉書の交換を永久に御願申し上げます必らず返書致しますよ又玉ぐや栞などの交換も御願申しますわ（秋田縣仙北郡大曲町寺町川原德子）

繪葉書交換

○諸孃樣妾にも繪はがきの交換を願ひます（神戸市加納町四丁目二百二十二番屋山氏方田中勇子）○妾は支那に居る本誌愛讀者の一人てあります繪端書の交換をして頂戴な御返しには支那風俗の繪端書を差上ます尙當地には露國英國佛國獨乙等各國の郵便局がありますから御好みの何國の切手かスタンプでゝも差上ます、（淸國天津河北大胡同東亞藥舖內谷口）○繪葉書や寫眞の交換をお願ひ申します返事は必ず〱差上げますから安心して御送り下さい（長崎市夫婦川春德寺境內濱山靜子）○妾事今度初めて誌友の一人になりましたから繪はがきの交換を願ひます（神戸市下山手通一丁目六十五番の四、小間物商田中勇子）○誌友諸姉妾に繪はがき交換を願ひます、寫眞御惠み下さらばみにくい妾のも早速送ります（本鄕區湯島天神町一ノ六○廣瀨方青木喜千子）○誌友の皆樣永久に御玉章繪葉書寫眞編物の交換なすつてくださいませんか繪葉書の御方に限り先着十名だけ屹度上等繪葉書にて御返禮いたします（靜岡縣周智郡山梨町萩原照枝）○記者樣妾は田舍に住む不束者てすが天下の諸孃と繪はがきの交換を致したう御座いますからよろしく

御紹介を願ひます（能登國輪島河井町一部百三十五久保田久子）

○女子文壇に依りまして諸孃樣より繪葉書數多頂戴いたしました誠に記者樣始め皆樣に御禮いたします 猶ほ御思召おはす孃樣方續いて御寄贈下さい（仁川淺水坳貳拾六號戸川原内五島富美子）

○皆樣相變らず末長う繪葉書の交換を願ひますよ又名高ひ社寺の印影も送つて頂戴れお返しは直ぐ致します 和歌浦の名所葉書お入用の方はお申し越し下さい（和歌山市有田屋町一七大草春子）

○諸孃樣繪ハガキ交換を願ひます又御手紙の交換もして下さい必ず御返しは差上ますから（横濱市辨天通四丁目七二清水ふさ子）

○御姉上樣澤山美しきゑはがき御惠下されまして有難御座ります 此上とても御送り下されませよ品の善惡にかゝはらず着しだいに御返事します（大阪西堀靱中通三町目島雄誠子）

○繪葉書玉草及び雜誌の交換を願ひます。本誌愛讀の方に限る（北海道石狩國岩見澤南六河合菊子）

○滿天下の御愛讀の諸孃姉樣先達は繪端書や書物に 御寫眞編物を御送り下さいましてありがたう妾は一々御返禮は 致しました心算てすが數多き中てすから万一洩れてありますか知れませんから誌上て 御詫び致します又妾は八月十三日に生れましたのてすから八月中に繪端書の上等なのか又は 其の他の品を御送り下さいました御方には拙ない 編物や小説を差し上ます（兵庫縣武庫郡精道村之内 蘆屋村二二九山村久右衞門方山村たれ子）

○諸孃樣方よ美はしい繪葉書有難ふ深く感謝仕ります 願はくは一時的にわらずして永久的に實行せられん事をねがふ本邦人の外國へ行き給ひし方と御交際を切に希望致す（神田柳町二番地早坂方彩園本）

○讀友の諸姉樣よ繪葉書の御交換を願ひます 私は舶來や和製を澤山持つてゐますから女子文壇第七號八號の誌友倶樂部て交換を望むでゐられた姉樣方の内六十八人に粗末な繪葉書てしたが差上ました 風景を送り下さる方は切手を必要面の繪の餘白に貼つてお越して下さい（下之關市觀音崎町八十一番地尾田縫子）

○皆樣私に肉筆の繪はがき御交換下さいまし（米子尾字町今井唐子）

○誌友の姉上方よ繪はがき澤山下され妾どんなに嬉しいか知れないわ以後も御見捨なくどし〳〵交換を願ひます妾必ず御返し致しますよ 妾の住所は霞が浦の北岸なり（茨城縣新治郡牛渡村大字牛渡石川ひさ子）

○諸孃樣妾しは田舍生れの者て美麗の繪はがきは一度も見ません 勿論私しのは一枚もありませぬてどうぞ情を以て御惠みください交換も出來ませんよ（遠江國榛原郡萩間村西萩間絹村兵四郎樣方すゑ子）

○妾紀念アルバムを作るのてすから嶄新なる繪ハガキの交換をお願ひします（岐阜縣山縣郡谷合村確井方みどり子）

○繪葉書の交換を願ひます。可成自作の和歌を認めて下さい、但し粗品は返禮致しません、またお寫眞を下されたお方には、舶來繪葉書に廿錢以上の書籍、又は雜誌を差上ます（千葉縣印旛郡中郷村海老川秋山花磐子）

○私は片田舍に淋しく暮して居る者てすが何卒文壇の諸孃樣繪はがきの御交換を願ひます（栃木縣下都賀郡寺尾村梅澤河田よし）

○誌友の諸姉樣私も愛讀者の一人てすから、どうか繪はがきの交換をして頂戴などんなのてもかまいませぬから、決してずるはしませんよ、どなたにかゝはらずれお願ひしますよ（京都府葛野郡嵯峨嵐山前片川せい子）

○誌友の姉樣方繪葉書及び寫眞新小説お送り下さい、お禮には近江八景一組づゝお送り申上升（近江犬上郡八坂西村悦子）

○諸姉上樣何卒繪葉書の交換を願ひます（播磨揖保郡龍野町原田敬子）

○誌上のお姉樣、美しい繪葉書有難う、第一番は濱松の谷口初子樣、次に一々お返し致しましたが、漏れたる方は亦御申込み下さい、罪を侘びてお返し致します、（山形縣西置賜郡豐川村小白川鈴木杉葉女）

○誌友の皆樣私は九州の片田舍のものてすが何卒此後は御交際下さいな投書も今度が始めてゞすよそれから私は肉筆の畫はがきが大へんすきなのてすから皆樣の内て御好みの方はどうか交換して下さい（筑前國若松町新地壹丁目田原あき）

寫眞編物交換

○誌友の諸孃樣御かはりは御座いませんか妾田舍者てすが御みすてなく末長くお交り下さいなしてお孃樣の内にピン細工御持の御方何卒御惠み下さいな妾きつと御禮いたします（府下南河内郡長野村字西代奥田黃菊）

○私の寫眞と妹さんのとて都合十八枚ありますの皆さんの御寫眞と交換を願ひます併し先着限りてすよ後着者には御禮に高尚なる繪葉書て、又御手紙下さいな（大和國磯城郡朝倉村大字脇本巽うの子）

○私は片田舍に淋しく暮してゐる者てすがどうぞ文壇の諸孃樣繪はがきの御交換を願ひます又御寫眞の御交換もね。替次第私のも送りますわ。先着十人樣にはリボンを添へて返禮致します（下野下都賀郡寺尾村字尻内福富定平方清子）

○誌友の諸孃樣妾は片田舍に友達とてもなくほんとうに寂し

くて困つて居りますのよどうか寫眞や編物造花菜繪葉書等の交換をなして頂戴な皆様の御手許に不如歸紅葉全集寛風戀風、金色夜叉御持なれば御惠ぐみ下さい御禮には麗子夫人趣味無果花ムラサキハガキ文學等の書に栞リボン舶來繪葉書を添へて御返事致します（兵庫縣武庫郡精道村ノ内打出村一八五番木村蓮子）○編物、栞、花りボンの交換を御願ひします御住處と貴名分り易く認めて御送り下さいな（美濃山縣郡葛原村大西英子）○親愛なる諸孃様には始めて御面會を致します私は奥羽の山家に住むものですが皆様の中て編物や繪葉書交換御好の方は是非に御交換を願ひます御禮は必ず〱申上ます（岩代國安達郡和木澤村和田永作方根本喜代子）○滿天下の姉様よ寫眞の裏に御名と御年とを認めて送て下された御方には妾の寫眞と編物と西洋繪葉書を添へて御送附致します左様なら（下總國印旛郡内郷村高座木山崎屋須）○麗しき諸姉様達よ、寫眞を送つて下さい。返禮として文學雜誌を一部づゝ先着拾名のお方に差上げます。また其のうちて、二名のお方には岡崎名處繪葉書を五枚づゝ差しあげます。（愛知縣碧海郡矢作町橋目永田舞鶴子）○妾の慰藉とするのは御文通するのみあはれと御思し召され文學に趣味を有し親しく永久に文通して下さる御方又編物にて御交際下さる御方には何卒願ひます（熊本縣葦北郡二見村串山武野）○僞り多き世の中に染らぬ姉君の中にて編物御持の方はひな形取らして頂戴な御禮には失禮てすが文藝倶樂部を差上げ永へに御交際を繪葉書の御交換も願ひます（大坂西區靱中通三町目島雄韻子）○本會にては今回誌友に裁縫必用ヒナ形及編物ヒナ形等を分與す御希望の方々は御入用丈御認めの上端はがき、寫眞、書籍にて申込下さい端はがき申込者は端面になにもしたゝめずして下さい、そして寫眞にて申込者には本會員一同撮影の寫眞をそへて何れも受付日より五日以内に郵送いたします、（靜岡縣駿河國駿東郡原町原杉山彦七方靜波誌友倶樂部會員一同）

懸賞品發送報告

第七號及び第八號に當選の下記諸孃にはそれぞれ所定の賞品をお送りしました。猶『發送未濟』の部に記名の方は至急住所姓名をお知らせ下さい。

▲第七號の分（六月二十日發送）
○森英子○岩谷緑子○岡部なか子○井上勝子○岡部佐保子○今村のゆり○島田たけ子○平塚あき子○野木ちとみ○乙女○北本歌千○金子染子○村田まつ子○山田くに子○小澤ちゑ子○高橋喜笑子○北野まさ子○濵野女史○白旗清子○片山千里○星野すみれ子○國松紫汀○金澤參知子○佐野貞子○豐井きく子○近由みつ子○濵部郭公

▲發送未濟　○三河、柳子○さゝ千鳥○土佐、青潔子○京橋、今泉磯千鳥○京都、孤雁女○青森縣、藤原千代子○失名

▲第八號の分（七月五日發送）
○白露○近由みつ子○前田かをる子○白石照子○淺田知枝子○大村澄子○服部水仙子○中村紫香子○さゆり子○牧山久子○春子女史○諸方ゑと子○飯田季春子○山崎居子○寺部君子○白衣○八重子○神の子○藤原國子○柳子○朝井松子○杉本きく子○森田なか子○三浦香月○山田沖子○杉山萩枝○神田仲子○中里きん子○村上柵子○山本琴子○岩田小春○いちじく○白井津奈子○乙幡もん子○松崎歌子○熊谷よし子

▲發送未濟　○上毛、うめ子○上毛、黒ゆり○長門、孤蘆女史○千葉縣、黄雨女○東京、康子○大阪、紫泡

剽窃詩文の注意

第九號の分　○北總、河井さく子。俳句四等「涼しさや」は明治三十四年の中學世界夏の卷『夾才詞苑』中、遠江中村孤操君の作を　○南總、松ケ枝雲子。和歌秀逸「あけぼのゝ」は某女史が嘗てある新聞に投書して受賞せしものを剽窃したる旨同氏より直接申越されたり。

第八號の分　○宮城、百合子。新笑話「花子の年」は『讀賣新聞』より剽窃。

第六號の分　○岩代、優女史。抒情文三等「野の戀」は三十九年十一月大阪發行の『新文壇』より丸寫し。

◎今回注意を與へられたる諸孃は○牛込、俳魚女○失名女○三河、初子○京都、エッキス女史○群馬縣、某娘。

文藝遊戲 讀書會（課題）

次の文藝遊戲は「讀書會」と云ふのです、「讀書會」を開きます時分は、節、新秋に入りて書籍に親む時分であらうと存じます、左の約束を守りて續續御出席否な投稿下さい。

▲讀書に關する一切の感想、何でもかまひません▲讀書の趣味、利益などに就いての感▲自分が讀書に依りて得たる經驗談▲愛讀の書籍▲愛讀書中より拔萃したる一節又は一句▲發見したる珍しき書籍▲我が家の藏書▲友人等の讀書會の現狀▲地方圖書館のありさま▲學校で用ゆる書籍に就いて其書名、好き嫌ひ▲讀みたいと思ふ書籍▲新聞又は雜誌の事▲歷史の書物にては何の條が好きとか地理の書物にては何の處が好きとか云ふ事▲雜誌では何から先きに讀むとか云ふ事▲其外書籍に關する事なら何でも宜しいが諸樣の今までお讀みになつた書籍に就いて感想を述べらるるのが最も宜しいでせう▲原稿は「讀書會」と題を書添えて一文十行內外の事▲締切は例の通り本月二十日▲懸賞も例の通り▲字體は明瞭に半紙又は郵紙に書くこと。

新出版

▲『妻の懺悔』（鮫島大浪著）妻の懺悔外數篇の短篇小說を集めたもので妻の懺悔は其名の通り一場のざんげ話、涙の出るやうな處もあります、鮫島君の小說は少しの癖もなく文章も柔かですから家庭で讀むには恰好のものでせう口繪は淸方（實價四十五錢京橋木挽町佐久良書房）

▲『海草』（伊藤銀月編）海の襍纂、海の紀行、海の詩文など皆海に關したもの許りです夏向の讀みものとして飽きない小册子です（實價五十錢同上）

▲『由井正雪』（塚原澁柿著）澁柿叢書の第一編です氏の歷史小說は現今の小說界でも外に類がないから歷史ものを愛讀する人には見ないで居られないでせう、芝居や講談でおなじみの由井正雪でも氏の筆に上ると更に面白さがちがひます製本は函入の立派なもので口繪にも一流のコロタイプ日本紙刷（定價一圓二十錢同上）

▲『寄宿舍日記』（中村枯林著）中村文學士が中學校時代の日記を細かに書いたもので、四月に始まり三月に終る即ち滿一年間の中學生活は何んなに愉快に何んなに變化があつて何んなに修養したか、是を讀むと學生時代が羨ましくなる、其學生時代に居る諸君は勿論一般の青年も本書のやうな純潔な作物を繙いて其精神を爽快にすることが必要であらうと思ひます（正價三十八錢京橋區新肴町精光館）

▲『過渡時代の女性』（阿部見川著）新思想と舊思想と入れ變る時代に於ける女子の心得は何うしたら好いだらうか、皆まち〳〵の意見を持つて方向に迷ふ折柄本書の著者は嫁と姑の關係から、新家庭の有樣、法律上の妻の地位、未亡人、女子の修養など餘程現代の家庭に接近した事を論じて居ます（定價五十錢京橋區桶町廣文堂）

▲『家庭要鑑』　菊版一千頁の大册、家政、育兒、裁縫、手藝、衛生、文藝、禮法、料理化粧の諸卷に大別し更に數百條の細目が分ち凡そ家庭で必要な事柄は此れを見れば何でも分るやうに出來た重寶な書物です（定價二圓五十錢、駿河臺南甲賀町東京國民書院）

▲『理想の母』（ミンニー、エス、デーヴィス原著）凡ての少女は皆理想の母たるべき希望を持たればならぬ、幸ひに本書の譯者は善き教訓と解決を與へて居ます（定價二十五錢、本鄕西片町內外出版協會）

▲『主婦の職分』　名家名夫人の意見を集めたものです（定價二十錢、麴町區下六番町新婦人社）

雜報

▲各女學校の夏休み　市內各女學校では例年の通り暑中休暇となりました、地方より遊學して居る者は大抵鄕里に歸つて父母の膝下に樂しい慰藉を得て居るやうです、平素能く勉強したものほど更に樂みが多いのです。

▲女子の富士登山　昨年あたりは稍流行の爲に女子の富士登山を敢てするものがあつたやうですけれど、此れからは風に心身を鍛錬する爲に女子の富士登山があるでせう、無鐵砲に登山して心身をいためる位ならもつと低い山へ登つた方がよろしい。

B: Not until the marks are given. I may have to take examinations all over again.	乙: 點數の知れるまでは駄目ですよ. 私なぞは, 又全く仕直を遣らなくては, ならんかも知れません。
A: We shall know the marks to-morrow, but any how, don't you think you feel lighter and happier than last week?	甲: 明日分りましよう, 併し兎も角先週よりは, 氣が輕く又樂しく思ひになりませんか。
B: I can not deny that.	乙: 其は打消す事が出來ません。
A: Which examination was hardest for you?	甲: 何の試驗が, 一番苦しく思ひになつて?
B: Grammer iwas the hardest. I could not answer last two questions, could you?	乙: 文法です. 終の二題は答案が出來ませんでした, 貴女は?
A: I knew them, but I omitted the second. I think I have failed in English dictation.	甲: あれは存じて居りましたが, 第二番のは脫して置きました. 多分英文書取に落第でしよう。
B: So have I. Why am I so poor in spelling!	乙: 私もそう思ひます, 何故私には綴字が下手でしよう!
A: It is difficult for every one of us. Let us ask our teacher how to study spelling during the vacation.	甲: 誰にでも六ヶ敷のです. 休暇中如何して綴字を勉强す可きかを, 先生に御尋ね申ましよう。
B: I wonder when can I see her. There are many things which I must ask her about before we are separated for the summer.	乙: 何時御目にかゝれるでしよう. 御別れ申す前に色々と御伺ひ申度い事がありますから。
A: Perhaps she will be in her class room this very minute. Let us go. (continued)	甲: 丁度今教場に入來しやるかも知れませんから, 參りましようよ。

by many commendations. Neither do servants exhibit any animated marks of affection to their employers; yet, though quiet, they are strong in their attachments; and the receprocal regard of masters or servants is powerful and lasting in old English families.

澤山頂戴するのでもない．又彼等の方からしても，主人に外見上忠義心を顯はすのでもないが，默々の中に存する，主從御互の親密の情は，英國に於ける古い家に實に强力なもので，是又永續する美風である。

What the Czar could not do

The Czar of Russia was visiting the King of Denmark, and upon one of their drives around Copenhagen the King pointed out to the Czar a certain high tower.

"Now," said the Czar, "how much power have you over your subjects?" Could you command one of your poorest subjects to climb to the top of that tower and jump off?

"No," said the King, "but I could go and sleep in that poor subject's hut and be a welcome guest."

And the Czar was silent.

(Selected)

露帝の不可能の事

露帝がデンマーク國王を見舞はれた時に，二人で首府コッペンヘイカンを馬車で御通過された．王は市中の高塔を露帝に指し給ふと，露帝は，

陛下は臣民に何程の權威を持ち給ふか．彼等の至極賤しき者に，かの塔に昇り飛び降れと御命令になる事が出來ましようかと御尋になりました．

其は出來ないが，併し，其賤民の小屋に這入り寢ね，又珍客として歡迎される事は出來ると國王は答へられたが，露帝は默然として居られた。

After Examinations

A: At last we can breathe freely.

試驗後

甲：到々緩くりと息がつける樣になりました。

And he breathes a blessing on the rain.

In the country, on every side,
Where far and wide,
Like a leopard's tawny and spotted hide
Stretches the plain,
To the dry grass and the drier grain,
How welcome is the rain!

Servants

There is a peculiar character about the servant of old English families. They have a quiet, orderly, respectful mode of doing their duties. They are always neat in their persons, and appropriately dressed. They move about the house without hurry or noise; there is nothing of the bustle of employment, or the voice of command. You are not persecuted by the process of making you comfortable; yet every thing is done, and is done well. Nothing is done by fits and starts, nor at awkward seasons; the whole goes on like well-oiled clockwork, where there is no noise nor jarring in its operations.

They are not treated with great indulgence, nor rewarded

雨の恵と　　稱ゆなり。

村里見れば　　遠近に
虎の斑ある　　皮のごと
燒けて黄ばむ　　野の姿,
渇きし草また　　穀物に
雨の待たるゝ　　如何ほどぞ.

僕婢

英國の古き家庭に居る僕婢には特色がある. 彼等は立働く時に靜肅て, 秩序を守り, 如何にも品がよい. 身の圍を常に清潔にして, 適當な服裝をして居る. 躁がす, 急かず室内の事をするから, さも働いて居りますと云ふ樣な騷々しさもなければ, 又命令の聲も聞こゑない. 御主人の御氣に召す樣にと, 色々ホヤホヤしなくとも, 萬事萬端確乎(チヤン)と調ふて居るし, 併も其が良く調ふて居る. 何事に於ても, 一時思ひ出して卒然に案外な時にする樣な事はないから, 全躰を許すると, 恰も運轉に何の音も又故障もない, よく油の注いてある時計仕掛の樣に, 家事向の事が整頓して居る。

此僕婢等は我儘を許可されて居るのではないし, 又御賞言葉を

英文（八）

津田梅子閲　河井道子述

Rain in Summer　　夏の雨

How beautiful is the rain !	あな美しの　降る雨よ.
After the dust and heat	塵と暑熱の　其後に
In the broad and fiery street,	燒くる市街や
In the narrow lane,—	徑路に
How beautiful is the rain !	あな美しの　降る雨よ。
How it clatters along the roofs,	屋根うつ響　さも似たり
Like the tramp of hoofs !	猛き蹄の　音の如.
How it gushes and struggles out	湧きて瀧なす　源は
From the throat of the overflowing sprout !	漲る樋の　咽もとぞ.
Across the window pane	窓板たゝき
It pours and pours ;	降り注ぎ
And swift and wide	氾濫(ミダレ)て速き
With a muddy tide,	濁流の
Like a river, down the gutter roars	狂ふ溝のおと　川ときく
The rain, the welcome rain !	あな嬉しやの　夏の雨.
The sick man from his chamber looks	己が部屋より　病人の
At the twisted brooks ;	繞る流を　うち眺め.
He can feel the cool	集まる水の　涼さを
Breath of each little pool,	身に覺ゆるや
His fevered brain	熱さめて
Grows calm again,	心靜かの　嬉しさを